

# 武蔵玉川における生活環境に関する 地誌学的研究

1988年

玉井建三

聖カタリナ女子大学助教授

## まえがき

玉川という川名は全国に散見する。とりわけ六玉川が古今を通じて名高いが、その自然と人文、ことに風土の面からは、まだ研究されていない。そればかりでなく、玉につく河川名になる、もとの玉というものが、丸く角がなく光り輝いていて、すべての人に受容されるという、玉本来の日本人の思想もひそむ。

とりわけ六玉川の地域にみられる、風土と文化を、ただ詩歌や謡曲にのみ語られる、日本古来の風姿とあわせて、その河川がもつ文化環境を、現代的な視点で整理して論理をつめてみた。とくに各地の風土を知る手法に、写真や絵図を採用することでせまってみた。

本調査研究は昭和59年度を初年度とし、武藏玉川（多摩川）を観ながら、諸国の玉川の古里を昭和61年度迄たずね巡検調査を行った。これらを通して、玉という宝石とおなじに水の精靈であることも、各地の土俗の語りや話のなかから採集していき、現代科学の一方法で整理し編んでみた。第Ⅰ編は多摩川でも、玉川と呼称する流域を検討した。第Ⅱ編は河川名の接尾辞をもとに、川・河・江にひそむ先人の習熟した知恵を、第Ⅲ編では玉の思想とその変容について言及した。第Ⅳ編は巡検調査によって得られた資料から、日本の玉川誕生の背景にせまってみた。また最後の第Ⅴ編で、それらの調査事例、そして資料整理によって全国の玉川（玉）などを表にまとめ、分布図を添えた。

本稿の巡検調査には、地域伝統文化科学研究所の桜井正信、高橋靖枝、梅林信夫、米田正継、山田徹の諸先生とおこなった。なお研究に際し、とくに御指導御教示を賜わった山口弥一郎（創価大学）、黒崎千晴（筑波大学）、山口恵一郎（日本地図センター）、小峯勇（帝京大学）、今朝洞重美（駒沢大学）、長野覚（駒沢大学）、中島義一（駒沢大学）、日野西真定（高野山大学）、北條文彦（宮内庁書陵部）、江口晏（亜細亜大学）、鈴木照男（文教大学）、酒井忠一（致道博物館）、犬塚幹士（致道博物館）、宮田齊門（亜細亜大学）、貫井晃（淑徳短期大学）、石橋幹雄（淑徳巣鴨高校）、岡本修（東海大学）、瀬尾菊次（能楽師）、川浦孝恵（日華交流教育会議）の諸先生に厚く御礼を申し上げます。

更に全国各地の市役所、町村役場、博物館、郷土資料館、郷土史家、それに多くの古老にも大変お世話をになりました。感謝致します。また、資料整理や調査を手伝って頂いた深沢歴史教室の方々、斎藤靖（亜細亜大学院生）、山田能子（昭和女子大学生）、森正州（日本大学生）、吉川澄子（成蹊大学生）など、多くの諸氏に御礼申し上げます。

最後になりましたが、本調査研究の御援助と機会を与えて下さった、とうきゅう環境浄化財團に対し、心から感謝いたします。

昭和62年8月20日

玉井建三

# 目 次

## まえがき

### I 武蔵玉川の環境

(1) 多摩川流路の文化風土の跡	1
(2) 多摩川の舞台構成とその条件	7
(3) 多摩川の歴史とその生活	9
(4) 武甲境域に記録された多摩川	13
1. 奥多摩の歴史と文化	13
2. 多摩川の資料吟味の方法	16
3. 丹生と原島丹三郎の足跡	21
(5) 玉川の自然環境と人文	25
1. 多摩川の伏流と泉	25
2. 玉川の古歌と歴史の跡	29
3. 玉川の古習と業	34
4. 玉川の流域設定の変容	39

### II 川の文化誌

(1) 玉と水にかりた先人の知恵	49
(2) 自然が語るカワの跡	50
(3) 人文が育てたカワ	53
(4) カワに遺る川名	58
(5) 川の環境と生活	60

### III 「玉」の系譜とその分布

(1) 玉の呼称とその意義	65
(2) 玉の文化受容の変質	67

### IV 日本の玉川誕生の背景

(1) 玉川の古歌と風土	75
(2) 国府にそえる玉の水面	82

(3) 玉工の細工をのこす玉の川面	84
(4) 古社と古寺に宿る玉水	89
(5) 開拓の野に根づく玉川	97
(6) 丹生にひそむ玉	99
(7) 古里の名にかりた玉	101

## V 調査事例とその資料

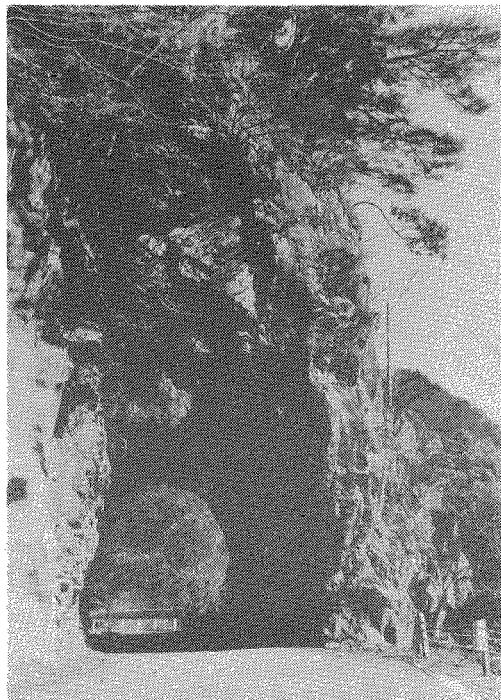
(1) 調査事例	107
いわき市野田の玉川	107
塩釜市野田の玉川	110
岩手県陸中 野田の玉川	116
津軽の古里 平館野田の玉川	121
伊予の玉川	125
山口の田万川	129
南会津の氷玉川の歴史地理	134
会津大沼郡の玉川	139
北海道美深町の玉川	143
北海道泊村の玉川	147
北海道共和町の赤玉川	151
北海道瀬棚郡北檜山町の玉川	153
長野県御代田町の涌玉川	157
城下町の玉川（金沢市玉川町）	161
(2) 玉川（玉）の一覧表	165
河川名のタマ川に関する一覧表	165
地名のタマに関する一覧表	168
タマに関する山地名一覧表	175
(3) 玉川（タマ川）・タマに関する分布図	177

ま　　と　　め

# I 武 藏 玉 川 の 環 境

## (1) 多摩川流路の文化風土の跡

昔時から、多摩川の流れは東国武藏の大地を整え野面を育てた大河で、荒多摩川である。源流は奥多摩



数馬の隧道と旧青梅街道



多摩川の筏流し (青梅市郷土博物館蔵)

湖より西の山里に入った、山梨県北都留郡丹波山村の深い谷奥、笠取山の分水嶺から一滴の玉水が落ちる、水干にあたる。笠取山の西側はもう笛吹川の源流で、甲斐国中の盆地を創造して富士川に落ちる。

水干からの細流は榎火のごとく永い年月をかけ谷を造り、一ノ瀬川に落ち、丹波の山里で柳沢川や丹波川、それに後山川と落合って、更に小菅川の枝流を引きいれて東流する。これらの山間いを削る深い侵食谷は、江戸人を寄せつけない粗い風土であったことを、『玉川沂源日記』(天保十三年)は記している。

奥多摩湖に通じる丹波山村は甲州郡内の文化圏に属していただけに、山尾根を越えて流入する甲斐の文化も武藏の国域へ流した。この谷に沿って甲斐と武藏を結ぶ古道が通じていて、山径を介して両文化が接触した。

ただ鳩ノ巣渓谷の、数馬の切通しが拓かれるまでは、ここが物資文化交渉の難所になったから、むしろこの谷筋をはずらはなれた、留浦から山嶺の峠道を経て、秋川最奥の数馬へ通じる古道に沿って甲斐文化を送りこんだ。

ところで、奥多摩湖からは秩父古生層とよばれ、日本列島の骨組にあたる硬い地層まで露出させる。基盤にあたるこの古層を、多摩川が上流か

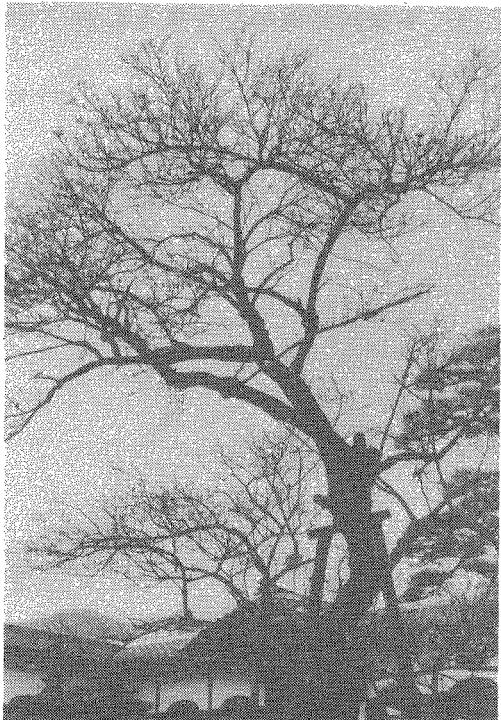
らの激流と角礫によって谷をきざみ、峡谷を作成しながら落している。惣岳渓谷、鳩ノ巣渓谷、御岳渓谷などの深い谷は石灰の岩層が加わって、景勝の里をつくりだす。江戸城の白壁に用いた石灰も、この山肌から採られた。石灰焼の窯跡は、朽ちかけながらも今に残る。

石灰は水面を青い清水に変え、それを清流の代名詞におきかえて流傳した。純白の石灰は氷河のクレバスと同じで、青い光をはなつ。深緑で化粧した山肌の雜木と奇岩が、川面に映え、一層神秘さを増し、山間の渓谷美をさそう。石灰で味付けされた渓流は素性のちがう水ではなく、奥多摩湖下の本来の清流で、巨岩に育てた川苔や川魚を棲息させてもきた。

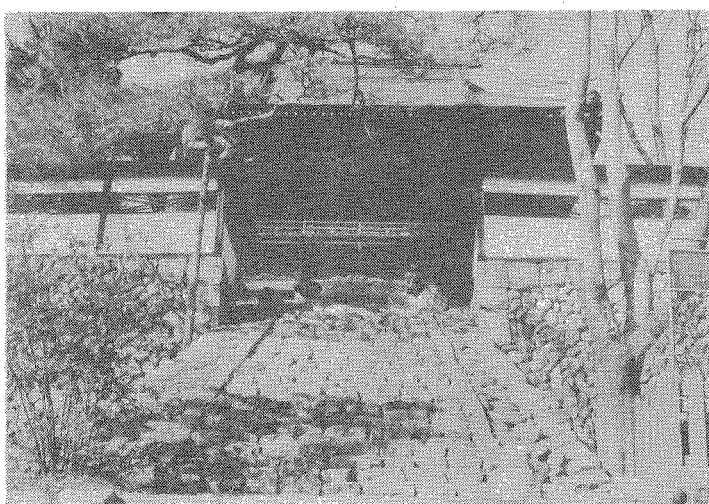
そこはまた、杣人の活躍する峡谷でもある。江戸時代に多摩の奥山から切り出される材木は大雨のあと、水かさの増したところで一気に流し、多摩川の本流と落合う鳩ノ巣などの渓流で筏に組み、六郷の河口まで流している。皮肉なことに、江戸の大旱が青梅材の隆盛期になったが、節の少ない良材は大正期まで、多摩川の流れにゆられて搬出されたという。

いまも川筋には筏道が武藏野のなかに、河口までえんえんと続く。

いつも水量の変わらない日陰の谷地に、多摩川が研磨した丸礫を敷きつめ、そこにワサビ田が彩りをそえる。もともとワサビは野生であって、足利時代の中頃さしみ普及によってその香辛料として使用されるようになったという。とくに江戸期に、スシやソバが江戸の大衆の口にも入るようになると、辛味が江戸っ子



青梅市金剛寺の梅

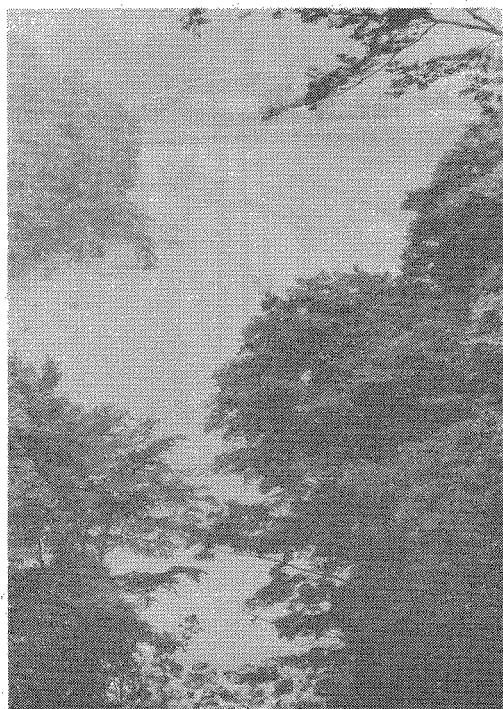


三田一族の墓石をのこす海禅寺

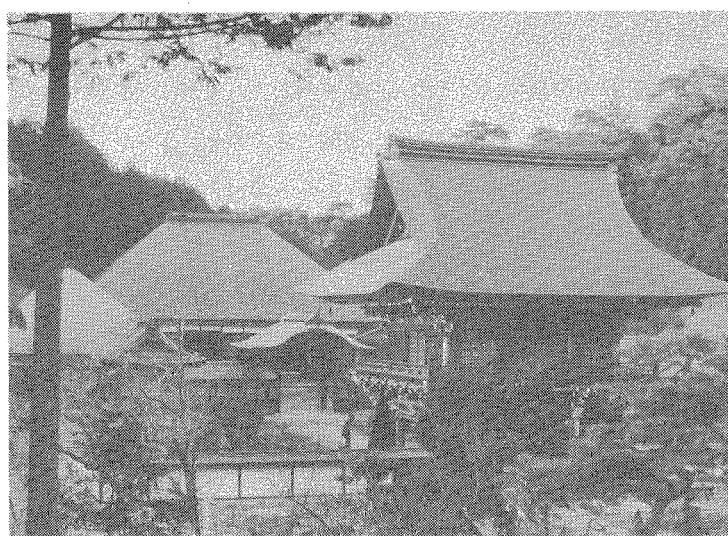
の気質にもあって、消費が増えてくる。それに伴って、沢や清水の湧く谷奥で育った良質の自生ワサビが出荷された。

またそこは切替畑という、土地と照合させる原から入で、暮らしを立ててきた山間の里である。山里の民は自然の斜面に火入れをおこなって、ソバやアワなど雑穀を育て、山に生きる姿勢を整えていった。まさに武藏野を縁どる仙文化が臭う、山すその粗い土地柄である。

中世においては平家の流れをくむ、三田氏が領有した谷筋で、関東武士団の実力を世にしめした将門伝説がひそむところである。谷口の町青梅に三田氏が創建したという青梅山無量寺院金剛寺は真言宗の古刹で、京都蓮台寺の寛空僧正が開山という。将門もこの古寺を訪れて、梅の枝をさしたところ根づき、実った梅は木枯の吹きすきむころまで青く、色ずかないので、これが地名の起源になったという名木である。石柵に囲まれた境内の白梅を株分けして、多摩川をはさんだ日陰に植えたことが、吉野梅林の来歴にもなる。



青梅の渓谷



天寧寺

将門や三田氏ゆかりの里はほかに、塩船観音や天寧寺を背にして三田領の支配体制をかためた勝沼城跡、それに辛垣山一帯の辛垣城跡、更に三田一族の墓がある海禅寺と、将門と三田氏の足跡は連綿と活きづく。

もうこの辺りからは乾いた高台の野原も顔をみせ、多摩川が運んだ土砂を再び削って階段状の段丘をのこす。谷口に拓いた青梅はそんな法面上の、日向の土地に街をつくり、



勝 沼 城 跡 (青梅市)

山里と武藏の台地との交易で賑わった古里である。青梅の河辺あたりは、まだ河床も深いが、そろそろ河幅を増して、急流から緩やかな流れに変わろうとする。

大河の流れが醸成した地形と川面も、谷口下の羽村に入ると、江戸人が残した玉川上水の堰が河畔にみえてくる。<sup>かわも</sup>羽村から四谷大木戸まで 42 キロメートルの上水が、玉川兄弟の開削によって承応 2 年に完成した、その取入口である。水喰土をさけ三回目の開削で、ようやく完成をみたこの上水は、農業水にも使用されたが、何といっても百万を超える江戸市井の人びとの飲み水を確保させてきた。江戸から東京へ、まさに暮らしを支える流れであった。名著『大菩薩峠』を著した中里介山は多摩川を望む羽村の高山にねむるが、実母は玉川兄弟の血縁だという。

多摩川の流れはこの付近で、右岸の丘陵と武藏の高台の間を洗いながら、清流をみせるが、戦乱の時代では牛浜、滝山、拝島など、多摩川をはさんで決戦の場所にあてられている。新田軍と足利軍の攻防戦が激しかった川面は、秋川や浅川の流れと落合って、水量を増し清水をつくるところ。今に残る旧河道との間の中洲が、戦の舞台となった河原である。

府中や調布から川向こうの丘陵を多摩の横山とよび、『万葉集』東歌に詠まれている。

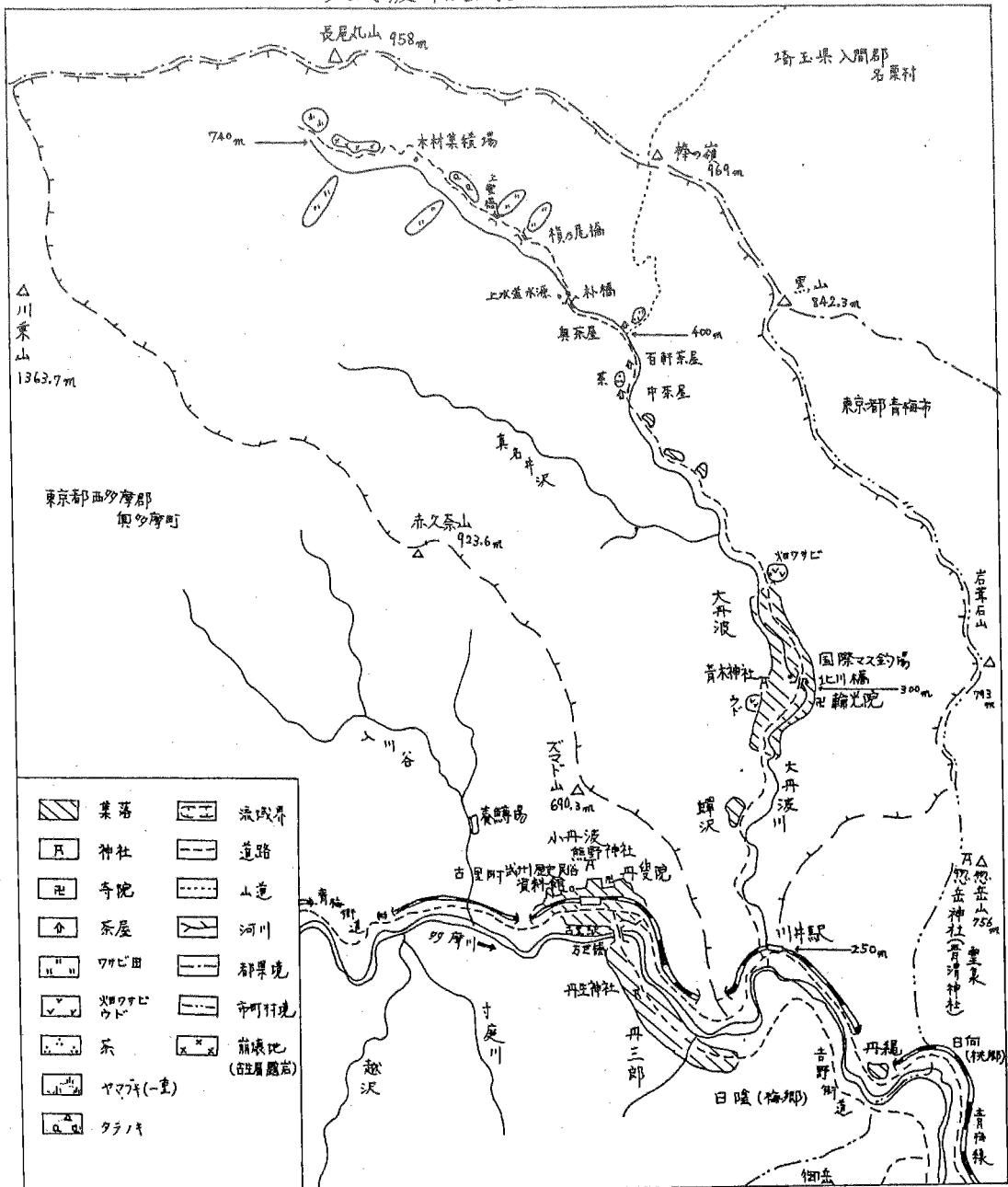
赤駒を山野に放し捕りかにて

多摩の横山徒歩ゆか遣らむ (卷二十)

天平七年の防人交替のとき、防人の妻黒女が詠んだ歌である。武蔵野の南のはずれ、多摩横山の古道を歩いて行かせなければならない、妻の切実さがうかがえる。それだけに、東国特有の歴史や訛りが、多摩川の川面に沿って遺されてくる。

府中や調布は武蔵野の文化を育てた中央の地で、国府や高麗人の技が生きている。古代武蔵野の文化がここを中心に拓かれ、また鎌倉古道が通るのも、多摩川の清流と台地端から湧く清水が育てたからか。古

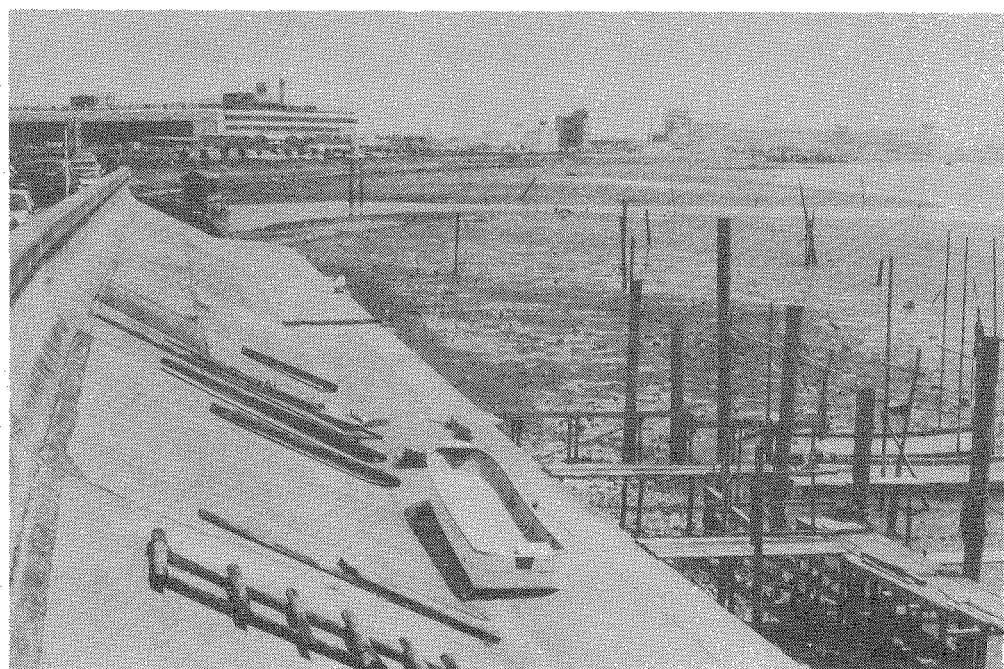
大丹波川流域図





調布玉川の図（天保年間）

調布市郷土博物館蔵



多摩川河口

（後方は羽田空港）

戦場、古歌、史跡など、武蔵野文化のふきだまりのように古碑も並ぶ。まさに多摩川の玉水がもたらす文化である。

日野の渡津辺りから下流は、多摩川でも玉川の流れに変わる水面になる。玉川は多摩川の伏流水が地表に顔を出すところで、二子玉川から六郷川に川名が変わる丸子玉川まで続く。この範囲には貝塚や古墳も多く、先人の住みか選定の知恵が、自然に逆らわないかまえで生まれたことを語りかけているようだ。丸子玉川をすぎると、多摩川の流れは水量を増して緩やかに流れ、潮の香りもただよう河口の風情になる。丸子の渡し付近はもう六郷川。日本の河川が河口の低湿地を六郷（六合）とか水郷と呼ぶ、古習にあわせた川名なのか。羽田の在ではいまでも多摩川でなく、六郷の名で呼ぶ。

笠取山の水干から六郷まで、およそ1,800mから落ちる流れは武蔵野の台地を釀成して、武蔵の活躍の舞台を提供した。まさに多摩川の一滴の玉水が、武蔵野を組成する原点なのだ。

## (2) 多摩川の舞台構成とその条件

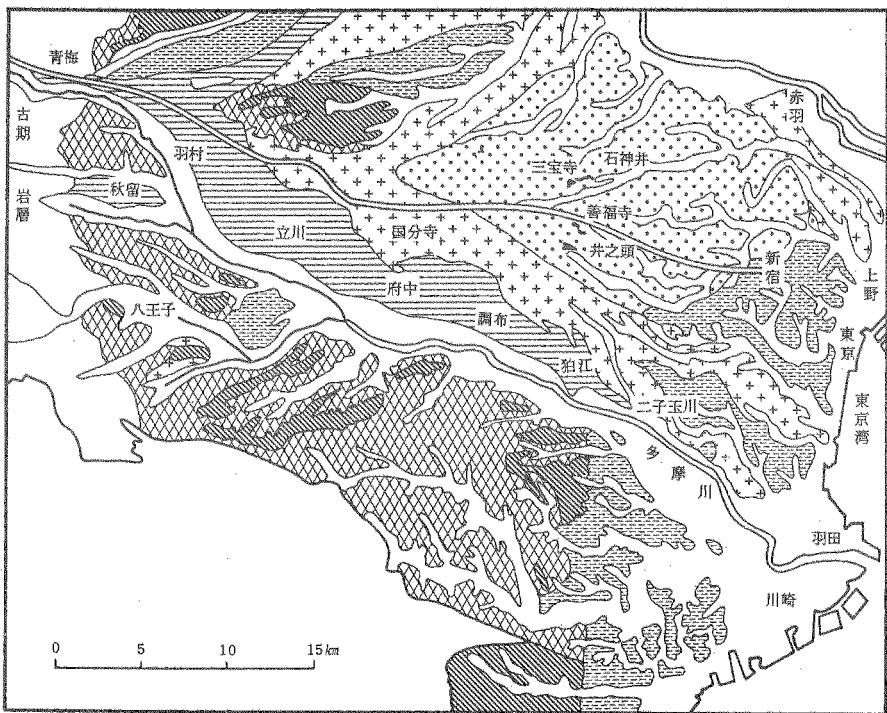
東京の大地をつくる最も古い基盤を、地質学者らが三浦層群とよんでいる。地質時代鮮新世のもので、多摩川の流域から房総半島にかけて地表に露出する。この三浦層群のうえに、洪積世のころ堆積した東京層がのっている。

東京層も三浦層群と同じく、まだ海底であった時代の地層で、多摩川が押し出す砂礫の堆積によってつくられた地層になる。そのころ、関東の海岸線は現在と異なっていて、海が深く入り込んだ構造盆地であったという。多摩川の河口も青梅あたりであったし、青梅の谷奥から押し出される東京層の砂礫は、青梅の河口よりも東方の、浅海に厚く堆積をくりかえし、武蔵野台地西方よりも東方が厚みを増してかぶさっている。青梅を要に東方へ開けた、武蔵野の高台は多摩川が運んだ砂や礫を、狭山丘陵で北と南に分けて堆積をくりかえしている。

東京層の上部には東京礫層という砂礫質の地層がのる。東京湾に沿う地域に沈降運動が加わり、陸化しない浅海の状態のところえ、西関東の山地から押し出された礫が、浅海に堆積したのが東京礫層の成因になる。ところが再び武蔵野の中央部まで、入江がのびてくる。この入江の浅海を、自然科学者たちは武蔵野湾とよんでいる。

その後は武蔵野湾の後退によって、現在の山の手台地まで陸化が進行している。この台地からはアジア大陸から移動したのか、ナウマン象の化石もみられ、高台がだんだんと現在の顔に似た形を整えていったことを示している。

こうして武蔵野を誕生させていったが、再び新しい砂礫を堆積させた武蔵野礫層、そして上に関東ローム層をのせて表土をつくる。火山灰がいく層にも重なった表土は赤土で化粧された、特有の活躍舞台をうむ土壤にもなった。だからローム層が粗野な台地に活ける、先人のきびしい生活態度をうむ要因にもなってくる。立川ローム層、武蔵野ローム層、下末吉ローム層、多摩ローム層と、上から四層に分かれる地層



[Symbol: White Box] 沖積層	[Symbol: Horizontal Lines] 立川段丘層	[Symbol: Vertical Lines] 下末吉段丘層	[Symbol: Diagonal Lines] 三浦層群
[Symbol: Crosses] 武藏野段丘層	[Symbol: Dots] 成増段丘層	[Symbol: Horizontal Lines] 多摩段丘層	

武藏野の地質（アーバンクボタ7などによる）



玉礫の立川面露頭（昭島市宮沢町）

はおよそ2mの立川ローム層に覆われた立川段丘、3mの立川ローム層と4mの武藏野ローム層に覆われた武藏野段丘が、下部の地質構造を隠すかのように、台地の野原を赤褐色の赤土でそめている。

台地の西端を流れる多摩川は武藏野の高台を、階段状に侵食跡をのこして、緩やかに南に流れ下る。西麓谷口の青梅の高度が180m、立川で90m、吉祥寺、深大寺で50m、新宿や世田谷用賀で40mとなだらかな傾斜を示すのも、多摩川のしわざである。

とにかく、地質時代に武藏野の高台を多摩川が創作したうえに、縄文時代から歴史時代に至る先住の活躍の舞台にも、多摩川の流れが一役かっているのだ。武藏の時代から東京の時代まで育て、発展させてきたのがこの大河である。

### (3) 多摩川の歴史とその生活

多摩川は武藏野をそだてた協力者というよりも、東国特有の文化が根づくだけの、舞台を提供してきた主体者である。それについて歴史学や経済史学など人文科学学者と、地質学や陸水学、更に河川工学など自

然科学者も加わって、流域の履歴を堀おこうと調査研究に余念がない。

多摩川について、諸書に記録する多摩、多磨、多麻、丹波、丹婆、太婆、玉などの文字を、その時代の表意と表音に思想を加えた分析も試みられている。では、多摩川のタマとはどのような起源をもつ河川名なのか、地名学や国文学の先学諸氏が解明させようとしているが、今だこれといった明快な解答は得られていないようだ。

『万葉集』に詠まれた「多麻河泊爾左良須立豆久利左良左良爾奈仁曾許能児能已許太可奈之伎」は大陸から渡来したコマの技術者が、調（貢物）の麻布を織り、それを礫が覆う河原で晒す里娘が、こんなにもたまらなく可愛いのかと、当時の生活環境や郷の風情をつけた多摩川だとする先学もいる。また上流から押し出る研磨された丸い礫で、河床が敷きつめら



高麗王の墓（日高町の聖天院）

れていく玉の川であったことに由来するとも、河水が砂礫の浄化によってタマのように澄んだ川とも、更に丹波川からの急流を下る河水が、谷壁を削った土砂を伴って小河内下の渓谷で角礫が研磨されることから多磨川だともいう。

もっとも、地名学者のいうタワ、タバ、タオ、ダオが峠を意味していることから思考すると、丹波川は河川の水源の場所で、峠とも分水嶺ともとれる。地名学者の松尾俊郎博士は「峠集落には田尾、太輪、太和などの名がしばしばみられるが、これはトウゲの語源が撓む、たおるからきたという説を裏書きするもので、つまり山頂のたわんだ所がトウゲである。そしてタワ越えがトウゲとなった」とのべ、峠説を主張している。また山口恵一郎博士は「ダバはタバと同義で、それはまたタマとも関連して類縁の地名」としてとらえ、山里のわずかな平坦面を指すことを指摘している。そこで多磨川について山口氏は、「多摩は多磨、多麻、多万、田間、田万、玉など、幾様にも書かれ、意味の解釈もまた多様に説明されているがタバと同義だとするのが、その筋では通説」と論考しておられる。

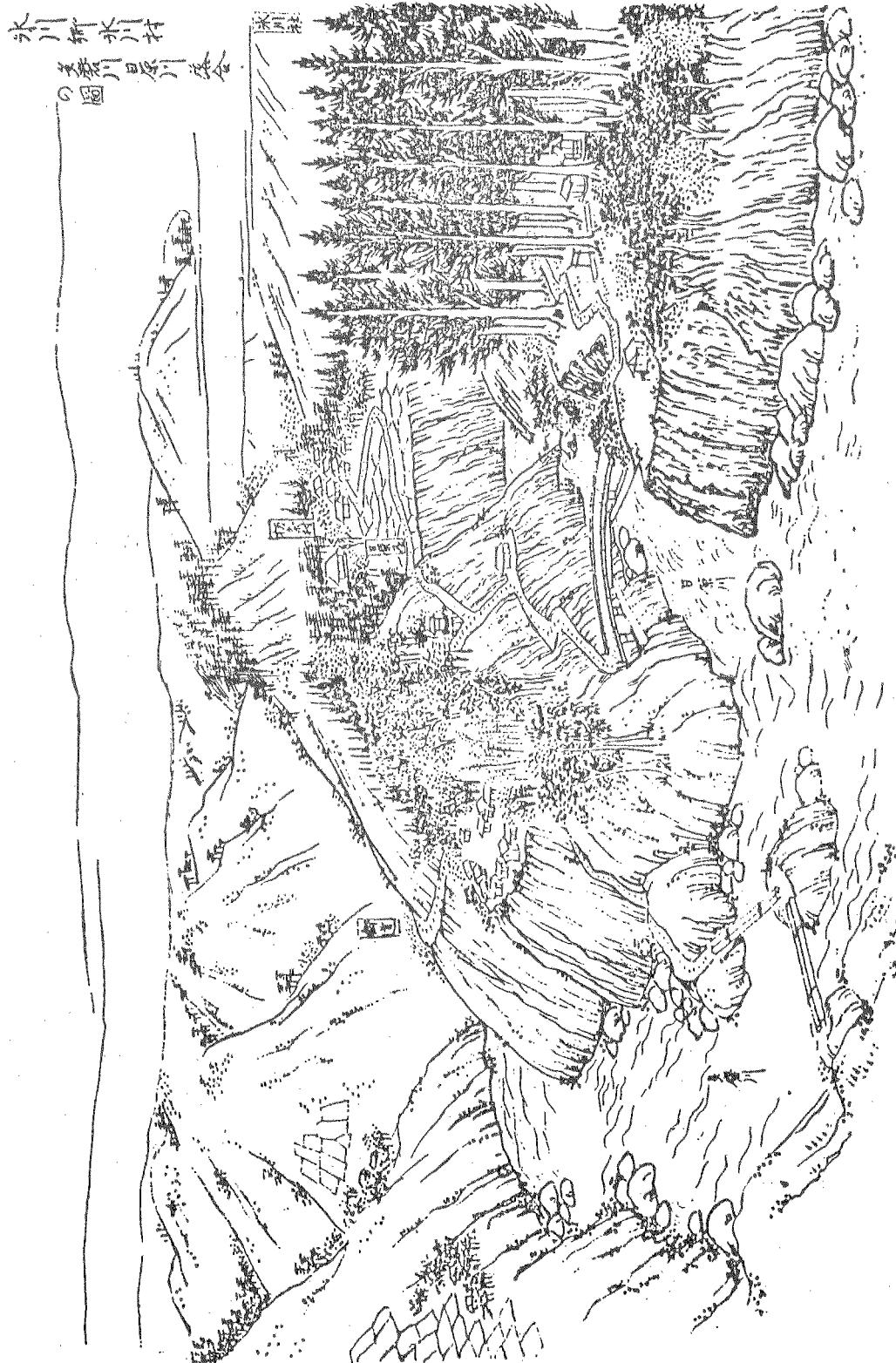
古文献から多磨川の地名を探ってみると、初見は『日本書紀』の多永屯倉である。多永は先学諸氏によって意見が分かれ定説はない。『倭名類聚抄』には「武藏国府在ニ多磨郡ニ訓ニ太婆」と載せて、多磨と記しているが太婆と訓している。そうするとタバ、タワ、タオからおこったのか。『新編武藏風土記稿』には「水源信濃国イザルガ嶽ヨリ湧出シ、甲斐国都留郡丹波山村ヲ過テ丹婆川ト唱ス。此下多磨郡三田領マテヲタバ川ト唱フルハ全ク里人ノ横ナマリティヘル如クオモハレタリ、村名ニナミテ是ヲ正シトスルハ非ナルヘシ」と丹波で記している文献もある。

『武藏名勝図会』には「西より東へ漲流する大河を、古く多波川と称し、中古以来は多磨川と唱ふは、名水有を以て、古へより郡の名に取て、土俗多波郡と唱へけり或は郡中三田領のうちに、大丹波小丹波という村里もあれば、郡名の唱へは、是よりおこれりともいひ、又は多磨川の水源、甲州都留郡丹波山より流來ゆへ、往古より丹波川と唱へ、今に至りても、三田領迄の奥山を、土入多波入など共呼、又川の名も多波川と唱ふ」とある。また『江戸名所図会』も「この川は武甲の境丹波山に發し、多磨郡の丹波村に添えて流るるゆゑに、多波川とはいひたるなり」と名勝図会と同様丹波でとらえている。

いずれにしても、昔時からの文献では丹波、多磨、丹婆、太婆の文字を当てていたことに変わりはない。ただその発音となると、10世紀に著された『倭名類聚抄』は勿論、『江戸名所図会』に引用されている鎌倉期の、『日蓮上人註画讚』や『北条家分限帳』にも多波、田波で記載されていて、いずれもタバ、タワと読むべきであろう。

『丹後國風土記』にいう、丹波のタニハも、タバなどと同じ立場をとっている場合がある。丹波国は京畿の雨水を日本海と太平洋に分け、丹波山は多磨川、富士川、荒川の諸水系に分水する山里にあり、ひいてはその嶺を越える峠にも結びつく。山間のなかでも緩やかな斜面の地形で、わずかな平坦地をよくタネ、タナの地名で里山に残しているが、これも広義にはタバ、タワと関係があるのか、凌線に沿って緩やかな山肌が続く。山容とか山里の急傾斜のなかでも、限られた平坦地の種や棚の地名もその証がある。

さて峠であるが、もちろん大和言葉の造語である。山国日本の地図をひとと五百を超える。名峠の



多摩川日原川落合の図（武藏名勝図会）

ほか忘れられた峠を含めると、里のまわりに沢山ひそんでいて、その数にいとまがない。ただ名峠は山国に集中するが、国字である以上、中央政府からの文化が及んだ圏域内においてのみ記されているのだ。現に沖縄県には峠の文字がなく、琉球文化には受容されなかつたらしい。かわって郷土語のヒラを峠にあてている。

ではトーゲであるが、国字で峠だけだろうか。ローカル語のなかには峠、屾、嶺などをあて、タワ、タオと発音することが多い。ことに中国山地の古里には多尾、田和などが固執するかのように集中している。山地の峰みねの間にみられる緩やかな曲線をたわると伝言されているごとく、タワッた場所を文字が輸入される以前から呼び、それが貴族社会や郷土のローカル語となって受け容れられ、土地に遺されてきたという。このタワッた所を越えることから、タワゴエであり、それが後年訛ってトーゲとなった説である。

トーゲはもうひとつ、手向の変化だともいう。古道を上下するタワゴエの場所には、きまって生活にけじめをつけ、旅の安全を祈願する神が置かれた。旅びとはあえぎながらも、坂道に、つまさき上りで脚を入れて、道中で手折った草花をトーゲの神に手向ける古習が各地の村里にひそんでいるごとく、このタムケが訛ってトーゲとなったというのだ。例えば出羽の修驗道場羽黒山門前に、手向（とうげ）の集落がある。手向の古里は古道そのままの道幅で、宿坊のいらがで彩られた屋並が続く。現代の廻り旅の観光客では、この地名はまず読めないと郷のひとがいう。

そもそものはず、一般にはタムケであって、トーゲでは読ませていない。庄内の山麓に拓かれたこの里



山形県羽黒町の手向集落

を引合にして、神にタムケる姿勢から転訛したのが、トーゲだと論考する先学もいる。

ともあれ、多摩川と丹波川に関する研究上の基本姿勢にも、こうした網かけのなかで論究されてきた。しかし少なくとも武藏野を縁どる山里で、丹生（水銀）を下地に山師たちの活躍を語意に加えなければならぬのでは。それについては後で述べる。

ただ玉川のタマとなると、先学が論考し認証してきた多摩川や丹波川の転訛といった内容と、大分異なっているように思えてならない。とくに多摩川水系における玉川をタワ、タオなどの変化ということで、川名の謎をときほぐすのは、大きな誤ちをおかすのではないか。そこにはタワ、タオにない、古人の生活と環境が時代をこえて、現代の河畔の経験になってひそんでいるとみたい。日本の河川が上中下流域で、それぞれ別の川名を付けた思想と同じに、玉川の範囲は多摩川のなかでも、中流の特定水域に限られていたと思われる。それは全国各地の古里にひそむ玉川をみても、タワ、タオの語源では認証できない、別の糸口が野面の風土のなかに生きているからである。

本流とよばれる川の上流と下流とでは、河水の味も水音も、また人びとの業にしても、決して同じではない。それぞれの川面に合わせた暮らしと環境が調和して、現代まで降りてきたから、玉川にはタバで解せない独自の河相があった。こうした観点から、武藏にのこる玉川を生活環境からとらえ、多摩川における玉川の流域設定にせまってみたい。それによって、タワやタオといった語源とは別の、古の風土と民の思想を継承させながら、独自の網かけがなされた法にも言及していきたい。

#### (4) 武甲境域に記録された多摩川

##### 1. 奥多摩の歴史と文化

武藏野の山里は野武士の育つ、土地柄であった。まだ東国という活動舞台が整わない中古には中央政府の指導で、地方政府が府中におかれ、長官国司が中央から派遣されて国土の整備にとりかかる。それに彼らが豪族たちの古社を合祀してたばね、更に京畿からもち込んだ仏教思想を浸透させることで、豪族をしずめていった。府中の大国魂神社と野川の沢奥に七堂伽藍の国分寺を建立したのは、まさに政治の道に宗教の道を添えて、整備させたことを語っている。

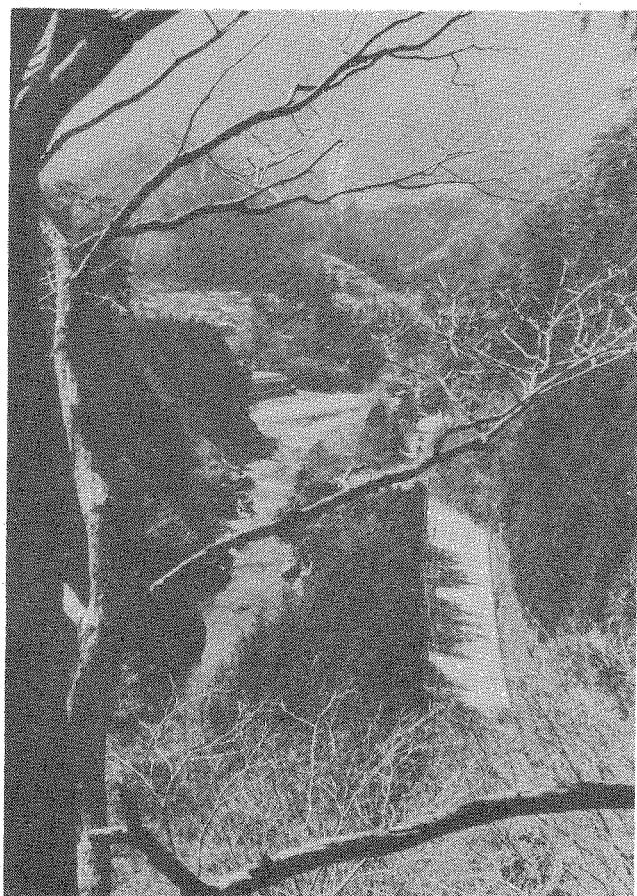
奈良から平安の時代になると軍戦に参加させるために、こうした豪族から防人を多く排出させている。また陸奥の反政府軍との戦いにもかりだされるから、一族は常に武装訓練を怠らず、粗野な大地を拓くかたわら結束を固め、領地を守るために武技を練ることにもつとめた。

こうした武士団のなかには中央の血筋をくむ行政官が土着した、箕田源氏や村岡平家の名門一族も誕生したが、平安から鎌倉初期にかけては、その一族では治安が維持できなく、武藏野の各地で台頭する地方豪族の力を借りるようになってくる。加えて奈良時代から関東の野に送り込まれ、帰化した大陸や朝鮮半島の一族も実力を發揮している。

武藏野武士の中心勢力は平家一門の系譜につながる、秩父系の一族からでた川越、川崎、吾野、小林、師岡、江戸、豊島、葛西、小山田の諸氏で、一族の領有地は奥武藏から南部、東部の武藏野にひろがり、中世武門社会に活躍し指導権を握っている。東京の背景になる武藏野は、平家一族の活躍をみる舞台のようでもある。

昔時の青梅周辺は関東武士団のうち、平家の流れをくむ三田氏が治めていた。そのため奥多摩には平家一族の将門の遺跡が多い。関東の豪族として国司や地方官と対決し、関東武士の実力をしめした将門の思想は、その一族を育てた武藏野にも及んだ。ことに東京武士団の先祖には平家一門の流れをくむものが多く、畠山、江戸、豊島、葛西、師岡、三田氏などが武藏野の各地で活躍した。これらの実力者が、一族の代表者を祀るに将門を持ち出し、藤原政権に対抗して関東の良民の重税を救済した将門と同じ立場をとったということが、将門を崇める歴史をつくり、将門遺跡といわれるものを関東の各地でつくりだしたのである。

奥多摩の谷間いでも、平家一族の裔をもって認じた三田氏が領有したところに、将門の遺跡が数多くみられる。



数馬の切通しから氷川集落を望む

奥多摩の地は中世から徳川時代まで榎保といわれたが、これは相馬保と同じ将門一族、平家一門の三田一族が栄えたことによる。そのためこの地は、歴史のうえからは奥多摩ではなく、三田氏一族の治めた三田谷とよくよばれている。将門の遺跡も実は三田一族がつくったものと考えると奥多摩の将門は、そのまま三田一族の生活地にいきている。

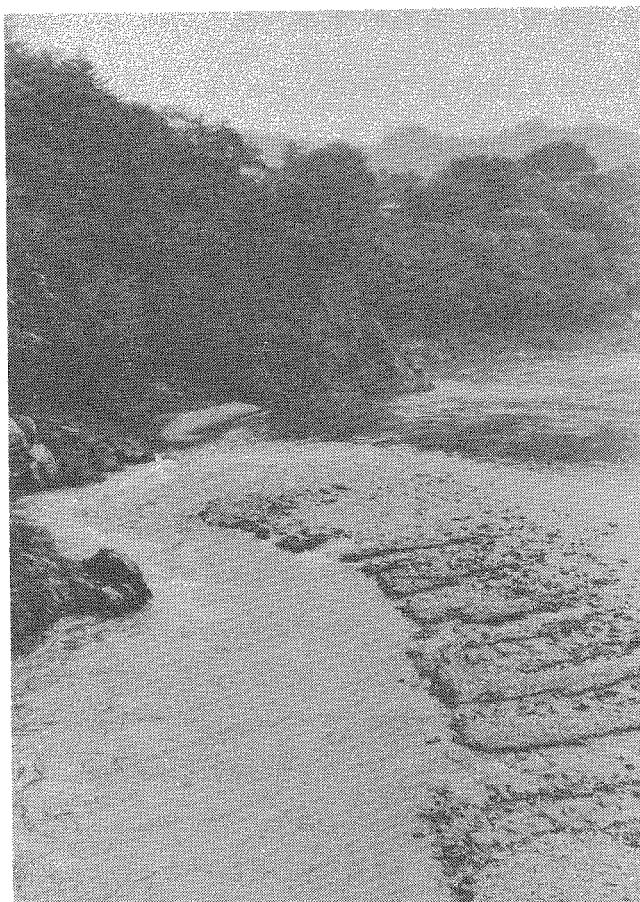
また徳川が江戸に入部するまでは鳩ノ巣より上流の数馬の峡谷を境に、西は三浦氏系杉田氏一族、東に三田氏一族の榎武士が支配していた。ともに平氏系に属していて、将門の血を伝えている。杉田氏一族は、三浦半島から相模に勢力をもっていた三浦氏一族で、小河内周辺を領有していた名族である。

数馬を境にその奥には甲斐の文化

が入り、武藏野の文化は数馬止りであった。それというのも鳩巣渓谷が人馬の通行を絶つような谷壁をみせ両文化の交渉が封鎖されていたからである。数馬の隧道が設けられる大正まで、マタギ以外は奥に入れないような深い谷が人の交流を遮断していたという。多摩川の流れが奥の丹波山から、甲斐文化の味を付けて流れ込むが、三田一族の支配した奥多摩の三田谷にはまだこの時代、自然が障害となって甲斐の文化に染められない土地柄となった。それまでの交渉は三田谷というよりも、むしろ山ひとつ越えた秋川最奥の数馬へ古道が通じていて、その径すじに甲斐文化が容れられていた。しばらくはこの手順で多摩川の流れとは別に、両国の交わりが続くことになる。

多摩川の三田谷（奥多摩町）は外国人はもとより、他郷の人にも、人情よりもこの厳しい自然が寄せつけなかった。武藏文化の行きつくところ、そのふきだまりが三田谷の山里である。

国府からの政治も、多摩川に沿って上流に波及させていくが、中世でさえその止まるところが三田谷であったから、古代国家の整備がなされる時期においてはよけい、国域のはずれ異文化と界する古里であった。だから武藏を治める知識人にしてみれば、多摩川の源流を、ここ三田谷に発する日原川や大丹波川と誤認していたとも考えられる。現場に探求の脚を踏み入れないで、机上で書き綴った感が諸書をひもとくとなくはない。修験と親密に結びついた御岳神社にしても、日原川や大丹波川を越えて秩父山系と交渉があった。それも山岳尾根づたいの山伏の小径に、鉱石を求めて探索する山師の径とが結ばれたような、行脚の古道をのこした。二俣尾根から秩父へ通じる山道は、昔時の山伏たちが拓いたその跡である。



多摩川の谷口青梅付近

## 2. 多摩川の資料吟味の方法

『新編武蔵風土記稿』の多磨郡に「郡名ノ起ル所ハ、サタカニ伝ヘサレド、郡中三田領ニ、大丹波、小丹波ノ両村アリ。是古ヘ太婆ト唱ヘシヨリトコロナルヘケレバ、是ヨリ始トモイヘリ。」と武蔵の国域でも三田領の、丹波の古里から多磨の郡名が起ったと記されている。もちろん『武蔵名勝図会』と同様、甲斐の丹波山村より発源する丹波川に由来する説もある。中古の昔、武蔵文化の行きつくところが三田領であっただけに、多摩川の水源は古の文化圏と当時の熟知した目に従って探ってみると、中古の教養人たちは多摩郡の、この丹波の谷奥にもとめていたとみたい。

諸書に集録された記事が、土着の人びとの語りを忠実に守って綴られた内容とは思えない。それは中央の官人たちが編んだもので、必ずしも土地に活きる人びとの意志を反映させたものではない。今日の川を観る姿勢と同じ立場で多摩川をみつめると、こうした記述に民の嗚咽も汲とれず誤ちにおちいる。

中古人の立場では、流域ごとに異質の生活文化が沈下し、その土地の価値を創りだしているところに注目して、更に歴史的背景にも光をあてて論考しなければならない。それが多摩川の語意にせまる、ひとつの立場にもなる。あくまで、武蔵国に網かけをおこなう官人にとっては三田領内に発源する川が多摩川であり、そこから流れ出る川面を全体像として把握したにすぎない。現代の集水範囲とちがって、もっと狭い範囲の多摩川を、机上で想定していたことになる。それは『武蔵名勝図会』の記述も同じであった。

いずれにしても、川名の多摩にひそむ語意には峠を意味したタワ、タオと、分水嶺から水源に結びつく意味が交錯するが、それに加えて語源発祥地も、山梨県北都留郡丹波山村と東京都西多摩郡奥多摩町が名乗りをあげている。いずれも先蹟を基に思考されたものである。早くから歴史地理の耳目を集めてきた多摩川を、ここでは後者が川名発祥地だとする立場で論考してみた。

中古に焦点を合わせて地域を論じる場合、土俗が生活舞台を構築支配し、名族に台頭していく歴史的過程と風土を、まず理解しておかねばならない。先に述べたごとく、奥多摩という舞台は杉田氏と三田氏が東西に分かれて領有活躍する交界地にあったから、それぞれが異質の文化を根づかせてきた。多摩川の創る渓谷がこの交界地であっただけに、人の脚を踏み入れさせない時代が、長く近世まで続く結果にもなった。多摩川の川面が丹波山村まで達しても、武蔵の文化はここ奥多摩止りで、それより奥へは他人間にとどきびしい異郷の深山と觀ていたからだ。異質の世界を自由に横断できて、往時の先蹟を笑いのめしてしまえる自信をつけたのは、近年になってからのことである。

甲斐国を縁どる丹波山村が武蔵の国域ではない点について、今さら語る必要はないし、多摩川の水源を舞台にして活ける山里であることも述べる必要がない。しかし、『文政天保国郡全図』の甲斐国図で丹波山村をみると、黒川方面から流れ出るタハ川はカモ沢、小菅、方原、譲原（権原）の古里をうるおして、鶴川（上野原町）で桂川と落合ってから、相模川となって相模国へ流出している。勿論この流れは誤りで、探索によって描いた古図ではないことを意味している。

甲斐の遠隔地であっただけに、こうした誤解も生れてくるが、ただ甲斐の中央で国域を守る知識人たち

## 多摩川の名称の変遷

出 典	年 代	玉川の名称	その他の名称	備 考
古 事 記	8世紀			丹波(旦波)
日本書紀(十八)				多冰(多末)
万 葉 集			多麻河泊	多摩の横山、郡名多麻・多摩
延 喜 式	10			郡名多麻
倭 名 類 聚 抄				多磨
拾 遺 集	11	玉 河		
後 拾 遺 集		玉 川		
夫 木 和 歌 抄		玉 川		
堀 河 百 首	12	玉 川		
新 勅 撰 集	13	玉 川		
拾 芥 抄				郡名多麻
日蓮上人註書替	13~15			田波・多波、タマと読むのは近世から
北條家分限帳				田波・多波
大丹波白髮神社 の鰐口の銘	15			袖保大玉村(奥多摩町大丹波)
慶 安 太 平 記	17	玉 川		承応2年玉川上水四谷大木戸まで完成
本朝食鑑(水部)		玉 川		
武 藏 野 地 名 考	18	玉 河		
絵 本 江 戸 土 産			多摩川、六郷川	
新刻日本輿地路程全図		玉川(下流)	丹波川(上流)	大々川でも記
武 藏 八 景		玉 川		
東 海 道 名 所 図 会		玉 川	多摩川・六郷川	郡名多麻、玉川が六郷川の本名で記
調 布 日 記	19	玉 川		
新編武藏風土記稿			多磨川	郡名多摩、文化2年「玉川の碑」が狛江付近に建立
武 藏 名 勝 図 会		玉 川	多磨川、丹波川	郡名多磨、三田領まで玉川で記
武 藏 野 話			多麻川	郡名多麻
統 武 藏 野 話			多麻川	郡名多麻

出典	年代	玉川の名称	その他の名称	備考
東都近郊図	19	玉川	多波川	郡名多麻、羽村を境に上流を多波川、下流を玉川
江戸名所花曆		玉川		
国郡全図武藏国			六郷川	多摩川を六郷川で記
江戸名所図会		玉川	多磨川	郡名多摩・多麻
東都歳事記			多摩川	
日本景勝一覧図		玉川		流域を玉川で記
玉川沂源日記		玉川		始めて多摩川源流を踏査
関東十九州路程便覽		玉川		流域を玉川で記
東都近郊のみちしるべ		玉川	多波川	郡名多麻、羽村を境に上流を多波川、下流を玉川
武藏国全図		玉川	丹波川	奥多摩町氷川より下流を玉川
大日本国沿海略図		玉川		流域を玉川で記
大日本管轄分地図東京			多摩川	明治27年刊の図
鉄道線路図 鉄道道中記	20		六郷川	明治36年刊の図
東京市十五区全図			多摩川	明治40年刊の図

は現代人からみれば誤認であろうとも、昔時の知識をもとに丹波という辺境の地を治めていたはずである。だとすれば、文政天保の時代は丹波山村を、おそらく多摩川の発源地でとらえていなかったのでは。誤認を誤認でない、熟知された水系で、永く認証させてきたことになる。ただこの古図では多摩川が丹波山村に発源していないとみたが、見方によれば曖昧な点もある。この時代はまだ山里で暮らす民の校閲のないまま編まれたことが、こうした絵図の誤りを生じさせたのだろう。とすると、文政から天保という時期が、探査によって現在の水系と一致してくる時代にさしかかっていることを語りかけてもいる。多摩川の源流を丹念に踏査し、始めて記録した『玉川沂源日記』が天保十三年(1842年)であったことでも、その一端が知らされる。

多摩川の源が天保年間に明かにされたとすると、当時の絵図もこの影響をうけて、かつての知識と交錯する図柄となって描かれる。それを天保以前と以後の古図で比較すると、土地と照合させる姿勢から編まれたのかどうか、より顕著になろう。

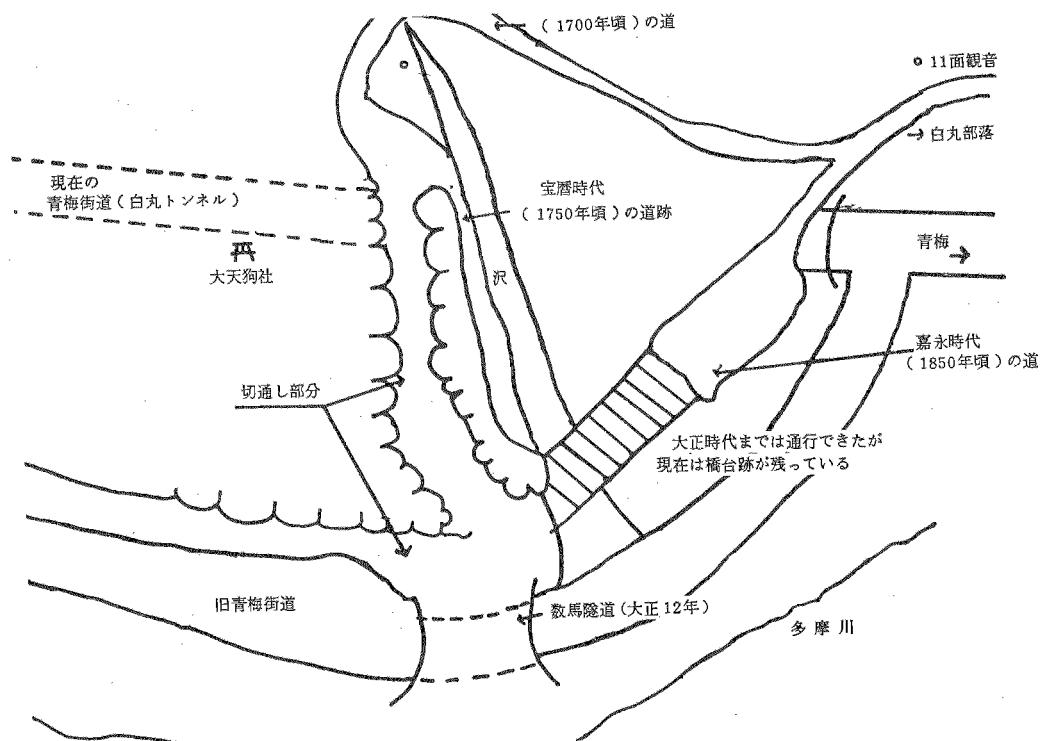
天保からおよそ60年前の、安永7年の『新刻日本輿地路程全図』で多摩川をみると、中下流は玉川で、上流は丹波川の川名で記され、しかもこの上流とは奥多摩町の小河内止りである。この時代、まだ丹波山村の源にまで、知識が達していなかったことになる。それが天保から十余年後の、安政3年に著された『武藏国全図』には丹波山村を水源に描いて、図中「甲斐州都留郡一ノ瀬村溪間及字名清水谷ヨリ流出シ

落合至テ多波川ト云」の付記まで添えられている。ただ『文政天保国郡全図』の描かれた時期でも、天保14年『富士見十三州輿地全図之内、遠江・駿河・甲斐・伊豆・相模五国図』は、甲斐の辺境にすでに記載されている場合もある。

これら古図の変遷からみても、各時代の歴史と風土を多摩川の流域ごとに焦点をあてながら、そのまま図化させた遺が忍べる。ともすれば理学の論法で処理しがちな現代とちがって、自然が創作する多摩川を人文学の立場で、長く捕えていたことを物語いるのだ。

先人が道を拓いて、甲斐の文化や物資を取り入れる努力をした跡は鳩ノ巣の数馬に残る。青梅街道の旧道には手堀りの隧道が残されているが、これは大正12年に開通したもの。それまでの数馬越えは、岩の露出した切り通しの小径であった。岩場に火を焚いて水をかけ、ツルハシとゲンノウで拓いた切り通しは元祿年間の古道で、宝曆になって改修した「道路改修の碑」も遺されている。武藏と甲斐の交界地にあたる数馬が、里人たちの往来を容易にさせて、旅人にとっては難所になって、甲斐文化が氷川止りとなる。古道をたどると、物資の輸送が困難で、旅人がようやく通行可能であったことを知らせてくれる。そのためか、甲州屋の屋号を看板に、何世代も前から商う店も氷川の街面にのこる。

先ほど、多摩川の発源地を奥多摩町だとする立場をとろうとしたのも、そこにある。甲斐国人でさえ、丹波山村をその程度の知識で治めていたわけであるから、他国や、それも多摩川中下流の台地や河畔で暮



武甲を結ぶ数馬の古道図

らす武蔵野人にとって、それ以上の知識が持てようか。三田領の山中自然の配合が加わり、武蔵文化が超えられない吹溜りであったからよけいである。

さて奥多摩町の丹波が多摩川の発源地だとする立場は、先学の遺した記録からも読める。例えば『江戸名所図会』の多摩川には「田沢義章の『武蔵野地名考』に、この丹波山を武蔵とせしは誤りなり」と記して、甲州丹波山に發すという。しかし『武蔵野地名考』は『江戸名所図会』が編まれる一世紀前の享保21年であるから、当時にあっては丹波山という山里は、武蔵に存在していたのかも知れない。だとすると、『続武蔵野話』(文政9年)の記事とも一致する点がある。

『続武蔵野話』二に、「冠嶺(現在正丸峠)二十町ばかりの急なる峻道なり。登り得て入間郡黒山村、高麗郡長沢村の界なり。ここにて眺めば西南に武光山(ちちぶ郡)正南に名栗の在馬山(現在有間山)甲斐の多麻山手に取るごとくにて、その絶景いはんかたなし。また北を眺めば東北に筑波山、北に二荒山、赤城山、吾妻山、西北の隅に浅間山を眺む。」と記された内容がそれである。正丸峠に立って遠望すると、およそ「甲斐の多麻山」の方位だけが一致しない。

在馬山(有間山)とともに真南で視界にとび込んだとする記事が誤認でないとするならば、有間山の背後に存在しなければならない。ところがその背後は甲州との国界どころか、甲斐丹波山村でもない。そこは日原川や大丹波川が深く侵食した三田領の丹波の古里にあたる。甲斐の丹波山村が武甲山の南をかすめた奥の、西南方向になるから、やはり多麻山は奥多摩町の丹波周辺に存在したのか。奥多摩町をくまなく探索しても、それに該当する山名は見あたらない。

ただ『武蔵名勝図会』巻十二 三田領之下の大丹波、小丹波に「往古は一村なりしや知れず。この村名は古きことにして、川の名、また郡の名もこの唱えより起りたと云。和名抄に「多磨」と註して「太婆」とみえたり。上世は太婆郡、または太波川とも書きたること、古きものに見えたり。」と記載されていて、19世紀初頭まで多摩川の発源地をこの山里だとする古図とも合わせると、その時代の風土と歴史と一致していく。

更に本書は同じ三田領之下、日原川でも「此辺の土人云多磨郡、多磨川と号するは、この川あればなり。水源は郡中より始まり。いまの多磨川は甲州より出て丹波山村へ入りて丹波川と称し来たれば、かの川は丹波川にして、この川は多磨川の本派なれば、実の多磨川なりと云。」と述べ、甲州丹波川を附会の意味であつかっている。ならば、三田領内丹波の古里に加えて、多麻山も存在することになろうが、土着の伝言には俗称名にも語られていない。

しかし青梅の谷合氏見聞録(江戸中期)に丹波川で記されてたり、延徳二年(1490年)、白髪神社(大丹波村)鰐口の銘に、武州袖保大玉村などと三田領内を記録したことからも、三田谷一帯の山里を総称して多麻山と呼称したのか。『倭名類聚抄』でも武蔵国に多磨郡を載せ、太婆と讀ませ、あくまでも甲斐国内で記録していない。先祖の熟知した多磨川の源流は現在とちがって、甲斐との国境(杉田領と三田領の境、現在奥多摩町内)で、奥深い山里にあった。

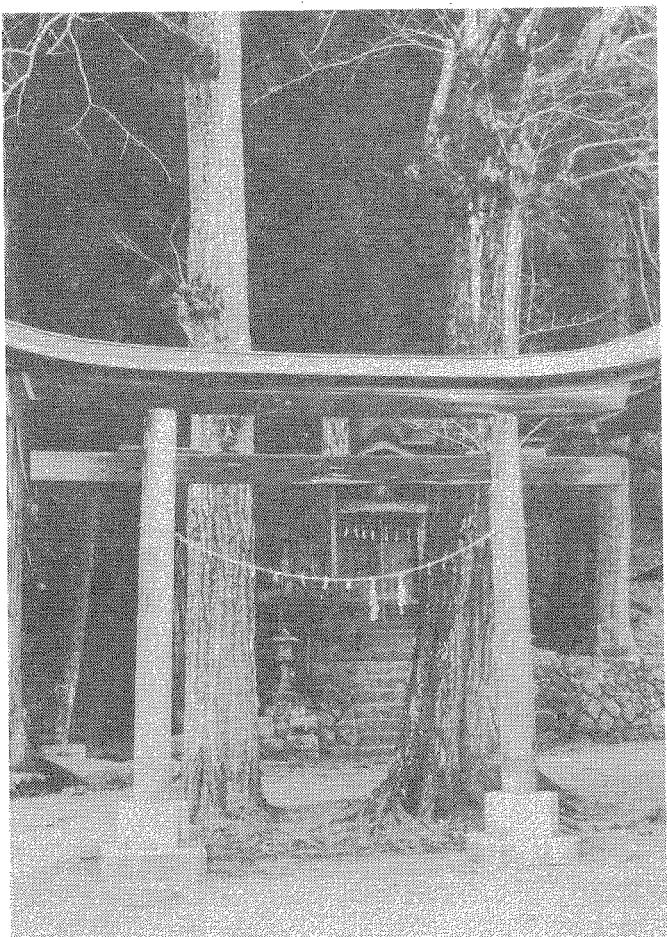
多摩川の源が、ここ奥多摩の山里から発祥しても、古人たちが捕えたタバ、タマの語義はやはり先学諸

氏が甲斐丹波山村でみた論考と同じで、峠や分水嶺の意味がひそむ。しかし15世紀以後になって、はじめて丹波の文字がみえ、以前は他の文字で記されている。この点について奥多摩町を観ると大丹波、小丹波、丹三郎などの古里名や、大丹波川のように、現代の顔立に整えられて遺ることである。丹すなわち三田谷に鍬跡をのこした原島丹三郎友連の足跡になるが、彼は武蔵七党に名をつらねた名族の出で、秩父・児玉・入間郡に勢力をもつ帰化族丹治党の流れをくむ。

丹治党は武蔵の北西部山間で、鉱産資源の採掘に勢をだす一族であったから、鉱物を精錬するにも丹生（水銀）が必要不可欠であった。この鉱山開発の名族丹（に）が、附会するように多摩川の語意にも容れられているのでは。そこで丹生の足跡をたどって、三田谷から秩父の山中に分け入ってみる。

### 3. 丹生と原島丹三郎の足跡

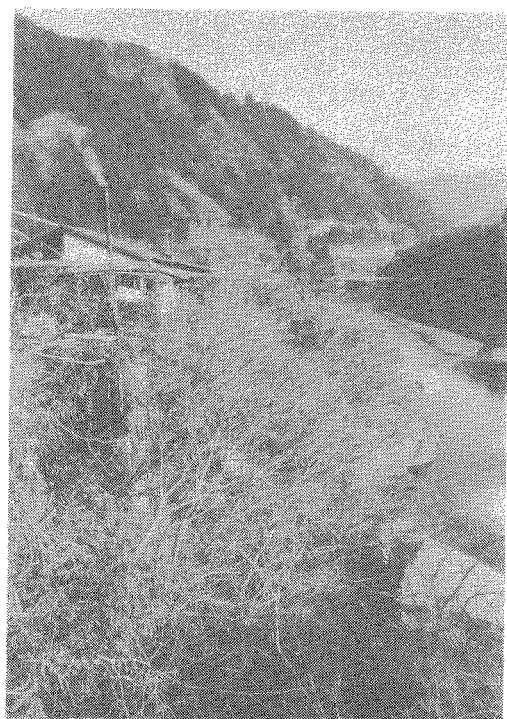
奥多摩の産業構造は乱世に三田氏が支配した三田谷で変わる。それより奥の川筋は甲斐の杉田氏が領有するところ。両者の文化交流は多摩川が秩父古生層をあらい露出させて、懸崖な地形を創り、道を断ち人馬や物資の移動を不自由にさせた。ともに平将門の血を引き、山岳一帯で袖人となって活躍しながら、交流が断たれたのはこの多摩川のしわざである。



奥多摩町丹三郎集落の丹生神社

奥多摩に將門伝説とその遺跡がいっぱい詰まっているのも、そうした先祖の系譜につながる土地柄であったことを、三田氏の実力は語りかけている。平家一族の出という三田氏の足跡でかき消されたかのように遺るのが、丹治党の流れをくむ原島丹三郎友連の鍬跡である。

日原村の一石山権現の社家をつとめた原島右京も、この流れをくむが、もとは先祖原島太郎直友が武蔵忍領原島村の出であったので、子孫原島姓を名のった。太郎直友の子丹次郎



川井の里の多摩川



青木神社に遺る原島家の足跡  
( 奥多摩町大丹波集落 )

友一とその弟丹三郎友連は、ともに文明年間原島村で生まれている。兄弟は小田原北条につかえた後、丹次郎友一が日原の奥谷を、丹三郎友連は小丹波と丹三郎を拓いて、きびしい土着の路をあゆむ。奥深い三田谷に開発の手を入れた彼らの子孫は社家職という、村内きっての役職を引き継ぎ、先祖の意志を譲りなく山里に染めていった。

原島家の祖神、丹生津姫(ニウヅヒメ)命を祀る丹生明神が、三田谷だけでも五社記録にみえて、原島家の活躍の跡が忍べる。

丹生明神は武藏野の北西部、山間野面に勢力を張っていた丹治氏(丹党)の領域に集中していて、ここ三田谷から秩父郡だけでも19社確認(新編武藏風土記稿)できた。丹治氏は宣化天皇の血筋をもち、たじひこおう多治此古王の子、広足が丹治の姓を賜った後、武藏守(承和十二年)になっている。

なかでも丹治氏が治める秩父の山里が、他国人に知れわたるのは黒谷の山から採掘される良質の銅鉱石をもって、わが国初の銅錢を鋳造したことである。この銅をもとに、近江の鋳造所で銅貨和銅開宝を発行し、それを記念して年号も和銅に改元している。勿論秩父の山里からは銅だけではない、鉄や金の鉱床跡ものこる。東国という粗野な大地を拓く武州人に自信をつけさせたのが、まさに秩父の丹治氏が実力を示した山間盆地であった。

ただ三田谷から秩父、そして児玉にいたる一帯からは、鉱産物の精錬に必要な丹生(水銀)は発見されていないようである。武藏の山地から掘り出される鉱石で、合金や水銀塩、火薬、更に顔料(塩化水銀)を製造する場合に、水銀は不可欠である。他国から輸送したのか、未だ古道も確認されていない。御岳山、武甲山、三峰山など修験の山塊をひかえていて、山伏たちが辰砂を焼いた跡はある。鉱石の多



黒谷の和銅遺跡



和銅遺跡の日本通貨発祥の地碑  
(秩父市黒谷)

い武蔵の山里に光があたり、山師の実力が發揮できるのは水銀あってのこと。山伏や丹治氏が根をおろして活きる地域だし、丹生の祖神を崇める姿勢もあるから、何らかの関連がそこにはひそんでいる。

ところで水銀であるが、丹生、丹、朱砂、辰砂、真朱などの漢字を当てる。なかには壬生、仁保、入野、玉生、邇、新田の土地名で、その所在を知らせる場合もある。太古から土着の日本人は水銀をにと呼んでいたが、後に大陸から表意を付けた丹の文字が導入されると、この漢字をにと訓んだことで、全国に丹の文字やにの発音が水銀と深く係る山里に記録されてくる。丹生は特に紀州の高野山から大和の吉野一帯に広く分布している。紀伊山中に居住する丹生一族の里へ、空海が真言宗の大寺院を建立したのも、用途の広い水銀が存在したことにはかならない。

高野山系真言宗の護持のもと、後に修験も加わって、水銀採鉱は宗教の布教のなかえ組み入れられて、全国の山間地に根づかせた。奈良時代、丹生氏の活躍があったから、七堂伽藍の大寺院を建築するにも、金属製品や染料、塗料も確保が可能となってくる。

丹生氏はニウヅヒメ命を祖神として崇め、一族の拓いたところ、あまねく丹生神社や仁保神社、また合祀されて別社名でのこしている。ニウヅヒメ命（丹生都比売命、生都比売命、爾保都比売命、丹生津姫命など）は天照大神の妹神で、稚日女（わかひるめ）の別名をもつ、水金を掌る女神である。古代水銀鉱山の開発には丹生氏とニウヅヒメ命が伴なって、全国へ散らばっていった。

この時代黄金の精錬にはアマルガム法を用いたことから、アマルガムを掌る女神で崇拜していた。しかし農耕文化が浸透し水田稲作が定着してくると、アマルガムが天や雨の意味にとって変わり、ついに



埼玉県名栗村の山伏峠

水を掌る女神（ミズハノメ命）を祭る社に変容する場合まで生じる。もともと国境の神ミクマリ（水分）が水田の発展につれて里に下り、水利を守る神にもそれは結びついていく。またタカオカミ（雨師）やクラオカミ（靄）という大陸の竜神信仰にも、とて変わっていくが、後世ニウヅヒメ命が消滅しなかったのは、弘法大師が大陸から帰朝した後、水銀の経済価値を宗勢の基盤に取り込んだからという。こうした丹生の経緯については松田寿男氏の『丹生の研究』に詳しい。

ともあれ武藏の山里にも、そうした系譜が連綿と生きづいてきたことは、丹治党の活躍と丹生の古社が語りかけている。鉱物が武州山間で採掘されるかぎり、水銀鉱がなくともその精錬には必要であったはずである。

また修験者によって拓かれたところにも多い。日原もそうだし、御岳山、天祖山、武甲山、雲取山、三峰山などの峰みねに山伏たちは脚を入れ拓いている。正丸峠も彼らの歩いた尾根道で、その南には山伏峠ものこる。もっとも三田谷の尾根も彼らの修行の径であったが、山伏から離れて生活舞台として拓かれたのは中世末の享禄年間になる。

ただ日原川流域となると近年になってからのこと。先人が熟知していた多摩川の源流で、奥多摩の谷奥にあたり、石灰岩質の岩場が農耕をこばみ、川の幸にも恵まれていなかった。大正15年に編まれた松川二郎著『名物をたづねて』によると、イワナについて「冰川附近では、多摩本流でも、日原川でも、盛ん

にヤマメが漁れるが、日原川のヤマメは不味く、本流でとれたものでなければ不可いと言はれてゐる。」と記し、川苔についても古者の語りを引用して「日原川の方が沢山採れるのだが、わたしは本流ばかりで採ってゐる。同じ川のりでも日原川のは不味うていかん。」と日原川を業にして暮らしをたてる困難さを知らせている。

こうしたことが山里で活きる人たちにも、日原の川面を奥深いところと捕え、後年まで脚を踏み入れなかつた。山伏たちはそこを、かゝこうの修行の場に仕立ててこもつた。日原鐘乳洞前の一石山神社の縁起は、この修驗の遺を語りかける。

ところで修驗道が原始山岳宗教で、有史以前から存在したのであれば、朝鮮や大陸から仏教がもたらされた後、遠隔の山中に大伽藍を建立する財力は鉱石から抽出する黄金や銀、鉄、銅などによって蓄積されていったと思われるし、その精錬には当然水銀を使用した。山伏たちの修行の場が国境であろうとも、それは下界の作為によるものであるから、自由に山地を越えて往来し、鉱石も求めたにちがいない。

彼らがタオ、タワを越えて活躍した例は全国各地に遺されている点から、武州山伏たちも多摩川水系から荒川水系というか、もっと広範囲に道をつけていた。すでに朽ちはてて足跡が残らないところもあるが、異文化に染められないで、なおかつ彼らの道筋を認めざるを得ない部分も多い。三田谷の丹波にも中古からのタオ、タワでとらえた思想に、丹治氏の台頭によって、丹の文字を付会させてきた。語意が明らかであつても、時代が降りるに従つて太婆、多波、丹波、太瀬波、多磨、多麻などの文字を当てて、源義を忘れさせるかのように多元的になるのも、そうした経緯があったからだ。

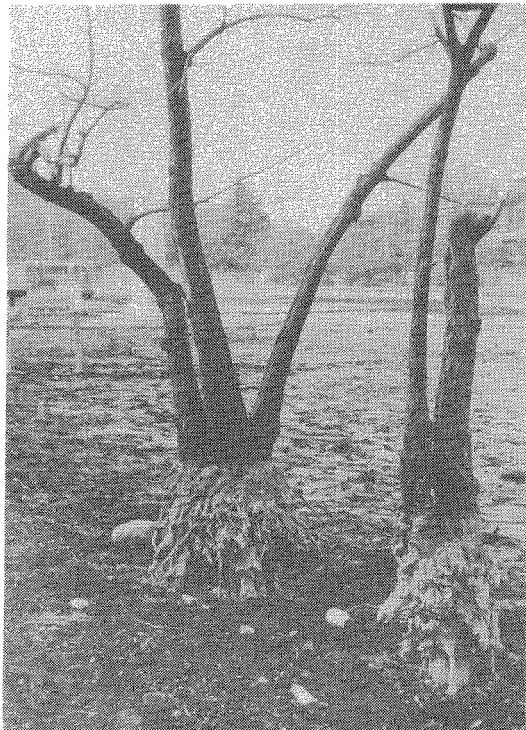
ただ多元の語意は多摩川という川名の経験に結びつく内容であつて、玉川には結びつかない。多摩川の水面を彩る玉川は別に、都人たちの歌謡にならつて美賞の意味がひそむ。玉川はもっと武藏野の高台が開けてくる、谷口下の川面になる。

## (5) 玉川の自然環境と人文

### 1. 多摩川の伏流と泉

東京の高台は坂の多い街である。坂道を上りつめると平坦な乾いた台地に出、再び下ると小川に架けた橋を渡り、また急坂がまちうける。下町にはない山の手独自のアクセントを付けるのも、武藏野の地形をそのままの姿で利用しているからである。

もっとも現代の高度な技術で改造するような時代となつては、街中を平面でとらえる姿勢に変わりつつあるが、まだまだ自然が創作した台地に生きていることを、深く切り込んだ川が知らせてくれる。東京西郊から武藏野を縁どる丘陵山地にいたる武藏野台地は、日本を代表する台地で、九段坂、三宅坂、道言坂などと、白金台、駿河台などの台町を、川をはさみ交互にいれて拓いてきた。こうした名坂や高級住宅地に改変された高台にかぎらず、武藏野人の生活舞台をそのまま、台地の履歴をつけて伝言している。なか



三宝寺池



善福寺池の遅野井

には西郊の国分寺や府中に、多摩川のつくった段丘崖を横切る急坂もある。

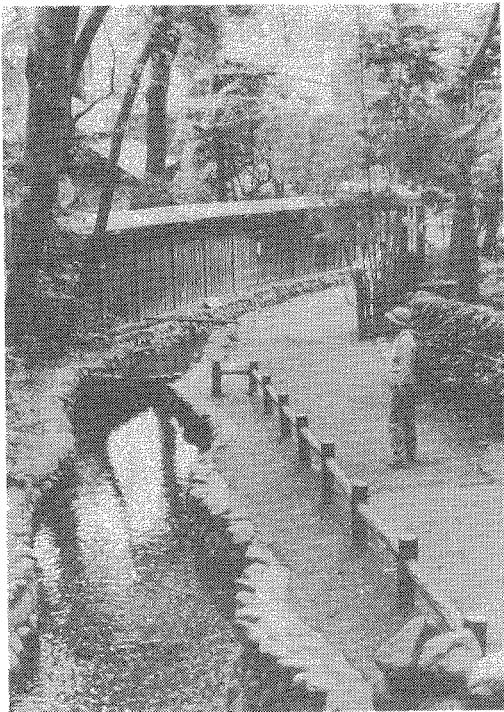
武藏野を研究する自然学者はこの高台を武藏野台地（洪積台地）と呼び、多摩川の谷口青梅を要に、古多摩川が土砂を自由に流し扇状に堆積させて、台地の基盤を創作した古い氾濫原の跡だという。西から東へ、およそ 50 Km におよぶ緩やかに傾斜した台地は、西軸の青梅で 180 m、立川 90 m、吉祥寺 50 m、そして東端の上野で 20 m と順次下っている。なかでも乾いた高台を武藏野段丘面といい、武藏野ローム層と立川ローム層が覆っている。多摩川が高台を侵食したそれより一段低い立川段丘面が、多摩川の流れに沿って青梅から世田谷付近まで続く。

台地中央部には古多摩川の切込みによって、孤立した狭山丘陵や浅間山などの丘陵をのこす。この丘陵は多摩川沿いに多摩の横山をつくっている多摩丘陵、加住丘陵、草花丘陵と同じ地形や地質で、武藏野の台地では最も古い平野だったところ。

こうした武藏野台地の素顔に、更に台地をきざむ小規模河川が、高台を深く切り、谷底の軟弱な沖積層をシマ状に分布させている。井ノ頭池、遅野井、三宝寺池など、窪地の谷頭から幾条もの谷筋となって流出する小川が、坂道の多い街面をつくって、途中ハケ（湧水）をいれながら流量を増す。

武藏野の台地を構成する地形や地質が、伏流水をこの標高 40 ~ 50 m の高さで、地表に顔を出させた場所でもあり、国分寺崖線や府中崖線に沿ってハケも分布させた。そうした清水の湧くところに石器時代の先住民も、居を構えていたようで遺跡も多い。人工の大地に改造された現代とはいえ、多摩川に沿うハケ筋の、玉水のもとにワサビ田ものこる。多摩川や台地の間にできた窪地、そして浅い谷から湧くこうした玉水を道標に、乾いた武藏野を拓く姿勢が

現代に受け継がれている。



真姿の泉（武藏国分寺）

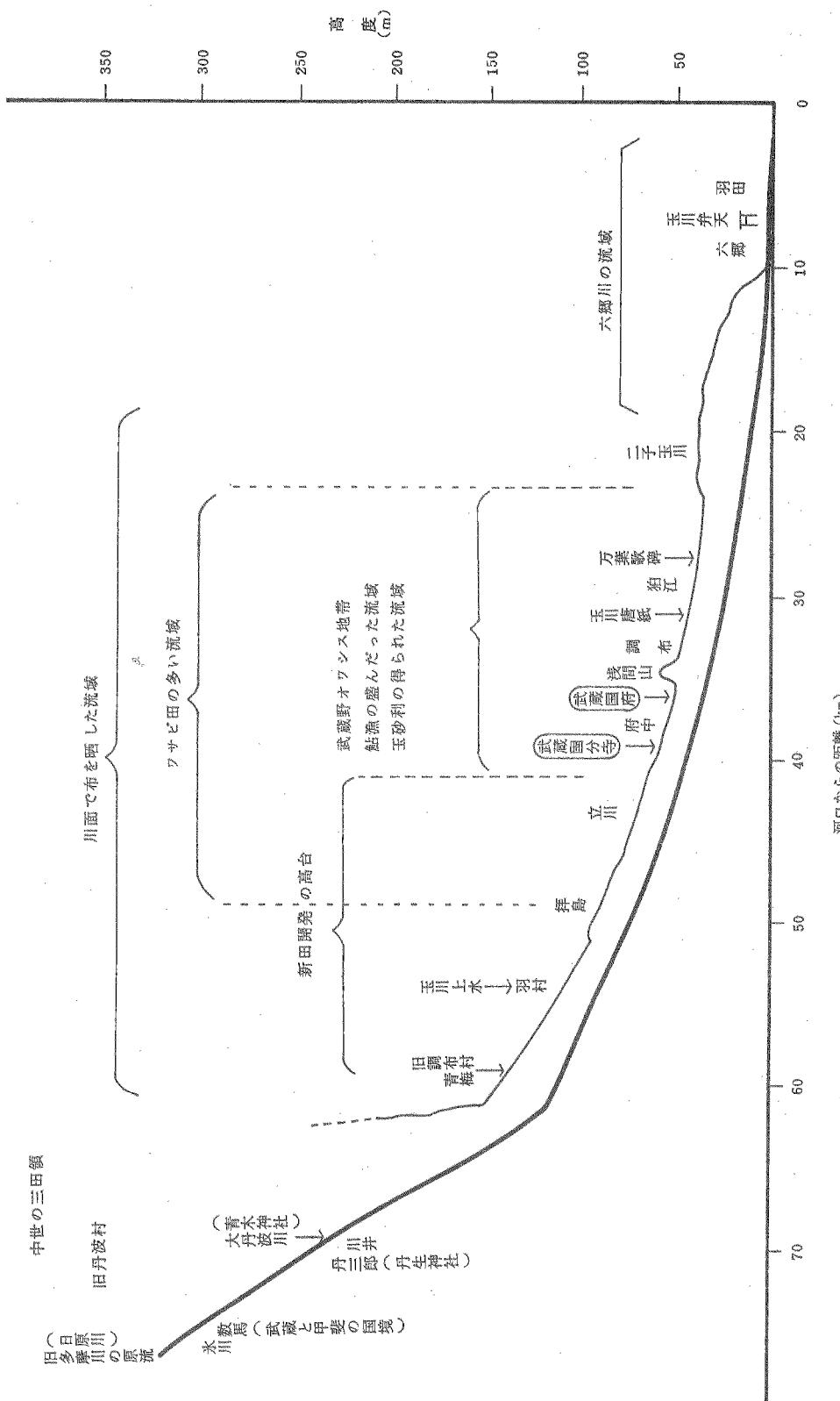
先人の脚を入れる方途には自然にそむかない、むしろオアシスにして開発の歎を残している。武藏野を舞台に、活躍する古代人の足跡も、府中の国府を中心に、その玉水勝に誤りなく歴史をきざむ。この生活舞台創作法には、古代の主力思想に加えるように、自然の摂理を熟知した上で養われていた。素朴な手法のなかに、地域風土の呼吸を汲みあげるかまえが、このオアシス地帯にあった点に、とくに注意しなければならない。オアシス地帯の標高 50 m を超える乾いた高台は粗い野で、先人の住みかにはならなかった。そこは近世になって、新田が拓かれるところ。それよりも標高の低い、伏流水が玉水となって流れ出る清流域に、先人の暮らしの跡もしのべる。

多摩川の流れに沿って探索すると、羽村や福生など、まだ伏流水が地表水に変換しない地形の部分で

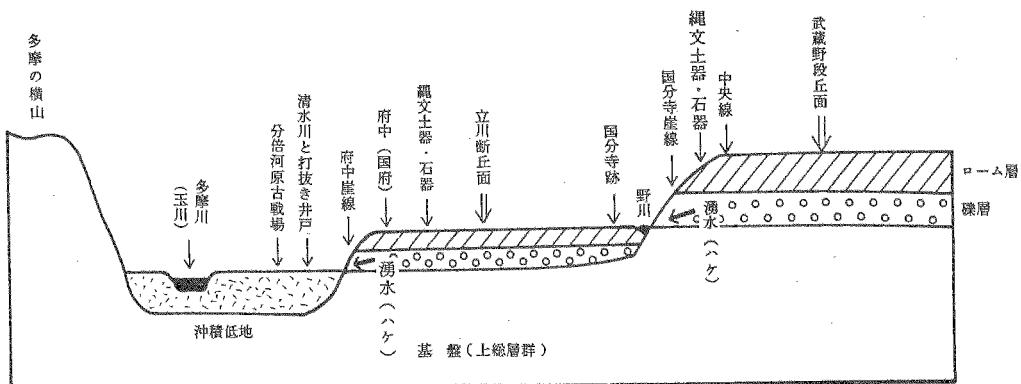
は、河畔に沿って帶状にのびる立川面からの湧水に限られ、広範に湧出しない。標高 50 m を下り多摩川が乱流する府中、調布、狛江付近になって、ようやく地下水も地表に広く顔を出してくる。この高度は石神井川、善福寺川、神田川、野川などの谷頭とも一致して、武藏野のオアシス地帯を形成している。先人の飲料水、水田稲作に利用し、更には布晒にも利用できる良水の地帯で、早くから業の地に釀成してもきた。

このオアシス地帯から離れると、水が得にくい乾いた台地になる。武藏野は中央部の面積が広いから、それだけ水問題が深刻である。玉川上水の通水で、中央部の砂漠地帯を潤すようになったが、それでも分水できない高台は永い間未開のままであった。とくに国分寺から府中を経て多摩川低地まで下ると、多摩川の侵食によって形成された平坦面が 3 段ある。高台を構成する武藏野段丘面、そして野川に沿う国分寺崖線で下がった立川段丘面、ともに数万年前に堆積したローム層が地表を覆い、下層に透水の礫層があって、台地中央からの地下水がここで湧く。野川や府中崖線に沿うハケの道は、古代人にとってオアシスづたいの道であった。国府や国分寺にしても、この玉水の利用できる位置を選んで、武藏国家を支えてきた。

古代人の活躍する立川段丘面から、更に多摩川に下ると多摩川の低地に出る。分倍河原の古戦場がのこる古多摩川の河道跡では、10 m から 15 m の厚さで砂礫の地層が覆い、まさに分倍の河原であったところ。多摩川の伏流水がモコモコと清水を湧かせたり、地中に管を打込んだだけで吹出る「打抜き井戸」が見られたところにあたる。この河原は多摩川が乱流する荒玉川で、戦場にはなりうるが、古代人の求めた



多摩川の河床断面とその開発



## 武藏国府周辺の舞台構成

生活舞台にはならなかったようで、布を晒す機業地とか川の幸をもとめる波うつ岸辺の景があっただけだ。

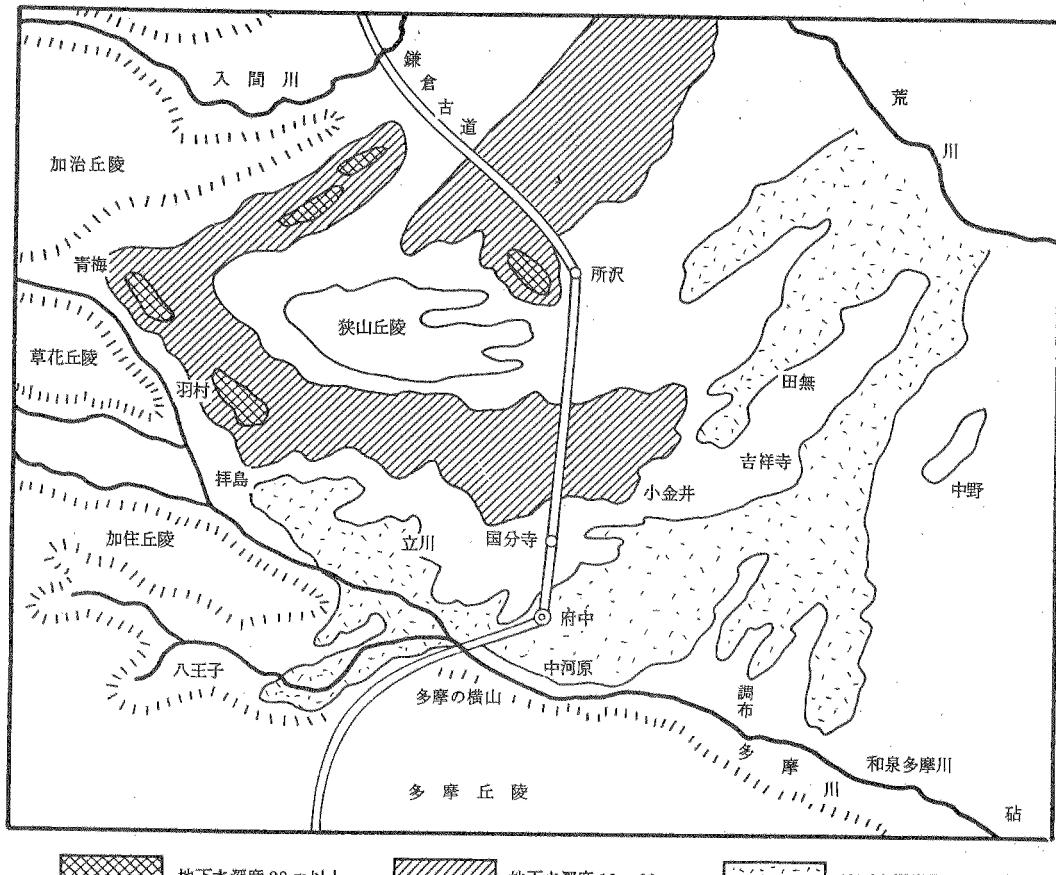
ただ、標高 40 m から 50 m の多摩川の河原では砂礫が自浄作用の役目を果し、玉水の川面を形成させていた。昭和 30 年頃、府中の是政から多摩川競艇場池に流れ多摩川に落ちる水路を「清水川」といって、アユやタナゴが水面で観せて、シジミが砂を吹く自然の姿があったという。雑木林と原野が見せどころの武藏野にあって、国分寺崖線と府中崖線、それに多摩川の河原は、玉水を湧かせひと味違ったオアシスの野面を創作していた。そこは武藏野でも地下水湧出量の最も多い場所か、もしくはその下側で、野に生きる先人の古巣になったところ。まさに乾きを知らない、生活の論理がそこにはあった。

多摩川を水無川にしないまでも、河水の多くが青梅の谷口下で伏流し、再び地表水となるのがこの河原付近である。急傾斜の河床もようやく緩やかになるところで、押出される礫が円礫であるだけに、川の自浄にもひと役かっている。流域に沿って礫の研磨度をみても、この付近に最も多くの玉礫が敷きつめられている。ここから下流にかけては玉礫もその研磨を低下させて、河口付近になると、もう泥と混在する水郷の景に変わる。

多摩川の玉水はこの自然のなかからもたらされた水面で、決して古人の作為ではない。三島の玉川や井手の玉川、それに野路の玉川などの六玉川にしても、そうした自然が創作する野面に遺る。玉水と玉礫が昔時の生活舞台でふれあって、独自の風貌を伝える。そこが多摩川のなかの玉川で、多摩とちがった語意をつけて伝言している。玉川の水面は古人の視覚だけではなく、味覚や触覚もものをいう川瀬で、心の姿勢にかっこうの舞台を提供していた。

## 2. 玉川の古歌と歴史の跡

歌謡から派生した和歌は粗野な大地の、東国にも光をあてている。京畿とちがって、粗削りの野面であ



武藏野の地下水湧出と地下水深度図

るがゆえに、ひときわ美しくあでやかに光りかがやく故地。そこにも玉川があった。

万葉の時代から歌に詠みつづられた多摩川は、尾花のにあう武藏野のなかでも、とくに地域風土と照合させるかまえで、都人たちが詩情を織りこんだ創作をのこしている。小田急線和泉多摩川駅から、多摩川の流れに逆らって堤を上ると、右手民家の庭先に多摩川万葉歌碑がある。

多摩川に曝す手作さらさらに

何ぞこの児のここだ愛しき (卷十四 東歌)

貢納の布を多摩川の玉水で晒す武藏の乙女たち、どうしてこんなにも可愛いのか、砧でうつ女人の生活姿勢と荒多摩川の川面が、千数百年経た現代へもせまってくる。

布晒の河畔は魚より多い釣人にとって変わったが、荒多摩川と呼ばれた古多摩川の素顔は今もひそむ。昭和49年9月の台風16号で、堤防が決壊したのもこの辺り。多摩川の乱流で、河原に刻まれた古河道は府中から狛江にかけて多く遺る。もちろん、荒れる河原は整形されたが、自在に行く手を変える荒多摩川の素地の顔を、この氾濫は伝えている。自在に流れる川幅をせばめ閉込め、流路決定が行われたのは徳



玉川万葉歌碑（狛江市中和泉）

川時代からのこと。生活舞台の拡張で、多摩川の怒りも増すようで諸書にもみえてくる。強固な堤防で川を固定させ、人びとは川からの恵みのみを得ようとしていることを語っている。

しかし古代の人たちは河相を踏みしめるかまえで、無理のない要求をしたことが、「母なる川」で捕えたなかにひそむようだ。流れに身をまかせ、水を味方にする態度は河畔で暮らす、古人たちの習熟された風選の知恵であった。

万葉の故地「調布の玉川」を、多摩川のこの流域だとする説が有力とされるなか、晒した布を河原で干す乙女にたくした古代教養人の思想を、歌謡に容れる川瀬にふさわしい。防人の妻が詠んだ「多摩の横山」にしても、対岸の丘陵である。武藏国府にもほど近く、清水の流れと水汲みや布晒の女人が調和する光景、同じ清流域でも青梅の谷口下ではなく、ここ玉水に名をかりた玉川にこめられているのだ。



「多摩川の調布」野田九浦画（調布市郷土博物館蔵）

万葉後に編まれた歌謡の趣きにも、隅ずみまで風土と業がにじみ出ている。

玉川にさらす手づくりさらさらに

むかしのひとのこひしきやなぞ (拾遺集 読人しらず)

たま川やをちの砧にならすなり

こやさほしけるてつくりのぬの (夫木抄 殷富門院大輔)

玉河に玉ちらばかりたつ浪を

妹が手づくりさらすとぞみる (楫取魚彦歌集)

玉川べりは古代の恋人たちにとって、格好の逢瀬の場にもなったし、高度な技術をもった大陸からの帰化人たちの腕を借りた、手作りもひそむ。多摩川の岸辺にのこる田園調布、二子玉川の調布橋、砧、狛江、染地、調布、たづくり橋（調布南高校前）、青梅の調布などの土地名は、高麗人が武州の民に機の行程を指導した名残りでもある。

高麗人が技術者として指導にあたった、当時の川面は今は無い。都民の飲料水にとられ、やせ細った川では玉川の河原を匿して、詩情をさそう万葉の景観もひそめたようだ。しかし、ゆたかな地下水脈をあち



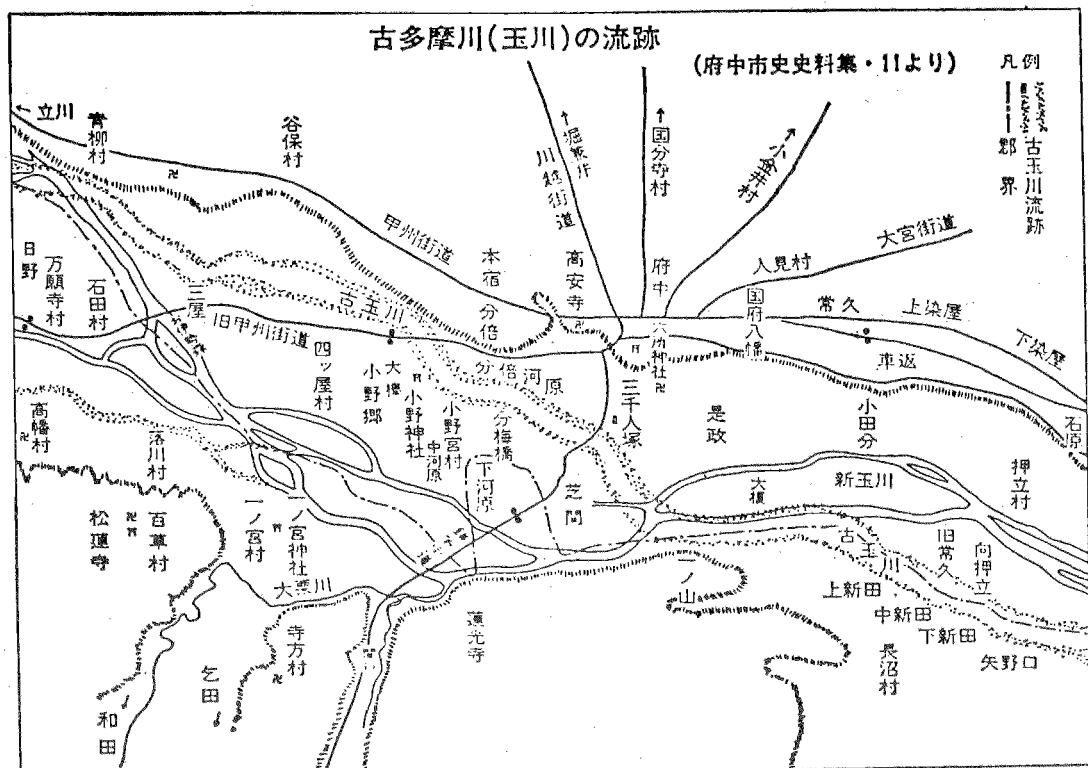
玉川の里 (江戸名所図会)

こちで分断しながらも、玉川に遺された歴史は消えうせていない。

狛江市中和泉に建つ玉川万葉歌碑は二代目の碑で、最初の碑は將軍吉宗の孫で白河藩松平家の養子となつた、松平定信の書になる碑が猪方村に建立されていた。ところが、荒多摩川と呼ばれる玉川が文政12年に氾濫し、この碑も流失してしまつた。里人たちは何度も河原を堀りかえしたが、ついに探しあてられず、百年後の大正11年になって、ようやく古碑の拓本をもとに再建したといふ。明治大正の大実業家渋沢栄一の助力によって再建されたこの碑は、古碑のあった猪方村よりも、数キロメートル上流の高台に設けられている。もともと伊豆美神社の境内に建てられていたが、すでに住宅が侵食して、古社と碑を分断してしまつている。伊豆美神社も台地下から移つたというから、ともに洪水をさけての移動である。

多摩川流域の古戦場や古城は国府の府中から延びる古道沿いに分布する。武藏国がまだ東山道に属していたころの官道、奥州道は後の鎌倉街道で、相模の国府から小野路に出て、関戸を通つて玉川の渡津から府中に至る。ここから進路を武藏国分寺にとり、乾いた武藏野を所沢へとぬけて上野国の国府に出る。

関戸は玉川と大栗川が落合うところで、古玉川の渡場の関所から地名が起つてゐる。官道を警備することは政治の安定をはかるうえでも重要で、この地をおさえることが武藏、相模という南関東をおさえることでもあり、ここを中心にしてしばしば合戦がくりひろげられている。分倍河原の古戦場はこのようなところにあり、鎌倉政権が府中を制して北関東へ出る大きな意味をもつてゐたところ。新田義貞と北条泰家の激戦（元弘3年）や、新田義貞の子義家・義興と足利尊氏の戦（正平7年）は玉川をはさんで、ここを舞台にしている。





鎌倉古道の笛吹峠  
(埼玉県嵐山町と鳩山町の境)

意識して、母なる川からの恩恵を受ける位置に設定された。他国の国府や郡衛をみても、それを語っている。教養人官人の遊里や民衆の業の地としての玉川は自然が創作する川面に、武州人が観る川瀬の音を容れている。後世の人びとが、この基本姿勢を崩さないで、大地を生活舞台に構築する手法こそ、多摩川ではなく玉川に匿された素顔である。

### 3. 玉川の古習と業

大陸から帰化人を登用して、粗野な武藏野を拓くのは7世紀後半の、まだ武藏国分寺完成前のこと。数十人を数回にわたって起用したが、その多くは時の教養人僧侶であり技術者でもあった。寺工や瓦師はもちろん、鉄工、織工、それに造船や農具を製す工人もいた。馬術、牧畜、耕作術なども指導する。

彼らの指導成果は、後に武藏武士を養成させ名族をうむ誘因になるが、ともかく大陸で身につけた技法で、武藏野に道をつけ光もあてた。尾花のつづく武藏野の原を、高麗人の手で拓き、いわば朝鮮からの帰化人こそ忘れてはならない恩人である。

彼らから学ぶ日本人のまじめな学習態度も加わって、山野に鍬跡をのこす。多摩川をみても同じこと、川の恵みを功に生活のなかへ容れて川面を組成している。高麗人の方針を守り復習するような姿勢で、里人は時をかけて土地に熟させていった。玉川べりの機と布晒を業にする古里では、そうした彼らのうけう

また万葉の昔から、多摩の横山と名づけられた多摩丘陵一帯は豪族が育ち、名族と呼ばれた実力者も台頭してくる。古社寺を中心に、中世の館が玉川を眼下にみる丘陵端に構築され、そのまま中世武藏野の歴史をみることができる。武藏野を縁どる横山ではあるが、まさに南関東と北関東を結ぶ歴史のふきだまりでもあった。

旧甲州街道も府中のいらかを通りぬけている。大国魂神社隨身門の北側がその古道で、谷保から青柳につづく。日野の渡しで玉川を渡り、秋川の五日市をへて数馬の辺境から甲斐の奥山をぬける道のりは軍道というよりも、歴史や文化で染めていく古道であった。府中を要に、政治や文化が国域の隅ずみまで波及して統治する道も、幹道から枝道となって配置されている。府中崖線上に「いききの道」と呼ばれた、生活の道まで残る。

国府を府中に置く古代人の思想には常に玉川を意

識して、母なる川からの恩恵を受ける位置に設定された。他国の国府や郡衛をみても、それを語っている。

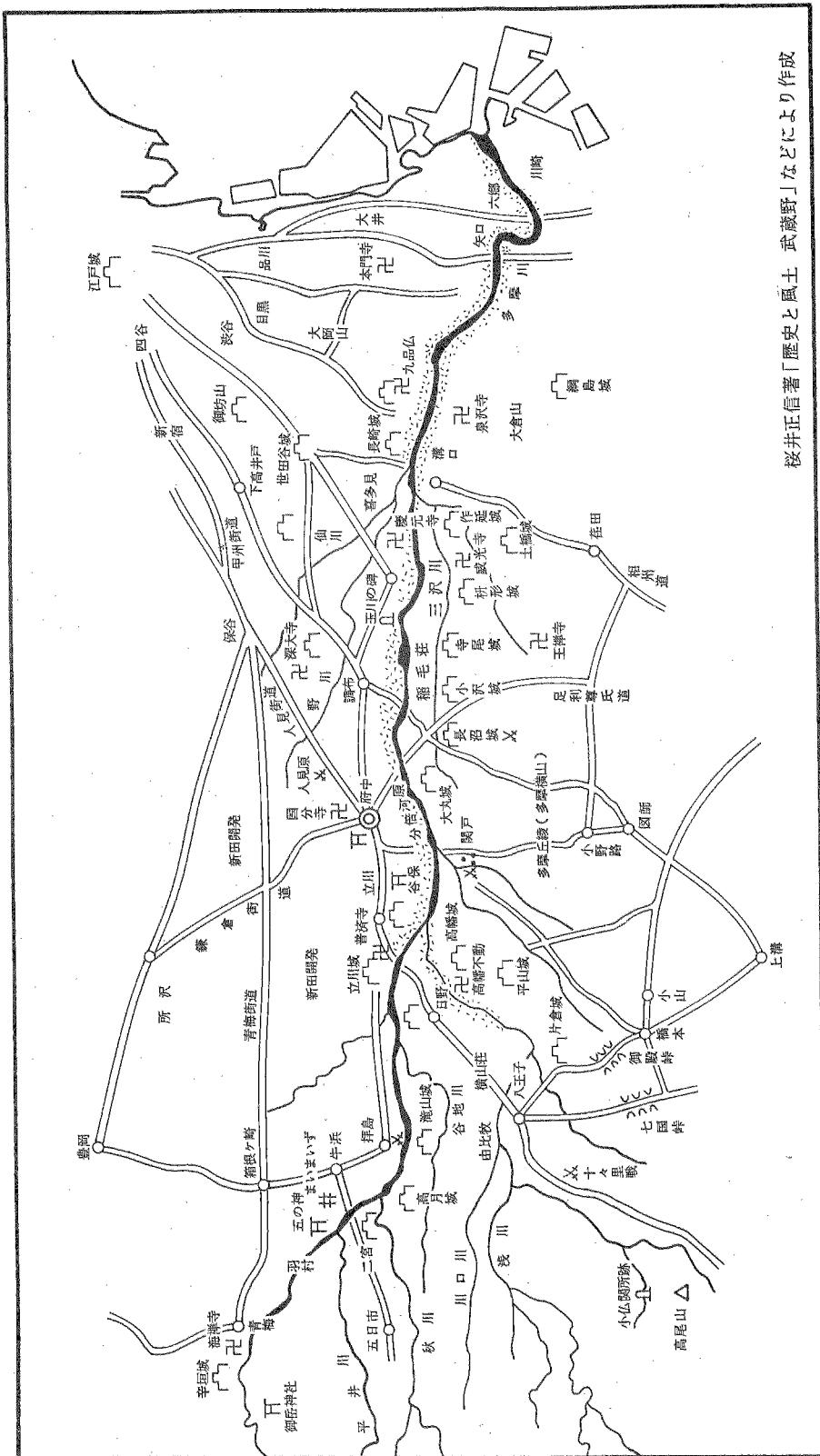
教養人官人の遊里や民衆の業の地としての玉川は自然が創作する川面に、武州人が観る川瀬の音を容れて

いる。後世の人びとが、この基本姿勢を崩さないで、大地を生活舞台に構築する手法こそ、多摩川ではなく

玉川に匿された素顔である。

## 多摩川流域の古道と史跡

桜井正信著「歴史と風土 武藏野」などにより作成



り技法が暮らしを支えたのだ。

狛江市六郷用水の取水に鎮座する水神近くに、伊豆石に彫られた万葉歌碑「多摩川碑」が、雜木を後景にして築山に建っている。この付近の流れは多摩川の流域でも、玉川にふさわしい清流域で、古里の乙女たちが白い素足を玉水にいれて布を晒した。彼女たちの習熟された手順と玉の水とが、映発して美觀を添える情景を歌謡に託している。独自の野の文化を育てる武藏野のなかでも、玉川のなぎさだけは川で暮らしひたむきに活きる民衆の水音が漂い、鳴咽のない乙女たちのしぐさと川瀬の風土が文学の題材にも採用されたのだ。

こうした古の歌人が求めた河畔の情景は何も立川や府中、そして狛江、世谷にいたる水面だけではない。

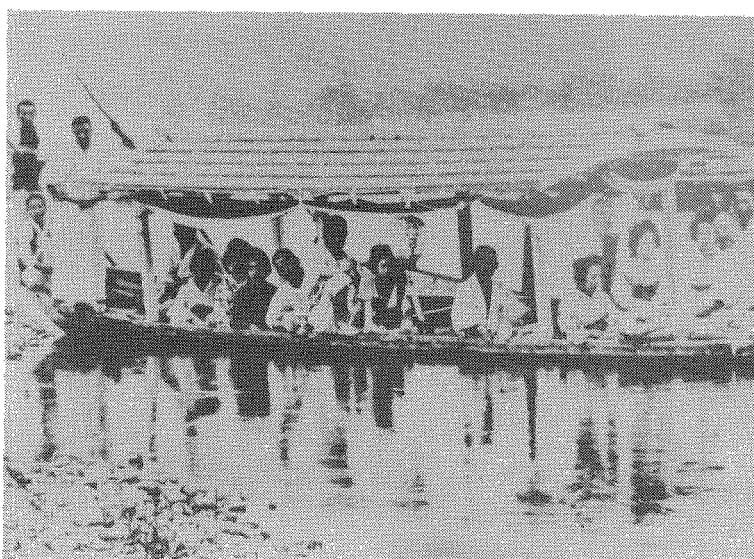
高麗人が技術指導をおこなった青梅まで広がる。青梅の調布、二子玉川の六郷用水に架けた調布橋などが、それを語ってくれる。ただ国府の官人たちは京畿の文学にならって、遊里としての詩材を国庁にほど近い野面に求めるわけで、幹道からもはずれた奥山になれば、秩父吉田の万葉故地のように恋歌が多くなる。

玉川の布晒の歌意を体した図柄はやはり多摩川の流れのなかでも、とくに自然が醸成する水面に無理なく隔合でき、歌人たちの集える道のりのなかで編まれただけに、青梅の調布は多摩川であっても、玉川ではなかった。三田領青梅が玉川で組入れられるのは、もっと時代が降りてからのこと。

ところで、多摩川には「川魚の王」とまで呼ばれるアユが名産であった。昔時から賞味され、歌人たちに



玉川（多摩川）の川面（狛江市）



玉川の屋形船（調布市郷土博物館蔵）

最も賞讃されたアユは多摩川でも、玉川で獲れるものが最も美味だという。徳川三代家光も、玉川是政辺に若鮎を求めてしばしばおとずれている。將軍に献上する上ヶ鮎を獲る川面であったから、他の川筋とちがって鮎料理の茶屋や鮎宿まで賑わったという。浅川に入った鮫陵源、玉川本流日野の玉川亭や立川の丸芝館、更に下って府中の魚元、魚重、そして調布の井上亭など、江戸明治から続いた老舗が、市井の遊客をあてこんだ案内板となって玉川鮎を高めた。

諸書に記された鮎漁は江戸時代すでにみえて、『江戸名所花曆』には府中の中河原や是政辺を玉川でとらえ、名物をアユにしている。また『江戸名所図会』でも、「玉川獵鮎」の絵図を載せている。ところによつては素性のちがうアユもあるが、ここ玉川で獲れるアユは天下一品だという。

魚の数よりも釣り糸のほうが多い、今日の玉川ではもうアユは釣れそうにない。アユの減少は今に始ったことではなく、木と紙と泥で創作する江戸の市井を、明治になって耐震耐火構造の東京づくりを始めてからのこと。文明開化という名のもとに、建物も道路も西洋風の街面に変えて行く。火山灰の覆う武藏野で、この近代的都市造りに必要な砂利や石灰石（セメント）は得られない。そこでひと役かってでたのが、都心に最も近い、ここ多摩川であった。

とくに清水の湧く玉川の砂利は良質で、建築資材になることから大量に搬出されている。いくつもの砂利穴を川面にあけながら、そのつど東京を成長させた。是政の多摩川競艇場は、かつての砂利穴を覆い隠



玉川あゆかり (江戸名所図会)

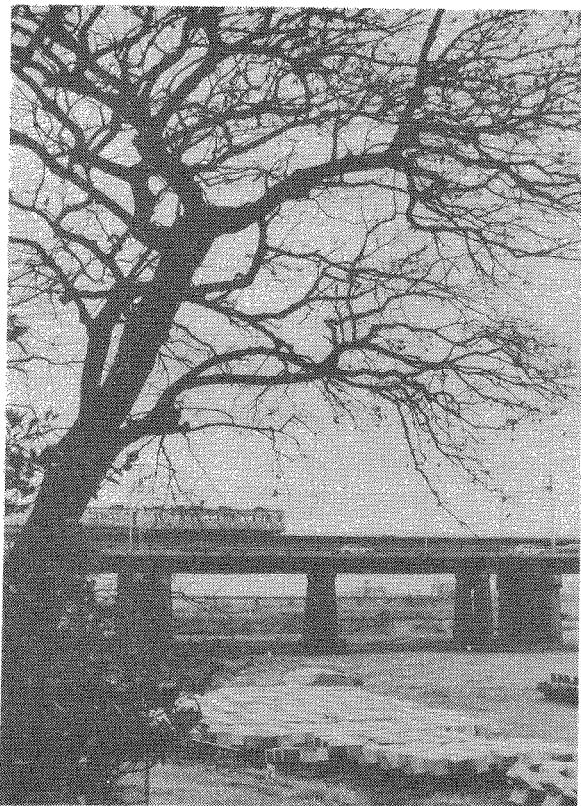
すかのように残る。玉川べりではこうした都市改造のあおりをうけて、大正期になるとアユの漁獲が激減している。

変わって、鍬を握る農民の手を借りて、砂利業者が玉石をさがし求める。明治前期には多摩川の川舟（砂利舟）に頼り、東京や横浜へ搬出したが、鉄道がその輸送目的で敷設されてくると陸路にとって変わられた。砂利鉄道輸送の先がけになった、玉川電気鉄道（昭和40年代までの路面電車玉電）が明治40年に渋谷と二子玉川間を走って運搬を開始した。次いで明治43年開通の東京砂利鉄道（昭和48年廃止された国鉄下河原線）や多磨鉄道（西武多摩川線）、それに多摩川砂利鉄道（南部鉄道）も大正10年に加わって、多摩川でも玉川域の良質砂利の輸送合戦をくりひろげている。立川から青梅へ敷設された青梅線が、セメント原料の石灰石搬出目的であったのにくらべて、玉砂利搬出のこれらの鉄道は多摩川の河相によって、その敷設範囲も限られていた。

古歌や布晒の古跡をのこし、永く鮎漁で賑わったここ玉川は、まさに自然が創作する玉水の流れのなかにあった。このところ、川で遊ぶ親水ばやりではあるが、各地で復活した風物詩、鮎漁の一覧表をみても、もう武藏玉川は載ってこない。

江戸後期、農家の副業に組入れられて発展した唐紙の模造「玉川和唐紙」も、菅村（川崎市）のミツタを原料に、調布近隣の古里で漉かれていた。山水を漉き込んだ襖紙など厚手の紙を玉川の清流で漉いたというが、その技法は機業と同じ高麗人から学んだとも伝える。やはりこの業も玉川の風景を碎く、新たな改造が始まって、明治中期に消えうせている。

いずれにしても、多摩川のなかで玉川の縄張りには独自の河相と、人びとの営みがあった。玉川上水を玉川の文字で記載するのも、羽村の取水口付近まで、玉川の流域を拡大させてのこと。昔時の玉川にそむいて、江戸人がとらえた用水名の作為である。



兵庫島と二子玉川

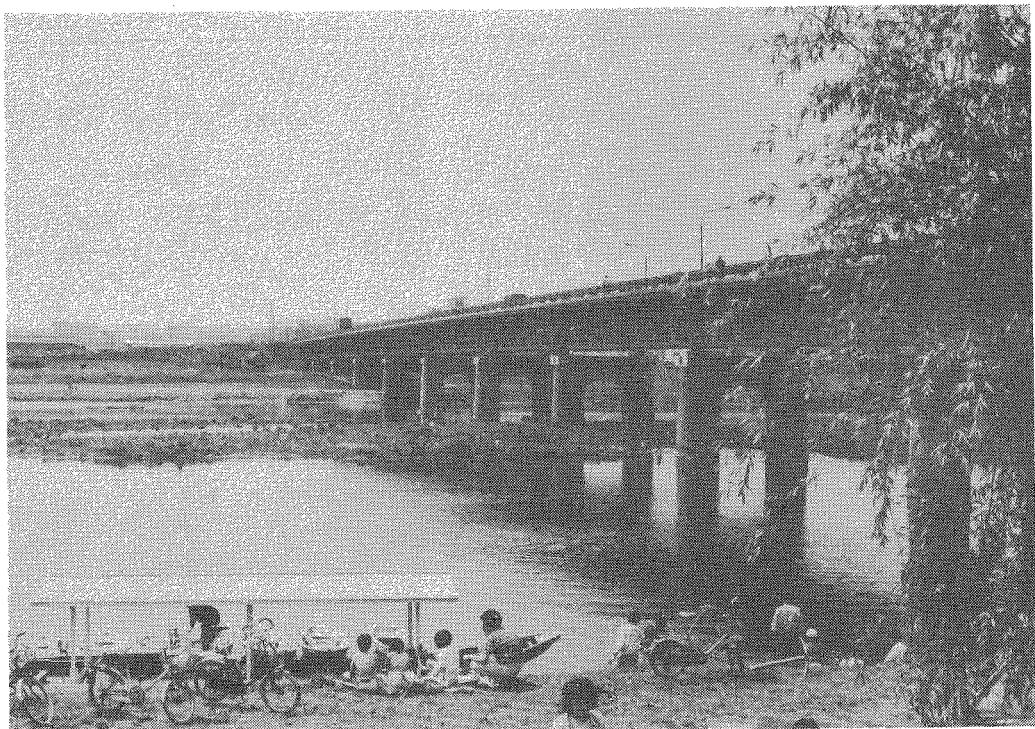
#### 4. 玉川の流域設定の変容

武蔵の野面は奥が深く広い。それでいて、諸書の多くは凍てる落葉の小径や、深緑の山径を丹念に探索しないで、江戸のいらかにいて奥武蔵を記したかと思うほど、江戸中心の作品に仕立てられている。それも名所旧跡を、できるだけ江戸近郊に取り寄せて、江戸の住人たちを楽しませようとする姿勢があった。

多摩川にしても、始めて源流まで脚を踏み入れたのが、天保 12 年（1842 年）に著された『玉川沂源日記』というから、そう古い話ではない。それ以前におびただしい数の書物が出版され記録したが、野で育ち野で終った里人の意思を組入れて集録したものではなく、居ながらにして編まれたことになる。玉川の流域設定を考える場合、どうしても要を得ないこれらの記述に頼らなければなるまい。

和歌をとおして流行の枕詞になった玉川も、決して歌人たちの創意だけに留まらず、野人たちの鋭い自然を観るなかにも容れられている。玉石や宝石、それに玉水、靈水といったたぐいの玉を、語義に入れて流傳する。名所旧跡が少ないと、さすがに歌も詠みにくいが、里人にとっては歌の世界ではなく、もっと現実におびた暮らしのなかで思考した玉川である。政府近くでの玉川では歌人の影響を受けることもあるが、それとて自然の摂理を下地に、彼らの業をつけて指呼される。

とかく多摩川と玉川を同義にとりがちな今日、多摩（丹波、多磨）川には峠や分水嶺など水源の、玉川はそれとは異質の論理がひそむようだ。それを知らせてくれるのが、多摩川水系に二個所のこる玉川の流



多摩水道橋と玉川

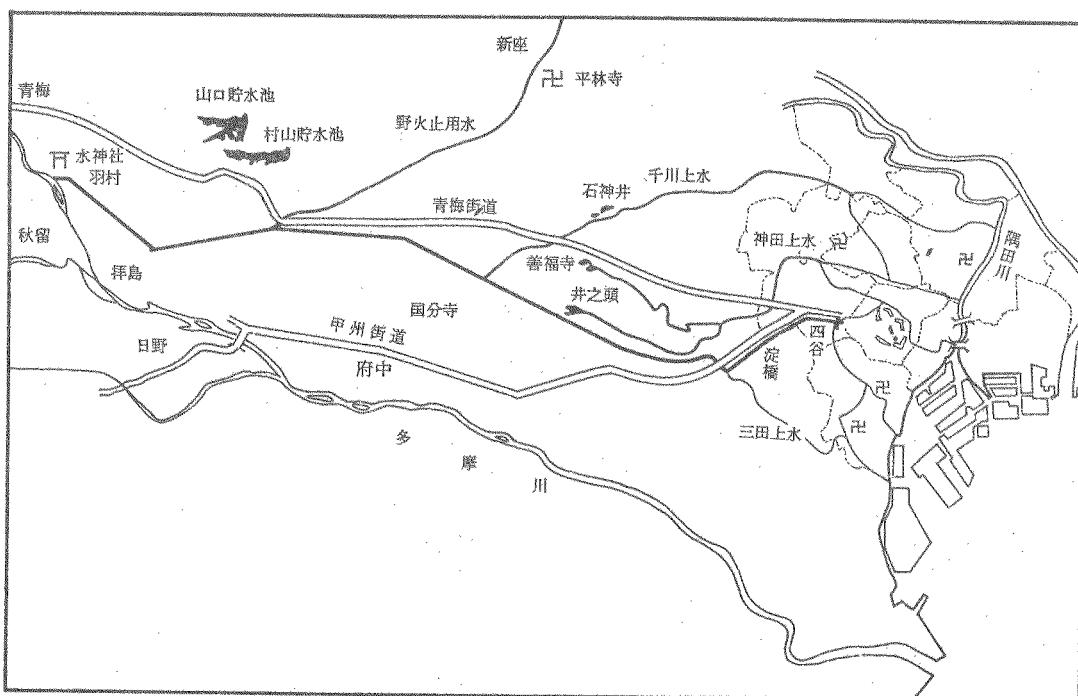
れである。ひとつは武蔵野を縁どる、調布の玉川で知られた多摩川の中流域である。

もうひとつは多摩川の上流、奥多摩湖から丹波川南側の谷筋を小菅川に沿って入ると、三頭山から流れ落する川瀬に玉川がある。この川の清水は將軍に献上した名水で、飲み薬用の水とも水薬だったとも伝える。こがね石とかコンニャク石という「子持石」が、川面で清水を湧かせている。名水と珍石の水面を玉川に詰め込んで伝言する、と山里の古老は語る。

かりに調布の玉川が丹波、多摩の転訛だとすると、小菅村の玉川の場合も丹波や多摩の系譜につながる名称なのかな。こうしてみると、どちらの玉川も昔時の河川が流域ごとに川名を変えた思想と相まって、丹波や多摩の川名に結びつかない、独自の河相を連綿と大地に印したとみたい。とりわけ後世の人びとに啓発する生活誌のこまやかな配慮が、玉川の口碑となって伝承されている。

「六玉川」の影響を受けてか、玉川の川名は中古の昔から諸書にみえるが、とくに歌謡に多く収められている。近世になると歌人たちの手から離れて地誌、紀行文、それに古図にまで登場してくるようになると、火付け役が特定の歌人たちであっても、歌の世界で磨かれた玉川が諸書を通して、一般大衆にまで受容されたことを物語っている。

ただ歌詠で遺る玉川は多摩川のなかでも、日野の渡津付近から府中・調布を流れて、狛江二子玉川付近までに限られていたように思考できる。自然の自浄で、清水の水面を演出させるのもこの川面であるし、その流れで生きる民衆のしぐさを、ごく自然に歌に盛る中古の歌人たちの行動範囲も、この流域に限られてくるからである。それよりも、もっと上流や下流では国庁の位置からみて、時の官人たちの遊里舞台に



玉川上水給水系統図

ならなかつたとみたい。

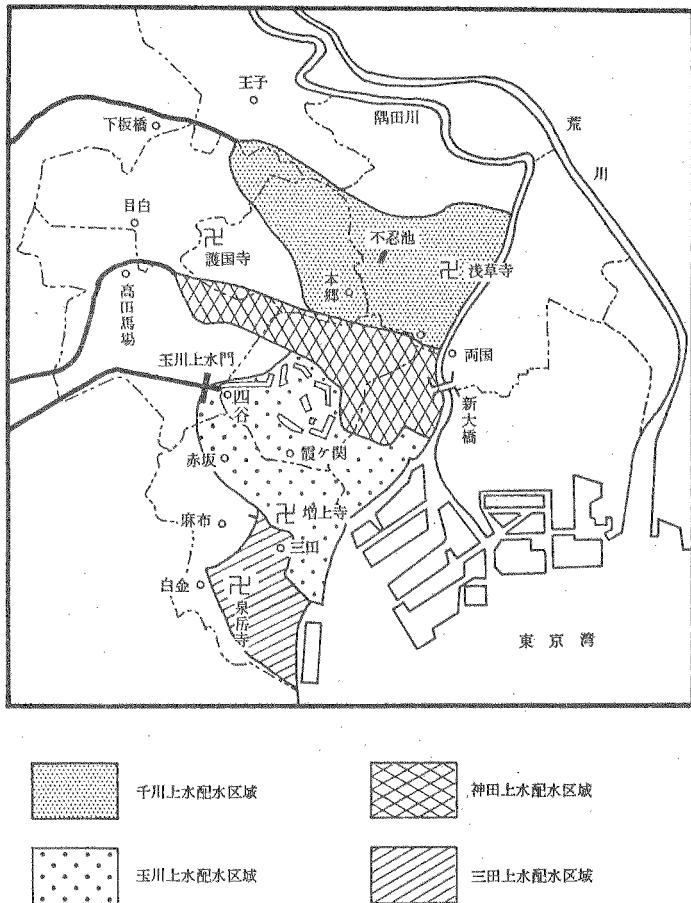
のびやかな労働歌の多い、中古の玉川とはそうした狭少な川面でしかなかつた。それが武藏野の高台を開削して、四谷大木戸まで上水を通水させるようになった承応2年を機に、玉川の川面も上流に拡げられた。玉川上水取入口の羽村辺りは古くからの伝言では、まだ多麻、多磨、多波といった川面であったが、多摩川の上流水ではなく、多摩川の清流域でも、谷口下の飲用になりうる清水であることが玉川の上水名を誕生させたのか。

それとも上水を最初に計画し実施したのが、日野の渡津青柳村（国立市）からの引水だったからなのかな。しかし、この計画は府中まで掘り進んで中止している。二回目の福生村を取入口にする計画

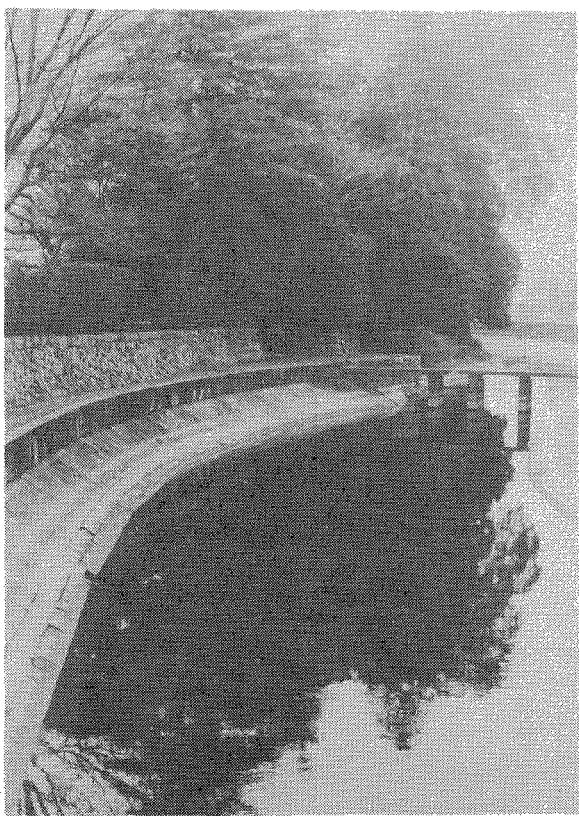
も失敗し、三回目の羽村からの引水でようやく完成をみたことを考えると、玉川上水の名称は頭初計画した青柳の玉川からの引水を、そのまま玉川名だけは羽村で完成をみるまで持越したとも考えられる。ただ玉川上水命名の経緯は記録にない。

開削に功績のあった玉川庄右衛門・清右衛門の玉川兄弟は上水完成後に玉川姓を賑わったので、もと加藤姓だったことを考えると、玉川姓からの転訛ではない。完成当時羽村まで玉川の川面が拡大していたか、それとも青柳村の玉川で計画したためなのか確証はない。いずれにしても承応2年（1654年）という時代には、すでに羽村付近まで玉川の水面が及んでいたことは確かだ。

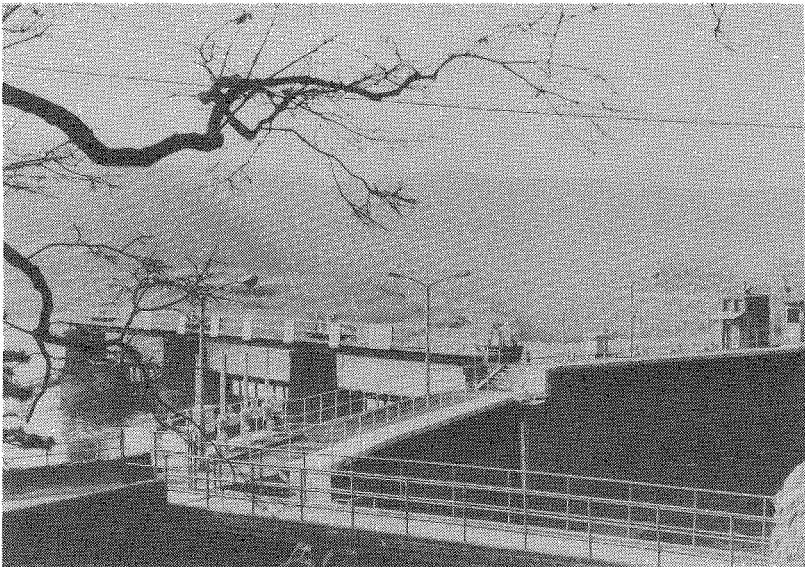
もしかすると、大丹波村（奥多摩町大丹波）の白髪神社の鰐口の銘（延徳2年奉納）に「武州榎保大玉村」と玉で記されていることを思考すると、玉川上水完成よりも約150年も前に、青梅の奥まで玉川が達していたとも考えられるが、それを認証するにはまだ論考の余地をのこす。ともかく18世紀以降の諸書をひもとくと、この影響をうけてか多麻、多磨などの川名も散見できるものの、六郷の河口から三田領までを玉川とか、羽村の玉川上水取入口を境に上流を多波川、下流を玉川と記録した書物まで登場していく。



玉川上水の給水区域



玉川上水と田村酒造



羽村の玉川上水取入口

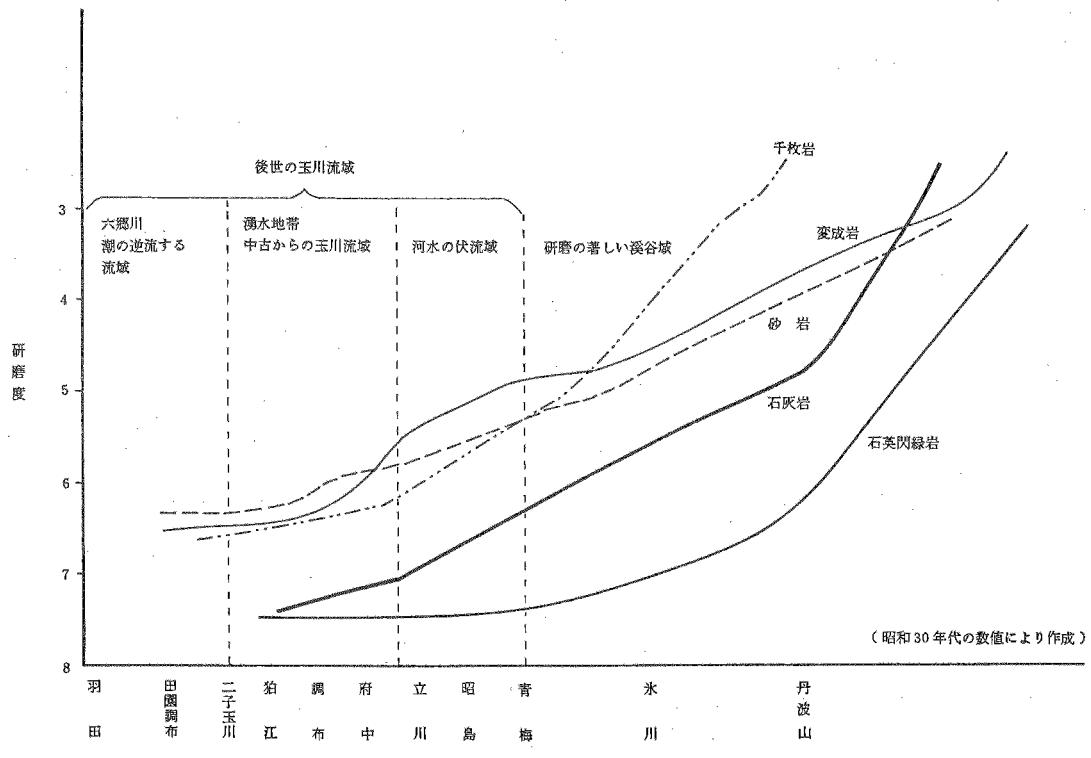
る。

こうなると歌詠の知的媒体だった玉川を超えて、玉川が武蔵野を育てた主体者になって、時代を降りてきたことを告げる。しかしその名称は徳川期まで、明治という時代になると建設省の河川整理によって地図からも消えた。

ただ河口の六郷川となると、羽田の古老が今も指呼するように、宝暦3年(1753年)の『絵本江戸土産』にすでにみえている。鎌倉から室町にかけては六郷保という保名のみで、まだ川名では記されていない。六郷村の里言葉から生まれた川名を、多摩川の代表者に扱うのは潮の逆流する川面までで、河口特有の河相をつけてのこと。この上限が、ちょうど古の玉川と接した境界にあたるところであった。地誌書類をみて、多摩川河口付近の記述には六郷川で記しながらも、中流からは玉川や多摩川、丹波川などの文字に変えて記述している。

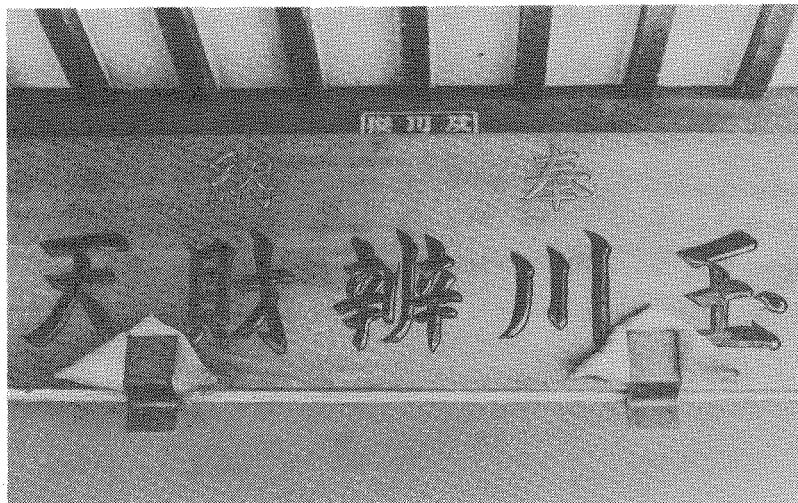
それは里人の意思を汲みとるかまえで、多摩川を観、編んだことに外ならない。しかし一方で、六郷川の水面を玉川で記録した例も見うけられる。

大田区羽田六丁目には玉川弁財天の古社がのこり、対岸の川崎市中原区にも玉



多摩川河床礫の研磨度と河相

川向（下沼部）や玉川淵（上平間）などの小名がみられ、玉川名の時代がひそんでもいる。大田南畠の『調布日記』には玉川弁財天を「康治2年の春当社の南の大川にして、網引せしに、一顆の如意宝珠を得たり、故に川を玉川と名づけ、玉川弁財天女と称」すという。



大田区羽田の玉川弁財天

この宝珠について『武州荏原郡六郷領、羽田村玉川金生山要島弁財天祠記』（正徳3年）や『略縁起』（年代不明）などによれば、奥多摩町日原山は弘法大師開基の靈山で、山中に大日の靈水があって、そこに大日堂が鎮座する。この靈水から宝珠が湧き、多摩川の流れで六郷の地先に至って日夜靈光を放った。里人はそれを拾い祠を設けて奉安したという。伝説とはいえ、六郷川の川面もこの奉珠によって、玉川の

川名を誕生させていたことになる。

独自の風土と歴史を語る玉川が、こうした伝統や古習をつけて、数百年経ても多摩川に連綿と活きづかせている。自然の流れを基本に、古人の生活をのせた玉川には、ひそかに準備されていたかのような手順で、後年になると玉川の川面を拡大させてくる。後世まで記録し伝言されるだけの深い因縁と論理が、ごく自然に盛られている点を玉川の系譜は語る。

それだけに玉川は多摩川の転訛ではない。玉川は中下流の、多摩川には上流域の、それぞれ異質の自然配合と文化交渉から誕生した。

#### [参考文献]

- 松川二郎著 『名物をたづねて』 博文館 大正 15 年  
『江戸名所図会』 吉川弘文館 昭和 3 年  
矢嶋仁吉著 『武藏野の集落』 古今書院 昭和 29 年  
芦田伊人編 『新編武藏風土記稿』 雄山閣 昭和 32 年  
犬養 考著 『万葉の旅(中)』 社会思想社 昭和 39 年  
桜井正信著 『歴史と風土 武藏野』 社会思想社 昭和 41 年  
『府中の風土誌』 府中市 昭和 42 年  
植田孟縉著 『武藏名勝図会』 慶友社 昭和 42 年  
桜井正信著 『文学と風土 武藏野』 社会思想社 昭和 43 年  
桜井正信著 『武藏野 古寺と古城と泉』 有峰書店 昭和 43 年  
『調布市百年史』 調布市役所 昭和 43 年  
竹下数馬編 『文学遺跡辞典 詩歌編』 東京堂 昭和 43 年  
舞田一夫著 『山と集落 奥多摩と奥秩父』 集団形星社 昭和 44 年  
稻葉松三郎 滝沢博校訂 『玉川沂源日記』 慶友社 昭和 45 年  
松田寿男著 『丹生の研究』 早稲田大学出版部 昭和 45 年  
八代国治・渡辺世祐著 『武藏武士』 有峰書店 昭和 46 年  
久保田鉄工株式会社 『特集・多摩川』 アーバンクボタ 7 号 昭和 47 年  
高橋源一郎著 『武藏野歴史地理』 有峰書店 昭和 46 年  
『羽田史誌』 羽田神社 昭和 50 年  
『続府中の風土誌』 府中市 昭和 51 年  
小田 治著 『山伏は鉱山技術者』 馬六舎 昭和 51 年  
『世田谷の河川と用水』 世田谷区教育委員会 昭和 52 年  
大森昌衛編 『東京の地質をめぐって』 築地書館 昭和 52 年  
山口恵一郎著 『地名を考える』 NHK ブックス 286 昭和 52 年

- 『日本名所風俗図会 3 江戸の巻 I』 角川書店 昭和 54 年
- 桜井正信著 『歴史細見 武藏野』 八坂書房 昭和 55 年
- 貝塚爽平監修 『地学のガイド 東京都』 コロナ社 昭和 55 年
- 『丹波山村誌』 丹波山村誌編纂委員会 昭和 56 年
- 瓜生卓造著 『多摩川源流を行く』 東京書籍 昭和 56 年
- 『名栗村史』 名栗村史編纂委員会 昭和 57 年
- 『北多摩郡誌』 東京府北多摩郡役所 象山社 昭和 58 年
- 『奥多摩町誌』 奥多摩町誌編纂委員会 昭和 60 年
- 山口恵一郎著 『地図に地名を探る』 古今書院 昭和 62 年

## (1) 玉と水にかりた先人の知恵

いつの時代でも、大地に社会生活を営み暮らして、世の中を丸くおさめようとする知恵を、民衆はもっている。

とりわけ、知に劣る民衆であっても、自然の心得だけはよく復習して、そこに土着の言葉を工夫して根づかせてきた。山川草木を後景に、雑然とした集合体から、暮らしの場に表情を変える里にしていく。そうしたところに、他国人には見えない焦点が匿されている。そこに時代に活き抜く発想もひそむようだ。玉や玉川にしても、同じことである。

地域の文化をみても、この自然にそむかない古習のなかに認証できて、人と自然が織り成す、まろやかな生態からうまれてくる。

もっとも、古習への回顧ときちんと処理された発想だけが、民衆の心と技を自由の域に高めて、地域文化を支える。知識欲の旺盛な舞台裏が、そこにひそんでいる。だから、生活文化をさぐる細道が、民衆の知恵として現代にも引継がれているのだ。

それだけに、古人の伝える文化の輪は広く深い。教養のある高貴な人たちのみが編んだ文献だけでは、眞の地域文化はみえない。文字なき時代では、文献で遺さない土着のまじめな生活姿勢も、その時代の価値を生む一等資料になりうる。

渡辺茂氏は文化について、「磨き上げられた玉である」と述べておられる。現代の先端技術はどこかギスギスしていて、玉のようなまろやかさに欠けているのではないか。何かと便利なロボットやコンピューターに頼ることの多い今日、乾電池にしても新たな公害源となり、その処理に苦慮するしまつである。最先端の技術といっても、初步的なミスによって社会の混乱をまねく仕組みでは、まだまだ玉のような、まろやかな文化に成熟していないというのだ。

ところで、天平の色彩感覚やデザインが現代にも通じるというが、それは古の歌謡も同じで、角をとり化粧をおとした素地の美がひそんでいるからである。自然にそむく態勢では、構築された社会秩序に丸くおさまるはずはない。それが創作であっても、つとに自然の意を注いだことで、受容され継承させる結果となっているのだ。

また、『万葉集』では三百数十首に玉をちりばめて、歌のまろやかさを一層引き立たせているという。宝石の玉は勿論、玉川や白玉などの歌枕から靈魂にいたるたまにも玉をおいて、それが映発しながら更に美を添える手法に、万葉の莊重がある。丸く角がなく光り輝いて、すべての人に受容されるという、玉本来の思想にも結びつき、歌の世界を超えるような、時代のやわらかさ、まろやかさがここにもひそむ。

現代の顔立に整えた川にしても、祖先の女人が水汲みの場に仕立てた川べりや、折にふれ綴った古歌の里が、現代の野野にさしこんで、河畔を舞台に腕を磨いて教養を高めた先人の足跡もまだまだ忍べる。それだけに、自然との語らいがままならぬ現代の川面に溺れることなく、しさに探れば、まろやかな水脈が道標となって、暮らしの地盤だけは連綿と生きづいているはずである。そこに昔時との再会の場があり、

また土地に根づき育まれてきた生活の原点を探る糸口もある。

それにしても、今日の技術がもつ革新とちがって、先人が脚を入れた方途には土地と照合する、こまやかな配慮と自分を正していくものが生きづいでいる。せかせかした今日の日本人と同じではない。

こうした人文学からみた、土着の古跡をもとに、郷土のしきいを越えた視点で、川が告げる文化と実相を集録し編んでみた。

## (2) 自然が語るカワの跡

大都市型の生活姿勢という、都会人の一方的な事情で、川は忘れられた感がある。川のおかげで生きていることも、水にちなんだ業で活力があることも、現代の暮らしの向きからは直視できないようである。もっとも、そうした野面に遺る文化は川だけではない。山も野も、それに海もある。つまり自然そのものである。

「一位は山、二位は川、三位は野または海」という亀本和彦氏の、調査結果を引用した記事が天声人語に載っていたが、それによると全国の小中学校の校歌に歌い込まれた固有名詞を拾っていくと、こんな順序になるそうだ。

とかく郷土の自然が、隣郷に誇るに足るものであったからこそ、競って学舎に自然を取り入れたのだろう。しかし最近都市近郊に誕生した新設校の校歌には、山川の固有名詞がめっきり少なくなったという。それは相撲の世界でも同じで、山や川を付けた力士名が少なくなっていると天声人語は記している。

やはりそれらも自然に背を向けた、都市指向型の生活姿勢を物語っているが、それにしても山と川は故郷を思う、かっこうの野面だということだけは昔も今も色あせていない。

この創作に川が果たした役割は大きい。大地を侵食した川水は土砂を下流に運び、人びとの生活舞台を提供するが、古では土着の人たちの要求とは別に水脈が自由に、それも蛇行しながら川幅を増している。川の摺理に従って、人びとの生活の縛張りもコンパクトにまとめられ、決して川にそむく姿勢だけはとらなかつた。貴重な生活水を得る川がもつ、もうひとつの粗い素顔を知っておかなければ、古の生活舞台は流出するからである。それだけに人工堤防を築き、固定させた現代の川とちがって、もっと河原の広い川面であった。

よく何々川は全長何キロメートル、流域面積何平方キロメートルと、川と川を競い合わせるかのように現代人は数値にこだわる。それは大地から川を閉じ込めた数字であって、本来の姿ではないはずである。武蔵野を流れる多摩川が、まだ荒多摩川の呼称だった時代に、台地を構築し顔立をきめたことからでも証できる。

もっと広く、自由に野面を流れた川の縁に、民衆は住まわせてもらっていたわけで、そこに自然の一員としての基本姿勢があったことを、ブルドーザーで日本列島を改造するような時代となつては忘れさつてしまつたのか。現代の計量的川の評価と、古の暮らしのなかの価値や姿勢は同じではない。とかく街にあ

ふれる文化に流されがちな今日でも、川を観る目を、先人がひたむきに活き、ひたむきに歩み続けた素顔からとらえると、古人の道をつけた実相がひそんでいるように思える。

ところで、大陸から輸入した水と流れを意味する漢字に川・河・江がある。この象形文字は四世紀末頃に導入した。なかでも川は山地平野に湧く泉を出、一条の流れとなった水の脈であるから、いつでも「川」の文字を当てことになる。それは流水との関係で、川を直視した先人の遺であって、この姿勢だけは大陸でも、またそれを借用したわが国においても崩さないで、日本のすみずみまで今日も伝わっている。

大地からとざされた現代の川面にも、そういった心配りを下地に、川のおいたちを探索すると、「」は野面のなかを自由に流れる様子を表現しているが、中央の線は流れる水脈を意味し、両側の線は人と触れ合う畔で、波打ちぎわである。強固な堤防で固定した今日の川では、もう岸うつ波と言える畔は陰をひそめたが、それを忘れた時、浮かれる社会が大地から孤立することを語りかけているのだ。

古代人の感性がとらえたかわの形容からも、そうした自然の流れと交錯する世界を、文字で描いたところに、古の感覚に少しの疲労もなく編まれたことが後世に伝言され、記録する結果ともなった。今や様ざまな図柄となって組み替えられ、装いも新たにドレスアップした川の時代であっても、一徹であり半面柔軟でもある彼らの策が、さりげなく河畔にひそんでいる。それが普段は隠してみせない、故地の川瀬の音でもある。

さて、川には国字にした跡がみられる。流れに地域の変わりはないが、これを受ける者には変わりがあるので。古代の狭小な生活空間のなかでは、ただ単に「川」といえばその生活圏内を流れる川を指していたが、他地域と交流が盛んになると、川の指呼では区別がつかない。そこで異質の川を自在に判断するには、だれにも認証され受容できる文字を付けなければならない。それが思索の結晶である接頭辞や河・江になる。古典の知恵である。

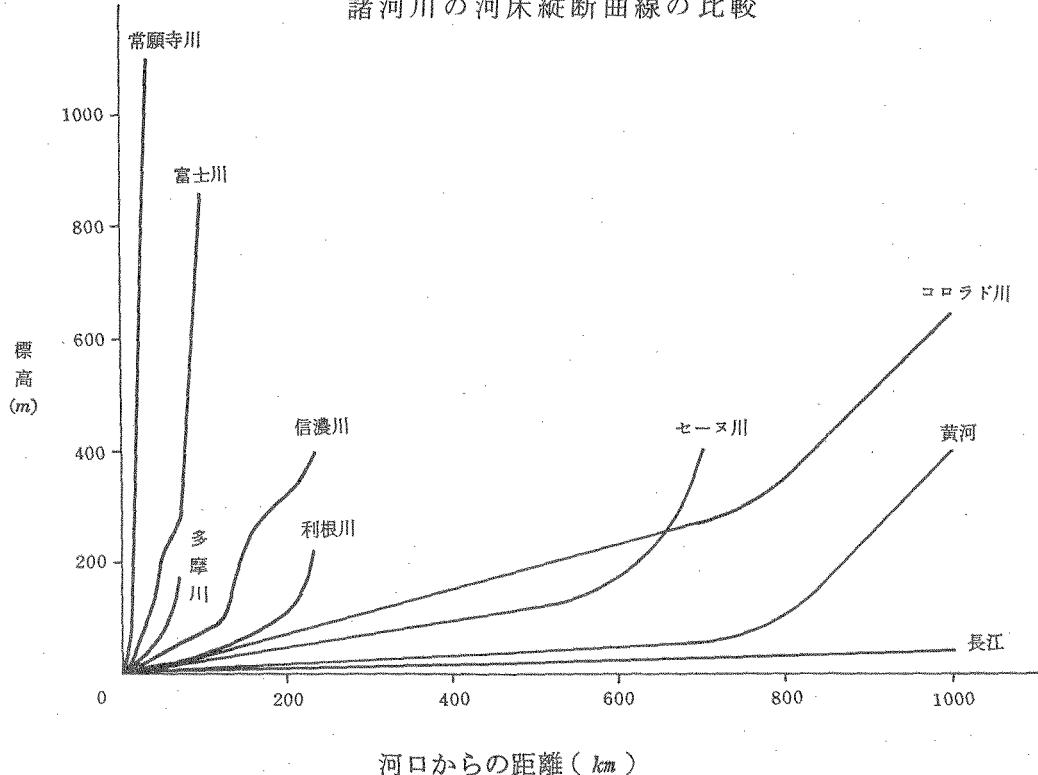
古代の中国では「河」といえば、北方の大河黄河を指す、規模の大きな川に付す発想がひそんでいるが、後に黄河の影響からか、その流域の支流にも接尾辞で河を当てるようになると、河を区別するために、更に「黄河」とか「大河」と指呼するようになったという。まさに川や河だけで、固有名詞になった時代が過ぎ去ったことを物語っている。

それは江とて同様である。南方の「江」は本来長江（揚子江）を指していたが、やはり区別することで「長江」とか「大江」と呼ばれている。漢詩の世界では、今でも古習の手順を踏んで長江を指すという。

台湾の花蓮で開催された第13回日華交流教育会議（昭和六十一年八月）に参加された常務理事川浦孝恵先生によれば、江は広大な中国を西から東に流れる、規模の大きな川に付す発想がひそんでいるという。そういえば長江には物資輸送の幹線であった時代から、それにふさわしい大河で、流域の人びとの文化を育ててきた。

また河は江とちがって、西から東に流れるような規模ではないが、比較的大規模な川をいうらしい。黄河は決して長江に劣る川でないし、中国文明を開花させる舞台まで提供したが、漢族の舞台は流域のほんの一部にすぎなかった。この漢文化の及んだ流域が、黄土を溶かす黄渦の範囲まで、源は異郷の故地で

### 諸河川の河床縦断曲線の比較



あったからなのか。それとも、黄河が川の代表者扱いにされたことから、先人たちの高度な文化と教養を、その流れに容れているのか。どちらにしても、古の心得をよく復習していて、ただの川でないことだけは確かだ。

ここでは川・河・江の文字が、わが国に輸入されてから、どのように使用伝承したのか、古人の決して閑却していたわけがないところを、日本人の風姿と合わせて還元しておかなければならぬ。

大陸の文字と思想を借用する日本は、内作用を強く受けた国土に導入してきたが、そこには異文化というとまどいは勿論のこと、古の無策とも思える策が内在している。大陸の地形とちがって、自然が創造した箱庭式のきめ細かい大地だけに、古人が大地と照合させるにしても、横索という旅の時期を長びかせる結果にもなった。

時をかけたこの深い細工の腕が、実は大地に生きる作法と日本の風土に合わせた、独自の料理法で地域に譲りなく記録させたのだ。だから世代交代があろうとも、諷諭の口碑が後世の人びとの先駆となってくれる。

都市を建設するために、川は犠牲になったと言われるが、まだまだ解法はある。川にとって素顔を匿した秋冷の時代になっても、ひたむきに生き、まじめに川に取り組んだ古人の息づかいは連綿と生きづいでいる。その意味で、川にかかる風音や霞をつけた知恵も、そこに宿る。いちばん肝心な川との対話を、河

川名の接尾辞でみても、その教養の高い大陸の発想と気配りが、古習の小径となって川面に遺る。

山ひだの細かい国土にあっては、川で普遍の網かけがおこなえることを習熟して、文化を育て地域の技を伝達させてもきたが、それでも国土の川には「川」の接尾辞で標記している。だから、大陸の小規模河川に付す発想を基本にして整理したから、〇〇河や〇〇江と記す川はない。

この立場での川は、あくまで自然の手続きの仕方であって、人文の論理に従った発想ではない。もしかすると、自然学からみた小規模の河川に「川」、中規模の河川に「河」、そして大規模河川に「江」という接尾辞を当てる論理が、グローバルにとらえた大地にひそんでいるのかもしれない。

### (3) 人文が育てた力ワ

昔時の暮らしと自然を結びつける、節目の役を果した川。何かとなぎさで遊ぶ親水ばやりの昨今においても、川名とともに古のイメージを喚起させるものが、細径をつけて詰め込まれているのだ。そこには史実の語り部というよりも、まだ誰も越えたことのない、土着の人びとの語りと再会でき、距離感もちぢまるところ。

現場を踏みしめて、丹念に探索すればするほど、そんな一等資料のつめが必要になってくる。現代の学問から隔離されたような領域である。本稿とて、まだまだ学問領域の枠組のなかで模索し続けていて、方法論の定まらぬ苦しみがある。

そんな立場で川のおいたちを索って、論理を詰める糸口を、川に記された固有名詞の接尾辞から観察する手法に求めてみた。それは先にとらえた「川」と「河」、それに「江」の自然決定論的なかわに加えて、それぞれの民俗がからみあう人文を添えて、新たな化粧で文字を川面に記した例が、陰に陽に散見できることである。川には表面でない、そんな伝統に磨かれた、まろやかな水脈も生きているのだ。

湿った野面を流れるわが国の川は、地形図で追うだけでも一万三千余の流れが存在する。その大部分に「川」の文字を当て、何々川と呼称している。それは古の野人たちが、三国という時の世界のなかで自然をみつめ、素直に文字で表現した跡であって、決して扶桑国だけのおごりではなかった。だから、島国日本で利根川といえば大河になりうるが、古人たちは借用文字の意味をよく熟知していて、決して無理に「利根河」や「利根江」で捕らえなかったことに気付く。そこに単なる記号でない、心配りを汲みとることができるのである。

ただ自然の川をとらえたこの立場を基本に、更に粗野な大地にへばりつくようにして、生活の場に整えた古人の川に対する姿勢が加わると、もう独自の解釈と手続きなしには語れない。大陸との文化交渉による、うけうり文化が基本とはいえ、自然を生活舞台に取り込む民衆の知恵には、やわらかい黒土での独自の解法が必要となってくるのである。

土人がとらえた地域学の裏側を垣間見せる川は、川べりに生きる民衆の眞の教養である。そこにひそむ警告ともとれる教えに、人びとはもっと評価基準を高めて、地域を整理する必要がある。それにしても民

衆の口碑を水没させて、

地域学はどこへ行くのか、泥かぶりの民族だった日本人に課せられた課題である。

川の接尾辞に「川」を当てる法はすでに述べたが、確かに「川」の規模であることには変わりはない。しかし諸書をひもとくと、決して「川」の接尾辞のみではなく、「河」や「江」を意識的に当たる川も存在した。とく

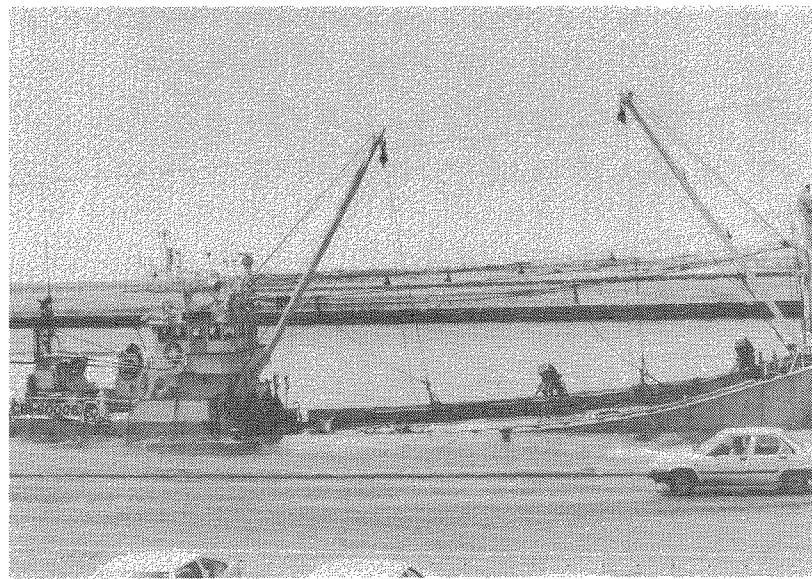
に古の地誌歴史書類は、時の教養人官人たちの著したものであって、必ずしも土地に根づいた民衆の手で編まれたものではないから、もの言わぬ民衆の語りを誤りなく記したとは思えない。

諸書の多くが中央政府の直接の編集か、もしくは諸国に命じて、国々の教養人たちに集録させたもので、机上で整理し対外的にも通用する記事に仕立てた点がなくはない。国家意識のたかまりのなか、庶民の校閲のないまま著したのが、風土記や六国史であって、決して土に生きる庶民の声を、完全にくみとった内容を下地にしていないことに気付く。

そうした上段から国土をみつめる姿勢でも、何か意味をもたせているかのように、「河」や「江」の表記が散見できることは、原形のままでないにしても、民衆の歌謡や神話をくむ立場で、思考しながら編まれたようにも思える。『日本書紀』や『風土記』などにみえる川と河、それと江の使用法には、その意味で、きわめて混沌とした表現がひそむ。

「國破れて山河あり」という習熟されたことわざでは、川を「河」でまとめているが、自然の総体を呼称した山川草木では「川」を用いる。冬型の気圧配置のように、大陸から表意と表音をつけて漢字が伝來したはずだが、どうもその記載には思考の跡がのこる。

『日本書紀』の巻第七には「隔\_山河\_而分\_國縣\_」と記載されたかと思えば、巻第二十二では「周祠ニ山川\_」と記録されているし、『風土記』にも「郡鄉境堺、相ニ續山河之峰谷\_」（常陸國風土記）のように山河もあれば、「山川之名、亦與レ里同」（播磨國風土記）や「堺\_山川\_、定\_地邑\_」（逸文伊勢國）も、また『宋書倭國伝』の「跋渉山川」のように山川もある。古人の漢字をあやつるこの態度には、現代人が外国语を学ぶ以上に、困難な一面があったからこそ虚妄もあり、また民衆からの最低の願いが込



利根川河口と銚子漁港

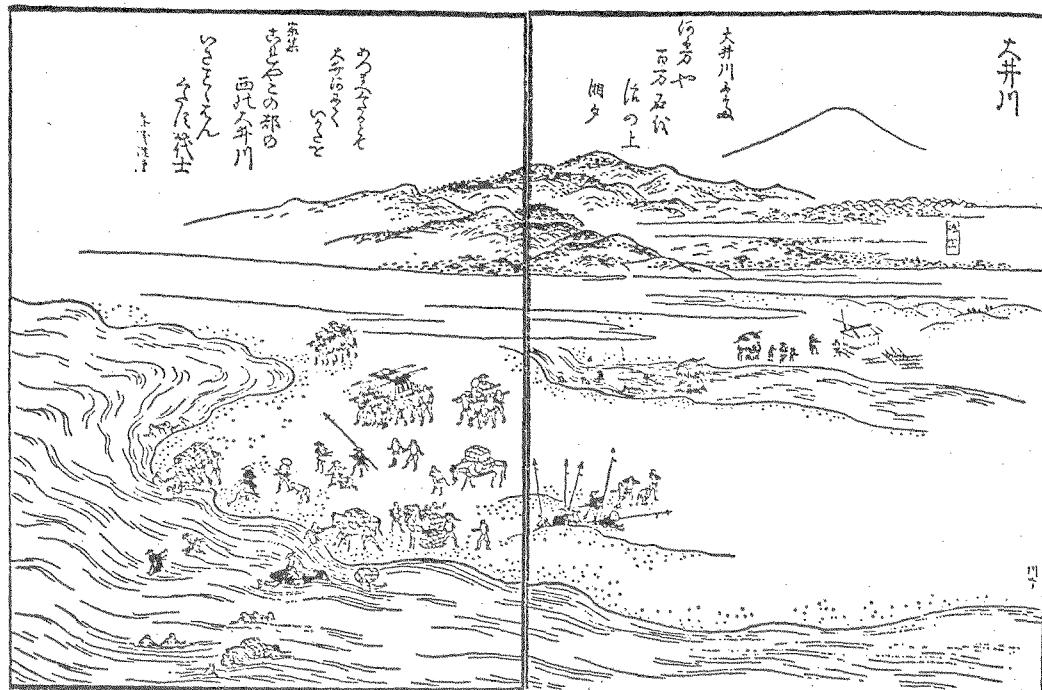
められたかどうか疑問もある。

口承の社会という時代からのがれて、上層階級の知的媒体だった漢字をもとに、国家の確立を図る時だけに、文字に対する洗練された手続きを踏んでいたのか。それとも土地に照合するかまえで、意図的に記したものか。ただ土人たちの生活態度と知恵の溯源は、多少なりとも『日本書紀』や『風土記』などにひそんでいるように思える。

静岡県の大井川は大井河（日本書紀卷第十一、枕草子）で記されているが、近世の『東海道名所図会』では河と川が混在する。山背河（京都府木津川）にしても同じで、使用に統一がない。旧国名では、河内国（大阪府）が川内国で記されたのは『播磨国風土記』だけ、諸書には河内で記載されている。また参河国（愛知県）も『古事記』と『続日本記』は三川であるが、『日本書紀』卷第二十五をはじめ風土記逸文も河を使用している。それは駿河国（静岡県）の場合も同様であって、おおむね国名では後世に至っても「河」を当てている。日本を記した『宋史日本伝』さえも、これらの諸国を河で編んでいる。

川と河の表意が出会った時、はじめて習熟され土地に印されてくるが、祖先からの口承を忠実に文字で記す気配りがあったのかどうか、土着の語りなしには認証できない。それは大河や大川とて同じで、『出雲国風土記』に「出雲大川」で記載したかと思えば、「出雲大河」とか「斐伊大河」の記述もある。更に御井大川（肥前国風土記）、「造=大川岸道=」（播磨国風土記）や、大河（日本書紀卷第二十六）、巨川（日本書紀卷第一）などの記述例もある。

川と河の整理を怠ったのか、後の『万葉集』『伊勢物語』『枕草子』などについても、古習の調整とそ



大井川

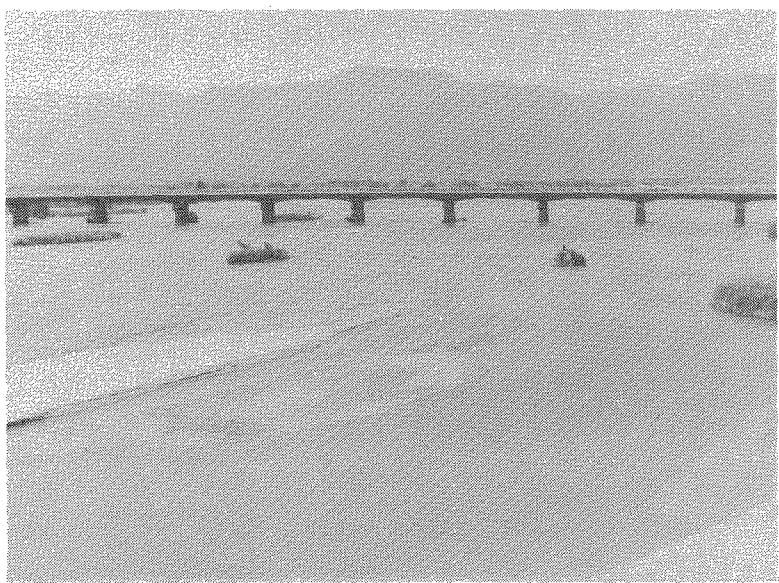
(東海道名所図会)

の啓蒙的思索の道が付けられていないような謎がある。

江を付す発想しても、川や入江、湖海の意がひそんでいるが詰めがみられない。『日本書紀』卷第十一の「更引之沂江」は江を川の意で記しており、卷第二十二には淀川の河口を江口でとらえている。また『風土記逸文丹後国』の水江は入江を意味するように、その手順には独自の流れがあったのか。固有の川名をみても、西門江と大方江（出雲國風土記）や大江（風土記逸文筑前国）のように記録されている例もある。

こうした川・河・江の引用は、果たして古の意図が何であったのか。現場を踏む立場で地域を整理していくと素朴な手法のなかに、古人の深い識見をもった変貌の道筋が漂う。

信濃川や利根川が大河といえども、大陸的発想からとらえると、小川にすぎない。接尾辞に「川」を付す発想もそこにある。ただその発想とは別に、日本人が大地に根づき安定と成熟の時代をむかえると、川が小川であっても、生活の糧を川に求めていた民衆にとっては大川になる。古人たちが水を味方にし、



斐伊川（島根県）



水上バスと大川端

快適に暮らすことを  
考え習熟した時、はじめて大川が誕生するのだ。

川や堀が物資輸送の幹線だった昔、江戸の隅田川や大坂の淀川が大川と指呼されたのも、そうした伝言がひそんでいるからである。同じ意味で付された大川は、全国約45の川に認められる。それも岐阜、兵庫、愛媛、鹿児島、沖縄の諸県には御丁寧に「大川川」という、接尾辞を複合させたものまである。

生活と結びつけた、日本独自のこの発想は、四面環海の国土にちりばめた島嶼も同じで、実際の規模が小島であっても、大島名の島嶼が多く、全国に55島も存在する。なかでも24島に人が住み、残り31島が大島とは名ばかりの小島で、無人島である。それとて狭小な島の空間で生きる島民にとって、地方で暮らす人びとに理解できない、土地に対する尊称が込められているのだ。島民が地方からの帰路、必ず数個の礫を持帰るという風習は島の沈没をおそれ、不安を解消するためだという。それだけに、最低の願いが大島の島名にも込められているのである。

だから、大川も決して規模の大きな川を指すのではない。河畔でひたむきに生きる民衆の強い語調をつけてのこと。河内川の川名にしても、それを啓発するかのようである。

旧国名にまで採用された河内は89の流れがあり、川内の30の流れをはるかに凌ぐ。河内国は古の記録では、大河内と呼ばれていたが、全国の国名を二字で整理するに伴って、大を省略したという。その語源は淀川の内側の地域であることが、有力説とされている。また三河国は、国域を流れる矢作川・豊川・男川の3つの川を意味するとか、矢作川の大川を御川と称したからともいう。更に駿河国については、珠玉が流れる川をとって珠流河(現富士川)と命名したとか、富士川などが急流を流れ落ちる駿なる川であったともいう。

いずれにしても、諸書では川が河に転訛して、国名に採用された点については記述がない。ただ川が国土を育て肥やしてきたわけで、川なしに人びとが生きられなかったから、土着の民は大川とか御川と尊称した。そのことが「河」を当てるなかに、ひそんでいるように思える。だとすれば、89もの河内の川名



大川（桜橋よりみる隅田川）

が存在することも、容易に理解できてくる。東京都の小河内ダムに水没した、今は無い古里の小河内も、それを語ってくれる。

川普請の季節と出水の季節で、川の顔立が異なることを、里人はよく熟知して、川を味方に里を拓く姿勢を崩さなかったことを河内が知らせてくれる。それがもの言わぬ土人の匿された叫びとなって、河に秘められている河相なのだ。

ところで江にしても、川の意味がある。旧国名の近江や遠江が、淡水湖や大湖だという説があるなか、全国に 58 もの江川の川面がある。谷や川が陸地に深く入り込んだ意味と丹生の溯源もひそむが、多くはやはり大川でとらえた流れである。また江川の江それ自体接尾辞であったが、後世になると更に川を付けて指呼している。例えば広島県の江の川は三次市より下流を江といい、上流を可愛といって日本第四の大河と『陰徳太平記』に記されているし、同じ江の履歴を古老も語る。「川の河口」と記す場合に、河江と江の文字を当てないことも、何かそれを語りかけているようである。こうしたことから、江をみればかわがみえて、内に潜む未知の論法が露出してくれる。

大陸のかわには川と河、それに江がそれぞれ異なる意味で用いられていたものの、日本に流伝されると、狭い範囲での主張を強いて国土に推及ぼそうとする点があった。そこに日本らしい、かわの面白味がある。それだけに、本義の河や江の流れがなくても、大陸とは異質の河や江の小川が誕生する結果にもなった。

#### (4) カワに遺る川名

不便さのゆるまざる洗練は文化を育て、土地の風貌を伝える。人びとは時代をはなれて生きられないように、風土からもはなれることができない。ある時には自然の流れに身をまかせ、また時には自在に行く手を変える、先人の野望や猜疑の跡もまじって、土地を構築して行く。時をかけたこの深い照合こそ、野面に活きる土着の知恵である。

彼らの苦労がむくわれ、成熟した野面だけに、そこにひそむ伝統文化はかわが創作する自然なしには語れない。とりわけ生活舞台を提供する川名に焦点をあててみても、古からの伝言が読みとれる。

人びとの生活空間は現代のように広くない。川の両岸に、それぞれ小空間が独立した形で営まれていた。それも川からうるおう生活というか、川あっての暮らしが狭い範囲内で行なわれていた。だから川魚をとる漁村であれば、それにまつわる川名を流れに付け、また川から農業用水を引水して稲作に勢をだす集落であれば、生業と関連する川名を設けるであろう。

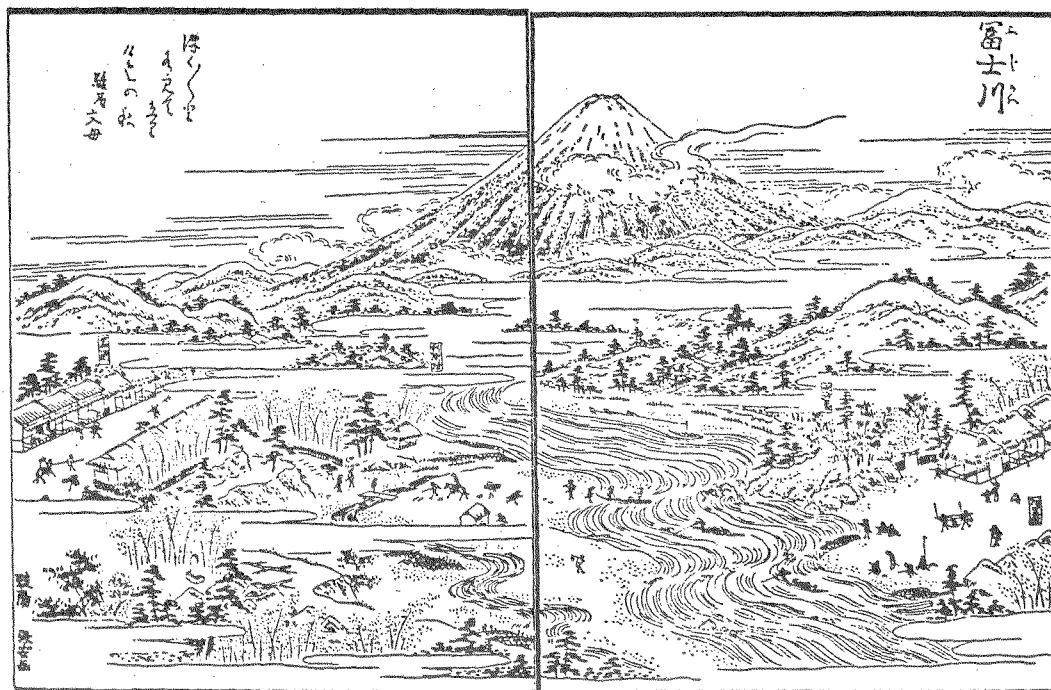
今日の川名は建設省が全国の川を整理する都合上、本流と呼ばれる川の上流から下流までを、ひとつの名称で統一した跡で、同名の市や町、村を設けさせない場合と同じである。統一した名称で指呼するこの川名を、あたかも古人の深い識見をもった伝承ととらえると、危険な知覚となろう。それは近代という、時代の要請に応える川の整理であって、以前からの息吹が生々と伝わるわけがない。生活文化の伝統や習俗を、100 年以上も経て新しく復活させるにしても、明治前の河相に溯っておかなければならぬ。

全国あまねく小生活圈で張りめぐらされていた昔時では、暮らしのなかの山や川を、冷静で確実な選択のうえで、生活に取り込む手法が流域毎にあったのだ。古里の水面によって異質の素顔があったから、おのずと里のみで指呼する名が、土地の風土に合わせた独自の料理法で確実に沈下し誕生する。なかでも里びとに認証され、成熟した川名だけが後世に伝流される結果にもなる。だから初伝の姿を開示した川名には実際の流れよりも、数倍もの川名が存在することになる。

川面を碎く工事が始まり、一様化する人間優先の論理では律し切れない、古里の論理がそこにある。「自然を壊すのも水、育むのも水」と古老の語るなかにも、流域に応じて趣きを異にした、水と人がふれあう姿を見せてのこと。

例えば信濃川の名称は越後の野野を乱流する範囲で指呼するのみで、信濃国では千曲川に変わる。また富士川も甲斐の国中では釜無川である。更に武藏野の顔立ちをきめた多摩川にしても、上流から一之瀬川、丹波川、多摩川、六郷川と、それぞれの古里で流れを指して、素直に表現した川名の跡である。

そういえば紀州の新宮川は、新宮市を貫流することから、大正5年に正式名に採用されたというが、それは官庁の書類上のことで、地元では古習に従って今でも熊野川だという。この流域には部分的にも、十津川や北山川の名さえ消滅しないで現役しているほどである。「木の国熊野」の奥深い山里から流れ出る川は、まぎれもなく熊野川の名だ。それを官庁の一方的事情で、由緒深い流れを新宮川に統一するとは心外だ、と筏師たちはいう。その影響か、最近の地図帳や建設省が河畔に設置した看板には新宮川としながらも、もうしわけ程度に括弧で熊野川の名を添えている。そこに昔時の里びとたちが遺した、川に生きる



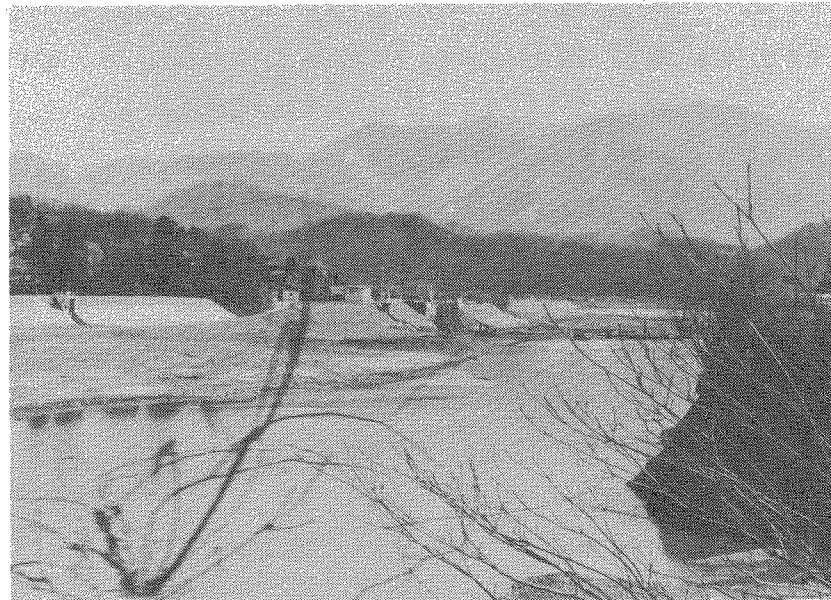
富士川

(東海道名所図会)

作法と手順を、のぞき見することができ  
る。

この立場で川の形  
状や水質を見つめる  
と、ひとつの水脈で  
あっても岸辺の古里  
に応じて、独自の川  
名を付す発想も解さ  
れる。

それにもしても、都  
市を建設するため川  
を犠牲にした時代が  
親から子へ、子から  
孫へという、川に活  
きる土着文化の連續性からとざされた時期にさしかかっている証拠でもある。だとすれば都会本位の考え方になりがちな我々は、しらずしらざの間に、暮らし向きそのものにも同様の誤りに陥っているのかも知  
れない。



釜無川（山梨県）

### (5) 川の環境と生活

1984年アメリカのニューオリンズで、「川の世界・水は命の源」をテーマに、国際河川博が開催された。わが国からみれば、自然が豊であるはずのカナダにおいてさえ、「リバー・カルチャー」なる活動が活発になったという。

自然の水を生活のなかに呼びもどそうとする思考が、先進国家の間で高まってきたのを機に、わが国においても、今度環境庁が全国の清水、湧水、溪流を対象に、「名水百選」を選定した。これには貴重な水資源を再見して、山川保全運動への関心を高めようとする意図があるようだ。また「河川保全美化運動」など、土地に根づいた里人の語りぐさともなったかつての清流を、再び蘇生させようとする機運が、地方自治体からも高調してきたことは、遅ればせながら善政といえよう。

このように人文学の立場からも、国内外を問わず、よりよい山川の環境を整備する兆候がみられるようになつた。しかしこの保全も、まだまだ一水系とか点としての湧水など、流域や地域単位に偏重する政策がとられているように思える。そもそも山川に記された地名は、土地に記した地名と同様に、流域の山地が微妙な味付けをおこなつて、地域の歴史や自然の環境を語りかけているのだ。とくに全国に散見でき

る玉川には共通する生活や、自然の水面がみられ、その実践が特定の固有名詞を附す要因にもなった。

この玉川と同様に、濁川や黒川それに大川などについても、「水が変われば暮らしも変わる」と、先人たちが川の履歴を継承したごとく、祖先が土地に活きたために、川の利用法や環境にたゆまぬ努力

を醸成したことが、それぞれ素地の顔立ちとなって、川名で反映させた。

山紫水明の國土にあっては、玉川の水音はけっして素姓の違う水ではない。自然の摂理に従って野面を流れ、大地と人が組成する土地柄をうみ、隣郷に誇るに足る、名水になりうることを里人は熟知していた。この一条の流れは、山地を侵食した土砂を伴ないながら、角礫を研磨し、山麓の河床に丸い良質の砂利を堆積させる。その砂利が水の浄化を図る玉であり、美しい川面を創作する玉川になる。

ちなみに、徳川期に武藏野の多摩川から、江戸の市井に引水された玉川上水は、多摩川の上流水ではなく、多摩川の清流域でも、谷口下の玉川からの飲料水を引水したことを物語っている。また、昭和40年代まで世田谷区の二子玉川から渋谷まで、路面を走っていた玉川電車（通称玉電）は、玉川の研磨された砂利を運んだことから、多摩電ではなく玉電なのである。この玉川からの砂利が、紙と木と泥で創作した江戸の街面を、明治という時代になって、耐震耐火構造の東京づくりに貢献したのだ。

研磨された礫が覆う玉川は、また古人たちが珍重した玉を産出する場所でもあった。かつての装飾技術者玉造部が、玉礫の得られるいわゆる山麓の玉川周辺に居を構えていたことからも理解できる。中国の物産辞典『天工開物』（1637年）にも、奥深い山地の急流では手が下せないから、玉の母岩が磨かれる数百里下流で採取することを記載している。

更に玉川は先人たちが歌を詠み、風流の場に仕立、業の地にも整え醸成した。古歌に詠まれた六玉川は勿論、玉川はおよそ30都道府県に散見でき、約50の流れが確認できる。古人たちが山水月花を楽しんだこの川の景を復元させ、後世に継承することが、もうひとつの川の環境の課題でもある。

このところ川に親しみ、河畔に遊ぶ人たちが多くなって、かつての野面や水面を復活させ、市町村がそ



二子玉川と渋谷間を走った玉電

の利用で、川の活性化を計ったことは尊重すべきである。けれども、この政策から一歩進めて、血の通う人に直接かかわる保全策を、玉川のように自然が創作した共通の空間に採用する必要はなかろうか。

今日の生活姿勢は山地の野面を背景に、繁栄する都市指向型である。この高度な舞台づくりをおこなった、大地の創作には川の果した役割が大きい。人工の大地で暮らす人びとから、近年森林浴とか河畔で遊ぶ親水が高調してきたことは、忘れられた土の香りと季節感を再び暮らしのなかへ、呼び戻そうとする意図がある。たしかに自然を取り戻そうとする姿勢が多いが、そこには一種の流行ではなく、人間の生きる基本的叫びでなくてはならない。またそうであることを願いたい。だとすれば、先人が遺した川に対する基本姿勢だけは集録し、伝言しておかなければならぬ。

[参考文献]

『古事記』 日本古典文学大系 岩波書店

『日本書紀』上・下 日本古典文学大系 岩波書店

『風土記』上・下 日本古典全書 朝日新聞社

『宋史日本伝』 岩波文庫

『唐土名勝図会』 ぺりかん社

吉崎正松著 『都道府県名と国名の起源』 古今書院 昭和57年11月

環境庁水質保全局水質規制課監修 『名水百選』 ぎょうせい 昭和60年8月

阪口豊他 『日本の川』 岩波書店 昭和61年3月

高山茂美著 『川の博物誌』 丸善 昭和61年7月

## (1) 玉の呼称とその意義

ところで「玉」(ギョク)は広辞苑によれば、「宝石・珠に対して、美しい石をいう」とか「貴重または美麗の意をあらわす語」、それに「天子に関する事物に冠して用いる語」などの意味があるという。たまの項をみても「美しい宝石類、特に真珠」「美しいもの、大切なもの、またはほめていう意をあらわす語」とか、特異な意味では「芸妓、娼妓など客商売の女の称、露・涙などのひとしづく」などの記載もある。

ギョク・たまともに事物に冠して、貴重で美しいといった内容から、尊称と莊重、それに神秘性の意味までひそむ語意になる。原義にかなり複雑なものをひめて流伝したようである。

また大言海でも、玉(ギョク)を「宝石の名。遊女芸者などの勤代。賞めて云う語。美しき旨き。天子の御物事に冠らせて、尊び申す語」などととらえて、玉(たま)には「瑪瑙など石類の美しきものの総名。真珠、珠。転じて、すべて物事を美めて云う語。すべて円き体を成せるものの総称」などの古習があるようだ。ともに卑俗というよりも、むしろ鑽仰の意味で記録している。寺村光晴氏の著『古代玉作形成史の研究』には「玉は単に、装身具の一つとしてだけではなく、呪的・宝器的・祭祀的意義をも有する」と論述している。

これらの内容に醇化されて、野野の玉をみても、それが創られた玉であっても、しさいには天然の玉を基本にして、数寄をこらした文化や腕を磨いた野人の跡に宿っているのだ。天然のなかに多くの玉が活きたところに、玉の原点と糸口が置かれているようだ。

ただ野にひそむ玉には、この他に神仏と結びついて、心のよりどころである魂・靈が転じた玉まで索ぐれる。だから寺村光晴氏もそれについて、「たまは例えば玉、珠、瓊、璁、あるいは珞、蕤などである。…略…多種多様の文字で記されていることは、文字が借字であることにも由来」しようが、本来わが国のたまの本義が、これらの文字の語義以外にも存在していたことを示唆するものと思われる。すなわち、これらの文字は「たまの本来的な名辞ではなかろうと思われるからである。このことは、形而下のたま(玉)と、形而上のたま(靈・魂)が相互に関連して、分離が明瞭でないところに起因する」と論じている。

玉座、硬玉、白玉、玉簾、玉露、玉石、玉垣、玉絹、玉敷、玉子、玉作など、表記のうえでも、玉は自然と人文をとわず受容されていて、使用例にいとまがない。寺村氏も「たまの名称には一定の規準がなく、物質(材質)により、形状により、色彩、色調、文様等により、あるいは使途により、さらには内在する形而上の意義により、それぞれ呼称されており、各方面から慣用語として命名されている」と記したごとく、玉で飾られた生活文化誌がひそむようだ。もちろん、人文を育てた山川での営みの中から、先人たちの生活姿勢をつけて、現代に引継がれているから、野面に印された玉をとおして、土に寝、巣に住んだ古人をさぐるてだてが遺されている。

こうしたことから、玉を土地と結びつけたかまえで、整理復元する論法は、単に玉の借用だけにとどま

らず、玉を道標に地図をぬりかえていく先人の歴跡とその履歴とが、深く編みなされていく法をも語りかけているのだ。

ところで、先学が集録した玉をみても、土地にひそむ玉が時代を越えて、暮らしに容れられ、認証されてきたことを語っている。それは山川に心を惹かれた土人の先蹟で、自然の摂理に従った伝言である。

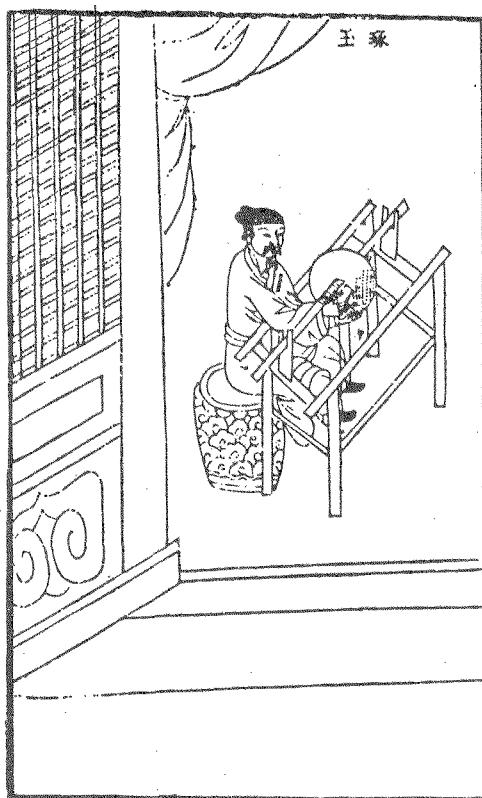
玉については『古事類苑』の金石部四に詳しい。それによると「玉石ハ玉ト石トナリ、サレド玉ト石トノ区別ハ甚タ詳ナラズ、而シテ支那ニ在リテハ、玉ヲ珠、玉、璞ニ分チ、海ヨリ得ルモノヲ珠ト云ヒ、陸ヨリ得ルモノヲ玉ト云ヒ、其未ダ磨カザルモノヲ璞ト云フ、或ハ自生ヲ珠ト云ヒ、磨ケルヲ玉ト云フト云フ説モアリ、我邦ニテハ、珠、玉、璞ヲシンジュシラタマ、シラタマ、アラタマト云フ」と説明している。

『東遊記』後編巻之二、蚌珠に「山から出するを玉といい、水に生ずるを珠という。唐土にはむかしより卞和が玉、合浦の珠……略……新潟の人の語りしは、此近きあたりに福島潟というかたあり、此潟に珠をふくめる貝あり」と珠玉を分けている。むろん、本書は中国の『天工開物』などを考慮しての記述であろう。

同じように『倭訓栞』にも「海に出るを珠とし、山に出るを玉とす。令義解には自然の物を玉とし、造作に出るを珠とせり」と伝言する。また『天工開物』は珠玉と金銀、それに宝石を区別して「金銀は太陽精を受け、必ず深土に埋もれてできあがる。珠玉や宝石は月の精を受け、少しの土にもおおわれていない。宝石は井戸にあって、上方の青空に通じるが、真珠は深淵にあり、玉は急流にあって、ただ透明な水の色におおわれるだけである」と卷末に記し、更に瑪瑙は宝石でも玉でもないと付記している。

ところで、中国では珠玉を金銀や宝石と区別していたようであるが、わが国においては瑪瑙、水精、琥珀、珊瑚などから、玉工にいたっては金銀までも珠玉に含めている。借用文字をそのまま当てても、そこには独自の料理法で育まれた珠玉が宿っているのである。だから寺村氏が「同一のものであっても、材質によりヒスイ玉、形状により勾玉、色調により青玉、使途により頸玉など」ととらえ、また究極的には形態であるから「名称は形状を主とし、材質を従とし、必要に応じて色彩、文様など他の要素をこれに冠して呼称するのを基本」にするごとく、やはり先人の活きてきたなかで、相当慣用の熟したものとなって時代を降りてきたまの語義の一端が知らされる。

平賀源内著『物類品隠』の玉部に、珊瑚、瑪瑙、



玉みがきの図 「天工開物」による

水精、雲母、白・黒・紫石英が記されていることからも、『古事類苑』がいいうように、中国の玉の語義にそむいた別の分類と呼称を踏んでいる。それにしても、玉には天然と作られた玉とがあり、それを先人の語りや記録にひそませているのだ。ここでは文献史学を道標にしてたどってみる。

## (2) 玉の文化受容の変質

玉作の来歴については『工芸志料』に詳い。それによると、「玉は太古よりあり、伊弉諾尊其の着くる所の御頸玉を以て天照大神に賜う。……櫛明玉命は能く玉を作り、以て天照大御神に奉仕す」と記されていることから、古墳時代にはすでに玉を愛用していたことがわかる。また書は「神武天皇日向より大和に入り、都を橿原の地に定め、是の歳を以て即位す。時に櫛明玉命の孫某、玉を作る工人若干を率いて玉を作りて献じ、以て践祚を賀す。是を美保岐玉という」と記載していて、『日本書紀』卷第三でも、その内容と類似する。

櫛明玉命の子孫は、その後「居を出雲に移し、玉を作るを以て職と為し、毎歳玉を調物に副えて貢献し、其の業を世襲す。是を出雲の玉作という。此の子孫を玉作連、玉祖宿禰といふ」とある。また『日本書紀』(天武天皇十三年十二月)にも、玉祖連に「姓を賜ひて宿禰(すくねはもともと皇室と関係するものから選ばれた位の敬称で、連姓の有力な者に賜わった。特に神別諸氏に多い)と曰ふ」と記され、『出雲風土記』の意宇郡には玉造湯社が、すでにみえている。

垂仁天皇三十九年をみても、「皇子五十瓊敷命をして諸国の玉造部を督せしむ」とあり、櫛明玉命が率いて居住した諸国の玉作部が、垂仁天皇の時代になって、五十瓊敷命が総督し、玉を朝廷に献上したようである。しかしだ化二年(646)になると「孝徳天皇、歴世の政体を改革して玉作連及び玉祖宿禰の諸国の工作部の工人を督する職を罷む。而して諸国の玉工の貢献する所の玉及び玉器は、国司これを取む。(文武天皇以後に玉及び玉器を献ずるを、出雲國の外は停めたという)……玉工を京師に召集して以て諸玉を作らむ。当時の俗、玉を以て衣服を装飾する者あり、是を阿利岐奴といい又多麻岐奴という」と変容し、また「飯含むるに珠玉を以てすること無。珠襦・玉柙施くこと無」(日本書紀卷第二十五)と死者に珠玉をふくます古習や、衣服に玉をちりばめた珠襦(上衣)や玉柙(下衣)をこの時代にやめている。

それが延暦十四年(795)になると「……帶に白玉を著けしむ。本邦に於いて帶に玉を著くる制、此に始まる。是より後天下の形勢大いに変じ、人珠玉を以て衣服の装飾と為さず、其の用いる所は僅かに神幣と為し、或は玉冠、玉佩及び革帯に著け、及び仏寺の莊嚴と為すのみ、玉工益衰う。以来業を以て相伝うる者甚だ稀なり。瑪瑙、水精、琺瑯、珊瑚、琥珀、金、銀等を丸と為し、諸器の装飾と為すが如きは往々これ有りと雖も、而れども出雲の国産の玉の如き堅質の者に至りては、諸国の玉人其の技を子孫に伝えず。故に其の製造法独り出雲國の意宇郡の工人のみ相伝えて、其諸国に於いては其の巧遂に絶ゆ。」と記されたごとく、特定の場合にかぎり使用され、玉を業にする工人も、出雲にかぎって技を伝承世襲していく、諸国においては次第に衰退したことが理解できる。

玉類の変遷

		玉の受容	玉の社会・文化史	備考
原 始	B.C.	日本神体・神宝と硬質中心の玉類、	櫛明玉命玉を作る。(一名豊玉・玉祖命) 工人を多磨通久利・多磨須利(玉作)という 硬玉製珠玉の出現 頭髪・頸・手足等の装飾(玉の緒又は魂の緒)	櫛明玉命子孫出雲に居住する 玉作連の祖
	1世紀	部族国家の成立	古墳文化起る	中国に仏教が伝わる(一説B.C.)
	3世紀		硬玉製勾玉、碧玉質管玉(北九州硝子製玉) 五十瓊敷命玉作部を監督する	中国三国時代
	4世紀		滑石製玉類・子持勾玉の出現	首長の權威、装身具、呪的性格
	5世紀		仏教伝来	神祭用で強調、宝的・呪的性格保持
	6世紀			玉類の多様化(仏教的色彩をもつ)
	7世紀	多様な玉類の用途	玉工を京に集め諸玉作る 衣服に装飾始まる(阿利岐奴・多麻岐奴という)	玉工の業大いに盛ん
	8世紀	前中期	『風土記』編さんの命下る。衣服に装飾する技法盛んとなる 大阪砂(金剛鑽)をもって始めて玉石を治む(大友斐太の枝) 『万葉集』(調布玉川)	万葉集に玉の枕詞を300数十首にちりばめる
	後		風俗一変し玉を衣服の装飾とせず 僅かに王冠、寺院を飾る	玉工衰退す(出雲の工人のみ業を伝承) 支那から渡来する玉・玉器が増す
	10世紀	前期	出雲の玉作技法を世襲す。『古今集』(井手玉川) 天慶の乱後出雲の玉を献げことを廢止	朝庭支那の玉を用いる
	11世紀	中期	『拾遺集』(井手玉川・調布玉川)、『後拾遺集』(三島玉川・野田玉川)	

緒 の 時 代	12世紀	後鳥羽天皇玉器を造らせる 『金葉集』(三島玉川)、『千載集』(井手玉川) 水精・瑪瑙等で僧徒玉を作る	名匠を召集 僧法範をもって善工とする
中 世	13世紀	僧徒中心に玉工増す 『新古今集』(井手玉川・野田玉川)	弘安の役後渡来船少なく玉類輸入減少
近 世	14世紀	朝廷近江の日吉神社造営のため玉工召集す 『玉葉集』(野路玉川)、『風雅集』(井手玉川・高野玉川)	京の玉工守清・妙法・成仏・為綱・妙子の作といふ
近 世	17世紀	国産玉石と支那産宝石で玉工の業更に発展 硝子をもって眼鏡を作れる	男子印籠巾着に緒メ玉流行 長崎の玉工生島藤七眼鏡製造す
近 世	19世紀	玉工更に繁栄す 京都の玉工、水精、瑪瑙、琺瑯、琥珀、出雲青石、佐渡紫石、赤石・蝦夷唐太石・夜光貝、真珠、蠟石・珊瑚、孔雀石・淡水石等を材料に用いる	緒メ玉ますます流行する
近 世	文化天保	支那・オランダ人美玉をもちこみ玉工更に繁昌する 支那玉工店を構える	緒に玉を貫いた多婆古伊札流行する 京の御幸町・江戸の南伝馬町・芝三島町・大坂の備後町で印籠・巾着・多婆古伊札等販売
近 世	文政天保	玉工大いに発展する 玉工衰退するが数年後再び繁昌する	婦女子玉を愛し、カンザシ・櫛で装う 徳川家慶、多婆古伊札・カンザシ・櫛に玉をちりばめることが禁止されるが数年後再び流行する

『増訂 工芸志料』、『古代玉作形成史の研究』(寺村光晴著)、『風土記』等により玉井作成

出雲の堅質な玉は延喜五年（905）に、毎年赤水精玉8枚、白水精玉16枚、青玉44枚が意宇郡の工人の技によって献上されたことを記している。それも国造が真玉を、国司が硝子玉を獻じていたが、天慶の乱（935～941）以後は廃止している。この乱後に、中国から渡来する玉を多く用いたという。しかし文永の役（1274）や弘安の役（1281）からは、中国人の渡来が減少して、玉の輸入も少なくなったことによって、再び玉工の業が僧徒を中心にやや起こっている。

またこうした玉が、玉作部たちの細工だけにとどまらず、歌枕や修飾句とか靈魂の意味で、中古文学のなかへも盛んに導入されていった。とくに万葉の時代から後の諸書には、高貴な人たちが川瀬をレクリエーションの場に取り込んで、精靈にみちた歌を詠んだ野野、相聞をひそませた歌などを遺している。

なかでも、古人たちが仕立てた六玉川（井手玉川、三島玉川、野路玉川、高野玉川、調布玉川、野田玉川）はそうした歌にふさわしい川面の環境であったから、玉の語義を越えた作法で採用し、まろやかな歌の世界を演出させている。玉をちりばめる時の文学は、慣用の熟した玉をも語りかけているようだ。玉川の波うつ故地を、格調高い歌でまとめた『万葉集』から14世紀の『風雅集』に至る諸書にひめて、創作歌への変容と発展をみせる。

ところで、家康が江戸に入部し幕府を開く慶長年間に入ると、玉も多様で、庶民にまで受容される時代となる。『工芸志料』に「男子印籠と巾着と相具して腰間に佩ぶることを好む、而して其の緒に玉を貫き、以って縮束す。是を緒メ玉」という。是に於いて玉工の業更に起こる。」と記載されているごとく、生活のなかにも玉をちりばめた用具が用いられてきている。とくに寛永年間になると、玉工の業がますます繁盛して、京の工人は水精、瑪瑙、琺瑯、琥珀、出雲の青石、佐渡の紫石・赤石、蝦夷の唐太石、夜光貝、真珠、蠟石、珊瑚、孔雀石、凝水石などを用いて、緒メ玉を創っている。また南蛮の巧を伝承する平戸玉は、肥前の工人が製し、江戸大坂においても玉の技を伝えたという。

寛文の頃、<sup>たばこいれ</sup>多婆古伊礼が流行ってくると、それまでの緒メ玉と同じように、緒を着けることによって、庶民は争ってこの美玉を求めたという。女性にしても、文化年間以後玉をちりばめたかんざしや櫛が流行ることで、更に繁栄している。

ただ緒メ玉にはその紐の神秘な結び目そのものにも、靈魂を結びこめる作法というものがあって、それを「魂の緒」とも呼ぶ。水引の結びと同じで、自身の靈魂を結びこめると、人びとは信じていたからである。「玉の緒」の流行のなかには、玉を緒にいくつも通した「御統玉」のたまとは別に、この靈魂を獨得の紐結びの作法で、結びこめるたまが内在していることも事実だ。

庶民受容のこの時代、すでに古の官人たちが諸書で詠んだ玉の記載例にとどまらず、玉工が製作する玉類を含めて、時代を生きる民衆の暮らしのなかへも取り込まれていく。貴重で美しく、更に丸い形状や靈魂に至る広義にも、玉を冠する思想が庶民にまで滲透しているのだ。もちろん、玉の原義は太古の昔に溯らなければならないが、この17世紀の頃にはすでに現代とほぼ同様の語意でとらえられていたことが諸書にみえる。

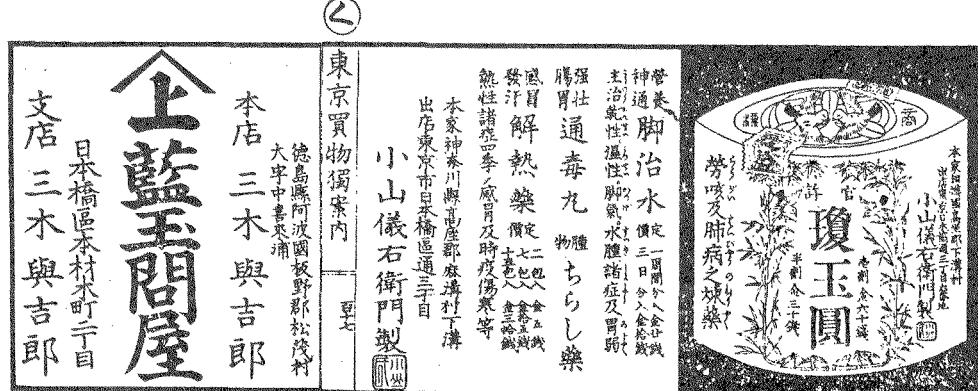
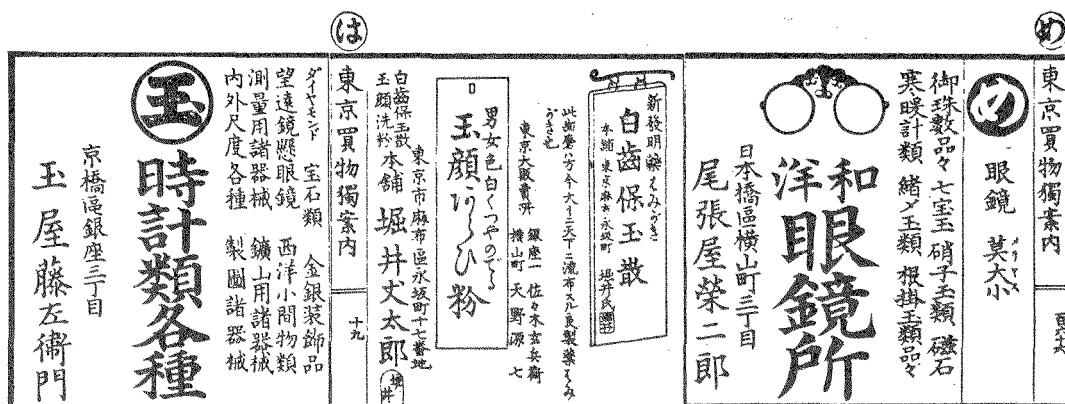
とくに17世紀に著された『毛吹草』卷第三、付合の玉の項には「貝 目 牛 舟 正月 湯 水 藻

こんなやく やきば れう  
藍 昆若 勾 刀 曆 鐵炮 龍」など、玉工の創作以外の事物にも付合させる手法が、生活にまつわるあらゆる面にみうけられている。この影響を受けて、『毛吹草』卷第四や『庭訓往来』に記された諸国の産物でも、そのことが承認できる。

18世紀になると、三宅也来著の『萬金産業袋』(享保17年)卷之三に記された玉のほか、動植物や言語のうえでも、過去の語意を超える姿勢で、その使用範囲を拡げている。越谷吾山著『物類称呼』(安永4年)には玉の原義を忠実に守って、流傳する内容を集録している。

玉つばき(植物、桺)、玉紫(植物)、すすだま(植物、薏苡)、たまたばこ(植物、玉樓春)、しほだま・くろだま(植物、楠)、大玉・小玉(動物、蛤)、まゆ玉(動物、蚕)、もだま(動物、鮫魚)、たまげる(言語、魂消る)、ぐだま(言語、おろかあさましさ)、しごくだま・しこたま(言語、多い事)、手玉(言語、石投)

もっとも本書に記載されたすべてのたまが、先人の伝言する「玉」と結びつくか疑問ではあるが、形而下と形而上のたまを問わず、相当慣用の熟した呼称で、多方面から受容されてきたことだけは確かだ。まさに庶民の暮らしのなかへも受け容れられた時代。それも、特定の人びとが生活に取り込んだ貴重な細工物や、歌の世界などに冠した中古の時代をのがれて、玉はそれまでの語意をもとに、庶民が住む街面や野面



明治23年東京市 玉類の大店 「東京買物案内」による

に幅広く流行らせ流傳していることを物語っている。そのなかに、玉や玉川もひそむようだ。

江戸の風潮を受けてか、明治になっても東京の大店では、まだまだ江戸の名残りをとどめる。屋号や商標としての玉、それに慣用語としてすでに定着している硝子玉、緒メ玉などの玉を、商いの看板に仕立てて、和洋の文化が交錯する街なかに活きづかせている。明治という耐震耐火構造の都市にも、そうした江戸から東京へ継承する、広義にとらえた玉とその老舗が彩りをそえる。『東京買物独案内』(明治23年)が、それを知らせてくれる。

中古から現代へ、玉の思想が特定の人たちだけの受容と伝言から、諸国の人にも認証できるような語意で、確実に暮らしのなかへ定着させたことを語っている。

#### [ 参考文献 ]

『風土記』上・下 日本古典全書 朝日新聞社

『日本書紀』上・下 日本古典文学大系 岩波書店

『毛吹草』 岩波書店(岩波文庫) 昭和18年

『天工開物』 平凡社(東洋文庫130) 昭和44年

平賀源内著 『物類品隣』 八坂書房(生活の古典双書2) 昭和47年

花咲一男編 『諸国買物調方記』 渡辺書店 昭和47年

『庭訓往来』 平凡社(東洋文庫242) 昭和48年

『増訂 工芸志料』 平凡社(東洋文庫254) 昭和49年

越谷吾山著 『物類称呼』 八坂書房(生活の古典双書17) 昭和51年

寺村光晴著 『古代玉作形成史の研究』 吉川弘文館 昭和55年

## (1) 玉川の古歌と風土

詩歌や謡曲に語られる六玉川の古里は京畿を中心にして、東国の粗野な川面にも遺る。もちろん古の時代においては六カ所の清流に玉川の名を借りて、貴人たちのレクリエーションの場に仕立てたはずだが、時代を降りてくるにしたがい、玉川のもつ語意と土地柄をうけて、後人たちが六玉川に似せて創作した跡までひそむ。

もともと六玉川とは、山吹とかわざで知られた井手の玉川（京都府井手町）と、うのはなで知られた三島の玉川（大阪府高槻市）、はぎの名所野路の玉川（滋賀県草津市）、ききょうで知られた高野の玉川（和歌山県高野町）、それに東国の布さらしで知られる調布の玉川（東京都調布市）と、陸奥の千鳥で知られた野田の玉川（宮城県塩釜市か）であるという。

駒とめてなお水かはむ山吹の

花の露そふ井手の玉川

藤原俊成（新古今集卷二）

蛙鳴く井手の山吹散りにけり

花の盛りにあはましものを 読人不知（古今集卷二）

古歌に詠まれた山吹の里、井手の玉川はカワズの名所でもあった。色が黒くカエルより小振りの、玉川の水中だけに棲むという、夜鳴くカジカである。

また『伊勢物語』百二十二段では

山城の井手の玉水手にむすび

たのみしかひもなき世なりけり

約束をたがえた男が、たのみを手飲にかけて嘆く歌までのこす。井手の風土をかり、波うつ畔で乙女との逢瀬の情景を『源氏物語』『大和物語』など諸書でもみえる。平安の時代から、時の教養人に詠られてきた故地、都人にしてみれば京畿の内でも郊外の、回想の水面であった。都人にとって、格好の遊里と風雅を忍ぶ土地柄に觀えてくる。京都と奈良を結ぶ幹道、大和街道がここ玉川を渡っていただけに、波のしじまに山吹が映えるような、素地の野原が「井手の渡り」付近にあった。

条里の地割と古墳をつけた、井手の歴史は  
廣くて深い。奈良時代橋諸兄も天平12年



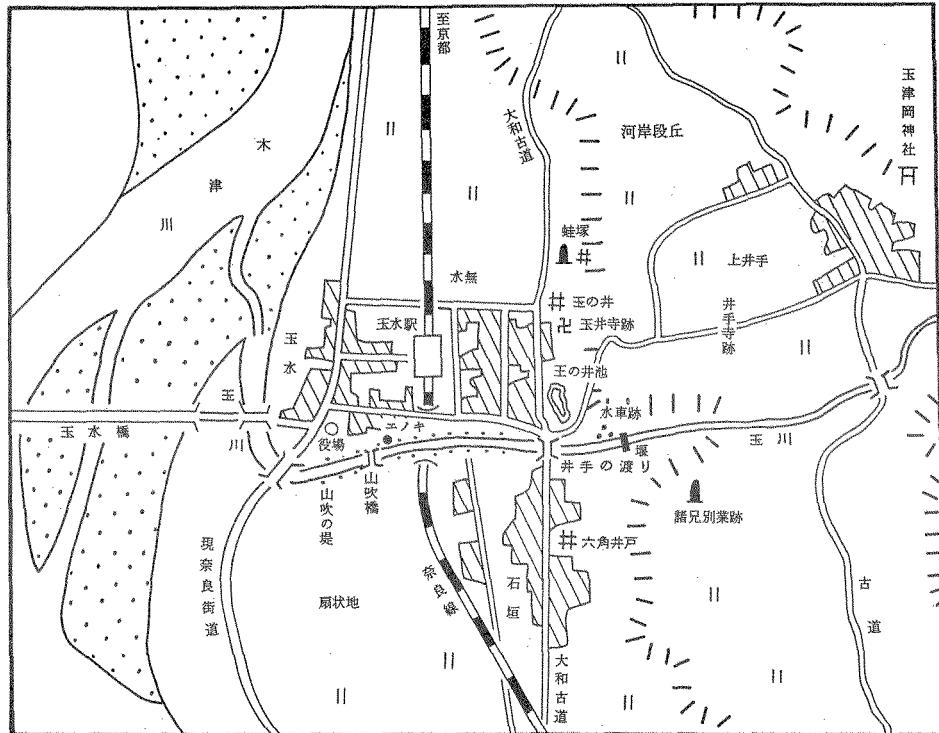
野路の玉川（伊勢参宮名所図会）



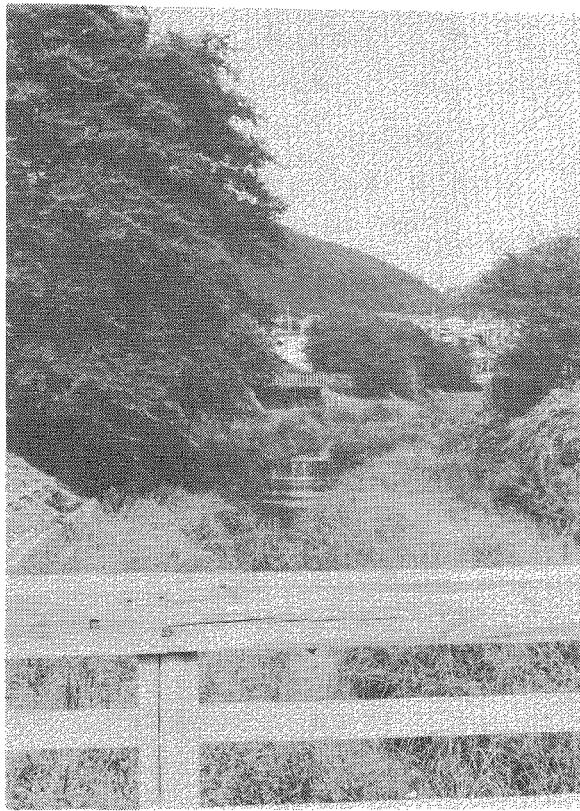
井手 山吹 かはづ（五畿内産物図会）

(740)に別邸をかまえて、玉川をとりこみ聖武天皇を迎えたのが、文人墨客の詩情をさそう井手の風土が、早くから歌人たちに容れられて名所に仕立てたのも、要路に組まれた舞台づくりがなされたからなのか。土着の民の業もまじって、玉川の名水は貴人たちの知的媒体だった文字で文献に遺す。

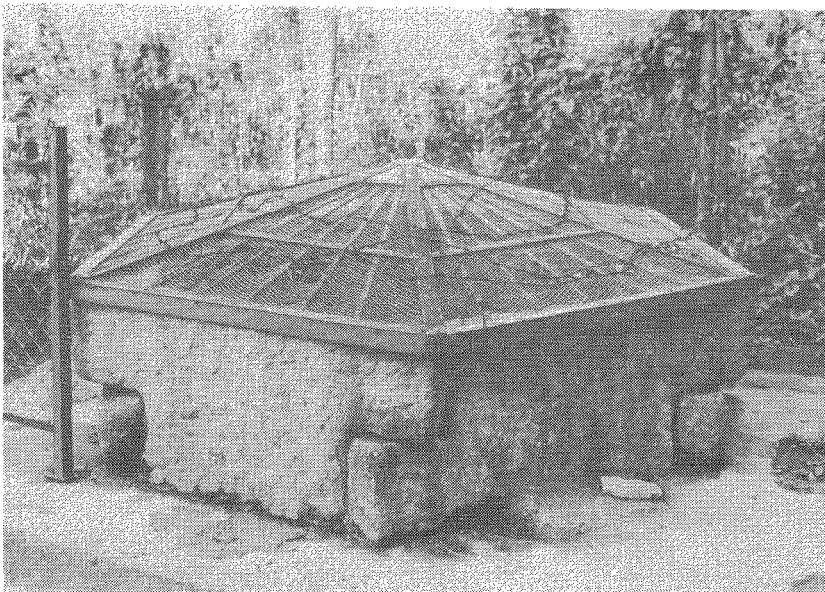
中古の幹道大和街道は木津川が創作する段丘下を、六角井戸、玉の井池、玉の井（玉井寺）、蛙塚など、先人の跡をつけて南北に貫ぬいている。「名水百選」に選定された現代の里よりも、もっと人文で味付された名水がそこにはあった。玉川の清水を四つの井堰で乾いた野を潤し、みずぐるまを稼働させて、民のまじめな基本姿勢を整えさせる名高い水にもなったが、東国の大和川（玉川）と同じで、官人たちが遊里に仕立てるだけの、自然の創作する湧水によって舞台づくりがなされている。歌語にひそむ井手の顔が後景となっ



京都 井手の玉川



井手の玉川



石垣の六角井戸

て、いまの野と照合でき、まさに時代を越えて中古の詩情がよみがえる。時代の変容にたえて遺るのも、そうした自然と人文を調和させた手順にある。

川を熟知した古人が、歌枕の地にふさわしい河相を、自然律の形でとらえたところに六玉川の下地はある。三島の玉川にしても同じこと。

みわたせば波のしがらみかけてけり

卯の花咲ける玉川の里

相模（後拾遺集）

卯の花の咲かぬ垣根はなけれども

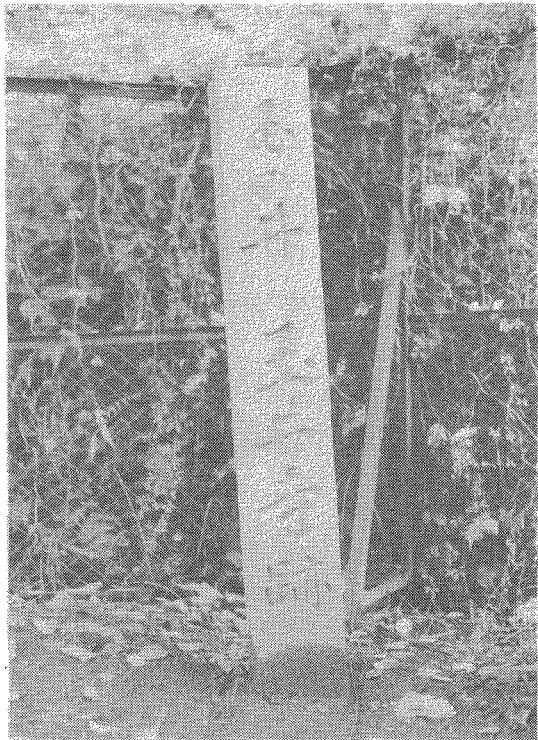
名に流れたる玉川の里

藤原忠通（金葉集）

卯の花の匂う古歌の里、高槻市玉川二丁目の玉川橋団地付近を流れる川面をさすという三島玉川は、平安以後二十数編の歌集中に納められている。玉川橋のたもと「玉川の里」と記された案内板が、由来を刻んだ

石碑とともに現代の  
顔に化粧されて、故  
地の風情をかもしだ  
す。

玉川の流れを右手  
にみて、桜堤を進む  
と、高さ2メートル  
もある「玉川の里」  
の石碑に出会う。も  
ちろん、卯の花で飾  
ることも忘れていな  
い。更に先には芭蕉  
の句碑が、観月台の  
水鉢をしたがえ、卯



水無の玉の井 玉井寺跡碑



三島玉川の里

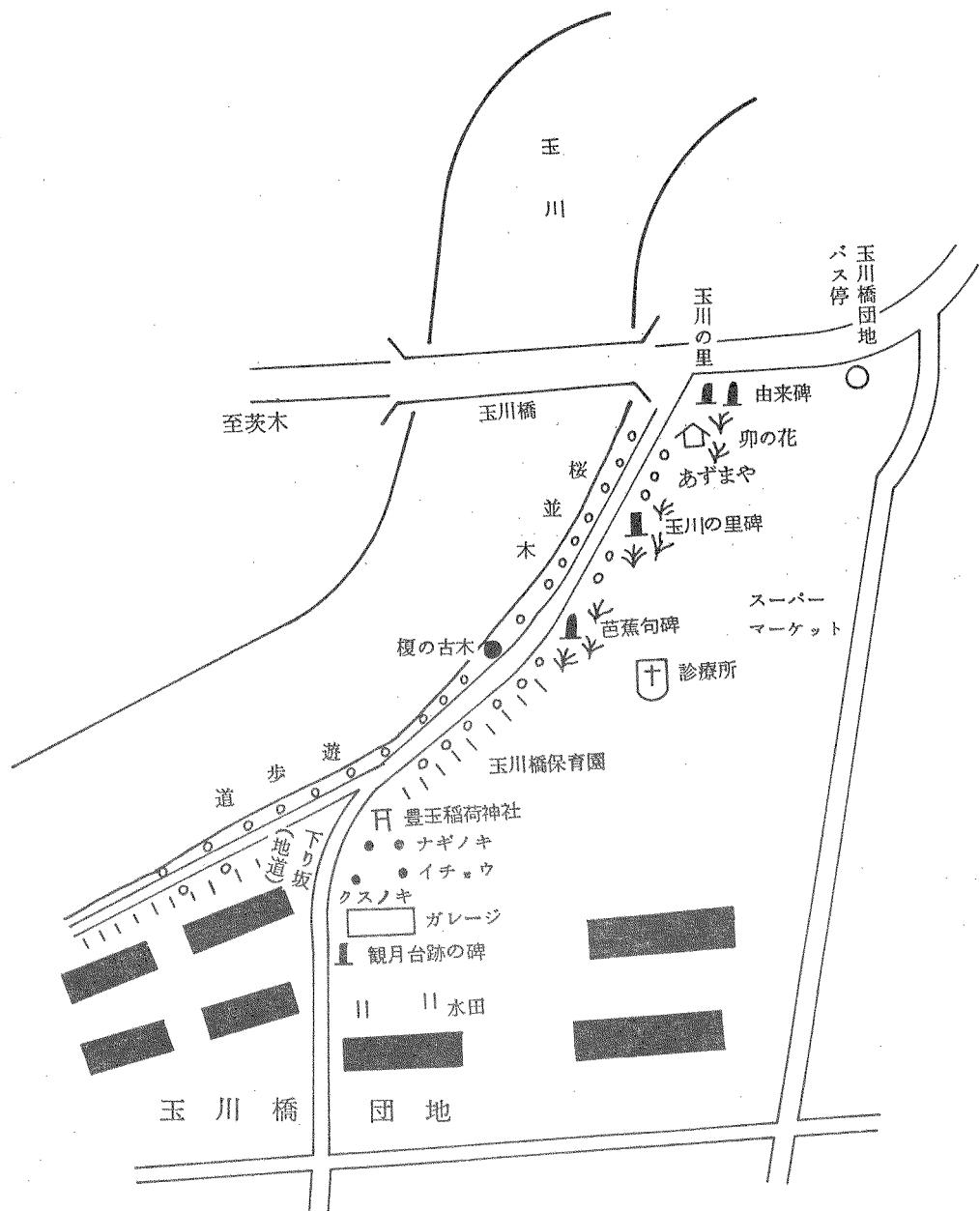
の花を後景に整地されている。硬石をくり貫いたこの鉢は名月を観る水鉢で、榎の老木を過ぎ、堤から団地内へ下るガレージ横にあったのを移した。いまは「観月台跡」の石碑をのこすだけだが、中秋の名月に水面にうつす月は阿弥陀三体を現わすという。

時代が降りても風流の故地だったのか、芭蕉の句碑も、かつては堤下の豊玉稻荷社境内にあった。玉川橋団地という現代の顔が社の周辺まで侵食するなか、ナギノキ、クスノキ、イチョウの緑蔭にしづみ、朱塗の玉垣で囲まれた神聖地だけは時代を越えて、繩張りを守っているようだ。

さて歌人たちが遊里の場所に仕立てた三島玉川にも、民の業があった。西面玉川の里保勝会が著した『名所（三島）玉川の里』の国芳の玉川美人画に、「子を背負った美人がムシロの上で衣を打っているのを中心として、玉川の清き流れに衣をさらしている女性、さては右には高下駄を脱いだ美人が着物の裾を摑み、犬がじっと眺めている。左は、高下駄をはいた美人が打ち終わった衣を抱いてゆく姿、……」と調布の玉川と同じ川瀬を画いている。乙女の白い素足が玉川に映える情景は卯の花や観月に劣るものではない。

郡家新町の郡衙跡と城内町の高櫻城跡の間を流れる芥川が、高櫻の野野をきめて、その湧水を玉川に流すという。井手玉川、野路玉川、調布玉川、それに野田玉川にしても、清水の湧く川下にのくる。歌詠人が六玉川を選定したのも、自然を直視した下地があった。詩情をそそる民のしぐさを、その流れに容れて玉川の故地は流伝するのか。三島玉川の素地も、そこにあった。

だが調布の玉川については、調布市以外に多摩川の谷口下で、旧調布村（現青梅市）の川瀬の里



卵の花の三島玉川 (高槻市玉川町)

だとする説もある。現に古村の記録や古の口碑に、先祖からの伝言をのせて譲らない。調布の玉川が現在の青梅市だとしても、多摩川の中流域の水面で、岸辺に礫の河原が広がる清流域であることには変わりがない。

しかし粗削りの野面に仕組まれた野田の玉川については、四カ所にその故地がある。凍てる陸奥の大地に貴人の生活を容れて、舞

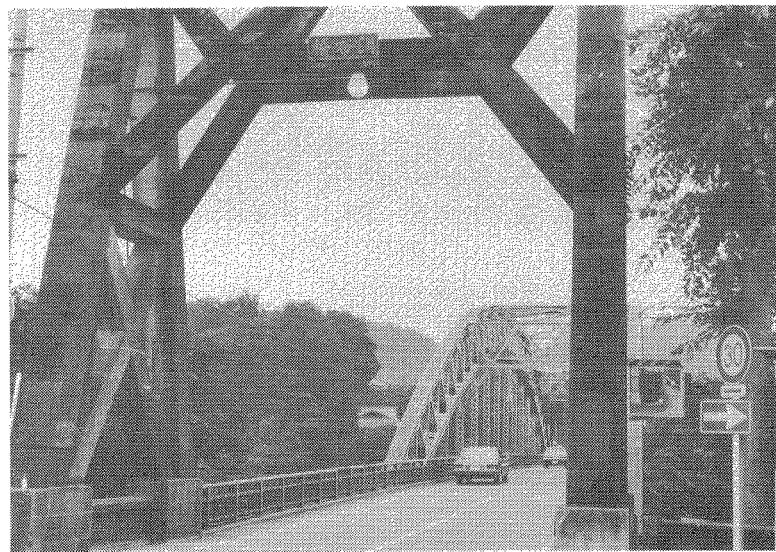
台を構成させた「野田玉川の里」。それには福島県いわき市野田玉川と宮城県塩釜市野田玉川、そして岩手県野田村玉川と青森県平館村野田玉川の里があり、西行法師や能因法師の竹扇の功をつけて、それぞれその風貌を伝える。何世代も前からひそかに準備され磨かれ、あたかも活きた情報かのように読みとれる。

しかも共通して語ることは、玉川の流れのなかでも、歌詠の里が群山から出る谷口下の、礫の河原が広く覆い清水の湧く土地柄である。彩りもなく飾りもない、それでいて玉水の香りと緑の繁みに風情があるような素顔をもつ。貴人たちが知を誇らず、風に奢らないかまえで、地域風土の呼吸を汲みあげるにふさわしい川面である。ただ自然を観るこの姿勢と立場からでは、中古の昔に仕組まれた野田玉川の故地を決定させるには糸口がつかめないが、京畿の文化圏に組込んでいく陸奥の経緯とその手法に焦点をあててみると、地図をぬりかえるなかに、玉川の古里を探る細道もひそむようだ。

まだまだフロンティアの粗い大地で、ひさしく陸奥の蒼莽のなかに隠れ住んで、武技を練る時代だっただけに、玉川べりを逢瀬の場に改変し、新しい中央文化の息吹きを注ぎこむにしても最前線の戦場より南の、政治文化が安定と成熟の時代をむかえたところに、玉川という自然配合物の力を藉る故地を誕生させてきた。

「井手の玉川」「三島の玉川」「野路の玉川」「高野の玉川」それに「調布の玉川」にしても同じこと。京畿の文化圏域の枠組のなかでも、文字を自由にあやつる都人など、教養人たちが戦略を離れて、点景と背景をつけて思索にふける野と川面に、玉川の古里はある。決して耳ざわりで汚染された水面が、そこに展開するのではなく、古人の季感と玉川の素顔が歌意を体した図柄となって原形のままで宿る。

こうした歌人たちの気持には野面で生きる自然の論理だけでは律し切れない、生活リズムとしての論理があったようだ。とくに玉川の風土とかみあう抒情の実相さえ、そこに還元でき、六玉川をうむ舞台構造



調 布 橋 ( 青梅市 )

も、歌人たちの伝統によって磨かれてのこと。乾きを知らない日本人だけに、玉川という川瀬の音を聞くにしても、よけい精細な心配りが下地となって、六玉川を選定したと思える。

自然が創作する川面に、律令国家の機構ができあがり、都人意識の高まりのなかで深い識見を持った歌人たちが、季節のうつろいをこまやかに描き綴ったところに六玉川の、それも玉川で命名するにふさわしい基本姿勢をのぞき見することができる。

現場を踏みしめて丹念に探索すればするほど、そんな京畿の香氣と風貌を「六玉川」は伝える。だから、玉川を観る古人の態勢には中央政府の華やかな暮らしをいとおしむかっこうの野面で、心をいやすだけの風土と歴史を語る環境を兼ね備えていたから、時の教養人たちにとっては、他国での心の姿勢を正すかっこうの舞台となる遊里を、玉川で育ててもいる。すると、玉川を詠んだ歌にはその流れが清らかで、ほめ讃える語義が込められることが条件となる。里人や旅人にとって、流水を飲用にする名水であることも、玉川の下地にひそむ。

それを知らせるかのように、神奈川県小田原市石橋の川面を、ほめ言葉で玉川と指呼している。古歌を遺すような名高い玉川ではないが、「玉川、西方山間の清水合して一流となり、村（石橋村）北を流れ、幅六七尺、直に海に入、村民等飲水に用ゐる」（新編相模國風土記稿卷之三十一）と記されたごとく、円礫の河原を伏流水が流れ、昭和10年の石橋村大火以前は、この清水を素焼の土管で石桶にため飲用したという。井戸は寺と2・3の世帯が所有するのみで、戦後も鉄管で引水し使用したと中島俊雄氏は語る。

このように玉川には美称の語意に加えて、名誉ある川名でもあった。それだけに歌を詠まなくとも、六玉川に準じるだけの自然の造る環境があつたことだけは確かである。

ただ本調査研究でも、当初河原の礫が研磨されて玉礫で覆われることが、河水を浄化し清水を保つ条件と判断して、理学の立場で検証させる手法をとったが、現代の大地から閉じこめた川では断念せざるをえなかった。それを、比較的自然が支配していると思われた岡山県高梁市の玉川や、山梨県北都留郡小菅村玉川で試みたが、やはりこれらにも現代の歎跡がのこり、中古の玉川の川面を再見することは困難であった。

#### 〔参考文献〕

秋里籬島著 『拾遺都名所図会』 天明7年

犬養孝著 『万葉の旅 上・中・下』 現代教養文庫 社会思想社 昭和39年

大津有一校注 『伊勢物語』 岩波文庫 昭和39年

竹下数馬編 『文学遺跡辞典 詩歌編』 東京堂 昭和43年

零石太郎著 『いわき市の文学散歩』 昭和47年

井手町史編集委員会 『井手町史シリーズ』 井手町

平館村 『平館村史』 昭和49年

高槻市教育委員会 『高槻の史蹟』 昭和50年

塩釜市教育委員会 『塩釜の歴史』 昭和 51 年

高槻市史編さん委員会 『高槻市史』 昭和 52 年

高槻市西面玉川の里保勝会編 『三島 玉川の里』 昭和 55 年

田村栄一郎著 『野田の詩ごころ歌ごころ』 岩手県野田村 昭和 58 年

## (2) 国府にそえる玉の水面

律令という国家意識の高まりのなか、中央政府は国府に国分寺や国分尼寺、それに総社をつけて諸国の整備をおこない、支配体制を国土の隅すみまで浸透させていった。この古代地方統御によって、国家統一の枠を一步一步遠隔の地域まで確実に波及させながら、政治体制のみでなく、文化の面でも知らず知らずのうちに京の色彩に染めかえていく。

それには土人の意識を踏まえたうえで、仏教という信仰に名を借りた手法で、京から派遣された官人たちの手によって、漸次国域を統治する。他国人である官人たちが支配するにしても、中央政府からの要求に応えるだけの、産業をおこし生産性をあげてこそ、国府の役人としての立場が保てる事になる。だから知に劣る土着の人たちとの距離感を、宗教を借りることで縮めてもいった。

彼らがとる姿勢には常に土人と京畿との狭間で、解決しなければならない問題が山積していたが、唯一職務を離れ、故郷のイメージを喚起させながら余暇を楽しむ野野も、異郷の土地で暮らす役人たちには必要である。そこにも玉川の水面があった。

山紫水明の国域にあっては、そうした野面を国府周辺で、しかも役人たちの日帰り圏内で探しあて組成していくことこそ、異郷で活ける彼らにとって、かっこうの栄養補給の場になりえたにちがいない。勿論清水の水面に光がゆれる風光明媚な野に玉川を呼称したが、そこは川の自浄作用によって清流域を保つだけに、土着の民にとっても業の地に仕立てるにふさわしい条件が整っている。自然律の形で玉川の呼吸を汲みあげる、土地観がすでに浸透していたとみたい。時の指導者層の遊里の場所と交錯する、国府のはずれの玉川の里



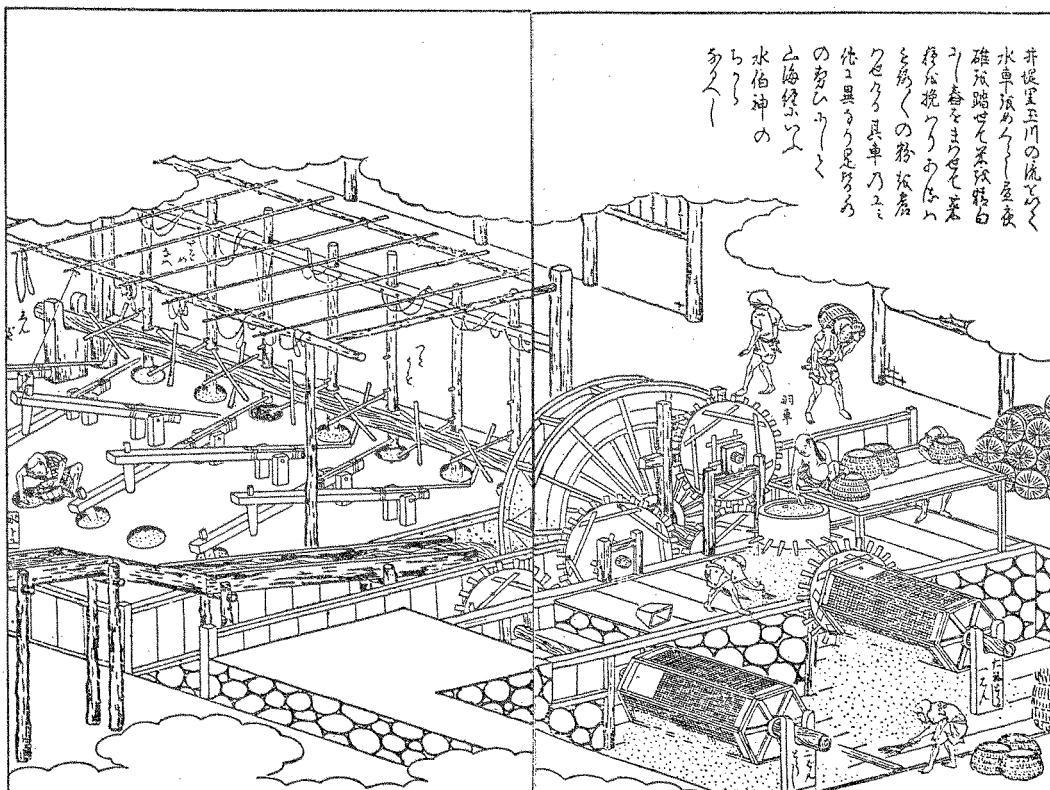
武藏国分寺跡碑

に、そうした都人とは異質の利用目的で地域を成熟させ醸成してきました。

古代人の川に対する基本姿勢には都人も野人も、暮らしのなかへ取込む態度が四季を通じてひそんでいて、その一方で、荒れる川面であることも熟知しておかなければ、彼らの舞台は流出もする。むろん野面に生きる古人たちも、この態勢を踏まえたうえで、自然と同化融合する知恵と検索を伝言させてきた。だから、国府や国分寺など中枢機能が集積する場所は氾濫という、川の粗い素顔の影響を受けない野面で、それでいて川からの恩恵だけは充分に取込める場所に構築した。黄河流域やナイル川流域など、四大文明発祥の舞台をみても、この姿勢だけは心得て、大地と照合するかまえで後世に啓発している。

わが国の国府とて、川を道標に国土を拓く手法に難儀をなめた経験をよく復習して、多元の検索による国府や集落の位置づけをおこない、コンパクトな縛張りを決定づける論法をとった。語調を強め、時に告発調に警告する。そんな川で修業して腕を磨いた跡や、歌を詠んだ跡が、川面にさしこんで、玉川の川名で遺る。

遊里の水面に仕立てた井手の玉川、三島の玉川、野路の玉川など六玉川は勿論、出羽の白玉川（山形県八幡町）や伊豆国の玉川（静岡県三島市）、それに伊予国の玉川（愛媛県玉川村）などは、府中にほど近く、官僚たちが暮らす圏内において誕生させた。それだけに、前人未踏の歎跡がみられない、人稀なる処



井堤里玉川

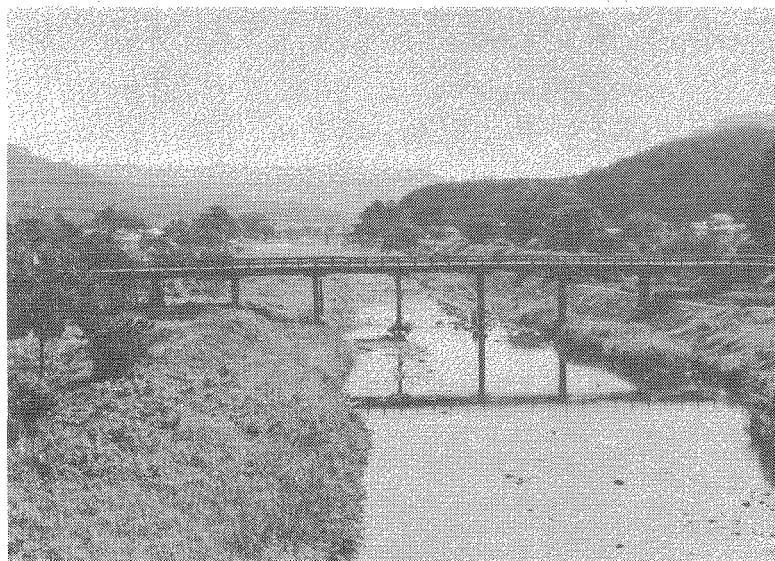
(拾遺都名所図会)

が斑痕するような、群山の  
ひしめく奥深い未知の空間  
には玉川の川名すらみあた  
らない。そこは山岳脊梁の  
草木の葉ずれと川音だけが  
聞こえる、遠隔の地である。

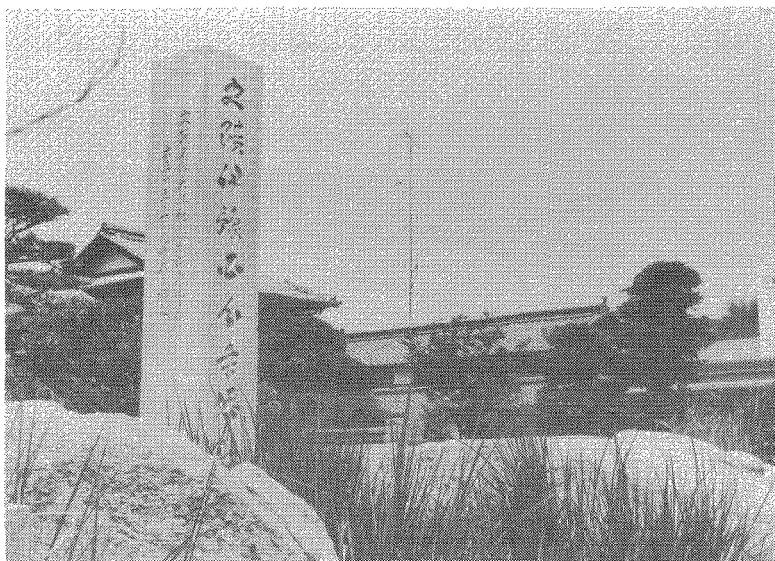
むろん先人が道をつけた  
大地の作法をくむかまえで  
後世の人たちが玉を借りた  
作為によって、玉川が誕生  
する例も認められてくるが、  
それはあくまでも国府で發  
祥する文化とその知識が容  
れられた後のこと。諸国の  
野野でも光のあたる場所が  
国府周辺であったからこそ  
玉川の痕跡もその枠内で業  
と語りをつけて、思考され  
ながら編まれてくる。

#### 〔参考文献〕

桜井正信著 『歴史と風  
土 武藏野』 社会思  
想社 昭和 41 年  
藤岡謙二郎著 『国府』  
吉川弘文館 昭和 44  
年



観音寺の荒瀬川（上流が白玉川、山形県八幡町）



伊予国分寺跡（愛媛県今治市）

#### (3) 玉工の細工をのこす玉の川面

大和朝廷の時代には勾玉、管玉、白玉などをはじめ玉類を製作する、部民が組織されたが、その技法は  
太古から継承されたものである。

天孫降臨に供奉し、伴造には玉祖連（宿禰）が中央政府の影響を強くうけ勢力をたくわえた。それ

たまつくりべ  
にひきかえ、玉作部は職業集団となって諸国の玉を産出する野面に分散し、木地師や鍛治集団と同様、古代国家の体制のもとで次第に強固な組織となって、大地に根づいていった。今日の古里名に玉作や玉造が散見できるのも、これらの玉工たちが腕を磨いた遺を語るところが多い。

ただ玉祖連は『日本書紀』卷二神代下一書に「玉作上祖玉屋命」と記されているように、玉作部の祖神でもある。この玉祖命を祀る玉祖神社は『和名抄』に河内国高安郡玉祖郷玉祖神社（大阪府八尾市神立）、周防国佐渡郡玉祖郷玉祖神社（山口県防府市大崎）とみえ、古社のたたずまいを今に伝えている。

周防国の玉祖神社の縁起によれば、天照大神が天岩屋戸におかれになった時、思兼命の発案で伊斯許理度売命が鏡を造り、玉祖命が玉を造られたという。この鏡や玉と供え物を前にして、天宇受売命の踊りをみていた神がみは大笑いし、それを天岩屋戸におかれになった天照大神が、何ごとかと岩屋戸を一寸ほど開けたところを手力男命という力自慢の命が開けて、天照大神をお迎えしたという神話をつけて、周防国衙のはずれ佐渡川のほとりに鎮座する。周防国の一ノ宮である。いまも神遊りの場所という玉の岩屋を、背後の山ふところに置いて、八尺匂瓊（八坂瓊之曲玉）を造られたことから、メガネ、レンズ業者は勿論、時計や宝石を扱う人も全国から多数参詣するという。

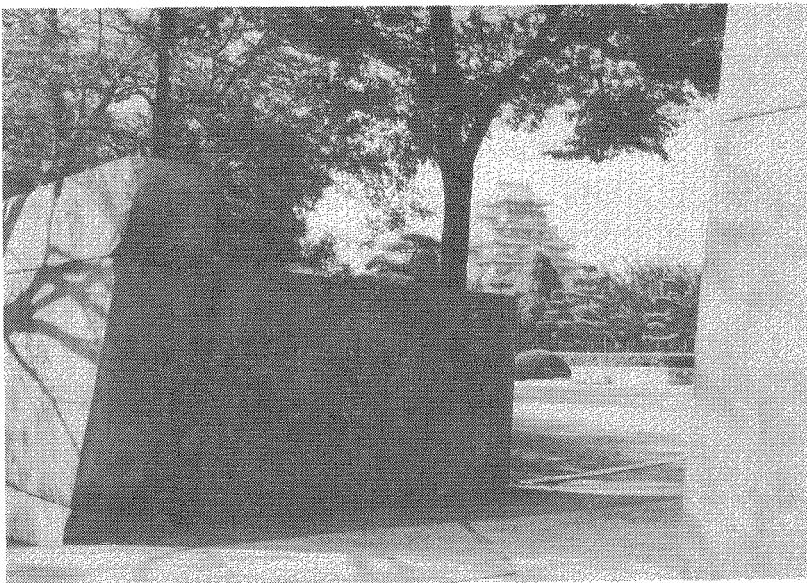
玉造部たちの祖神、玉祖命を崇め、諸国に散らばった玉作部たちは、野野で集団を組織し玉作や玉造の地名をのこしながら玉作神社や玉造神社、また玉祖命を祭神にする社を設けて、職業集団としての繩張りをきめていく。この工人たちの足跡は国府周辺や玉川の畔に踏みしづめてのこる。

大阪城の南、難波に鎮座する玉造稻荷神社（大阪市東区玉造）にしても、古代の玉作の岡にある。高麗に工匠をもとめ、玉作の集団を形成した難波の高台は『日本書紀』卷十五、仁賢天皇六年是秋に「難波玉作部鯉魚女、嫁於韓白水郎疋生哭女」と記されているように、493年にはすでに三種の神器のひとつ玉作を組織して

いた。それが豊臣の時代になんでも、大阪城の守護神として城内玉造門から出た正面に西向きで祀られ、とくに秀頬や淀君の崇敬あつく、神殿跡の後方には月花を楽しむ高殿まで建立されたという。また玉作岡付近には、千利休の屋敷跡と茶をたしなむ良質の清水が湧く清水谷（玉造清水）



玉祖神社 (山口県防府市)



大阪城玉造門跡



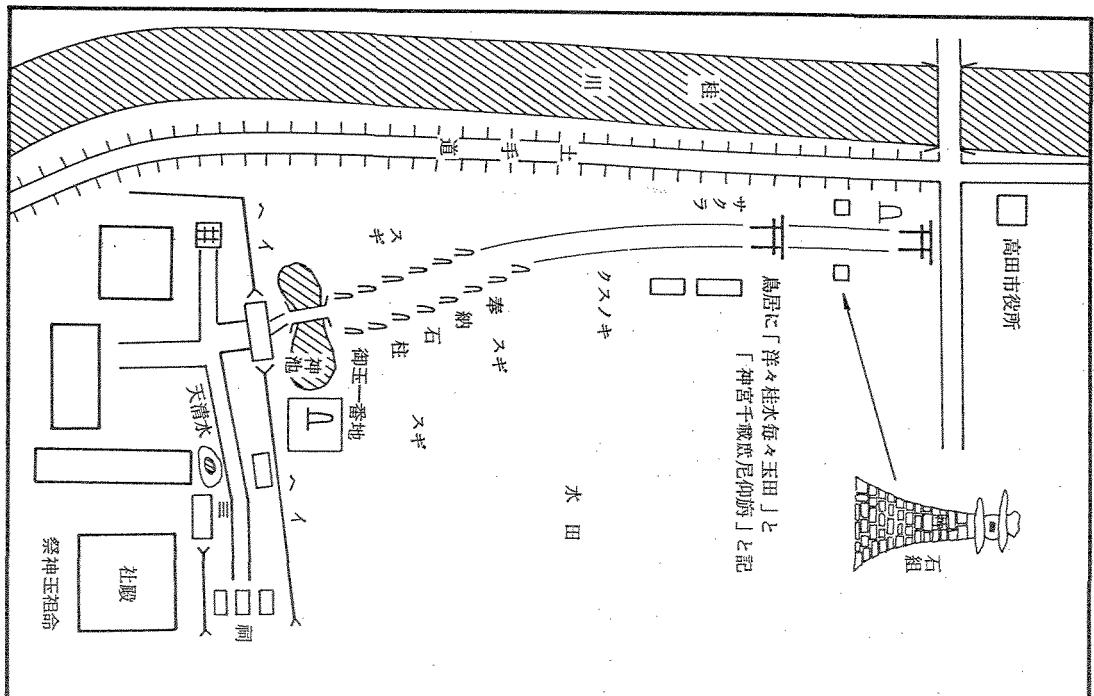
玉造稻荷神社と玉作岡 (大阪市東区)

て、玉を洗い清めた「玉の井」という堀抜の清泉井戸ものこる。

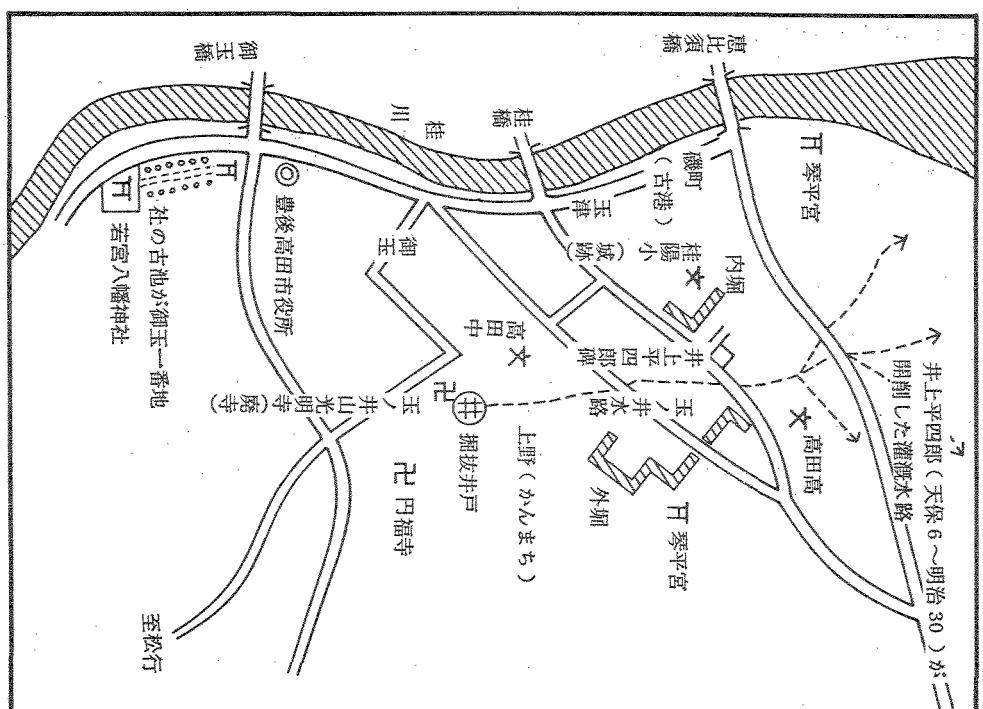
このような玉作の技を守って流れのなかに容れ、川とともに工人の里を拓いた川面に出雲の玉造川や相模の玉川(厚木市玉川)などがある。相模の玉川は厚木市西郊を流れるが、その上流広沢寺では水面に今も碧玉<sup>へきぎょく</sup>の原石で緑色細粒凝灰岩が採取できる。この玉川産の原石で玉を模造しても、古代遺跡から出土す

もあって、時代のか  
きねを越えて玉工の  
伝統は受け継がれた  
という。

また、大分県豊後  
高田市御玉の高田若  
宮社は玉祖命を祀る  
古社である。鳥居手  
前の縁起板には「字  
<sup>たま</sup>御玉の璞を神体」と  
記されており、璞と  
はハクであり、未だ  
手を入れぬ素玉(あ  
らたま)、すなわち  
璞玉(はくぎょく)  
ということになる。  
この御玉一番地はな  
んと若宮社の境内、  
それも長い参道から  
山門にさしかかる古  
池に架けたタイコ橋  
のたもとに、「御玉  
一番地」と記した標  
柱があった。職業集  
団である玉作部の崇  
拝する社であったこ  
とは、祭神が玉祖命  
であることでも確か  
である。それに加え



豊後高田市御玉の若宮社配置図



豊後高田市の御玉と玉ノ井



豊後高田市御玉一番地の碑



厚木市玉川上流 広沢寺入口

る玉類と極めて類似する。また日向川と落合う小野の古里の西方、丘陵尾根を光玉山といい、光玉とは攻玉であって玉造と関係の深い土地柄である。現にこの一帯から玉作の遺跡も多く発見されると郷土史家はいう。『和名抄』にも国郡の部に、玉川郷の名がすでにみえ、それを示唆しているかのようである。

このような玉川と玉作の関連は武藏の玉壺川（埼玉県玉川村）、玉作（埼玉県大里村）、常陸の玉川（茨城県大宮町）などをみても同様で、武藏では緑色凝灰岩が常陸では瑪瑙が産出され、その原石を細工した跡が埼玉県の月輪玉造遺跡（滑川村）や舟木玉造遺跡（大里村）、そして大宮町の東野遺跡などにのこる。

#### [参考文献]

酒井宮藏著 『豊後高田市誌』 国東半島文化研究所 昭和32年

防長風土記出版委員会編 『防長風土記』 青雲社 昭和32年

『日本書紀 上・下』 日本古典文学大系 岩波書店

『天工開物』 平凡社（東洋文庫 130）昭和44年

厚木市史編纂委員会編 『厚木市史料集 調査報告 第二集』 昭和47年

厚木市史編纂委員会編 『厚木市史 史料集(3)考古編』 昭和48年

『増訂 工芸志料』 平凡社(東洋文庫 254) 昭和49年

寺村光晴著 『古代玉作形成史の研究』 吉川弘文館 昭和55年

酒井宮蔵著 『国東半島の地名あれこれ』 第一法規 昭和55年

#### (4) 古社と古寺に宿る玉水

全国の玉水を探っていると、靈魂の宿るたまや、それから派生して心をいやす清泉の玉水といった御靈のタマ川が詰め込められた場合もある。

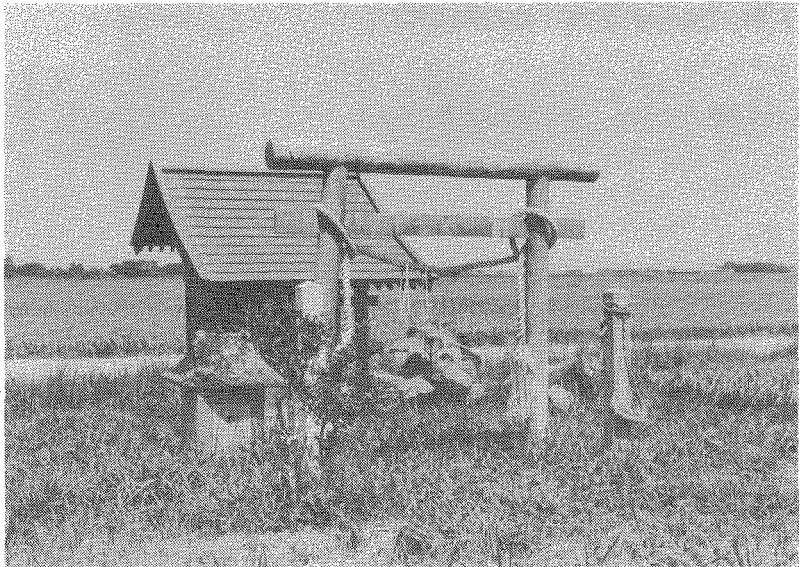
楠原佑介他編著の『古代地名語源辞典』(東京堂)のたま(多摩・多方)には、東京を流れる多摩川について、その語源を述べている。それによると「①『和名抄』の訓注に太婆とあるように、峠を意味するタバ・タワに由来する説、②聖なる御靈のタマという意味の二説になる」と記載し、②について「多摩川は本来、その源流の名に由来する丹波川であったろうが、同時に武藏国の中南部を貫流する聖なる川であるから御靈を表わすタマ川に転訛」したと、地名二元論を唱えている。

多摩川の語源がこの二説であることには、いささか不満はあるが、タマ川に聖なる御靈が宿る点では、同書でも記載する田万川(山口県田万川町)にむしろ妥当ではあるまい。現場に脚を入れ丹念にタマの足跡をたずね探索すると、そんな靈魂のタマを大地に根づかせ、清水にさしこませて流伝する古里も少なくない。なかには附会説であったり、諸説を複合させた場合もある。

長門国の田万川は二説をもって、今日に伝言する。田万川町の郷土史家中野清巳氏によれば、田万川河口の漁村、湊集落では古代カキから太玉の美しい真珠が5玉あらわれ、それにたましいが宿っていると信じ、里人たちは採取した川を玉川と崇め、後に多磨川、田万川に改めたという。中野氏が語るこの伝説を裏付けるかのように、日本海を望む河口丘陵端の八坂瓊之曲玉を祀る八幡の古社が、風雪に耐え川と古里の関係を知らせる。ただこの川にも他説があって、稲穂で敷きつめる田圃が川筋に万とある語意もひそむようだ。

水田の拡がる意味でも、靈魂のたまでとられた野面が山形県鶴岡市郊外、中清水の小字に玉作でのこる。浄土真宗隆安寺の住職板垣頤栄氏によれば、玉作には人家はなく、清水田圃といっていた水田で、土壤が良いことから良質米が作られたという。庄内平野そのものが良米を産すなかでも、とくに清水田圃の米は酒井藩の御用米で最良の米であった。玉作の諏訪大明神は60年前、盛土した岡に古木が覆っていたというが、今は区画整理によって、田横にひっそりとたたずむ。良米が得られるのも、この大明神のおかげ。そこで村びとたちが「良米が作れる所」と崇め、玉作の小名をのこしたというのだ。大明神の一圃で米作りに勢を出す、下小中の佐藤不二雄氏も、古の玉作集団の居住跡ではないという。

神社名で玉来というのが、九州は大分県天瀬町五馬市に鎮座する。現在の社殿は宝永2年に建立したが、社の縁起によると景行天皇の時代にまで溯るというから古社である。境内から東方500mに清森という場所に玉来の塚がある、同じく西方500mにも黒土盛という場所にやはり玉来があって、その中間の



鶴岡市中清水の玉作



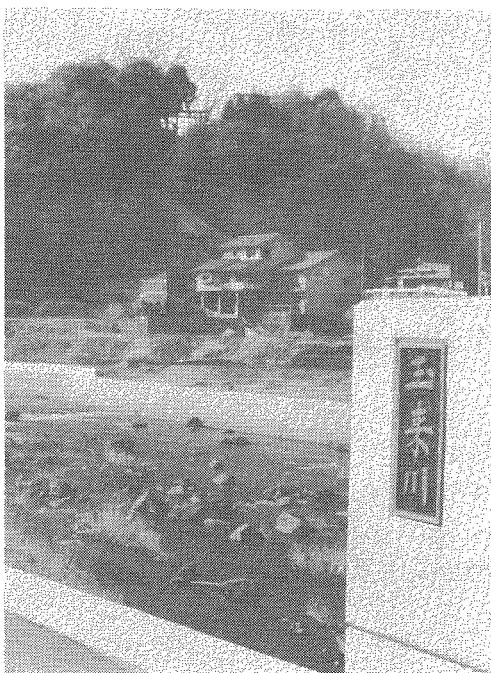
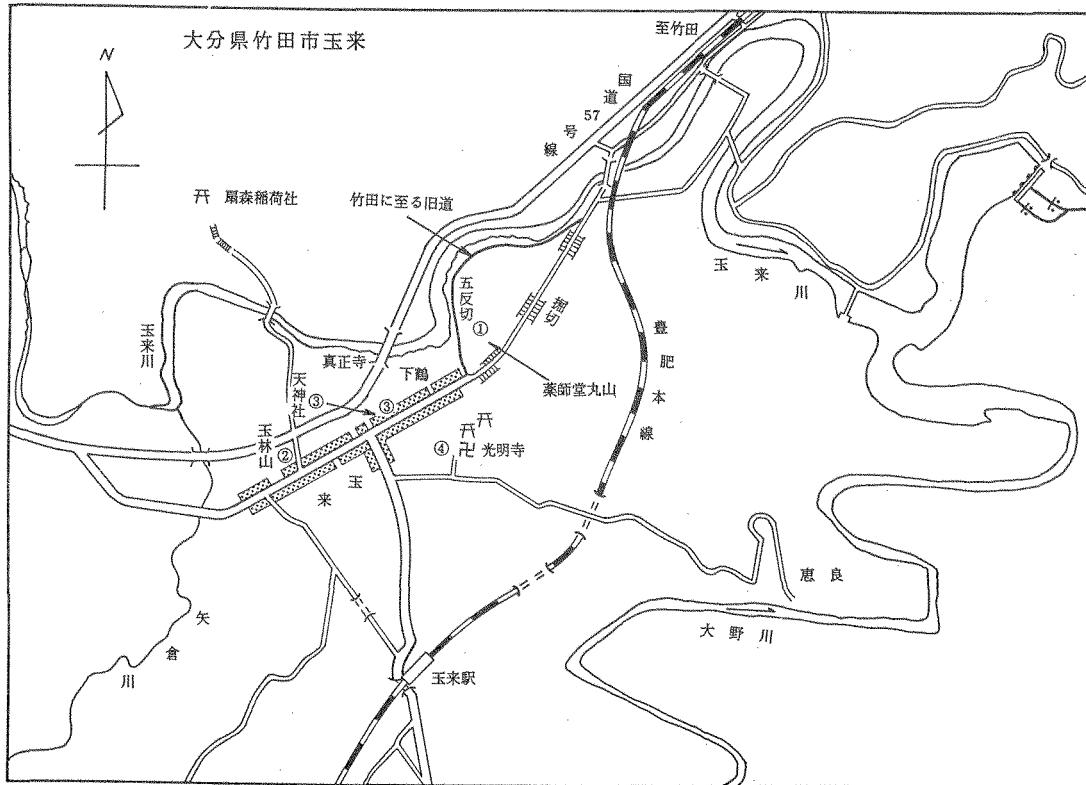
大分県天瀬町五馬市の玉来神社参道（左は山伏の墓）

地に社を設けて合祀したという。古社前の古道は英彦山の山伏たちの修業の道でもあったようで、鳥居のかたわらには苔むした山伏の墓もある。里の古老湯浅三男氏の語りのなかでは、どうも山伏と大日如来との関係にその起源がある。

それは大分県竹田市玉来川の河畔、玉来の古里にも同じような経緯がひそむ。民俗学者柳田国男は狩猟民が集まりたまる意味だとするが、郷土史家久保巖氏によると猫原という野良猫の集まる場所があつて、里人に悪さをすることから、4個の玉石を里の四方にうずめたからといふ。玉洗の小名も里中にあったともいう。

この猫は五馬市の玉来と同様に山伏たちの記録も残されているから、後の附会ではながろうか。どちらにしても、一の玉は丸山の薬師堂、二の玉は玉林山の祠、三の玉が天神社、そして四の玉は現在不詳（かつて塚あり）であるが、靈魂の宿るたまが存在したことは確かだ。

南会津の氷玉川にしても、谷口下の古里福永に鎮座する雷社や藤巻神社に由来するというし、庄内平野の羽黒町には玉川遺跡で名高い玉川の里があって、玉川寺（旧玉泉寺）の古寺にちなむという。



玉来川と扇森稻荷神社

ただ靈魂は玉そのものにも宿っており、なかでも伊勢の鳴玉や薩摩の竜の玉が名高い。伊勢の鳴玉は掌中で少し動かせば、大いに鳴響いて動くという。また竜の玉は鶏卵ほどの玉で手に握ると、いかなる寒中といえども自然に暖気を感じる珍石という。この暖石、名園の飛石などに用いると、積雪をみない名石である。唐土の人の温氣を得ると、自然と動く  
緬鉈（中国雲南省産）のように名玉で、他国人に献上するような珍石である。

いずれにしても、古社寺や清泉、珍石に宿る靈魂のたまが、土地の履歴となって「玉」を縁どる。

清泉でも、玉簾の滝という名瀑が全国にいくつある。すだれをかけたような、玉しづきをあげる清冷な瀑布には水霊が宿り、行者のみぞぎの場であり、水中に靈魂を込めておる。玉水をすだれにしたような、無数の細流になって落ちるさまは水の靈力に

よって、それぞれの土地で名水を誕生させたことを物語っている。水の神に感謝でき、仏の聖水を供えるような清水の湧く土地に、お玉ヶ池、玉の井、涌玉、玉泉、玉川などが存在するように、玉簾も靈水であり清冷である。それ

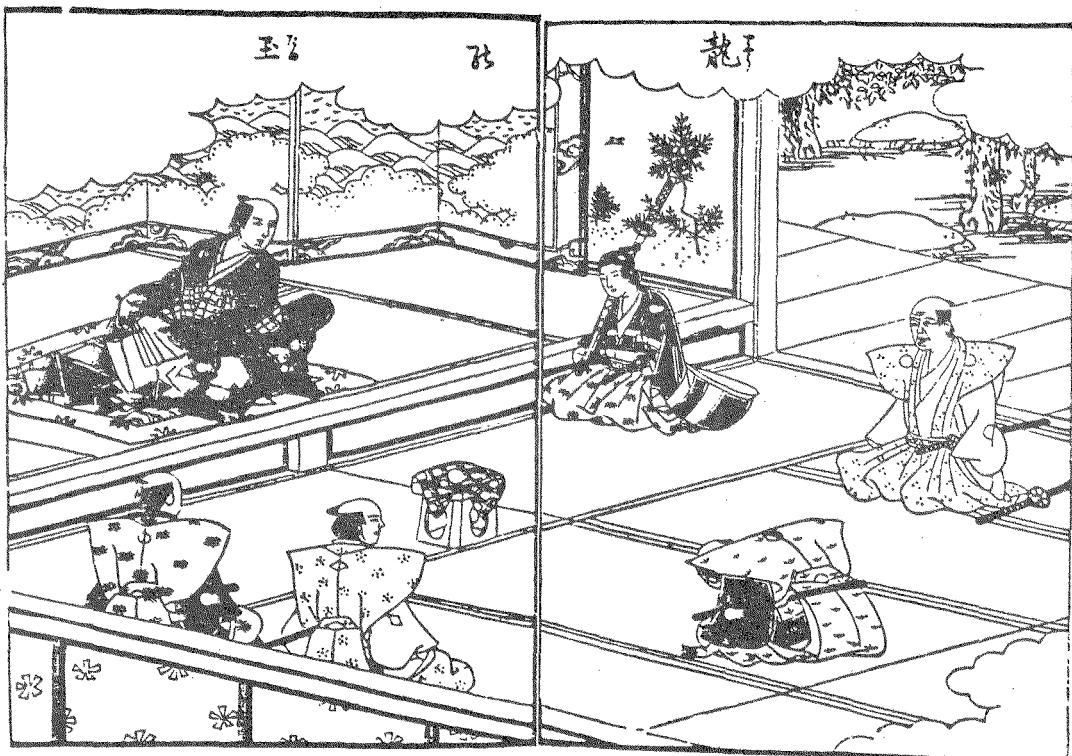
を神仏の御利益に結びつけ、機業の布晒や釀造など業の地にも釀成する。

玉簾の滝は神奈川県箱根町と茨城県日立市が名高い。旧東海道筋、箱根湯本の和風旅館の老舗天成園が須雲川左岸にある。宿の前庭に飛煙の滝と玉簾の滝が、

なかよく玉しぶきを



竹田市玉来の玉林山（二の玉）



竜の玉図

「西遊記」続編による

あげながら落ちる。

湯坂山南側の中腹から涌く玉水は熔岩礫層からの伏流で、不老長寿の美味な靈水と伝えている。滝際の急な石段を登りつめると、水神を祀る玉簾神社が鎮座し、玉すだれの名瀑をみすえている。

紅葉せし木の間の

滝の玉簾

落つる錦を

着てこそまされ

と水戸徳川家九代斉昭が詠んだ日立市の玉簾の滝も、凍てる常陸谷奥に玉散るすだれを垂らすような滝である。水戸光圀が建てた瀑布山玉簾寺（玉簾観音）の裏手にあって、光圀が玉水に觀世音菩薩の靈を感じたという、やはり名瀑である。

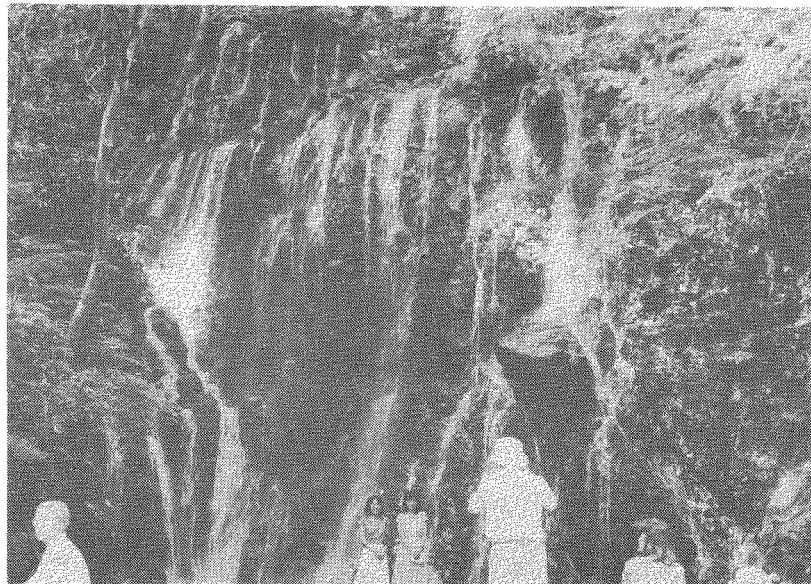
清泉な滝や流れは里人たちが靈威を用意して、昔時から水神の伝説やその経緯をひろめていくなかに、聖なる水、靈魂の宿る水としてのたまがひそむようだ。

玉水を清泉でとらえる思想は国域の深くまで、普遍の網かけがおこなえるが、なかには玉水を毒水でとらえることもある。橋南鎔の『西遊記』続編卷之四「肥後の毒水」に次のように記されている。

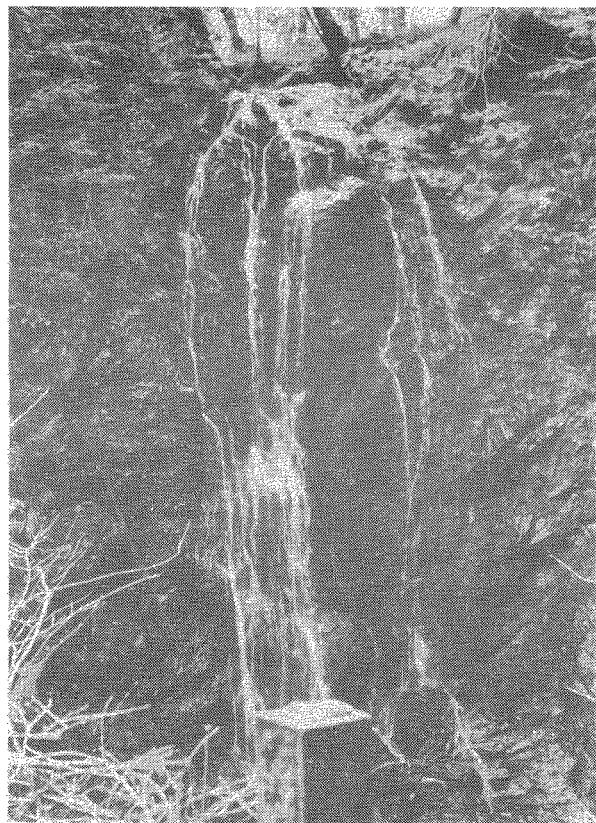
おぐに  
尾國（熊本県小国町）の近きかたわ

らに毒水あり。少さき谷川の流れなり。

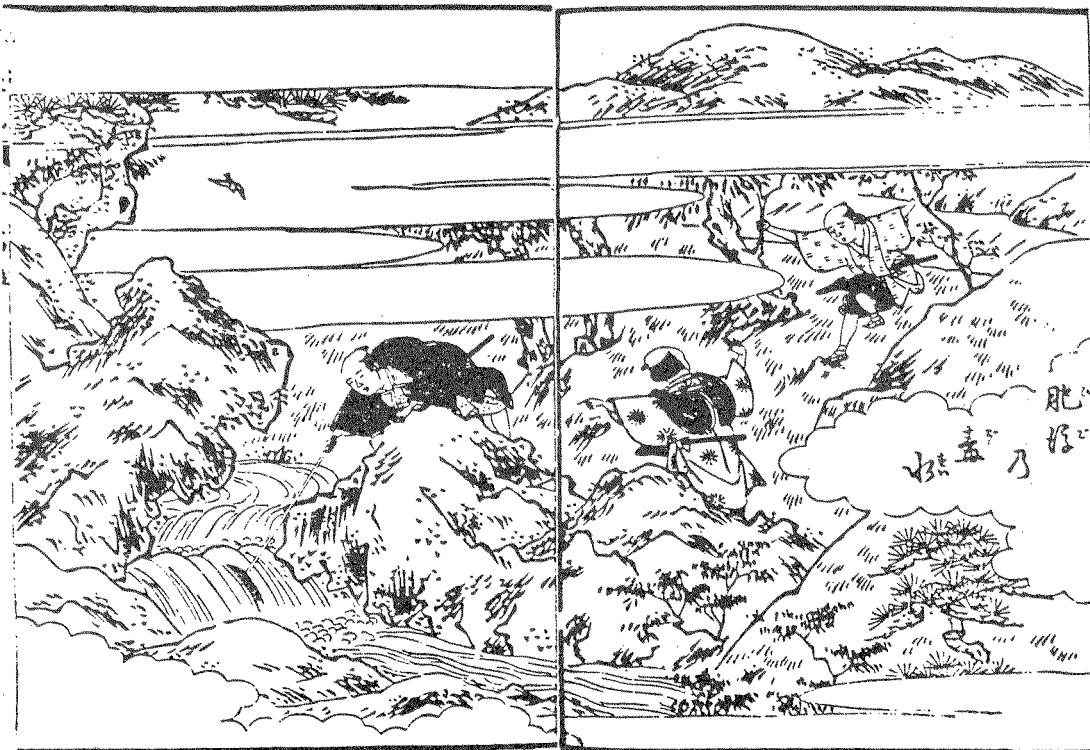
諸の禽獸此流れを飲めば即死す。鳥獸



箱根湯本玉簾の滝（天成園）

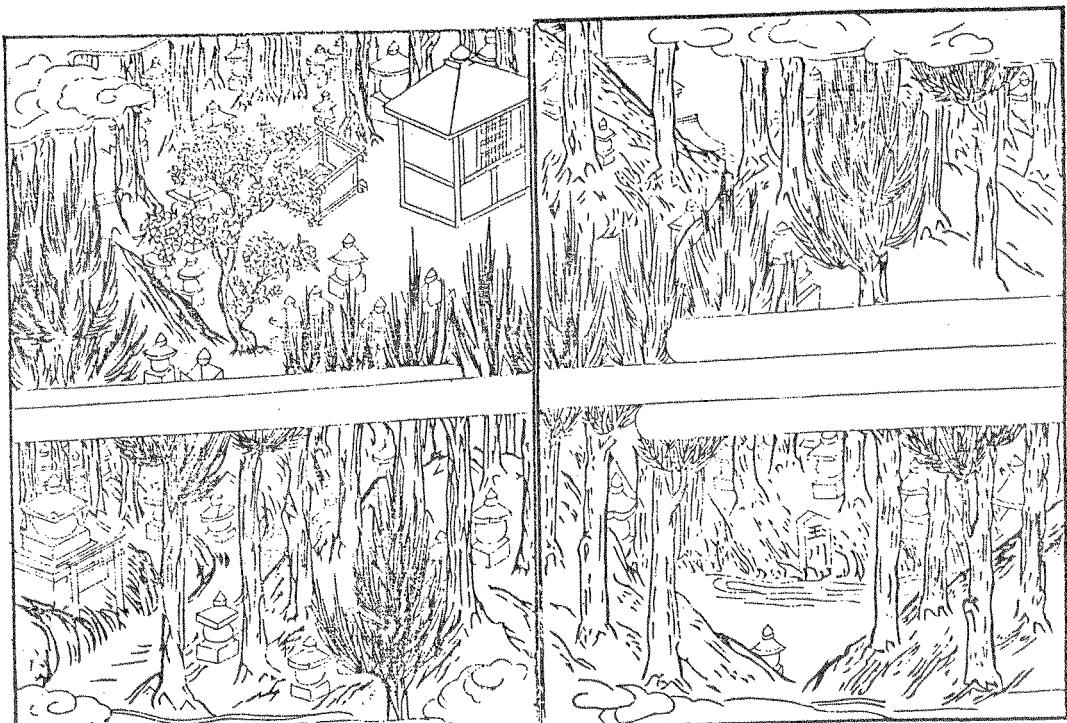


玉簾の滝（日立市）



肥後の毒水の図

「西遊記」続編による



中の橋と薬井、その近くを流れる玉川

(野山名盡集)

の枯骨数多く此傍に有りとぞ。然るに人には会て毒せず。此ながれの下に村里も有りて、人皆汲みて用うれども、終に毒にあたれる者なし。犬もまた死せずとぞ。都て常に塩氣のものを喰うものには、此水の毒あたらず。……那須野の殺生石などは殊に名高きに、斯の如く世に顯わると顯われざるとの幸不幸は有りけり。高野山の玉川の水は世に毒水といえども、これは実の毒水にてはなきという。この記録の、高野山の玉川とは六玉川のひとつ。古歌に詠まれた玉川は名誉でありながら、諸書では祖先の口碑を忠実に守って毒水だというが、これは後人の附会とも考えられる。『西遊記』と同じく『雨月物語』卷三仏法僧には

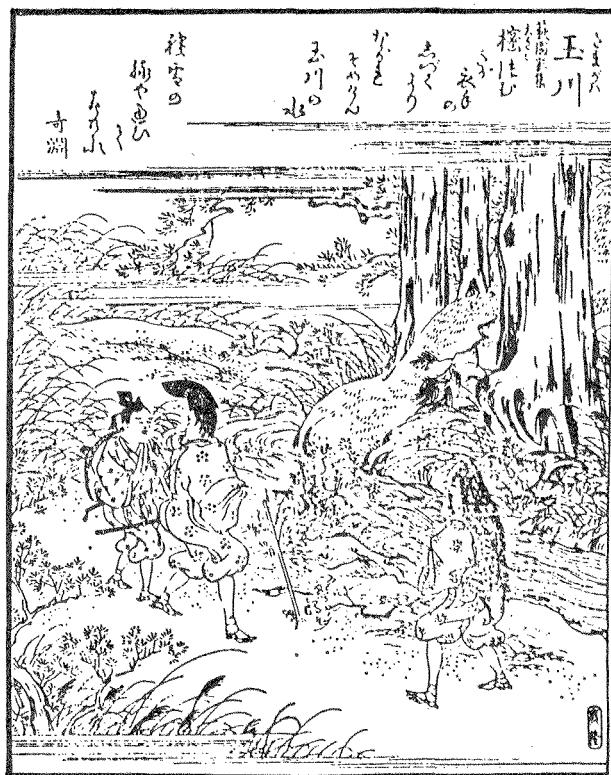
玉河てふ川は国々にありて、いづれをよめる歌も其の流のきよきを譽しなるを思へば、ここの玉川も毒ある流にはあらで、歌の意も、かばかり名に負河の此山にあるを、ここに詣づる人は忘るるも、流れの清きに愛て手に掬ひつらんとよませ玉ふにやあらんを、後人の毒ありといふ狂言より、此端詞はつくりなせしものかとも思はるるなり。又深く疑ふときには、此歌の調今之京の初の口風にもあらず。

たまかづら たれ たまぎぬ  
おほよそ此國の古語に玉綾、玉簾、珠衣の類は、形をほめ清きを賞する語なるから、清水をも玉水、玉の井、玉河ともほむるなり。毒ある流れをなど玉てふ語は冠らしめん。強に仏をたふとむ人の、歌の意に細妙からぬは、これほどの訛は幾らをもしいづるなり。

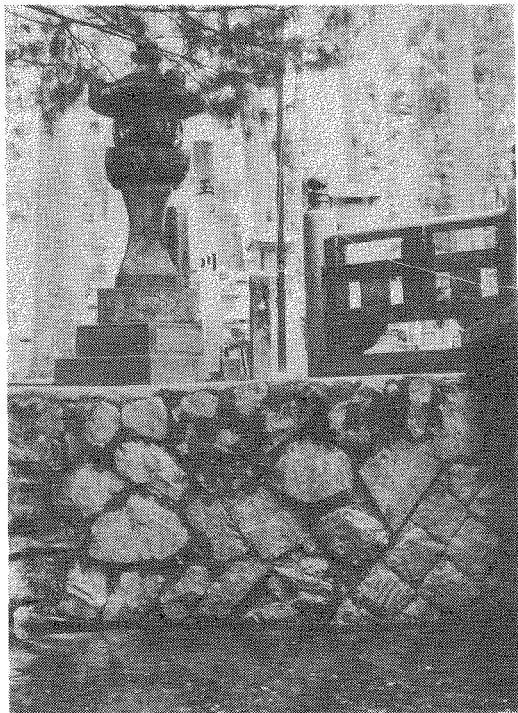
と毒水であれば、なんで玉川という誉めたたえる語を、その流れに容れようか。仏や歌に通じていない人にとっては、これぐらいの誤解があるのも当然だというのだ。しかし『大和本草』卷之三の砒石には、高野の玉川に「其水上ニ砒石アルカ」と記している。ただ砒石も磐石も毒水であるが、少量であれば薬用になりうることが『本草綱目譯義』卷之十にも記録されている。

この毒石は温泉、河川、採鉱地にも認証できるようで、全国に散見する玉川にも、そうした水面が玉水となってひそむ。ちなみに、この石は飲用というよりも外科に多く用い、諸国においては鼠コロシとか、ハイコロシとも郷土語でいう。

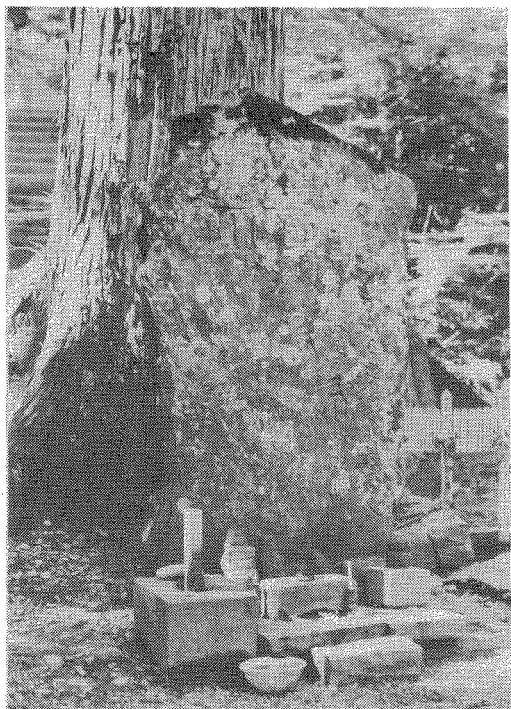
ところで高野の玉川は奥ノ院の靈域、弘法大師御廟前、御廟橋下を流れる靈水



高野の玉川 (紀伊国名所図会)



高野山玉川



天保玉川歌碑

である。聖木塔婆を書き、水向地蔵に供え玉川の靈水を塔婆に注ぐと先祖の供養になるという玉川は、奥ノ院をうるおす清流である。御廟橋のたもと、通称「天保玉川歌碑」といわれる苔むした碑が建っている。

わすれても汲やしつらむ旅人の

高野のおくの玉川のミつ

嘉永元年(1848)建立のこの歌碑を溯る、慶長16年(1611)に建てられた古碑は、同じ奥ノ院でも手前の、一の橋を渡り一の坂左奥、羽後佐竹藩墓所横に通称「旧玉川歌碑」と呼ばれること。この旧歌碑にも

忘てもくミやしつらん旅人の

高のゝおくの玉川の水

の碑文で記されている。もちろん弘法大師作としているが、これとて後人の付会であって大師の歌でないと『紀伊続風土記』に記している。どちらにしても、玉川歌碑が靈域に2つ、それぞれ別位置に建てられた点について、山内潤三氏が「高野山詩歌句碑攷」(高野山大学論叢第5巻)で論じておられる。

高野山大学助教授日野西真定氏は昔時の玉川を、「旧玉川歌碑」の建つ位置に流れていたことを古図で確認され、玉川の水が「何らかの信仰的関連があったと考えられる。或はみそぎの場であったか。」と、「高野山の山岳伝承」(修驗道の伝承文化)のなかで述べている。

更に奥ノ院玉川の水源は慶長年間の古図で毒池にしているが、もし水源がこの古池だとしても、地理的にみて玉川の水源よりも、山地裏側に古池が存在することになり疑わしい。このことは玉川の清水が、タブー視されたためと日野西氏が語る。

### [参考文献]

- 防長風土記出版委員会編 『防長風土記』 青雲社 昭和32年  
石上堅著 『水の伝説』 雪華社 昭和39年  
『紀伊続風土記』 高野山之部 卷之八  
『野山名鑑集』 卷第三  
橋南鎧 『東西遊記 2』 平凡社(東洋文庫 249) 昭和49年  
貝原益軒撰 白井光太郎考証 『大和本草』 有明書房 昭和53年  
楠原佑介他編著 『古代地名語源辞典』 東京堂 昭和56年  
青木正次全訳注 『雨月物語(上)』 講談社 昭和56年

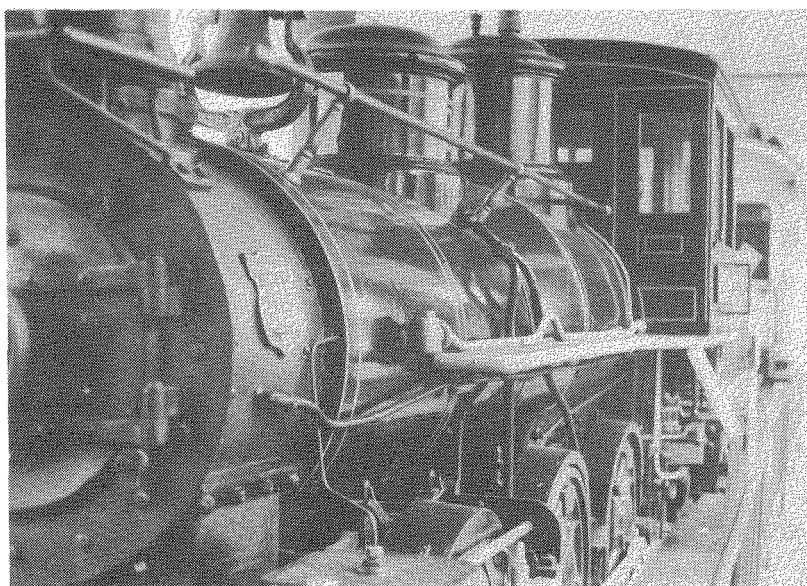
### (5) 開拓の野に根づく玉川

明治2年松浦武四郎が蝦夷を北海道と改名してから、和人の歴跡が北方の大地の奥深くにまでこった。大正12年関東大震災の罹災者を迎える前の、明治2年から大正11年までの移民はおよそ56万戸、204万人であった。勿論内地からの移民者は全国からの移住で、都府県からもしくは市町村単位の集団が粗野な大地に入植している。

ただ蝦夷と呼ばれた時代、内地との結びつきが日本海文化の北漸、北前船の影響を強く受けていただけに、出羽や北陸からの移民者が明治になっても多い。北海道の開拓地名にしても、移民者の故郷の名を、そのまま持込んだ場合も少なくない。県名、旧国名、郡市町村名から山川名にいたる、故国を思うかっこうの土地柄に仕立て  
る意味を含め、開拓  
の地を住める舞台に  
整えてきた。

内地の地名を借り  
て、里を拓いたとこ  
ろには主に次のよう  
な土地に造る。

津軽団体(黒松  
内町)、青森団体  
(中札内村ほか)、  
南部団体(士別市  
ほか)、岩手団体  
(占冠村ほか)、



北海道開拓鉄道弁慶号 (交通博物館)

明治 19 年から大正 11 年  
間の主要北海道移民政県

府 県 名	戸 数 (戸)
青 森	49,800
新 潟	49,573
秋 田	44,973
石 川	41,606
富 山	41,306
宮 城	39,452
岩 手	30,453
山 形	29,332
福 井	24,294

宮城団体(当別町ほか)、白石村(札幌市)、伊達町(伊達市)、越後村(江別市)、越中開墾(岩見沢市)、磯波(名寄市ほか)、石川団体(八雲町ほか)、福井団体(上富良野町ほか)、越前開墾(栗沢町)、群馬団体(大湧村ほか)、信濃開墾(札幌市)、岐阜開墾(栗沢町ほか)、山梨(農浦町)、愛知団体(大湧村)、京都団体(陸別町)、新十津川村(新十津川町)、吉野団体(名寄市ほか)、三重(南幌町)、香川(苦前町ほか)、東予(沼田町)、広島村(広島町)、鳥取村(釧路市)、山口村(札幌市)、島根団体(更別市)、佐賀団体(和寒町)、日向団体(士別市)  
蝦夷から北海道へ改名されていく経緯に加えて、このような内地の地名を多く採用したことが、北海道の歴史や文化を特色づけてもきた。自然を踏みしめて、暮らすことを

要求される北海道にも、こうした開拓者たちがもつ故国の地名、更には知識と教養から誕生するが、そこにも玉川の川面があった。

内陸に拓いた旭川の街から北へ分け入ると、天塩川の上流山ふところに、美深町玉川がある。里名と川名に採用されているが、それは昭和になってからのこと。それも大阪から移住した彫刻家高橋始次郎が命名したという。彼の真意はわからないが、玉川小学校の校歌にのこる詩から、ウルベン川が清泉であったことから改名されたという。

これは共和町赤玉川にしても、加賀金沢からの移民者たちの拓いた前田の里に残るし、泊村茅沼の里中を流れる玉川も、秋田からの鉱山技術者が名付けた川名だという。更に北檜山町玉川も同じこと、会津出身の識見深い丹羽五郎氏が近江八景の玉川(野路の玉川)に似せて、川名と里名(俗称)に採用している。風流な里に仕立てる願いを、彼は玉川に託したという。

地名の多くを開拓者が持込んだのと同様に、4カ所のこの玉川も内地からの導入で、いずれも開拓当初の水面が、とくに清泉の流れであった。

ただ開拓地にのこる玉川は北海道だけではない。中古においては京畿からみて、東国の粗野な大地にも玉川を付す思想はあった。京畿の政治が東夷へ漸移する政治の道に、西国で育まれた仏教が仏の道ともなって波濤する、当時の主力思想のなかに組込まれている。派遣された貴人と、粗い風土が玉川で落合って、無情できつい大地に光をあてながら、東国では語調を強めている。

古歌でのこる野田の玉川や調布の玉川など、清泉の故地が小径をつけて、それを知らせてくれる。

[ 参考文献 ]

丹羽五郎著 『我が丹羽村の経営』 昭和 2 年  
泊村編 『泊村史』 昭和 42 年  
美深町史編さん事務局編 『美深町史』 昭和 46 年  
共和町史編さん委員会 『共和町史』 昭和 47 年  
美深町郷土研究会 『ピウカ』 研究集録 1・2 昭和 58 ~ 60 年  
茅沼炭鉱史編集委員会 『茅沼炭鉱史』 昭和 57 年  
稚内文庫編集委員会 『北への路』 稚内文庫第 4 卷 昭和 58 年

#### (6) 丹生にひそむ玉

古里名に借りた玉の溯源には靈魂のたま、清泉の玉水、宝石としての玉石、貴重で美しい事物に冠する玉など、多岐にわたって玉やタマを当てた先人の思考の跡が承認できるが、もうひとつ、丹生との関連もひそむようである。丹生（にう）すなわち水銀である。

史学や地理学、更には地域学の立場をとる理学からも、鉱物を表舞台にだし論考する場合には金、銀、銅、鉄などが主で、それらの処理に不可欠である丹生については忘れられた感がある。伊勢白粉のような塗料に、西陣織など機で織られた布の染料にも、また古くから中国にあった处方を用いて製す富山の反魂丹など薬用にまで含有される。

更に珊瑚を枝玉にして緒メにするが、この玉職人たちも丹生を使用するようで、三宅也来著『萬金産業袋』（享保 17 年）の巻之三万玉類珊瑚には「本玉の瑕もの、あるひは小粒にてさしたる直にもならぬなとを打くだき、其外

玉のやすり粉等を末にし、餅糊と松脂とにて丸し玉形を作りて、右の本玉の瑕とす。……此ころは一向に寒水石を粉にしいくども水飛して後、色よき程に辰砂（水銀）を和し、これに又もちのり松脂とて丸し玉を作る。」と水銀を用いて緒玉を加工することを載



丹生大師 （三重県勢和村丹生）

せている。

このほかにも、『本朝食鑑』水火土部温湯には有毒ではあるが、辰砂が温泉にも含有されていて、治療に効があることを、また『本草綱目譯義』の丹砂や『大和本草』の金玉土石にも、毒性について記している。

先祖から継承する暮らしの基本態勢のなかに、そんな多方面で相当多く使用されてきた丹生を記録している。この丹生を採掘する古里にも、玉の名があった。

丹生については松田寿男氏の『丹生の研究』にくわしい。本書によると、栃木県塩谷郡塩谷町熊ノ本字玉生と富山県婦負郡八尾町大玉生、土玉生の里はともに古からの朱産地であり、壬生(にう)と解すべきであると記載している。すると丹生と深い関係をもつ奈良県宇陀郡菟田野町宇太町古市場の玉岡、山形県尾花沢市玉野(古は玉野原)に玉の語義にも丹生がひそむのか。それについて松田氏は記述していない。

そもそも昔時から生活に必要不可欠の資源であったから、貴重の意味が丹生にも込められ、それを玉でとらえたとも思考できるが、この点については探索する必要がある。それというのも、玉生の地名のなかでも、例えば愛媛県伊予市上野の行道山の中腹、瀬戸内を望む岡に、玉生林という松林がある。

この岡は神功皇后が三韓を征した帰路、天神の託宣によって久斯美玉を老松の下に納め、後に上野の清泉を集めて落ちる大井手川から里人が玉串を流し、その流れついで伊予郡松前町西古泉に神靈を移し社殿を造営したという。それが松前町西古泉玉垣に鎮座する玉生八幡大神社であるが、この玉生は丹生を伝言していない。

しかし伊予国府のおかれた今治市に椿森神社があって、山里には玉川の流れがある。織田ヶ浜にほど近い、喜田村の江口に鎮座する椿森社は、合祀された朱坂神社の方が古社だという。朱砂の守護神、朱盛神である。蒼社川の河口に位置する江口は上流の玉川、鈍川の郷、鴨部郷(現玉川町)から移送する朱砂を集めする要地であった。この鈍川(丹生川保)は伊勢神宮の御厨である。領地を伊予国玉川の御厨とも呼ばれたことが『神鳳抄』に記載されている。現に別所の真言宗仙遊寺奥からは丹生が採取されたし、古代丹生族につぐ水銀採掘の吉野族が祖神にしたイカリヒメ(井光姫)と関係するのか、付近に五十嵐の里名が残るし、蒼社川を見下す丘陵端には伊加奈志神社も鎮座する。

ただ昔時から記録する丹生をひそませた朱坂神社、伊加奈志神社、鈍川、朱砂採鉱地と玉川の関係を認証させるまでに至らないが、用途のひろい丹生を珍重した点を考察すると、玉と無関係ではない。

更に真言密教の紀伊高野山は水銀鉱床が分布していて、その靈域にも玉川がある。大門から弘法大師御廟にいたる靈域を、松田寿男氏はすべて水銀鉱床であることを科学的に裏付けて、「水銀に関する深い知識は、空海がシナから伝えたものと見るべきであって、それが、高野山の經營に、あるいは宗勢の拡張に、ある程度の経済的な役割を演じた」と述べている。空海がわざわざ水銀産地に伽藍を建立したことは、水銀が宗教上必要不可欠の資源とみたからである。

ただ、用途の広い水銀を飲用にすれば有毒となる。そのことが高野の玉川を、毒水で詠んだのでは。少量であれば薬用になりうるが、高品位の水銀が検出される奥ノ院を、玉川はいまも靈水で湧出させる。

おどがわ  
靈水を集める御殿川(けがれをとる川)

を玉川と呼称し、真言修験の靈域と玉川、それに丹生をひそませる。それは山岳修験と丹生、そこに玉川や玉の結びつく諸国が散見できるのと同じで、問題は深い。いずれにしても、丹生と玉の両者を同時につかみとることは出来ないまでも、玉(タマ)を整理する手順に、丹生の力を借りる必要がある。

[参考文献]

松田寿男著 『丹生の研究』 早稲

田大学出版部 昭和45年

三宅也来著 『萬金産業袋』 八坂

書房(生活の古典双書5) 昭  
和48年

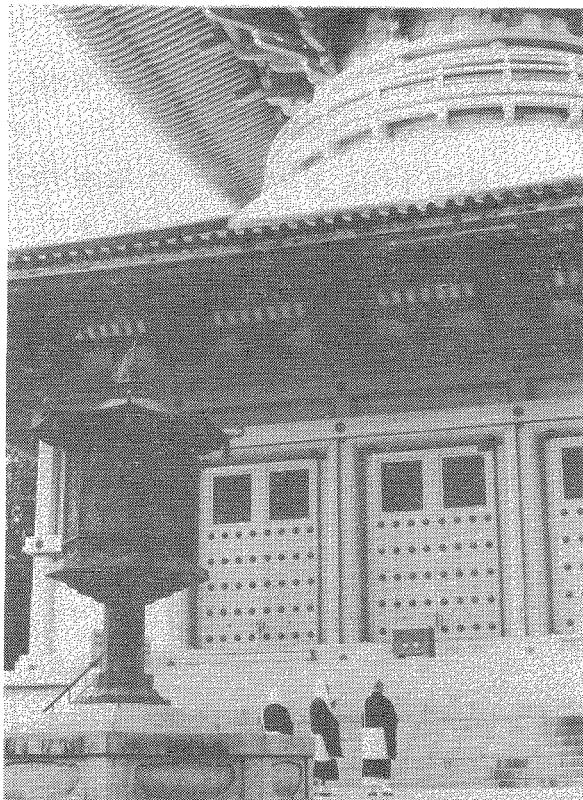
島田勇雄訳注 『本朝食鑑』(1)

平凡社(東洋文庫296) 昭  
和51年

貝原益軒撰 白井光太郎考証 『大和本草』 有明書房 昭和53年

玉川町誌編纂委員会 『玉川町誌』 昭和59年

『紀伊国名所図会』 角川書店(日本名所風俗図会12) 昭和60年



高野山大塔

(7) 古里の名にかりた玉

靈魂のたまや玉に借りた玉川(タマ川)が散見できるなか、原点を探るてだてが判然としないで朽ちかけたものも多いが、大地に奥深く印された流れや場所もまだまだある。

いつの時代でも地域風土の呼吸をくみ容れるかまえが、土に生きる基本姿勢であっても、時によって外圧や古里の創意で土地觀は異なる。この野での行脚のなかで育まれた土地觀と作法は、その時代の価値や思想を垣間見せてくれるが、玉川にしてみればそれが古習の玉川の伝言に加えて、附会するよう新たな玉の履歴を付け、互に触れ合って後世へ流伝させる結果になる。

こうした複数の玉思想が土地にひそむなかで、あたかもグランプリを勝ちえたかのような論法だけが、玉の溯源であるという立場では、眞の玉を見誤るおそれがある。ひとつの論理のみで論究するのではなく、

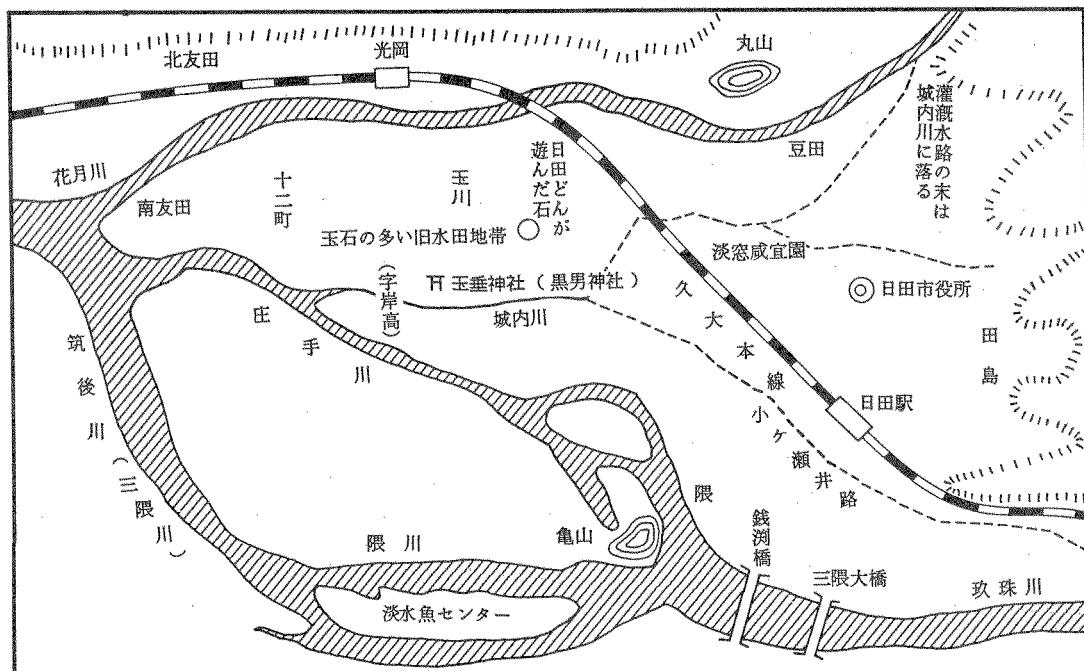
各時代の土地觀を地域概念のうえにのせる立場で再考する必要がある。

してみると六玉川の故地や玉作、それに靈魂のたまなどの玉は、それぞれの論理で追求したのでは偏向する解法にもなりかねない。いくつかの玉の語意を詰めこんで、玉の古里は顔立ちをきめているから、よけい構築された舞台にも無数の玉がひそみ出会う。どれが先でどれが後の語意であるというような、時代考証も必要であろうが、明らかにこうした系譜が古里の玉や玉川の情報となって宿る。

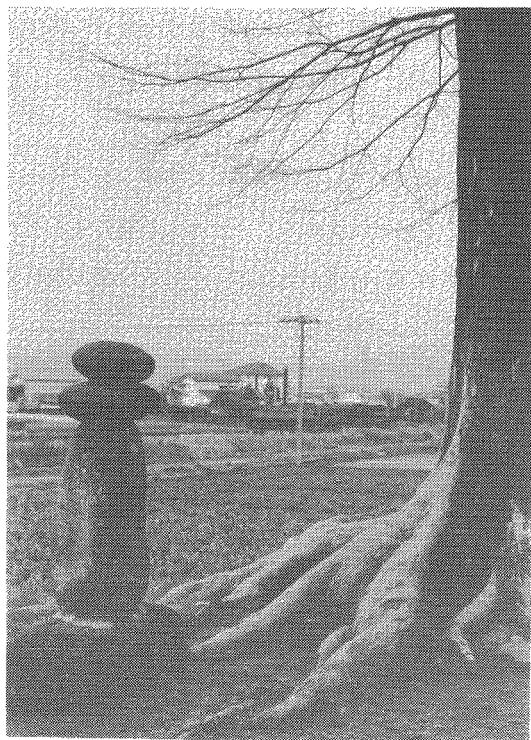
江戸末期の儒学者廣瀬淡窓の生地、大分県の日田の山里に玉川がある。町名でのこる玉川はあっても、流れの玉川はない。古老深見正氏によれば、十二町の岸高に鎮座する氏神玉垂神社の玉の文字を借りて、昭和 15 年玉川町が誕生したという。玉垂社は明治 3 年からの社名で、それ以前は黒男殿社と呼ばれる村社で勿論玉川の痕跡はない。廣瀬淡窓が境内で詩会を催して「濠梁西ニ去る黒男ノ祠」（天保 10 年）と詠んだ古社に玉石があったからとも伝える。

玉川町は代官所から庄屋まで、距離にして十二町あったが、筑後川が運ぶ円礫で敷きつめられた川面にあって玉石も多い。この玉石を、日田どんが手玉にとって遊んだという祭神の「玉だれ石」もあったからともいう。現に手玉にとった玉石のひとつが、町内の水田の中に残っている。河川が創作した玉石は玉垂社の石垣にも用いられていて、かつて粗い河原であったことを物語っている。

こうした諸説で飾られた例に、三重県松阪市茅原町の字名、玉泉がある。茅原広江公民館長鈴木和夫氏によると、茅原には伊勢神宮の屋根をふく良質の茅が自生していて、刈り取った茅を荷車で櫛田川の津留の渡津まで送り、そこから川船で伊勢へ移送したという。津留の渡しには伊勢赤福と同じ店構えの茶屋と、



大分県日田市



玉垂神社 (日田市玉川)



玉泉 (三重県松阪市茅原)



於玉が池の古事 (江戸名所図会)



物資輸送も請負う豪商鈴木家があって、茅原から出る茅と木炭輸送にたずさわった。茶屋は鮓料理の店になって、「計り岩」を望む河畔で今も健在。茅原産の炭は伊勢神宮で使用する良質の炭だっただけに、里びとはこれを玉炭（最高のスミ）と呼んだことに由来するという。

この玉泉を老人会長の吉川万吉氏に聞くと、昭和10年まで流伝していたタマズミ（玉炭）とタマイズミ（玉泉）を合成させ玉泉にしたらしいというのだ。だから今も古老は玉泉を、タマズミと発音する。タマイズミは、朽ちかけた村社愛宕神社前（里人は宮下）に靈魂の宿る清泉があって、それを玉泉と指呼したという。地籍図をみると、宮下を玉泉一番地で記していた。

また伝説の玉が土地名に採用された例に、長野県御代田町の飯玉、松本市のお玉ヶ池、香川県志度町玉の浦など各地に多い。飯玉とお玉ヶ池は湖底が竜宮に続く水脈があると伝えている。玉の浦の名にちなんで、志度には玉浦川が老舗もと屋建立の石槌山奉獻灯籠を河畔にそえ、街なかを流れ玉の浦に注ぐ。この浦には竜神に奪われた「玉取り」伝説がある。

ちなみに、講談でおなじみの江戸神田松枝町の「お玉が池」は水を舞台にした悲恋物語で、お玉の入水というよりも、たま水の威力を述べたてることが真意であろう。お玉が池には神奈川県箱根町にもある。閑所破りのお玉が処刑され、首を洗ったとも伝えるが、やはりお玉という旅芸人が入水し、その靈が宿る池だとも言い伝えている。

このように附会説であったり、また伝説だったりすることが、玉の原点を遠ざけ、その糸口さえつかめなくする。これも玉（たま）が多岐にわたり使用伝承されたことで、語意にまで影響を及ぼしていることを物語っている。今日の眼から玉を見ると、何となく平凡な玉のように見えても、この種の玉が誕生した時分も、果たして平凡だったかどうか疑問である。時の人びとだけに通用する、特殊な玉もあったのでは。そこではもう多元的立場が必要になってくる。

#### 〔参考文献〕

石上堅著 『水の伝説』 雪華社 昭和39年

吉田東伍著 『大日本地名辞書』 富山房 昭和44年増補版

廣瀬正雄編著 『廣瀬淡窓・旭莊・青邨・林外名詩選釈』 廣瀬八賢顕彰会発行 昭和45年

吉井貞俊著 『伊勢路志摩路』 中外書房 昭和52年

## (1) 調査事例

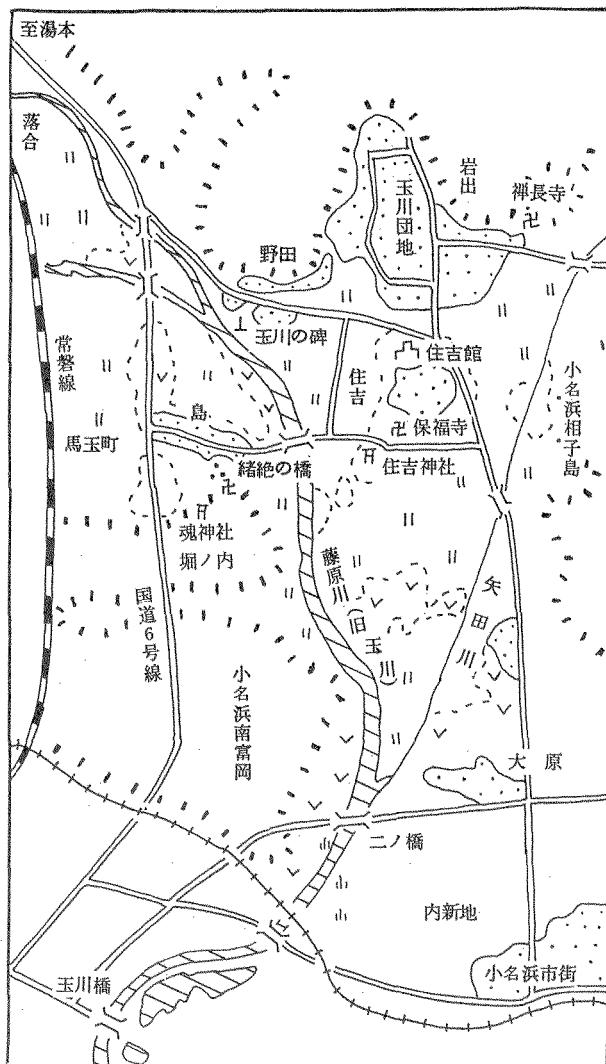
### いわき市野田の玉川

いわき市小名浜に玉川町と野田字玉川という歌名所の野面がある。玉川町については、近年の都市化の波によって、団地が造成された後の町名。土地に根づいた、昔時の玉川は野田玉川である。

漁港と化学工業の顔をもつ、良港小名浜港に注ぐ藤原川は、かつて奥州野田の玉川と呼ばれた清流で、風光明媚な川面であった。国道6号線から分かれて、小名浜市街に入る道路が藤原川を渡る玉川橋が、わずかに古を語りかけている。この橋のたもとから上流にかけて、河川は大きく蛇行するが、幕末の戊辰の合戦があった二ッ橋付近で、矢田の里から流れ出る矢田川と合流し、藤原川の本流との間に三角の野面を造っている。そこに小名浜住吉と野田の里がある。

玉川の村名は明治22年に、湯長谷領の南富岡、島（志摩）、大原の3村と、幕領の住吉、野田、金成、林城、相子島、岡小名、岩出の7村が合併し成立した村里で、近世まで、玉川村は存在していなかった。ただ、野田の小字をみると、八合、玉川、我鬼塚、寺作入、柳作、北坪、田中の7字名があって、そのひとつに玉川が存在する。

玉川村の新村名選定について、『磐城国菊多・磐前・磐城合併並組合町村調』（福島県歴史資料館蔵、明治21年）によれば、住吉に磐城判官の官趾があり、また延喜式内社の住吉神社があって、最も著名であるから、住吉村との意向であった、が他村民の反対もあって断念している。そこで各村を貫流する藤原川（旧玉川）は野田の里において、野田の玉川や緒絶の橋など、古今集の古歌にみえる著名の旧蹟によって玉川村と改称したこ



福島県いわき市玉川

とを記載している。

野田の田仲バス停留所から、畦路を藤原川の堤にでると、2本のシロ樹に彩られて「六玉川の一野田玉川旧蹟」と刻まれた仙台石の碑が河風にさらされるように、河畔にひっそりと建つ。昔時にかえったような、歌人の跡がしのべる。歌碑は昭和19年に、「野田玉川旧蹟保存会」が村里の語りを、後世に確実に残そうと平安の歌人、能因法師、順徳院、藤原俊成の歌を印したものである。

夕されば汐風みちてみちのくの

野田の玉川千鳥鳴くなり

能因法師

陸奥の野田の玉川見渡せば

汐風越して水る月かな

順徳院

来る人もなこそその闇の呼子鳥

こいて別るゝ野田の玉川

俊成郷

玉川べりの、いかにも時代を越えた風流の場所、遊里にふさわしい景をただよわせる堤に添える歌碑である。それは大阪高槻の三島の玉川にも似た、田園の里柄であった。

ただ、古にも歌碑があったようで、昭和4年の『石城郡町村史』の玉川村の項には「野田ノ玉川。みちのくの玉川ハ、此所ニキハマリヌ。先領主内藤氏、能因ガ歌ニ藤原道雅ノ歌ヲ引キ、玉川ヘ壱町七間、緒絶ノ橋ヘ十一町半ニ石碑ヲ建ラレ……中略……右ノ石碑ヲ田ノ中ヘ堀埋メタリ」と記している。

野田周辺の住吉や島なども古里で、文化の高い土地柄であったことを歴史が伝えている。野田の対岸、藤原川右岸には島（志摩）の里がある。島の里はずれ、玉川の下流に緒絶の橋が架かっていた。今はないと玉川とともに歌の名所であったと伝える。

後拾遺

みちのくの緒絶の

橋やこれならん

踏みみ踏まずみ

心まどはす

藤原道雅

続後撰

白玉の緒絶の

橋の名もつらく

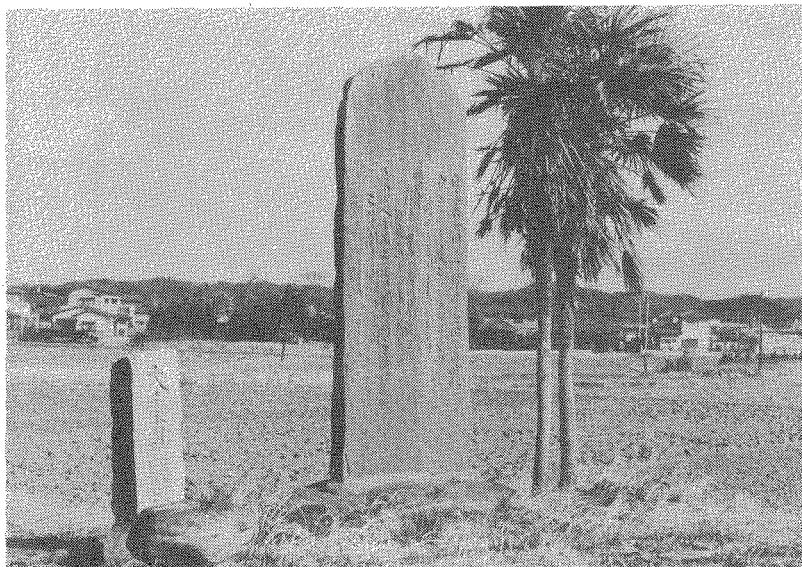
くだけて落つる

袖の涙に

中納言宣家

と古歌に残された名橋

であったという。『磐



野田玉川の歌碑

(福島県いわき市)

『城風土記』（寛文8年）には橋の縁起を「今橋なし、只柱礎あり、人もし此の橋を經營せば必ず死す、因て魂の絶心より此の名起れり」と伝言している。今も丘陵下の魂神社などが、歌人たちの集う土地の景をみせている。

更に野田の下流、住吉在のはずれ微高地には延喜式内の住吉神社が老松のなかに鎮座する。その北端には館山と称す住吉館のあった岡がある。この岡は将門の孫の、平政氏の居城趾で、岩城四郡を領有して磐城判官と称したところ。磐城判官政氏たち、岩城族のこの居城は野田の玉川に隣接していることから、またの名を玉川城とも呼んだ。安寿と厨子王伝説の語りもひそむ館趾である。

小名浜玉川町はかつて野田の内で、藤原川が造った自然堤防外の、水田と畑で彩られた、のどかな野であった。それが昭和40年代の宅地造成によって、玉川団地という街面に変貌した。この現代の面を取り除くと、昔時そのままの野田の顔が浮かびあがる。住吉の里も同じで、館山（住吉館）から住吉神社までの、かつての自然の河がもたらした微高の土地が、村の多くの戸数と人口をかかえる古里であった。明治21年の里別の戸数と人口をみても、住吉が戸数65戸、人口408人で近郷の中核である。それに接する野田は同じく戸数23戸、人口161人で藤原川左岸、河原端の清水の湧く荒田の里であった。

藤原川が運ぶ砂礫で埋めつくされた里の土質は、野良の勢には労を要したが、それで浄化される清い地下水は多くの歌人たちが歌を詠む里に、ふさわしい土地柄に仕立てた。井手の玉川や三島の玉川、それに野路の玉川にしても、水面と野面が地形からも同じであるように、野田の玉川もそうした自然の顔がのこる。

奥州への入口、勿来関をすぎ浜海道の路のりはきびしく、蝦夷という異郷の地で京畿を想う東歌も残されていることは、京で育った文官が東国に活るために点から線の開発へと発展させ、それでいて京畿とは地形風土の異なる領域の文化を高める指導のなかには、中央の遊里を模した場所さえ設定している。野田の玉川にしても、そうした文化未踏の磐城に西国の光をあて、新天地を密度の高い圏域に編んでいく過程のなかに組み込まれていた。東夷の異郷の土地で、野田の曠野を文人たちが井手や三島の玉川に似たてて、川面で遊ぶ里に仕立てたのか。小名浜入り江が住吉まで達していく



なごそ  
勿來 関

た昔時の土地は、京畿からは遠隔の、それでいて京を忍べる野面を歌人はもとめた。

明治の歴史地理学者吉田東伍によれば、奥州の古歌の名所、野田の玉川は宮城郡にもあり疑問があると記載している。又『石城郡誌』（大正十年）にも仙台と南部に、同様の玉川が存在することを記している。

磐城の夏井川下流域は、律令の時代から文化の中心であった。現在の平市街の東方は、磐城郡衙と考えられている根岸遺跡や、郡寺で水田のなかに残る塔跡を含めた一帯に、夏井廃寺跡がある。更に岩城国造建許呂命の墳墓で、かつて塚全体を老松が枝をひろげた「八方にらみの松」があったという甲塚古墳や、古墳には延喜式内の古社で、古木におおわれた大国魂神社などが夏井川に沿って丘陵端にのこる。

この政治・文化の跡から遠くない野に、野田の玉川がある。それも浜海道の古道が藤原川と交わる下流にそれた、河床の荒れがおさまる河畔に位置する。一般に古歌に残る玉川は古道のはずれで、しかも高い文化をほこる地域に近距離であることからも、磐城の玉川が例外ではないことを流伝しているように思える。まさに辺境の地、蝦夷への玄関に活きる、先人の語りがひそむ土地柄である。

ちなみに勿来は、5世紀のころは「菊多の剣」とよばれ、道奥三古関のひとつであった。菊は終焉の獻花のように、菊多もこの世の終わりで、大和文化圏の東端を意味した。勿来の関門は「夷人よ、来る勿れ」の意で、な來そ（来るな）といったという。夷人の南下を防ぎ、蝦夷を国家の枠に組み入れる軍の根拠地であったが、圏域の北漸によって、むしろそうした関門の役割よりも、平安朝以来語呂のよさから、歌枕で活き続けてきた。そのはずれ、沖積地に玉川の里はある。

#### 〔参考文献〕

『磐城国、菊多・磐前郡合併並組合町村調』 福島県歴史資料館蔵 明治21年

『石城郡誌』 歴史図書社 大正10年

諸根樟一著 『石城郡町村史』 歴史図書社 昭和4年

零石太郎著 『いわきの文学散歩』 昭和47年

『いわき市民 第九卷 近世資料』 いわき市 昭和47年

いわき市教育委員会 『いわき市都市計画区域内埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書（小名浜地区）』

昭和57年

#### 塩釜市野田の玉川

中央政府は律令国家の充実を図り、財政的により強固な体制を整えるため、辺境の地に強者たちを送り込み、開発の歴史を休みなく入れさせた。進撃な拡域的支配が深く編まれていくなかで、フロンティア精神をもった先達者たちは、京畿の指揮を讃仰の想いで容れ勢をださねばならない。

ことに、東北地方は京畿の東縁部で、征夷の政策がとられた地域であった。蝦夷の風土で彩どられたこの地を、7世紀から9世紀にかけて、律令政府がその権力によって次つぎと城柵を築造させ、より高密の

体制下に編入させていく経営がとられた。

とりわけ宮城の野は、律令国家の政府軍と蝦夷人がともにゆずらず、軍事的に緊迫した前線基地の顔をもつ舞台であった。この難儀を嘗めた狭い器の交界地には、夷政の跡が土地の履歴となって流傳されている。8世紀までには仙台平野も、東北開発の拠点に、また京畿文化も波及して、密度の高い圏域に編成されていく。前線の舞台が北上して、仙台平野南部が熟すころともなると、外因による成熟した文化の中核にふさわしい顔をも

ってくる。

多賀城は養老～神

亀年間(717～729)

の創建で、大野東人

によって蝦夷平定の

砦館となったところ。

近傍の高崎の丘陵に、

多賀城鎮護のため建

立された多賀城廃寺

跡の、大宰府の觀世

音寺を模した配置形

態や、宮城野の陸奥

国分寺跡と同尼寺跡

が砦館と関連して、

みちのくの中枢機能

を果していたことを

語りかけている。ま

た塩釜街道の多賀城

跡バス停留所近くに

建つ壺の碑(多賀城

碑)は、坂東の那須

国造碑と多胡碑とと

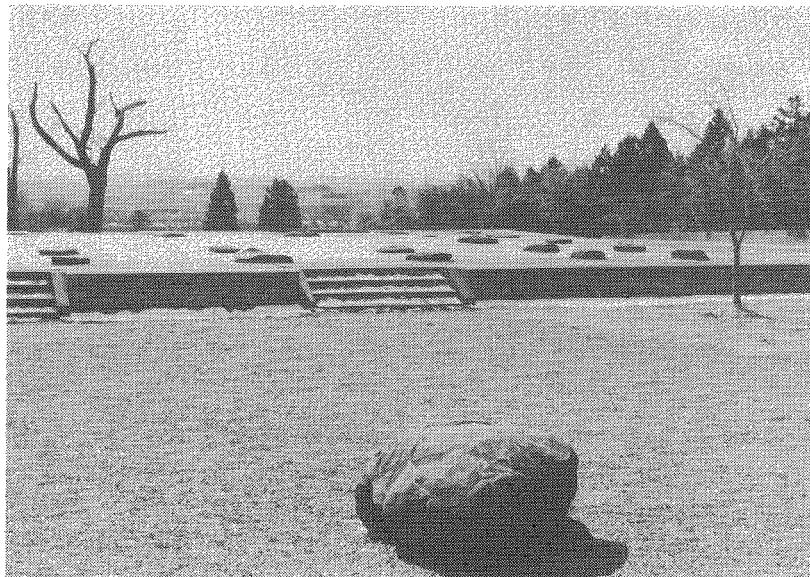
もに、日本三大古碑

のひとつで覆堂に納

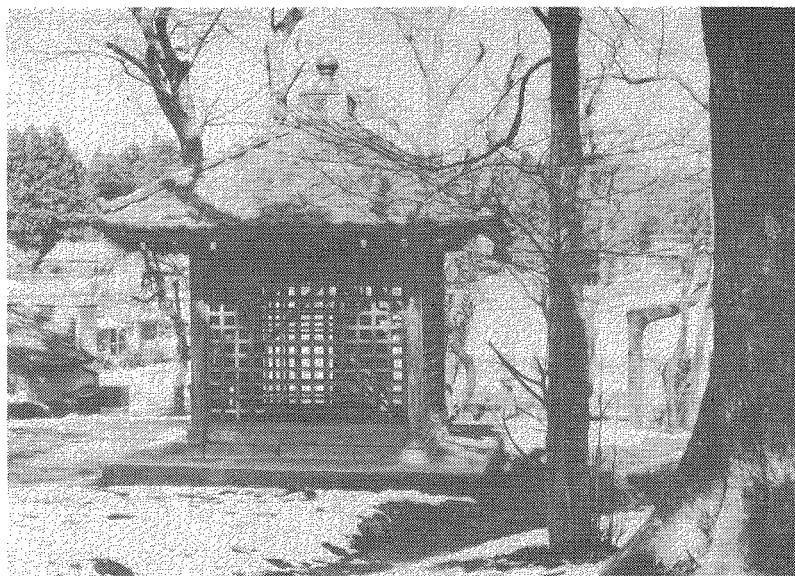
まっている。芭蕉の

「奥の細道」にも記

録されたこの古碑は、



多賀城跡 (多賀城市)



多賀城碑 (壺碑)

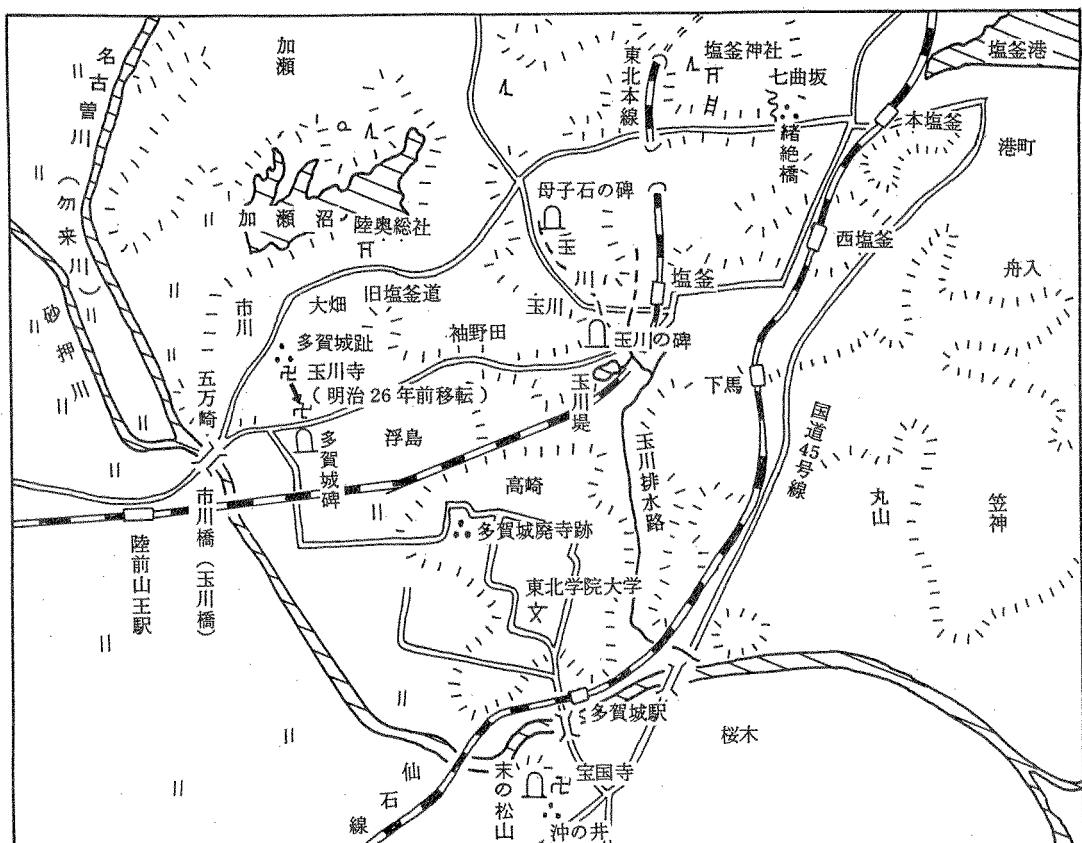
天平宝字6年(762)の建立で、「去京一千五百里、去蝦夷国界一百廿里……」と石面に彫られていて、この頃にはフロンティアの波がすでに北上していることを、碑文が語っている。

条里遺構にしても、すでに土地に奥深く刻まれていることからも、昔時の城柵、寺院、軍団などを拠点として、京畿文化を借用した、ひとつの文化圏域をつくり、生活圏にもあたる内容の充実が図られていた。

このように地域をある程度設定した後で、政府指導型の内部の構造を次第に高密なものにしていく法が、縁辺部の東北には潜んでいる。とくに多賀城周辺は東北文化の拠点で、諸施設を中心に文化の集積が、内容の濃い土地に組成させている。

教養の高い人びとが集う遊里は、けっして蝦夷の異文化と交わる危険をともなうような土地でなく、むしろ京畿の文化が伝播して、爛熟した土地や時期になって、はじめてのこされる。地域の教養を高めた古歌をみても、古代地域設定の枠組みの時期から、次期の内部が成熟していく過程のなかにおいて詠まれている。

宮城の野はこのような先達者たちの姿勢をもとに、素地の野面を歌枕で化粧させていく。歌で飾る野に仕立てたのは教養の高い歌詠たちであるから、山川を奥深く分け入った人稀なる野ではなく、古道に沿った大路や、それからそれた野径、そして国府周辺の比較的京畿の流行文化を早くに入れ、浸透させること



宮城県塩釜市玉川

のできる里に遺されている。

ただ貞觀 11 年(869)に多賀城周辺一帯に地震が発生し、多大の被害をもたらしたことが『日本三代実録』に記載されている。更に 10 世紀後半には灰白色火山灰の降下堆積の要因によって、11 世紀に入る以前に、多賀城が終焉を迎えたとするのが定説であり、それとの関連など論考のよちがある。

そうした大地に遺る深い履歴のなかに、野田の玉川も流伝されてきた。野田の玉川は現在の塩釜市内母子沢町から西玉川町を流れ、玉川一丁目で泉ヶ岡からの小流と落合って、玉川排水路に沿って砂押川に注ぐ細流である。しかし玉川はすでに暗渠となっていて、歌枕の面影を忍ぶ川面はみあたらない。東北本線下の玉川堤でさえ、雑草で覆われて、散策者の脚をまどわす。

変容した玉川の街面のなか、かつての風流の地をしのぶ唯一の遺が、塩釜街道と国鉄東北本線とが交差する、玉川一丁目角の民家の庭先にある。老松を從えるように、稻井石に刻んだ野田玉川の碑がひっそりと建っている。高さ 2m、幅 60cm の古碑の表面には、

ゆうされば汐風越て陸奥の

野田の玉川千鳥鳴くなり (新古今集)

と能因法師の歌が頭部の「野田玉川」とともに彫られている。裏面には塩釜の俳人文之が、天明七年の晚夏に建てたことを記し、「玉川や田うた流  
るゝ五月雨」と詠んだ句が添えられている。

この古碑よりも、小ぶりの石碑が右横に建てられていて、「宮城県三十三番の内十九番 野田玉川 南無觀世音菩薩 享保十五戌天四月十七日 月うつる野田の玉川岸見れば水影きよくすめる世の中」と刻まれている。そういえば朱塗りのその観音堂が、2つの古碑を彩るように祀られている。

この古碑や堂が、樹齢 200 年以上といわれる黒松の笠の下にしづむ。黒松は十数年前までは 2 本あったが、1 本は民家改築のおり伐採したこと。残る老松も、昭和 60 年になって伐採される予定であったが、市教育委員会では「野田の玉川 黒松伐採についての意見書」をまとめ、伐採を中止させている。それによれば「大枝が左右にわかれ片方が市道の上に覆いかぶさっており、折れたりすると太さ約 80cm の枝



野田玉川の碑 (宮城県塩釜市)

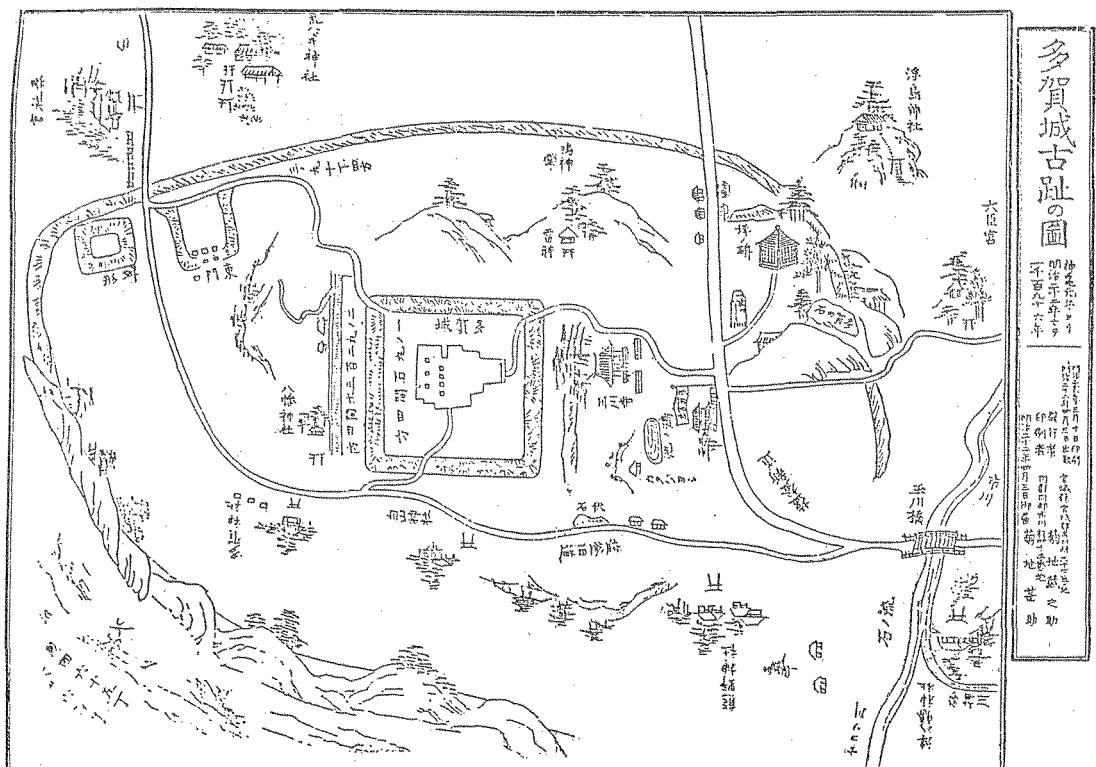
が歩道に落ち怪我人が出る心配がある。しかし、石碑と松は対のものなので根元からの伐採ではなく枝払いなどにとどめ保存を……」としている。今は意見書通り、枝払いに留めていて、唯一野田玉川の面影を残す地にふさわしい風情をかもしだしている。

古碑前の塩釜街道の路傍には「奥の細道」と印した木柱があり、古碑をやさしく見守っている。勿論芭蕉もここを訪れている。末の松山の項に「それより野田の玉川・沖の石を尋ぬ。末の松山は、寺を造て末松山といふ。」と脚跡をのこしている。

ではこの野田が、古歌に詠まれた六玉川のひとつ野田の玉川なのか、今だ認証されていない。他に福島県いわき市小名浜野田、岩手県九戸郡野田村玉川、青森県東津軽郡平館村野田の地が、それぞれ野田の玉川の里だとしてゆづらない。

野田の玉川周辺にのこる古歌には、なこそとかをだえの橋などの地名も詠まれているが、その地名はいわき市にみえ、宮城の野面にも遺る。

明治 22 年発行の『多賀城古趾の図』によれば、神龜元年より明治 22 年まで一千百九十六年とし、多賀城趾を中心に河川、寺社、道路などが記載されている。図中には多賀城西方にナコソ川と記した河川がある。この河川は多賀城西門跡前で砂押川と落合う。現在の地図では名古曾川とか勿来川の漢字を当てていて、今だその由来が判明していない。また塩釜街道がこの河川を渡る五万崎の橋名は市川橋であるが、



多賀城古趾の図

(明治 22 年)

古図には木橋で玉川橋と記録している。この玉川橋にしても、まったく語られていない。もしかすると、街道沿いの壺碑前の玉川寺に由来するのか。

ただ玉川寺は「宮城郡市川村玉泉寺書出」（安永三年）によれば、慶長五年（1600）の開山で、往古においては玉川寺であったが、玉泉寺に改められたという。現在では再び玉川寺であるが、その位置は多賀城趾下から今の街道沿いに移転したという。この玉川寺と玉川橋は何か関係があるとするならば、野田の玉川との縁もひそんでいるのでは。しかしその証はない。もっとも、出羽の玉川（羽黒町玉川）は河畔の玉川寺（旧玉泉寺）に由来する。このように河川名と古寺が深くかかわっていることは全国に散見できるが、あくまで推論の域を脱しない。

野田の玉川と直接関係していないが、をだえの橋は古川市と、塩釜市の陸奥国一宮塩釜神社に七曲坂があり、坂下の橋だとする2つの記録がある。どちらにしても、みちのく文化の中心宮城の野面からは近傍の里であり、昔時の文化が活きづき、歌枕の多い高い文化を誇るにたる土地柄を物語っている。

野田玉川など近傍の里は、かつてはのどかな里のかまえで、人びとを魅了させ、歌に親しむ遊里の顔立ちを整えた。村里には安山岩や集塊岩など第三紀層と火山岩の上に、灰白色火山灰層（10世紀前半降下）などの表土が覆っていて、民の丘陵への鍬入れで、業の地に仕立てるには困難を要した。むしろ、稲作農耕にとって最適の沖積地に、生活の糧を求めて勢をだし民の基本姿勢をととのえた。

この相反する素顔の土地柄は歌を詠む遊里にもなりうる。とりわけ六玉川の、自然と人間が織成す環境をみても、沖積地と洪積台地や麓など、地形が変換する野にひそむ。それは砂礫を含む地形が清水を湧かせ、清い水面に堤の草木が化粧した、風流の地にふさわしいことを自然が語っている。

しかし野田の玉川を、何も塩釜市野田の里に限ることはなく、多賀城趾周辺の細流に共通する条件であるし、いわき市の玉川にも似た土地条件である。宮城の玉川が、あまりにも細流であるというが、調布の玉川を除く六玉川は、こうした細流とその畔と野が舞台で、それぞれ昔時の圏域内では高い文化をもつ土地に遺る。この意味からも塩釜市野田の玉川は例外でない。それにしても、先人の自然を無理なく受けとめる舞台の組成に敬服する。

#### 〔参考文献〕

塩釜市 『宮城郡塩釜村風土記御用書出』 安永3年

塩釜市教育委員会 『塩釜の歴史』 昭和51年

塩釜市教育委員会 『明治のころの思い出』 昭和53年

塩釜市教育委員会 『塩釜市の文化財』 昭和54年

東北歴史資料館 『旧石器時代の東北』 昭和56年

東北歴史資料館 『多賀城と古代東北』 昭和60年

塩釜市教育委員会 『野田の玉川、黒松伐採についての意見書』 昭和60年

## 岩手県陸中 野田の玉川

陸中海岸の北の端、琥珀とマリンローズ（バラ輝石）の郷野田。塩ベコの古道が北上の奥山に分け入る、山里の暮らしの基本を整える野田は、また大海原を後景にした陸奥の古歌の里でもある。陸中の湾頭から台地に拓いた、野田の里なかに玉川はあった。九戸郡野田村こそ、古の歌枕の里、陸奥の「野田の玉川」だという。

赤いラインが荒海に映える、三陸鉄道野田玉川駅をおり、整備された道を海岸沿いに下っていくと、玉川漁港が眼下にみえてくる。道筋の崖下に江戸末期の在のひとで、三之助、円治が塩を焼いたという釜跡は、もう太平洋の波しぶきが及ぶところ。

ここから松葉で敷きつめられた細径が、切り通しになって、高台の森に通じている。まがった地道であるが、下茶屋の屋号をもつ大沢家横からは、老松に覆われた平坦な岡になる。西行法師が訪れ、数年滞在したという庵跡がこの岡にある。詩情をさそう岡の片隅に、「西行屋敷」の案内板が、粗野な大地に光をあてるかのようにたたずむ。玉川の古歌の里をたずねて、はるばる訪れた者にとっては、「玉川の玉石」と書かれた立札が目にとまり、ついで「西行屋敷」の石碑横、砂岩の玉石が玉川の古里であることを認識させるにふさわしい。



岩手県野田村の西行屋敷碑と玉川の玉

潮騒と潮の香りがただよう、この松林の岡は、西行が能因法師に心ひかれて、二度平泉に旅したなかで、二度目の文治2年（1186）、東大寺砂金勧進の名目で平泉をたずねた時に、ここ野田玉川へも脚を踏み入れたと伝える。絶景のこの岡に立った西行は去り難く、ついに庵を設けて滞在したという。いまも陸奥の素地の顔立ちが眼前にひらけ、西行の時代そのままの姿で、古歌の地にふさわしい風情をかもしだしている。

夕されば汐風こして陸奥の

野田の玉川千鳥鳴くなり

新古今集 能因法師

みちのくの野田の玉川みわたせば

汐風越してこほる月かけ

続古今集 順徳院

この古歌は、昭和58年に西行屋敷に建

立された碑に詠まれている歌である。歌碑をしづめた、老松の緑蔭から観る玉川の漁港と玉川の河口は、白砂青松のなかで、時代を越えた古の素顔をみせているようでもある。松風と海鳴りが時をうばい、詩情をさそう風流の古里である。

ただ、明治29年の三陸津波によって、西行屋敷の3分の1が崩壊したし、玉川河口の風貌を伝えていた眼鏡橋も流出して、古を忍ぶ景観が失われたというから、当時としては玉川館の石垣と巨木の岡とともに、より風情のある土地柄をみせて、旅びとの脚を休めさせたことだろう。

六玉川のひとつ「野田の玉川」が、この古里なのか確証はない。野田の村びとは村内の玉川だという。能因法師と順徳院のほかにも、故地にちなんだ歌枕を拾ってみると

五月雨は夕しほながらみちのくの

野田の玉川浅き瀬もなし

続後拾遺集 鴨 祐 夏

さと人や野田のわかなをすすぐらん

汀ぞにごる玉川のみづ

夫木抄 為 家

ひかりそふののだの玉川月きよみ

夕しほ千鳥はに鳴くなり

夫木抄 後鳥羽院

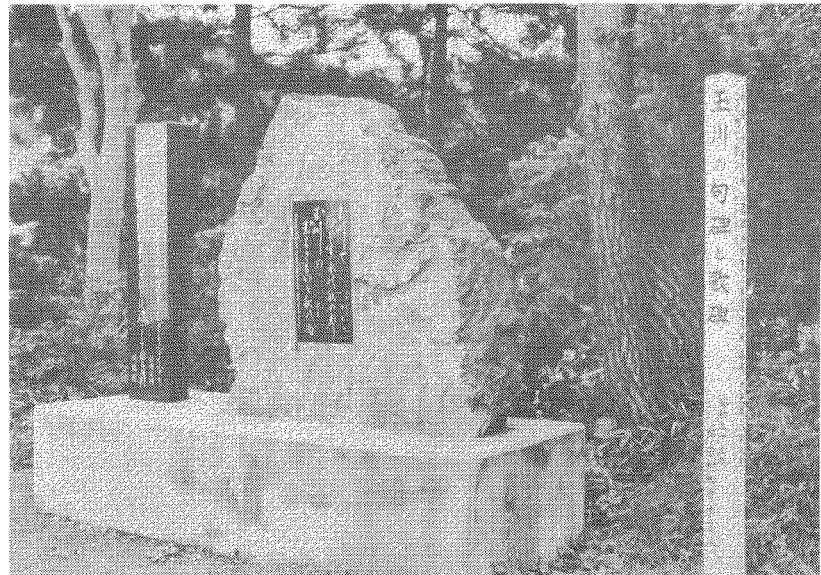
などがこの玉川で詠まれたという。西行屋敷から台地に上る、枯葉で敷きつめられた地道の途中に、苔むした石段と風雨に耐えぬいた玉川の社がある。天照大御神を祭神にする玉川神社は西行屋敷におされてか、訪れるひともなく、潮騒のなかにたたずむ。

玉川を詠んだ歌枕の地は当時の中央政府、京畿の文化圏内に六カ所存在するが、なかでも陸奥の野田玉川については、東北

地方に四カ所認めら

れる。もちろん野田の玉川は一ヵ所である。わが古里の野田玉川だとする地は、福島県いわき市小名浜野田玉川と宮城県塩釜市野田玉川、それに青森県東津軽郡平館村野田玉川とこの陸中野田玉川が名乗りをあげている。それぞれの故地で、

古老の口碑や歌碑で



西行屋敷の野田玉川の句碑と歌碑

もって、名所旧跡に仕立てたのは現代の文人たちによって編まれたのではなく、祖先から流伝する語りと場所あてがひそむからである。

陸中野田にしても同じで、里びとが荒野のなか、最初に光を当てたところ。西行屋敷跡にたつと、北上の山やまと後景にして、歌謡のひとふしが、今も現役しているように思える。

またをだえの橋（緒絶橋・途絶圯）で知られる歌枕の古橋跡は、いわき市や釜石市と同様に存在する。野田の村役場前の三差路を十府ヶ浦に折れ、古い屋並の甍をぬけて国道45号線に出ると、泉沢川に架かる轟橋のたもと昭和58年に建碑した一つ橋歌碑がある。地元ではここに古歌で詠まれた古橋があって、一つ橋とか轟橋、または途絶の圯とも呼ばれたという。歌碑には次の歌を記していた。

朽のこる野田の入江の一橋

こころ細くも身ぞふりにける

平政村朝臣（夫木和歌抄）

年経ればかわるものや今野田の

入江もなみの礎と成りけり

正之（彦九郎北行日記）

潮の香りと浪音をかき消す白砂青松の十府ヶ浦にまもられて、のどかな田園のなかにひっそりとたたずむ。つとに先人の意を注いだところにふさわしい。

それはいわき市や釜石市などの古里にも通じることで、学問領域を越えた視点で検索する必要があるし、また旧国家のしきいを越えて、地域を復習する論考もある。ともあれ世にうずもれた遺跡も多く、地域一帯が由緒の深い縁のとりである。ただ、文献史学でみると能因法師は津軽に、西行法師は平泉まで脚を入れているから、ここ野田の玉川を訪れたとしても不思議ではないが確証はない。郷土史家たちにしても、「野田の玉川」はこの地だとしながらも、「この地の人々が、何百年もの間、信じて疑わなかった心情やロマンの温もりを、今さら否定し去ることもあるまい。」とのべるだけで、九戸郡野田村だとする根拠は充分でない。

文治4年(1188)の『千載集』のなかに

来る人もなこそその閑の呼子鳥

こいて別るゝ野田の玉川

藤原俊成

が詠まれている。この古歌からみても、勿来の閑をすぎた陸奥に、野田玉川が存在していることは確かである。ただ歌謡が高貴な人びとの娛樂であったことからも、中央政府支配下と異文化が漸移する交界の陸中に、はたしてレクリエーションの場所が設けられたか疑問である。むしろフロンティアの土地柄がぬぐい去れない東北においては、戦場から南の、畿内の文化が比較的熟して、高度な舞台づくりがすでにおこなわれていた宮城野辺りまでに、野田玉川もひそんでいたのではないか。

それは奈良朝の時代に、中央政府の出先である多賀城が開拓の拠点であった頃、東歌がいまの福島までで、宮城の小牛田が万葉の北限だったことを考えると、歌謡圏は政治支配の圏域よりも、一步ひかえた古里までで固められていたことで解される。

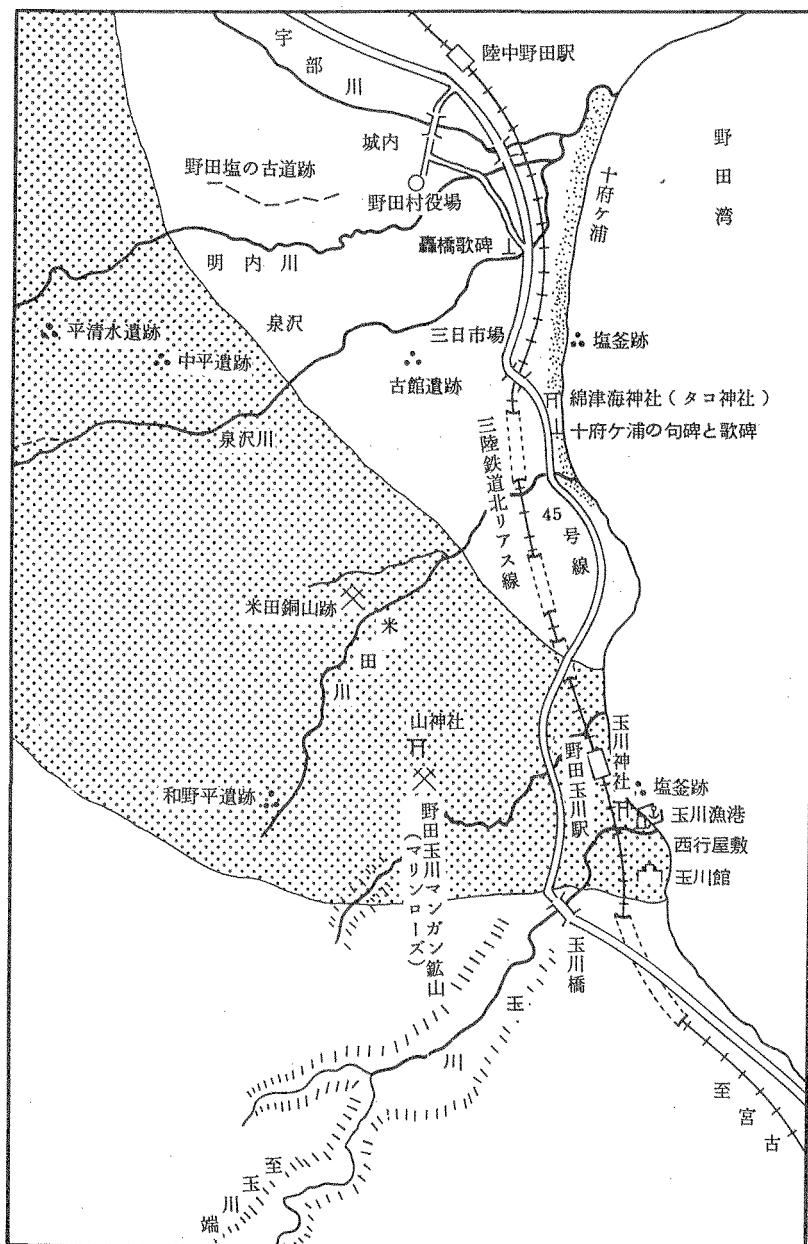
いまさら里びとが流伝してきた古歌の地を否定する気はないが、明治12年の『岩手県管轄地誌』の玉

川村の項には次のように記載されている。

名勝、玉川「村ノ西方ニ発シ、東流シテ海ニ注ク処ロ、川ヲ狭シテ岩石アリ。円石ヲ及子出ス。其径小八寸許。大八尺余ニ及フ。其蟬脱マルヤ、殆ント琢磨ヲ経ルモノノ如シ。蓋シ玉川之ニ因ル歟。  
…」

この内容からも古歌の里というよりも、玉礫の石を産出することに由来するようである。『岩手県郷土史』にも「河辺多く玉の如き石を出すを以て、斯く名づけたる由いふ伝ふ。」と集録されているごとく、河川名での玉川は玉石をもって名付けられている。玉川の河口付近を探索してみても、玉礫を採取することが今もできる。

玉川の流れに沿って水の脈をたどって、南部藩御用の鋳銭にも使用したという、近世に拓いた玉川端鉄山跡がある。鋳銭沢や門番沢の地名もこのころ山峡に、「かなくそ」の塊が露出する高森の、山ふところの平坦地に鉱山はあった。明治にな



玉川層（野田琥珀層）

岩手県九戸郡野田村

って、この跡地に巫女（いたこ）が住みついたという。今も口寄や流行病の祈禱に、玉川の峡谷に分け入って巫女屋敷にたどりついた古老的の語りもひそむ。いずれにしても、鉱物資源が埋蔵されていることは確かで、現に野田玉川マンガン鉱山が存在する。

マンガン鉱山といつても、鉱物の種類の多さと希少鉱物の産地で名高く、実に 60 種類に及ぶ。中世代三疊系の累層とそれを覆う白亜紀層、そして第四紀の堆積層からなる地層からはマリンローズと呼ばれ珍重されているバラ輝石も産出する。更に古の時代から、久慈琥珀の産地で知られ、その琥珀層が玉川にも延びている。野田湾に分布する玉川層では、昭和初期に採掘した跡までのこる。琥珀の勾玉や棗玉などが、先古の遺跡からも出土しているし、波うつ岸辺の荒海に琥珀が寄りあがったのを拾い、沼宮内に送ったという古老からの伝言もある。バラ輝石や琥珀は玉川の古里の背後にも散見できることから、それらが宝石の玉類に結びつき、玉川の語源にまで採用されたものと思われる。

ただ、田村栄一郎氏が『村の歴史文化手帳』で「地方から中央を見る必要もあるう」というのも、特にみちのくの先住民文化と律令文化の間に、日本史に書かれていない、先人のたくましい足跡があるような気がしてならない」と述べられていることには筆者も同感であるが、古歌を引用する以上、そこには京畿文化からみる姿勢が、おのずとひそむことになる。だから文献史学の論法を借用すれば、文化圏の設定と時代考証が不可欠となる。

この立場で「野田玉川」の里を探ってみると、陸奥の地域でも早くから京畿文化が根づく宮城野以南の古里に認められることになる。この観点から、余分なものを削ぎおとせば、津軽と陸中の玉川には文化圏の北漸拡大後、地域が熟する頃の料理法で土地に照合させながら、六玉川の手順を踏んで当てたようにとれる。それにしても見えない焦点が、陸奥の村里にひそんでいることは確かだ。

#### 〔参考文献〕

『岩手県管轄地誌』 明治 12 年

竹下数馬著 『文学遺跡辞典』（詩歌編） 東京堂 昭和 43 年

零石太郎著 『いわきの文学散歩』 第二巧版印刷 昭和 47 年

野田村教育委員会編 『村の歴史文化手帳』 昭和 58 年

田村栄一郎著 『野田の詩ごころ歌ごころ』 岩手県野田村 昭和 58 年

田村栄一郎著 『南部藩琥珀物語』 南部藩琥珀物語刊行委員会 昭和 58 年

『野田の石碑』 岩手県野田村教育委員会 昭和 59 年

田村栄一郎著 『久慈琥珀史年表』 昭和 60 年

古川幹夫著 『岩手県苗字分布辞典』 トリヨーコム発行 昭和 61 年

## 津軽の古里 平館野田の玉川

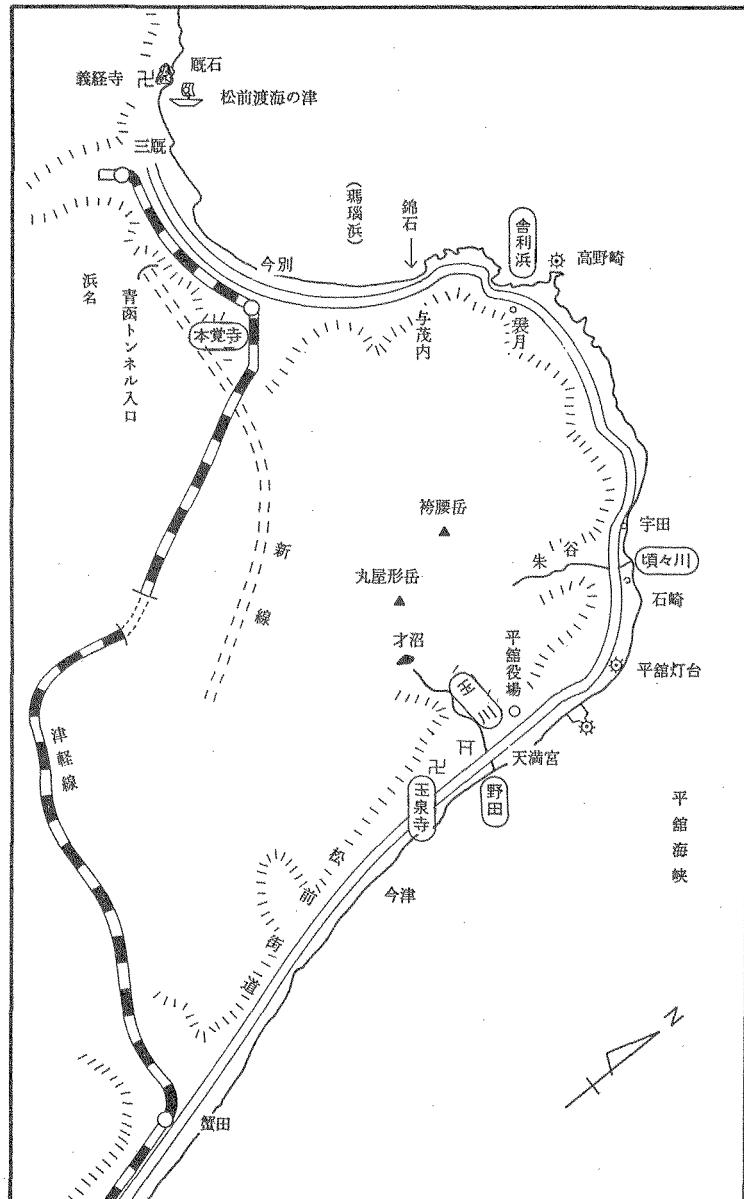
南部の家臣で、平館左衛門尉貞宗が津軽におもむき、城を築いたのは正治元年（1199）のこと。平館氏が陸奥の端、粗い大地に住みついたのが、この陸奥湾を望む東津軽郡平館村である。

今に伝える平館の名家、柿崎家にても永仁3年（1295）、南部から日蓮六老僧のひとり日時上人を案内して蝦夷へ渡島の後、石崎沢に上陸して永住したという。

このように中古の昔時は南部からの、人と文化を導入することによって粗野な大地を拓いてきたが、後世になると、荒波を越えて日本海を北上する北前船などがもたらす、生活文化と関係が親密になる。17世紀の頃には、その北上する海路の影響もあって、若狭・越前・越後との結びつきが根づよく、それらの諸国から漸次入植者が増えて、他国人どうしで津軽の曠野を創作する村おこしをした故郷である。なかでも古老の語りには、若狭（福井県）の話題が多くひそむという。

今日の古集落のたたずまいは徳川中期からといい、とくに根岸や今津の里人には日本海文化との関係もあって福井の姓が多い。やはり若狭からの移住者が拓いた古里という。

しかし野田の里では藤田、木村の姓で、浪岡町野沢か



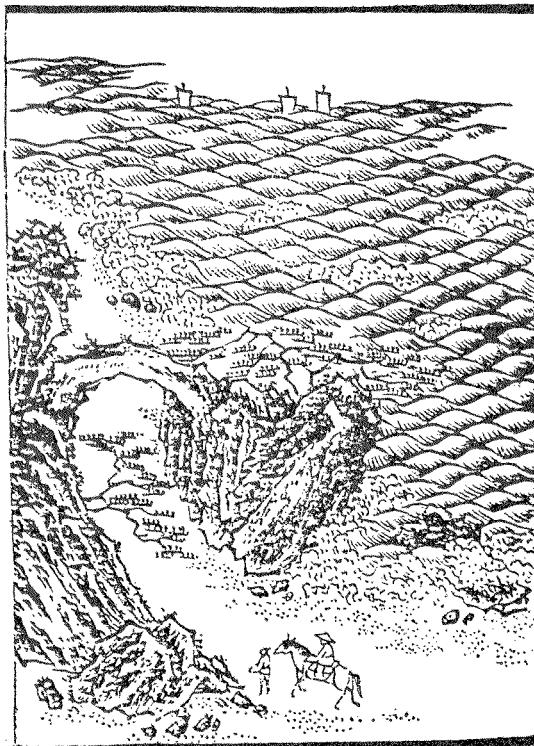
津軽半島の野田玉川

らの入植者だ、と鍵谷三四郎氏はいう。『松前旧事記』にも永祿5年(1562)、南部が野田を領知したこと記している。そのためか、野田には福井姓は皆無である。外が浜の村里では、長男が家督を相続する他は分家を禁じ、全て村外に生活の糧を求めて転出する風習が今も守られていることを考えると、世帯数の増減はない。だとすれば古者の語る南部からの入植者がもつ、大地に活きる姿勢は時代を越えて引き継がれることになる。

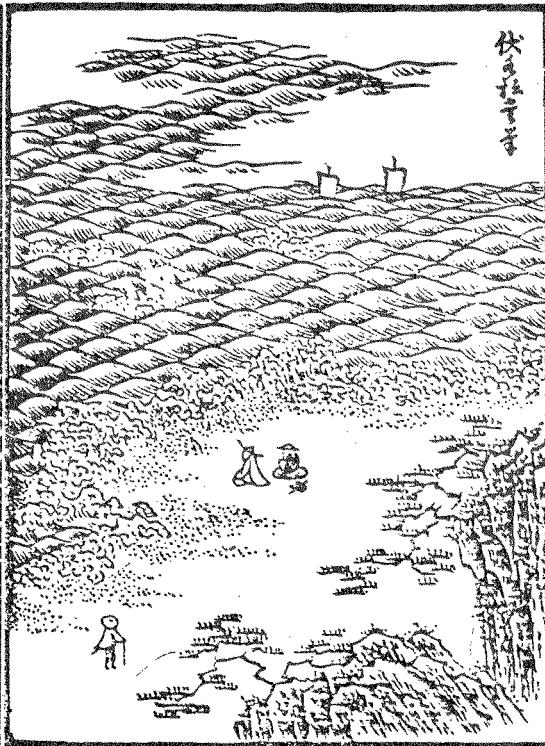
そうした影響もあってか、みちのくの古歌の里「野田の玉川」が、わが古里だと名乗りをあげる4カ所のうちのひとつ、ここ平館村の野田だとする説を、土着の民に永く伝言させて一歩もゆずらない。たしかに、津軽の野面には文字なき時代の伝説が多い。そのひとつ、『東遊記』卷之五に舍利浜が記されている。それによると、

「奥州外が浜にホロヅキ(裘月)という所有り。此海辺に舍利浜あり。小石浜なるが、其中に舍利石まじれり。白きあり、飴色なるあり、大きさ豆のごとく米粒のごとく、……又、此舍利浜の先きに今別という所あり、武三里も隔たれり、此所の浜を瑪瑙浜とい。……凡石も瑪瑙も、大きさ大抵拳の程より、鶏卵、或は小さきは蚕豆(そらまめ)のごとし。皆々甚だ明徹にして、京都にて緒メにするもの也。世に津軽玉といい、又は宝石ともいう。……」

と裘月から今別の浜を図会で記録している。地元の人びとがいう錦石である。



舍利浜の図



「東遊記」後編による

この錦石は山の急斜面を落ち、川水によって研磨されながら峡谷を流れて、外ヶ浜の荒波で砂浜にあらわれるという。浜でこの石を拾う在のひとや旅人が、いまも絶えない。また奥山深く分け入り、巨石の粗い錦石を採る者もいた。かつて家屋周囲の石垣に、錦石を積んだ屋敷もあって、近年の珍石ブームにのって、この石を販売し富を得たという名家も少なくない。このように、舍利の珍石は今でも、その衰えをみせない。

更に同じ『東遊記』に朱谷の項がある。

「奥州津軽の外が浜に平館という所あり。此所の北にあたり、巖石海に突出でたる所あり。是を石崎の鼻という。其所を越えて暫し行けば朱谷あり。……此谷の土石皆朱色なり。水の色までいと赤く、ぬれたる石の朝日に映ずるいろ誠に花やかにて、目さむる心地す。其落つる所の海の、小石までも多く朱色なり。……」

と記載されている朱谷は、いま平館村に属す石崎の頃々(コロコロ)川だという。

頃々川の朱石も錦石かと思われたが、村教育委員会では錦石でないという。ただ朱石にしても、徳川期からの伝承がひそみ、旧蹟であることは認証できた。

しかし野田の玉川については、諸書には名勝旧跡で記録されていない。古老の語りによると、野田玉川の里は無住であった平安時代をすぎ、慶長5年閑が原の戦以降、ようやく南部から移り住んだ人たちで拓いた里だという。

野田玉川の流れは、松前街道筋野田の麓を分かつように流れている。鳴川岳に源を発した玉川が、村内の諸流のなかで最も良質の真水だという。そのことが知れてか、沿岸交通の諸船は1ヶ月も保存が可能というこの水を求めて、わざわざ玉川沖に碇泊したという。この清水は津軽の浦々に知れわたっていて、いつ頃からか北前船も玉川の河口で給水をおこない、再び荒波を越えて航海したと里の古老は語る。それだけに野田の里びとも、古から昭和33年に上水道が引水されるまで、この玉川の清水を飲用している。集水面積の狭い玉川だけに流量は少ないが、他の諸流どちがって、まろやかな清水である。

野田字鳴川の前田辰太郎氏によれば、玉川は小型船が航行できたという。川沿いの田畠を堀りかえすと、かつての河床の礫が、現在の構築された川幅どちがって、もっと幅広く認められ、その旧河床沿いには古木が埋もれていて、先人の伝言を誤りなく語りかけているという。また野田の浜でも錦石が採れるが、なかでも玉川の河口に多いらしく、平館村役場玄関に展示する錦石は玉川の流域から流れ出た珍石である。

吉田東伍の『大日本地名辞典』によれば、「玉川といふは黒耀石を出す故にやあらん」と玉川の来歴を記載しているが、86歳の野田の古老小田桐氏も、玉川には黒耀石が河原にあったという。

清水と珍石を運ぶ玉川の上流は深く谷を作り、鳴川岳(658m)の中腹、才沼から出る地下水が水源になっている。この沼は海拔430mにありながら、湧水を集めているが、今もって流れ落ちる場所を探しあることが出来ずにある。そのことが高所で湧く沼を、村の不思議のひとつにあげるのだ。沼にはまた珍らしいモリアオガエルやサンショウウオなどが棲息していて、潮の干満によっても水量が上下するという。

才沼の畔には山の神を祀っているが、秋になると玉川の河畔、野田の里なかに鎮座する天満宮(天神様)にお迎えして、翌年春になると、再び才沼へお帰えりになられるという。前田辰太郎氏によると、それは厳寒の才沼をさけ、冬季のみ里に留めて、玉川の水源でもあるこの山の神に感謝する、古習からきたものと語ってくれた。

玉川のほとり、黒松やタモノ木の古木にしづむ天満宮は、かつて茅葺の社であった。村史によれば「菅原道真をまつる天満宮は勧請年月不詳、昔上方から此祭神をのせて善知鳥(今の青森)を指して行く船あり、此の川口(玉川)の沖合に止まり、進むことなし、依りてついに此地に安置勧請するにいたれりと。」と記述している。前田氏によれば、全国に六つの名高い天神様があり、そこにはそれぞれ玉川という流れがあって、それを六玉川と先祖から伝言されたとのこと。この六天神のひとつが、野田の天神社で境内横を流れる河川を玉川だという。

いまは社と玉川との間に、玉川農村広場が設けられて、現代の顔立ちに整備したこともあるって、玉川の来歴を語るものはなくなったが、玉川の清流だけは昔も今も変わらない。玉川の清水を船舶の飲料水にしたこともあってか、天神様にはおびただしい船の額が奉納されている。

ところで天満宮の南には、樹令300年を越える老松が墓地を覆う、玉泉寺がある。調査当初は山形県羽黒町にも玉川があり、そこで玉川の由来が、河畔の玉泉寺という寺名の泉が川に改名され、その後寺前の河川も玉川と呼称したのと同様の意味がひそむのかと思われた。しかしここ野田の玉泉寺は、隣町今別町の本覚寺の末庵で、万治2年(1659)単求という僧の開基、弥陀を本尊にしている古寺である。地元では万治年間以前から、玉川の川名は存在していたということからも、山形県の羽黒町の例と異なり、寺名が川名に採用されたのではない。もっと以前から、玉川の川名は存在したことになる。

数人の古老をたずね歩いたが、この玉川を説く鍵は聞取れなかった。ただ共通して『新古今集』能因法師の「夕されは汐風こして陸奥の 野田の玉川千鳥鳴くなり」だけは先祖から流傳するという。村史の野田の玉川の項にしても、古歌の「野田玉川」は陸奥のこの里だと、次のように記している。

野田の玉川は平館村大字野田にあり、青森を去る九里余、古来から有名なる六玉川の一つである。  
其水清くして川底洗うが如く、その川に産する所の石は皆黒色にして光沢あり、恰もみがきたる漆器  
の如くにして、世人の最も珍重するものである。古歌に

光りそふ野田の玉川月きよみ

夕しほ千鳥夜半に鳴くなり

後鳥羽院

夕されは汐風こして陸奥の

野田の玉川千鳥鳴くなり

能因法師

陸奥の野田の玉川見渡せば

汐かせこしてこほる月影

順徳院

うつら鳴く野田の玉川けふ見れば

萩こす浪に秋風そ吹く

家 隆

ただ村史にいう、  
玉川に黒色で光沢の  
ある珍石というのは、  
吉田東伍の「黒耀石  
に由来する」という  
内容と共に通する。ど  
ちらにしても、玉石  
や清水の玉水が流れ  
る河川であることは変わらない。

能因法師が詠んだ  
歌が元久2年(1205)  
成立の『新古今集』  
に、順徳院の詠んだ  
歌も文永2年(1265)

に成った『続古今集』に、それぞれ収められていることから論考しても、当時歌人たちが陸奥の、それも北端の津軽の地まで、足跡を遺すことができたかどうか。平館左衛門尉貞宗の築城が、正治元年(1199)であったことからも、まだまだ歌人たちが集う場所ではなく、粗い暮らしの場所であったとみたい。

野田玉川のように、古歌に詠まれる里は当時高貴な人びとのレクリエーションの場であって、決して戦場や大和文化圏の遠隔の地ではなかったはずだ。中央政府からの文化が熟すころになって、ようやく古歌は遺る。だとすれば、平館村野田の玉川は後の世の人びとが、清流と玉石の得られるこの河川に、こじつけた感がありそうである。

#### [参考文献]

『平館村史』 平館村 昭和49年6月

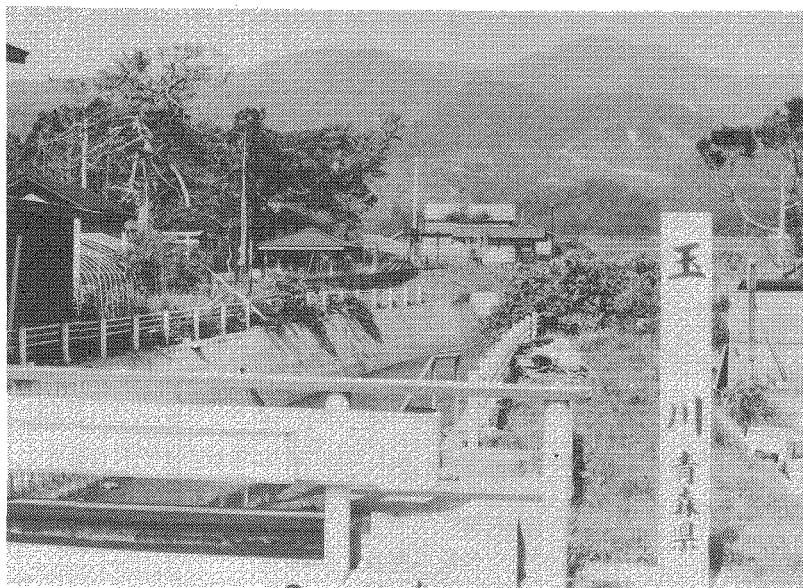
『東西遊記』1. 平凡社(東洋文庫248) 昭和49年2月

吉田東伍著 『大日本地名辞典』

田村栄一郎著 『野田の詩ごころ歌ごころ』 岩手県野田村 昭和58年10月

#### 伊予の玉川

伊予の国府は高縄半島東岸、今治市の郊外に存在した。中心都市松山よりも畿内よりの、予讃線伊予富田駅にほど近い、瀬戸内の海路に恵まれた頓田川北側の上徳に遺る。



平館村野田の玉川

今治市の南郊、かつて水田地帯であった国府跡も、近年の市街地化に伴って宅地化が進行するなか、小御門や丁地など国府の所在地と思える小名が確認できる。更に国府周辺には大化改新以前から施行されていた、条里が長地型の土地割で分布する。

ここ桜井の古里に、国府が置かれていたことを推定するのは諸説があるものの、中央の史料「倭名類聚抄」や「延喜式」を礎に、今治藩医半井梧庵の著した「愛媛面影」と、東予の寺社が所蔵する古文書類などを綿密に考証した片山才一郎氏の説を採用したからである。国府の位置に関しては藤岡謙二郎氏も、ほぼ一致した見解を『国府』（吉川弘文館）に記している。

国府の置かれた桜井は政治的な中枢管理機能のみではなく、国分寺や国分尼寺の古寺跡も、国府にそえるように唐子の岡にのこす。

国府跡上徳の東方、拝志の集落は頓田川の河口にあって政府への玄関口の役割を果していた、砂丘上の古里だったという。銅川もここを河口にしていて、山里から搬出される資源を精錬したのか、丹生の守護神、朱盛神（朱砂神）を祭神に、椿森神社が老松にしづむ。また丘陵には古墳群、伊予桜井駅西方には大陸の技術者が拓いた跡なのか、高麗の古池もある。

こうした昔時の活躍舞台となった今治の野野は、蒼社川が土砂を大量に運んで舞台を構成させ、古人が演出してきた。谷口の丘陵に鎮座する石清水八幡神社からながめると、蒼社川の乱流のなかで、野野を拓いていった先人の足跡も忍べる。郡衙跡という中

寺の古里や丹生をひそませた五十嵐の里が眼下に、蒼社川をはさんだ対岸の山ふところには多羅の鍛冶集落も土地名でのこす。まさに伊予文化のふきだまりを、現代の顔立に整えたなかに観ることができる。

苔むした石清水八幡神社の石段をのぼりながら観る古郷の大河、蒼社川の造った野面だけに舞台が広く歴史も深い。川と古人がすこしの疲労もなく調和させながら、土地を構築していく語りが聞ける。丹生やタタラ・カワラなどの業によって、古代の施設や支配体制が整えられてくるから、伊予の国域でもここには古の基本姿勢を探索する細道も多い。

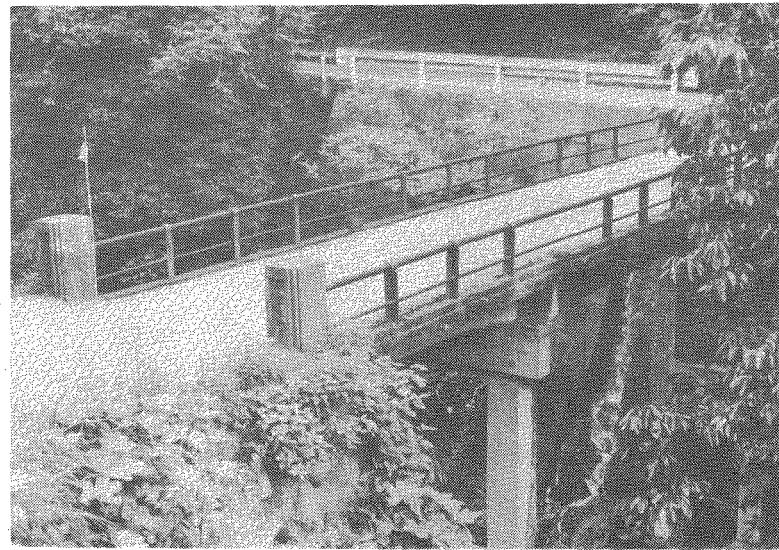
さて蒼社川を溯ると、その支流に玉川があり町名も玉川になる。玉川町は昔時には丹生川保であったことを、鈍川の地名が知らせてくれる『神鳳抄』には丹生川保を「玉河御厨」と記し



玉川の玉川橋

て、玉川保が伊勢神宮の

御厨だと語りかける。奈良之木の小名、土居に「宮の上」があり、ここに伊勢天照大神の宮がおかれていたという。鈍川（丹生川）では檜原山の谷奥から湧出する木地川の水の脈が、岩を洗う楠窪付近で玉川といい、この清水を神田に引水して栽培する稻穂を臨時祭料にあて、伊勢神宮へ寄進したと伝言している。



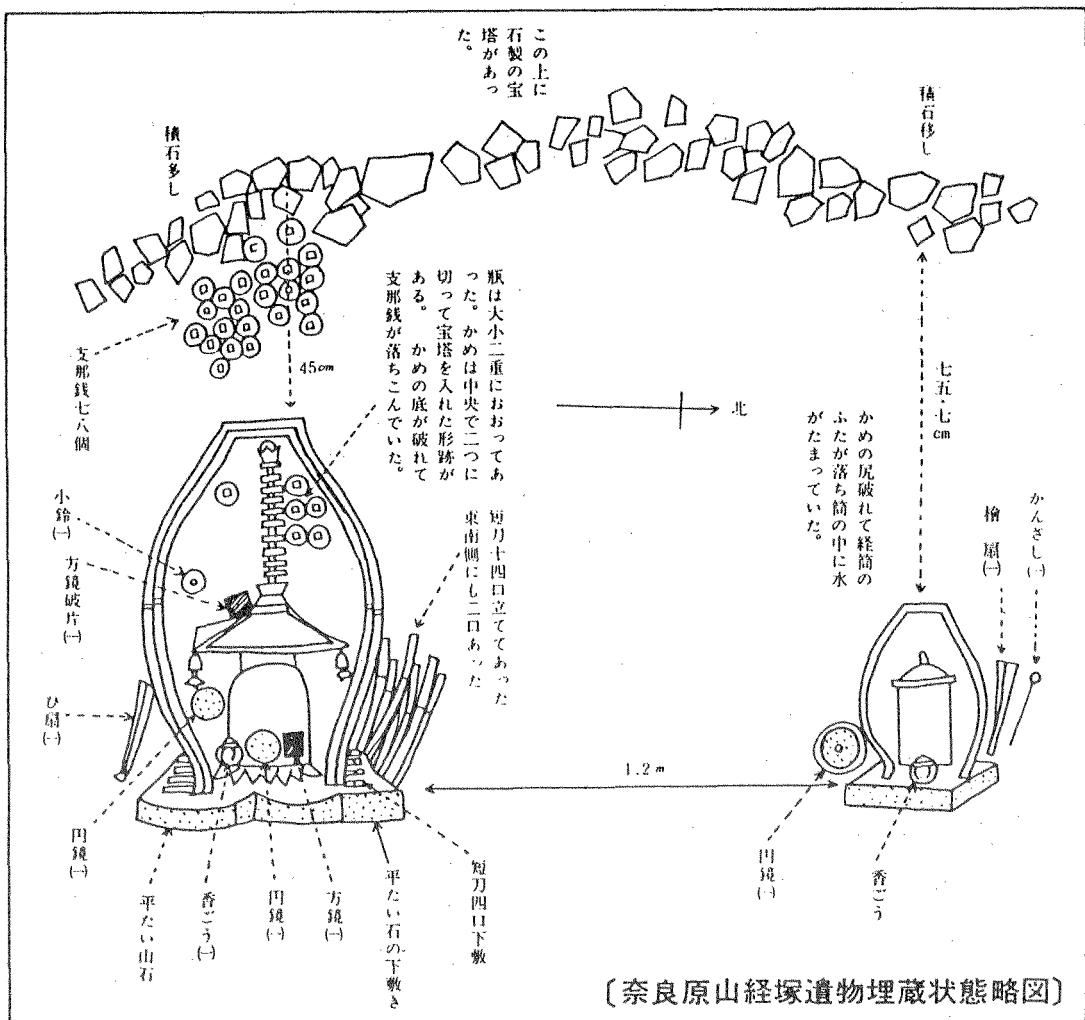
玉川町の玉川 (愛媛県)

伊勢神宮の領地であった昔時、すでに玉川の呼称が認証できるが、それを乃間の大沢愛太郎氏の発案によって、昭和29年町名に採用したのが玉川町の由来である。しかし諸書をみると、鈍川の流れが大変美しいので、玉川名を誕生させたように記載されてもいる。どちらにしても、そこには後世の人にみえない舞台演出が匿されていて、付会説がひそんでいるように思えてならない。

それは高縄山が修験と結びつき、檜原山もその関係からか太宝元年（701）徳藏上人が古權現山に社を建立した後、山伏がこの社の経塚を背負って檜原山（奈良原山）へ移したといい、その古跡だという山伏塚が丸山に遺されている。役小角が奈良原山を朱鳥4年（689）に開始したというし、空海も大同年間（806～9）に、奈良原山と光林寺で伝授していることから、真言密教との関連も深い。檜原山の摂社、子守權現は分水嶺の神水分神で、ともに祈雨の神として崇められている。

修験との結びつきの強い丹生（水銀）はニウヅヒメ（アマルガムを掌る女神）を祭神にするが、農耕の発展とともにミズハノメ（水の女神）の祭神に転じた例は全国に散見する。鈍川が丹生川である点を考慮すると、丹生の生産地でもあったと考えられる。現に今治市域、蒼社川河口の椿森神社に合祀された朱盛（朱砂）神はその跡を忍ばせていて、仙遊寺から光林寺にかけた山肌から朱砂を採掘していた。

このように農耕以前から、修験と真言密教による舞台演出がなされた土地柄だけに、玉川の名も歴史が古いとみなければならない。霊域全体が丹生の産地である紀州高野山の奥ノ院にも玉川があり、朱砂を貴重な資源でとらえていた。伽藍を建立するには鉱物の精錬や塗料に、丹生が不可欠である。全国の山岳修験と結びつく天台密教、真言密教の道場付近には、その影響で朱砂産地が分布する。こうした霊域に玉の跡が存在することを、松田寿男氏の『丹生の研究』で読みとれる。

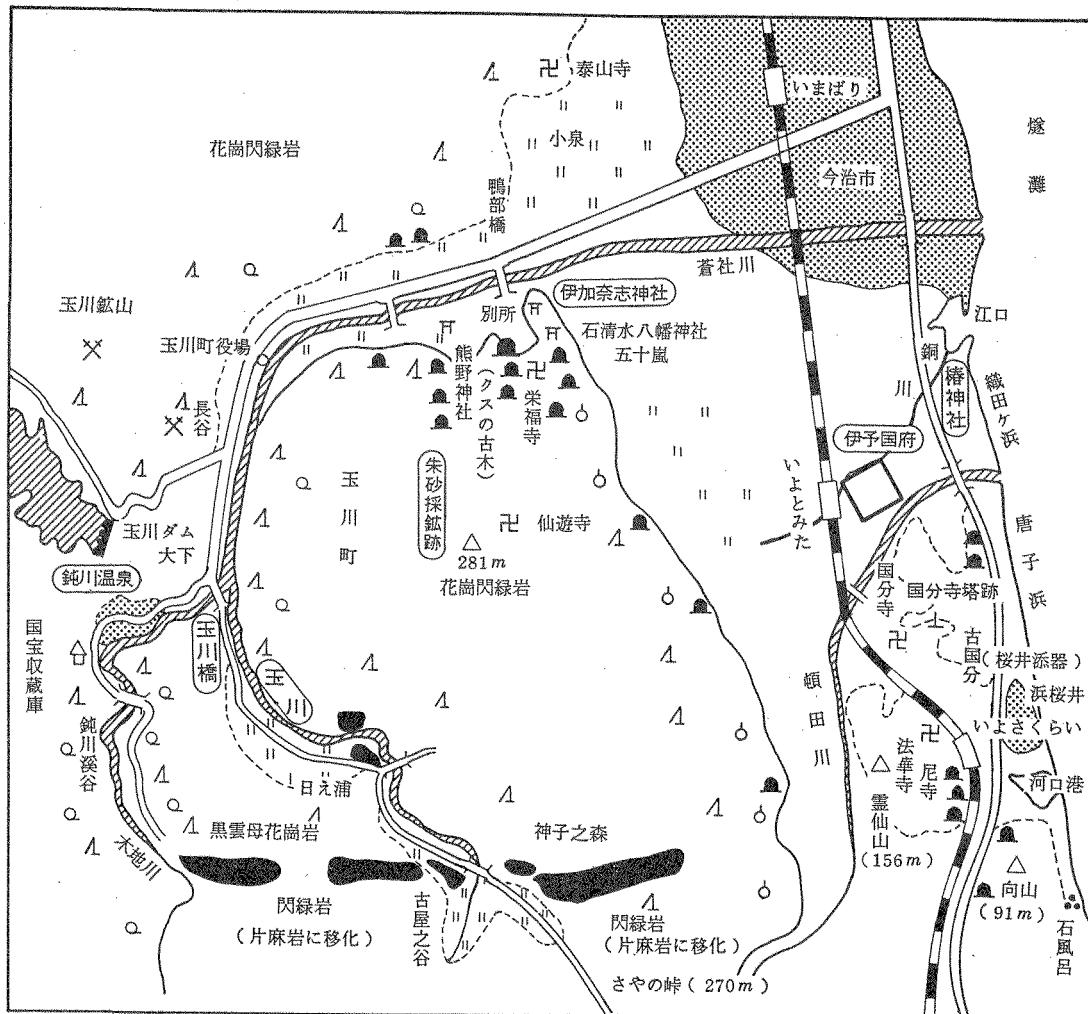


〔奈良原山経塚遺物埋藏状態略図〕

愛媛県越智郡玉川町・玉川町誌による

〔参考文献〕

- 「国宝伊予国奈良原山経塚出土器一括」 玉川町
- 藤岡謙二郎著 『国府』 吉川弘文館 昭和44年
- 玉川町教育委員会 『玉川の民話』 昭和44年
- 今治市教育委員会 『今治の歴史散歩』 昭和55年
- 玉川町誌編纂委員会 『玉川町誌』 昭和59年



愛媛県玉川村玉川

## 山口の田万川

山陰の西はずれ、山口県の北端に田万川という清流の河川がある。田万の河川名は珍らしい。町名までも田万川町である。田万川は隣町の須佐町弥富から、陵夷した山塊をぬうように北流して、田万川町に入つて西川や畠田川などと落合つて、粗い山陰の海に注ぐ。

田万川の下流付近は和名抄によると、多万の古郷で記されている。勿論隣郷江崎をも含めてのことであるが、里名は昔時から連綿と活きづいてきた古里であった。

多万の古郷の沿革をみると、興隆寺所蔵の文正二年沙弥備中守連署執達状に「当山興隆寺三重塔婆料所長門国阿武郡多万郷内拾五石地、同郷内五石地等段錢事、自去年文正三年三月二十七日御寄進以来至己後

所免除也」と見える。正任記文明十年の条には「阿武郡多方郷祥雲寺卷数御茶餅等進上之 …… 中略 …… 文治年中長門守護職佐々木高綱本郡に十八郷を置きたる節、田万郷、小川郷」としている。その後右州の名流吉見氏が天文二十三年に領有している。

慶長五年の関ヶ原役後においては毛利氏防長2州削封され、萩三十六万石領に属して、上多方・下多方の両地区に分かれた。寛永二年になると益田河内守が門田御領替の際、江崎を蔵入にして江崎村に改村して多方の二村は益田家所領として共に奥阿武宰判の管轄となっている。いまも益田家墓所が、須佐町の良港を見下す高台に、益田館が港奥のモクレンの古木に彩どられて遺る。

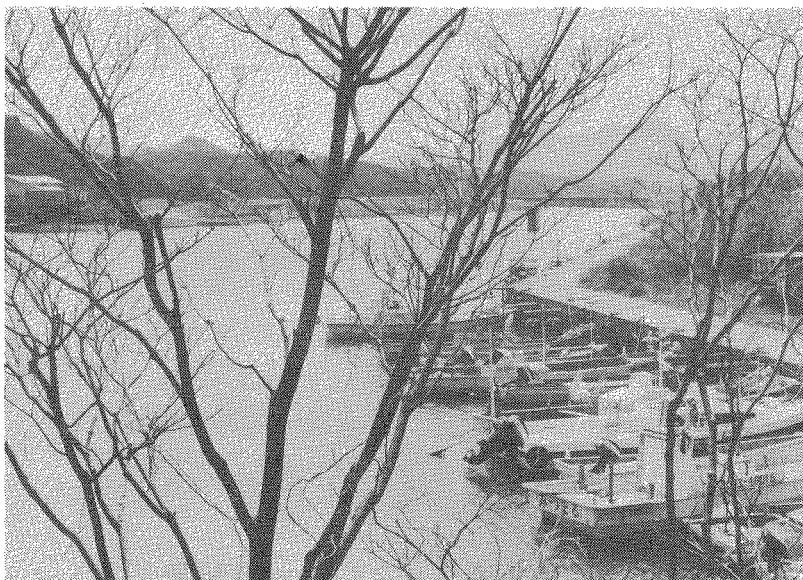
享保年間には多方の本郷に江崎の浦も含まれていて、風土注進案に「江崎往古江津湊と弥す。繁昌の地で阿武郡各郷の米を若狭の国に積出し、後益田河内守常浦の内湊と須佐湾の大江津と隣接、まぎらわしいとて入江の崎にあるをもって江崎と改むと伝う」とある。

明治期に入ると、二十二年町村制実施によって、上田万村、下田万村、江崎村を合併して、田万崎村に改称したが、昭和十五年町制を敷き江崎町と改めた。更にこの江崎町と田万川流域の古代の宿駅小川村とを、昭和三十年に合併させて、両町村を貫流する河川名をとり多方川町に改めている。

田万川中流の旧小川村は延喜式諸国駅伝馬長門国駅、馬小川三疋とあり、山陰と山陽の古道を連絡する主要駅であった。文治年中長門守護職佐々木高綱は小川郷を上小川と下小川に分けており、益田氏文書には延元二年南北朝抗争のさい、石見の軍が小川の関所を破り長門に進撃したことを記している。このように小川にしても、山陰の終駅で、田万川に沿う山間の古里であった語りはひそむ。古駅が設けられた小川の里は、田万川の清水が民の白い肌を化粧しているといい、今も色白の小川美人を生むという。

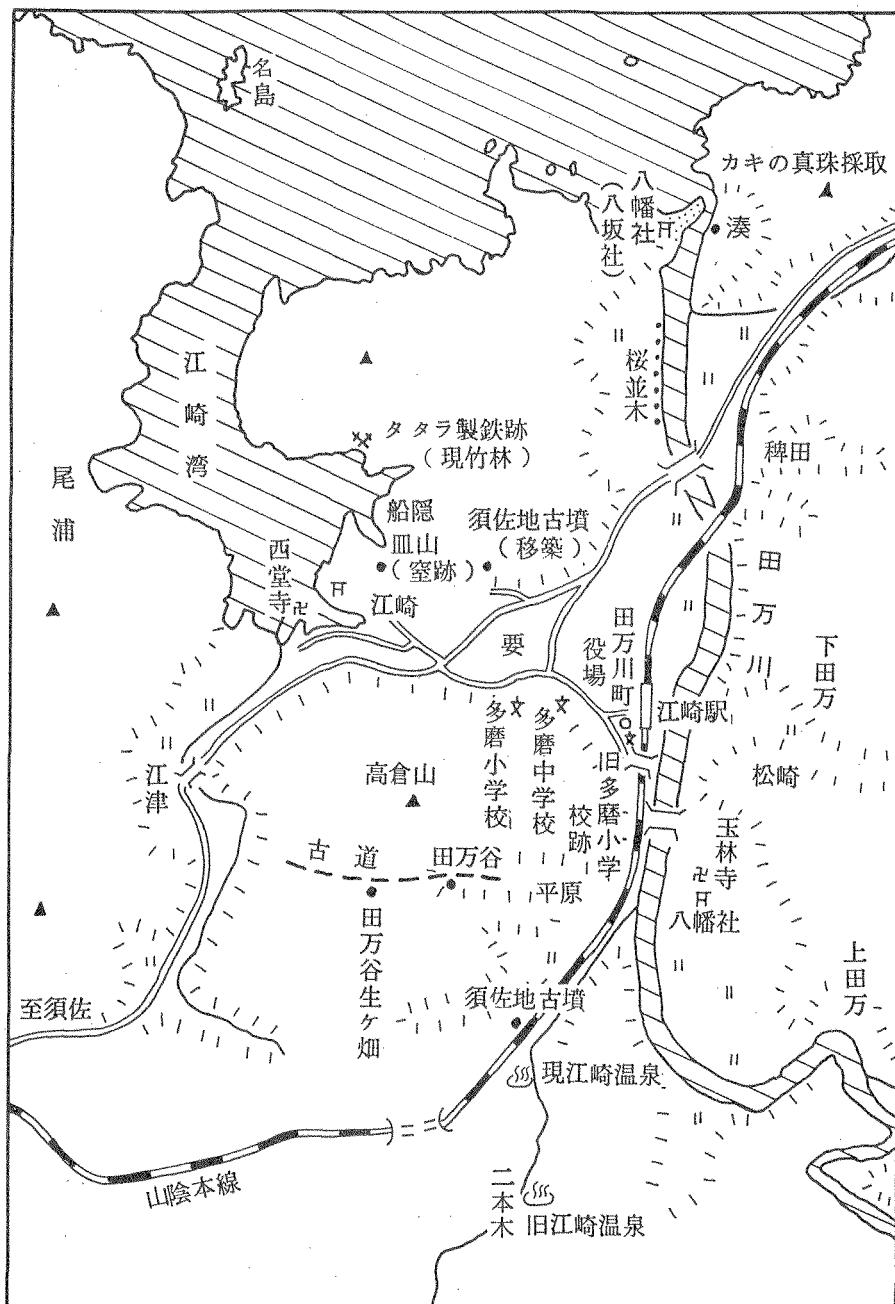
町名での田万川は江崎町と小川村の合併によるが、それは古郷の多方に起源があるというよりも、合成

地名にたよらない町名を思案した結果、両町村を貫流する河川名を採用することで意見が一致し、田万川町と命名したという。ただ文政天保の「国都全国並大名武鑑」によれば、古里も河川名も田万で図示記録していることからも、多方も田万と同義であった。それは一般に古老か



田万川の河口

(山口県田万川町)



山口県阿武郡田万川町

らの伝言が先で、地名を漢字で表現するのは、時代がずっと降りてからのことである。

ところが、田万川町の郷土史家中野清巳氏によれば、藩政期の頃、歌を美しく詠むことで玉川を使用したという。とくに文化文政の頃には玉川であるが、多磨川を記すこともあったようだ。それが昭和十年から十五年にかけては多磨川と書き、その後田万川になったという。

田万川について、中野氏の語りをまとめると、次の2つの説になる。それも伝説であって、認証できる内容ではないという。

田万川の河口、日本海の荒波が洗う崎に、八坂社、三穂社を合わせた八幡社が、河口を見下すように鎮座している。社の対岸に河港と外港にふさわしい里、湊集落がある。この漁港からは須佐唐津で焼いた赤瓦と、江崎字船隱皿山という杉木立て覆われた窪地があって、かつての窯跡が遺っており、その破片が今にあるが、両者で焼かれた物が田万川上流の山里に船で輸送したという。古の小川駅も、この瓦で葺かれたといふ。船隱とは琉球との密貿易船が停泊した字地で、皿山の窯は須佐町の唐津と同じに、製品を北前船によって越前小浜や、遠く秋田までも年間130俵も送られたという。

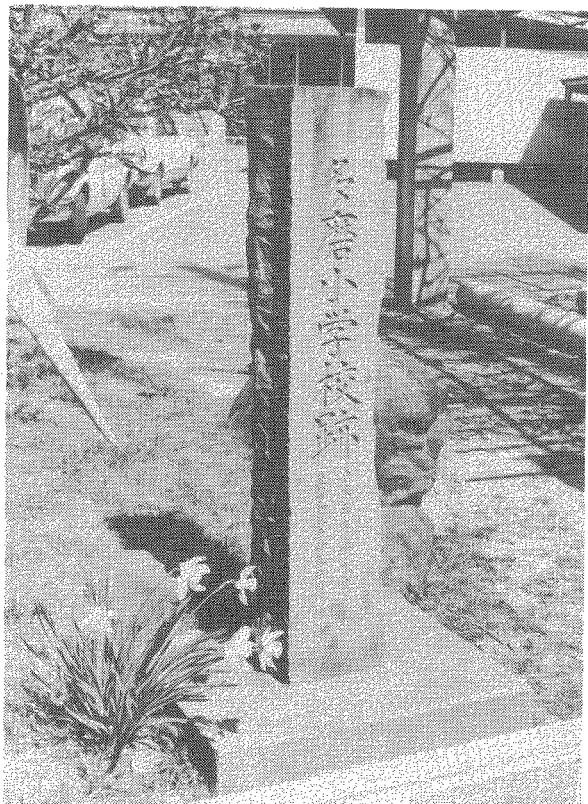
湊の漁港は海水と田万川の淡水がまじる河港でもあり、昔時からカキで真珠を養殖した。今からおよそ1135年前、カキの貝に大粒の玉が5個ほど入っていたが、その玉を在の民が耳飾りや首飾りにして使用した。あまりにも美しい光を放つ玉（真珠）だったので、近郷近在の里人にも知れわたり、それをほしがったという。湊の漁師たちはその後も真珠を珍重し勢を出して磨いたことから、貴重な玉として崇めた。この玉を田万に置きかえて、河川名に採用したという伝説である。

そういえば、田万川河口の八幡社は、八坂社でもあることを考えると、玉作部の守護神玉祖神社の神器、八尺勾璁に関係があるかも知れない。もしそうだとすれば、湊集落の真珠伝説は伝説でなくなるし、古代玉作部のすみかにもつながる。

もうひとつの伝説は、やはり1135年前弘法大師（空海）が、阿武郡須佐寺（現在須佐地）の里にこられた、まだ稻が青田の7月14日頃、大師は須佐寺の谷奥の、榎木の古木が二本あったという二本木の在で、こんこんと湧き出る湯につかったという。この湯は後に毛利元就公の御用湯で、須佐領主の益田氏も愛用したという、今の江崎温泉のことである。その途路、大師は須佐寺の入口の縁蔭で、ひと休みしていると、野良の草取りに出かける在の農夫が通りかかった。

大師はその景のなかで、あまりにも田畠が多いので、百姓に「お百姓さんや、この里は田が多いなあ」と言葉をかわすと、百姓はみすぼらしい風体の大師を見て「坊さんや、この里には田が万とござんす」と答えたという。この田が万とある伝説が流伝されて、田万になったとも伝える。

伝説にかたられる須佐寺は、今では須佐地に改変されている。このいきさつについては江戸前期に遡らなければならないが、当時須佐寺には流行病や火災など、多発する村里でした。そこで村びとたちが思案した結果、村名を改名して、里中にこもる邪気を祓うことになり、田万崎村江崎浦の庄屋小野七兵衛が、天保12年萩藩の絵図方奉行井上武兵衛に「須佐寺の寺という文字が、村里に災をもたらすと思いますので、地の文字に改めてください」と申し出たそうです。これを機に、里中が平穏になったという。



田万川町役場前の多磨小学校跡碑

原氏によると、学問を幅広く、また多く磨くことから、多磨の校名になったということ。それまでは上田萬・下田萬小学校の字で表記されていて、両校を統合させてから多磨の校名が誕生したらしい。もちろん、多磨は明治期に田万川の田万を改めたもので、そう古くはない。旧多磨小学校跡も、字名は関であるし、役場は清水ヶ浴であった。

字名でタマで発音させる里は、それよりも南西方の平原の里奥にあった。須佐地の北側の谷筋奥で、田万谷という無住の地があった。その谷を上りつめた山方には、多万谷生ヶ畠がある。ともに、いまは葉ずれの音だけが聞こえる、陽のこもるところである。

この谷筋は古郷の須佐へ出る古径にあって、昔時から名を遺す古里であったらしい。しかしこの古里が、田万の起源なのか、それとも、田万川の河名の方が先なのか判明できない。いずれにしても、田万川の下流付近に、タマやタマ川の履歴がひそむことには変わりがない。

#### [参考文献]

山口県文書館編集 『防長風土注進案 第二十一卷 奥阿武宰判』 発行山口県立山口図書館

昭和39年

それでも、須佐地は古里である。

里山の肌が昭和41年に崩れ、在所の民家が倒壊した折、約1500年前(5世紀)の古墳がぽっかり口をあけたという。いまは移築されて、町民センター前の墓地横に復原保存されている。竪穴式石室古墳のこの古墳には、妻石が箱式石棺で田万川の丸礫を敷きつめ、エビス土器などが埋葬されていたという。

ところで田万川の由来であるが、先の2つの説は先人から流伝してきた、村里にひそむあくまでも伝説である。それ以外に由来を証するものは何もない。

ただ田万川町役場前に、「旧多磨小学校跡」と刻んだ石碑があり、多磨の地名も村中に遺っている。いまでも、要集落のかなめの丘に移転した多磨小学校と多磨中学校が、ともに校門の校標に玉が添えられている。多磨の校名について、町役場の美

『躍進する田万川町』 防長新聞阿北支局 昭和46年

山口県教育委員会 『須佐唐津窯』 山口県埋蔵文化財調査報告第71集 昭和58年

## 南会津の氷玉川の歴史地理

南会津に玉川に關係した、地名や土地の呼称を探索してみると、いくつかのところが、現実に云い伝えられているところがある。

そのなかで会津の瀬戸焼といわれる、的場の陶工を堀って、江戸時代からニシン鉢を主に焼いていた。本郷の集落を貫流している、氷玉川を踏査してみた。

調査の段階でまず、玉川に冠している氷について、その意味を文献資料と、現地に詳しい会津乗合バス観光課の渡辺好子先生に、御指示をいただき、本郷での聞き取りからはじめた。本郷での氷玉川に関する応えは、宗像窯の職人からのものであるが、藤巻神社があって、その畔に氷玉川が流れている。

氷玉川の機能は本郷の集落よりも、福氷の街道村の方が、両側から利用している河川なので古来から氷玉川との関係が深いので、氷川の神を祭る社殿が造営されている。

この地方で氷玉川についての、諸説を拝聴してみると、各説あってこれという論理は見い出せなかった。本郷での土地の人からの伝えでは、火打石を採集したことから、火の原点である川というが、いつの間にか氷となったと思われると語ってくれた。

また寒期のときは冰る川であることから、福永宿の時代には、用水の役目がなさないので、渋難したことから氷川といったという。

こうした観点から、氷川は街道宿場集落の重要な上水並に用水に使用されていた。

宿場街でもほかに例をみない、氷玉川の幅員の広い河畔に、両側に街村をつくる宿場の形態は、他地方に觀ることのできない、一つの特色である。

この宿場集落はもともと、日玉といったという。これは会津風土記に下記のように記されている。

福永もと日玉という。端村大工屋敷。関山、端村、高松を云う、櫟沢（とちざわ）と云う。

福永の集落は氷玉川畔に、宿場町の機能を氷玉川の水を利用して開けたもので、はじめから福永とはいわれていない。

福永集落が宿場町に集落したのは、南会津を貫通する会津西街道の一つ、南山街道の本道が開通してからである。

それまでは、ここ氷玉川畔の村里は、日玉、火玉、氷玉といわれていた。

氷玉川にそって、福永から氷玉川の源流である氷玉峠（関山峠）を越えて、大内の宿場町に至る山路が、866メートルの氷玉峠ともう一つの大内峠の920メートルの峠路を越える豪雪の風送りの山路である。

大内の山間盆地の宿場町は、700メートルの高地集落を耕地をもちながら、現在も街道集落の形態をよく保存して、旧時の姿をとどめ、大内峠下集落というよりも、宿場町の姿をみせている。

福永の宿場町は大内の宿とは、異った形態をとりながら、やはり峠下集落の姿であることは変りはない。

ただ福永の宿場町の場合、関山越えにむかって、福永集落の枝村関山を分村し、南山道（日光街道）は九折の道が、大内までつづく急坂のところなので、宿場町は平野部に比べると近距離であるのはいなめない。山路ゆく街道宿の特長でもある。

福永の宿場町は氷玉川が、幅員を増し水量も豊かであることは、宿場町繁栄の基本であったが、氷川にそっていることが、特に夏期に雷電が発生し、その道にもあたっているので、雷が襲う。

このため福永に雷神を祀る社もある。雷の発生と落雷から、福永以南の氷玉川筋では、古来火玉川の名で呼称され、それが同音で日玉川とも語られてきた。

福永の集落がもともと、火玉や日玉と呼ばれてきたのは、雷との関係が重くみられる証で、当然火玉川と呼称されたのである。

氷玉川に沿って、氷玉峠に延びる、街道というよりも山路の旅道は、冬期よりも夏期や秋期に繁く、会津藩の参勤交代は初代正之と二代正経の寛文・延宝（1669～1680）年が主であったが、日光の裏側を護る街道の役割が大きかった。

またこの街道の利用は、会津藩の廻米の道であった。ことに正保（1644）年いらい、江戸に運ぶ荷駄の道であった。この道は幕末の弘化元年（1844）から猪苗代西岸の戸1口を経て東道をゆくようになるまで、繁く利用された。

廻米のルートはただ、米輸送だけではなく商品流通の径でもあったので、荷駄をはじめ人馬の往来がはげしかったのである。

こうしたことから、雷や雷雨には輸送業にたずさわる者ばかりでなく、旅の者も受難を除く願いから、福永に雷神様を祀っている。

火川と藩領時代からいわれていた、氷玉川の火は、雷の発する火から伝えられたのかもしれない。

福永の宿場町集落には、前時代ことに会津藩領の時代の急激な発展で、それ以前の伝承や説話がよく伝えられていない。

ただ藤巻神社の祭神に、瓊の曲玉をつくるということが、縁起に見えることから、



福島県大沼郡本郷町福永の雷神社

この地はかつて、玉川をさかのぼる、氷玉川での赤色の玉の原石を採り、加工したところと見ることができる。

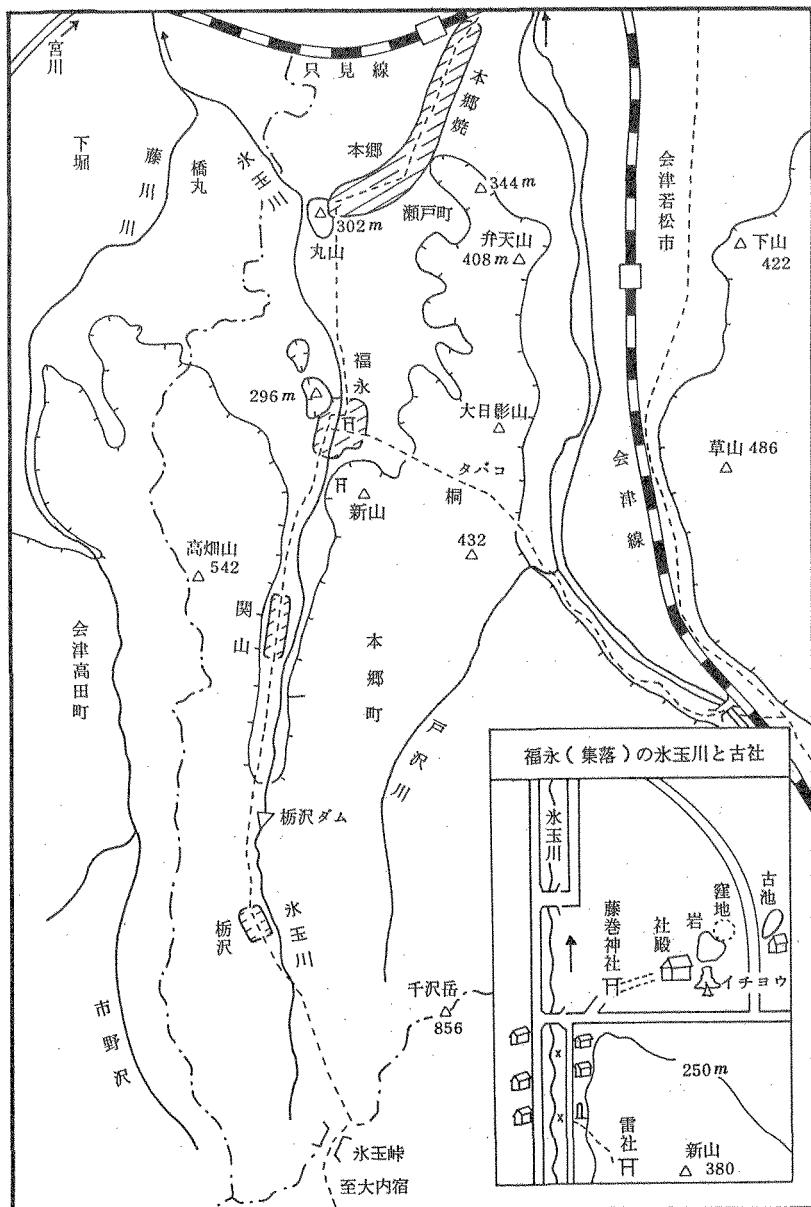
藤巻神社の境内から、社殿裏の村道をみると、かつては神池があって、玉を磨くにふさわしい処と拝見できた。

氷玉川の探求はまだしばらくしないと、未だこの地の玉川は詳でない点が多い。

氷玉川は福永を本拠に、氷玉峠（関山峠）までの源流と支流をみつめ、火玉、日玉がはたして雷からでしたのか、また火玉といふことで日から伝えられて変化したのかなど、研究するところが多い。福永の源名は日玉か火玉であったのを、徳川初期に参勤交替制導入から、各街道を整備したが、南会津地方も西街道を、会津若松から南山街道を開いて、時代に応える道に拓いた。

このとき日玉・火玉と呼称されていた、ところに、火玉峠越えの峠下宿場町を整備すると同時に、火玉の名称を福永と名づけて、これ以後現代までその呼称がつづけられた。

火玉というような火を名称にした、宿場町は全国にもみられないし、また宿場集落ではとくに火事は忌み嫌うことから、この名称を除いたと伝えられてい



福島県本郷町の氷玉川

る。

このため福永の宿場町の中央を貫流する、玉川も氷玉川と呼称されて、火や日の字を用いてはいない。氷玉川が育てた、宿場集落では福永が最も栄えたことから、氷玉川の祭神を祀る、藤巻神社が現在も、福永の町の右岸中央に鎮座して、氷玉川の縁起をのこしている。

会津の氷玉川は氷玉峠付近を源に北流し、阿賀野川支流の宮川と合流している河川である。この河川沿いには会津若松と江戸を結ぶ重要な南山通り（会津西街道・日光街道）が通っている。この街道は参勤交代・日光社参をはじめ多くの物資が流通した。会津若松・本郷・福永・氷玉峠・大内峠・大内宿を経由するものである。この大動脈は檜原から会津若松の間、大川沿いを通る三方道路が作られたため往時の賑わいはない。

氷玉川が会津盆地へ流れ出る谷口に本郷町福永がある。合併以前は福永村で、日玉・火玉・氷玉と称したこともある。現在の福永は周囲を水田に囲まれた静寂さの中にある。氷玉川は集落を東西に二分して流れ、集落形態に特徴を出している。

福永の中央の社が藤巻神社である。本殿には由緒を掲額している。祭神は元面足尊・煌根尊で神世七代の第六神、今明玉命別御名玉祖命である。八坂瓊曲玉をつくらるとある。

八坂瓊曲玉（やさかにのまがたま）とは大きな赤い玉で作った曲玉のことである。長いことを形容している八尺の緒に繋いた勾玉のことをさしている。奈良時代前後は身につけて飾りにした。神代紀には「八坂瓊の五百筒（いおつ）の御統（みすまる）」とある。また「天明玉（あまのあかるだま）」が作れる八坂瓊曲玉」ともある。御統は多くのものを一つに集めた意で、多くの珠を緒に貫いて輪にし首にかけ手にまいて飾りにしたものである。三種の神器の一つとされている。このことは玉造部との関わりを示唆している。

藤巻神社は慶応3年（1867）まで旧藩主の造営により境内は免除地となっていた。会国一万石総鎮守の称を許可され、累年仰付けられた豊饒祈禱の祭には代官奉行などの参拝があり、初穂料の寄進もあった。

時代は明治を迎えた。明治5年（1872）の藤巻神社は村社に列せられた。若松県の指令により祭神を明玉命と改めた。大暴風のあった明治35年（1902）には大きな被害を受けている。本殿後の古い大樺が倒れかかって本殿は大破した。その翌年の明治36年（1903）に社殿が新たになった。現在の拝殿幣殿は氏子一同の協力により昭和37年（1962）に完成したものである。祭神が面足尊・煌根尊から明玉命別御名玉祖命に改められたのは明治になってからである。玉造部との関係を再度調査さらに研究する必要がある。

藤巻神社の本殿裏には大きなイチョウの古木が繁り、白い大きな岩盤が露出していた。岩盤の端は窪地になっていた。この岩盤と道路を挟んだ家の庭には大きな池があった。この辺りが吉田東伍氏の地名辞典による神池跡なのかもしれない。また同じくこの辺りにあるはずの火玉の三重の塔は見つからなかった。

藤巻神社から氷玉川沿いに100メートルほど遡ったところに雷社があった。福永は氷玉川の会津盆地への出口にあたり、氷玉川沿いは雷道である。雷は稻妻や稻光とも称されて農耕と深い関わりを持ってい

る。豊作や稻作に重要な降水の祈願を行なっている。また雷社は落雷による火災を防ぎ、集落を守るものとなっている。この社は地形図の新山（380メートル）の麓に立地している。火打ち石の原石となる石英岩を埋蔵している団子石山は確認できなかった。地質上は石英岩や玉になる凝灰岩が埋蔵されている地域である。

氷玉峠・大内峠を越えると大内宿である。この大内宿の中央付近から西へ入った山の麓に鎮守の高倉神社がある。高倉神社は高倉宮の御墨付を祀っている。高倉宮は修驗道や山岳信仰とも関わりが深かった。高倉神社の祭礼は高倉以仁王の命日の5月19日から7月2日に変更され、半夏祭と呼び賑っている。

この半夏祭の時の神輿は神社を出てから、必ず御旅所の佐藤家で休息する。佐藤家は大内宿の西側の家並みの北端から三軒目である。佐藤家の屋号は玉屋で、高倉神社の永代頭屋である。神輿の御旅所になつたのは以仁王が佐藤家に草鞋を脱いで休憩したことによる。

後白河法皇の皇子以仁王は治承4年（1180）に打倒平氏の命を出し、源平の合戦がはじまった。源頼政は以仁王を奉じて挙兵したが、平知盛・平維盛の攻撃を受けて宇治平等院で戦死している。その後、以仁王は東海道・信濃・甲斐・上野沼田・尾瀬・檜枝岐を経て大内宿へとやってきた。以仁王に関わる地名などがその道筋に数多く残っている。

氷玉の由来は治承4年（1180）までさかのぼる。平家に追われた以仁王は途中の大内宿で一泊した。大内宿（当時の山本）に以仁王が滞在していることを柳津の石川有光氏に報告した者がいた。石川氏は平家の家来であり、兵を連れて高峯峠へと集結した。以仁王の一行はこの時に柄沢方面からの攻撃にあい難渋している。一天にわかに曇りすさまじい雷光が鳴り響いた。落雷は火の玉となり石川勢を目がけて押しよせた。火の玉は敵の石川勢を退脚させた。それから大峯峠は火玉峠・川は火玉川と呼ばれるようになった。その後、火の字をきらって氷玉峠・氷玉峠と称するようになった。火の玉ではなく氷玉が降ってきたという説もある。

田島と南郷村を隔てる駒止峠の由来についても以仁王との関わりが出てくる。以仁王は火玉（氷玉峠）の戦が終り、南へ引き下り箕の輪峠を越えようと馬を急がせた。箕の輪峠は1168メートルを数える厳しい高度である。以仁王の馬は何回となく脚を止めた。そこで箕の輪峠は駒止峠と呼ばれるようになった。峠付近は駒止湿原と呼ばれる高層湿原である。この湿原は昭和村の玉川の水源となっている。玉川の合流付近の下中津川には古峰信仰の石碑が残されていた。

大内宿には高倉以仁王に関わる遺跡が数多くある。袖窪・御側原・桜木姫墓・薬水・大内などである。袖窪は以仁王の住居のあった所と言われ、栗の古木や御居間石という人工石が残されている。大内は大内裏にちなんで大内の里と呼ぶようになった。

源頼政の子の乙部重朝の娘が桜木姫である。桜木姫は以仁王と共に敗走を続け、尾瀬大納言と共に大内へ辿りついた。敗走の旅は苦労の連続で疲労を倍加させていた。倒れた桜木姫は薬水（墨水）が与えられた。病にはこれ以上打つ手もなく桜木姫は息を引きとった。大内の人びとにより手厚く葬られた。桜木姫の墓のあたりは御側原と呼ばれている。

今回の巡査で収集した資料、実踏をもとに冰玉の由来を整理してみた。雷(火玉・日玉・雷社)、玉造部(藤巻神社由緒書・火打ち石と石英岩・凝灰岩)、修驗道と山岳信仰に関するもの、高倉宮以仁王との関わりであろう。どの説も確定し難い。

#### [参考文献]

吉田東伍著 『大日本地名辞書』 富山房 昭和44年増補版

会津民俗学研究会編 『大川ダム建設に伴う水没部落内の物件・習俗等の生活実態調査報告書』

会津若松市 昭和48年

渡部 圣著 『会津の民俗』 昭和56年

田島町教育委員会編 『奥会津の民具とくらし』 昭和58年

西ヶ谷恭弘著 『史跡 田島山城』 田島町教育委員会 昭和59年

#### 会津大沼郡の玉川

玉川の川名は全国の野面によくみかける河川である。四十数河川の玉川の流れには、自然を取り込んだ暮しが営まれているが、その生活は玉川がもたらす自然によって、玉川独自の文化が芽生えている。

玉川の河床を覆う丸礫が自浄作用を果たして、清流となり、人びとが飲料水や業の地にもしたてた。山河や草木を基本に人びとが定住し、そのなかで生活の糧を求める。換言すると、玉川の川面は自然が創作した流れに、人びとがこの流れに順応しながら、土地に生きる業を選定していくことで、けっして大地を無理に加工したものではない。

ことに玉川辺では、清流を利用して醸造や機織業の地に、さらに古い時代においては、玉の加工者、玉作部の居を構える場にもなった。

こうした独特の土地柄をうむ源は、玉川が良質の水をもたらし、古代人の珍重した玉が採取できたことを語っており、それを川名で表現させたものと思われる。

帰化人たちが機を織り布を晒した武蔵玉川のごとく、生活の糧を機業に求めた玉川も少なくない。本研究では、わが国において数少なくなった青麻(あおぞ)の栽培地を尋ね、玉川との関係を論考しようと、会津の山里に分け入った。

南会津の玉川が貫流する山里は、只見川の上流で昭和村の生活環境を育ててきた。昭和村は昭和2年に、野尻村・大芦村が合併し現在の村名になった。昭和村は周囲を約1000mの山々に囲まれた山国であり、村人が早くから鍬を入れ、開発の手をのばしてきた沖積地は野尻川流域に広がっている。この流域に山里の人びとが生産の場を求め、暮らしの拠点である集落も設けていった。集落は山の自然傾斜が比較的ゆるやかな野尻川に面した河畔に路村形態をとる。昭和村の生活圏の拡大は、玉川流域よりもむしろ、自然条件の整ったこの河川流域に集中したことは、地形が語ってくれる。

野尻川よりも暮しの跡が少なく、自然と水音だけが現代にまで引き継がれたかのような河川に玉川がある。この流れは南会津郡駒止峠(1135m)を水源にして、矢の原高原の西側の渓谷を北進、昭和村下中津新田にて只見川の支流である野尻川に合流する。

玉川は見沢川および9本の諸沢を集め、標高は源流部の1070mから合流地点の460mへ山間をぬって、いっきに流れる全長約18.2kmの河川である。

玉川の由来は瀬の部分の角礫が、河床をころころと音を立てて流れて行く、また玉の様な形の丸石が採取できることから、この川名がついたと古者は語る。

玉川の玉という漢字には、一般に美しい物、貴重な物、神聖な物を意味する場合が多くみられる。これを水との関係でとらえてみると、貴重で美しい前者の場合の玉(ぎょく)を示し、古代人たちが珍重した石である。これは円球状に磨き上げられた宝石を示す。玉を加工して装飾等に磨きあげる玉作部(たまつくりべ)はこれを勾玉(まがたま)・管玉(くだたま)などに創作した。

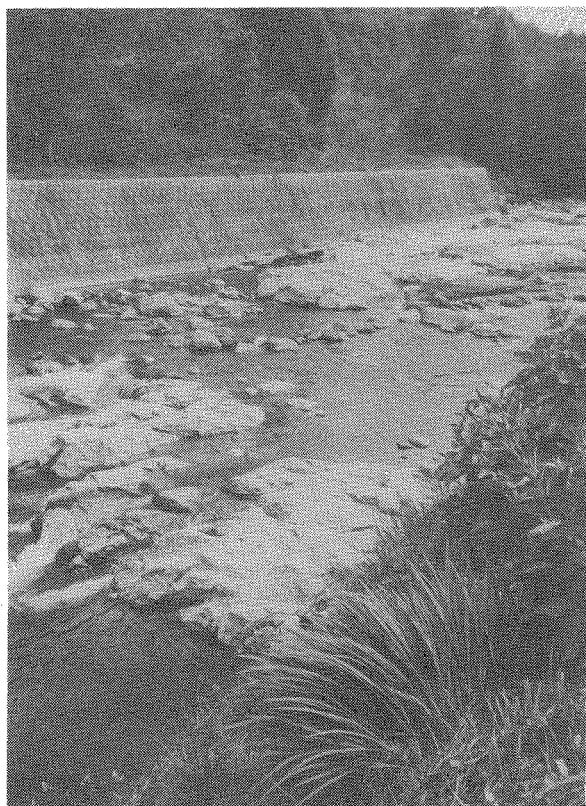
後者の場合、一滴の水を玉水と呼び、靈・魂などの神聖な物に通じて神格化されたものと考えられ、水质・水量ともに靈・魂にふさわしい水景で、山間を流れる清流を思いうかべることが出来る。

玉川に関するこれらの概念を、昭和村の流れに当はめると、次のような内容が論考できる。玉川の上流から下流にかけての地質分布をみると、駒

止峠から並松山までが石英安山岩類で占められ、以後、新生代第三紀上部層・中部層・下部層と続き、土地柄が一変する。更に野尻川と合流する山里付近から土砂が堆積した沖積層となっている。

両河川が落ち合う地点には、第三紀層が白い岩盤を一部水面上に露出させている。さらに河床には丸い形をした玉礫が比較的多く、この礫が河水を浄化させ、昔ながらの水景を今日まで伝えている。もっとも玉川の上流部の大部分を構成する石英安山岩類が、宝石としての玉の原鉱となるものである。玉川の源や、上流部に分布する石英安山岩が下流に運搬されていく過程で、角礫が研磨されて丸くなり、形・岩質ともに玉となったと考えられる。

しかし、玉が生まれるはずの最下流部に当る昭和村新田で、玉が取れたという話は



福島県昭和村玉川

古老からも聞きだせない。玉の製作を職掌とする玉作部の祖神、玉祖命（たまのおやのみこと）を祭った玉祖神社などの諸神を確認することも、できなかった。

したがって、礫形状の丸い石が河床を覆いこの礫が河水を自然浄化させることによって清水が流れる玉川といわれるゆえんである。

玉川の源流である駒止峠は、南会津郡田島町と南郷村の国境にあり、高峻で豪雪地帯のため、昔時から雪による遭難が多く、魔の峠と呼ばれてきた所である。そのため自然環境が保たれ、雪融の清流が渓谷に沿い村里の中心、下中津川集落まで流れしていく。

玉川流域には厳しい自然環境から、河畔に沿った集落があまり見られない。最上流に立地する三階山集落（723m）には、河川に沿ったわずかな平地に、細長い水田が分布しているにすぎない。下流にかけても、水田が未発達で、わずかに点在している。

以上のことから、昭和村の玉川を考えると、岩質としての玉ではなく、単に形状の丸い石が取れる川、あるいは駒止峠から流れ出る玉の様な清水という意味から、玉川と名づけられたと考えられる。

人間生活と河川のかかわりを考えた場合、前記した玉川のいわれの中には、生活と密着した清水の利用が潜んでいる。

昭和村では、野尻川と玉川の落ち合う地点に村内最大の水田地帯が開けている。これは沖積地に河水を引き水田としたもので、野尻川流域には細長い水田が続く。

しかし、山里の暮しは水田耕作よりも、山裾の緩傾斜を利用し、従来の切替畠を転用した畑地がみられる。なかでも、古代から衣類の原料になった青麻（あおそ）は、今も継承させながら細ぼそと栽培されている。

青麻とはイラクサ科に属する宿根性草木の植物であり、一名マオとも呼ぶ。本来マオは人びとの手を加えていない、全くの原野に自生しているものを指し、畠に栽培されているものを青麻と呼んでいる。

昭和村で織られているカラムシ織は、青麻の茎皮を蒸して皮をはぎ取ることによって得られた纖維を使用した織物である。

昭和村では、カラムシ織の原料の青麻を栽培するにあたり、昔からの焼烟と下肥を利用した栽培方法をとっている。この潜栽方法を固守するには、青麻から纖維をとる上で、重要な理由がある。化学肥料を使用すると青麻の根がいたみ、青麻から取れる纖維の質の悪化につながるため、化学肥料は一切使用されていない。したがって、山の急斜面を焼くことにより、草木の灰を肥料とし、さらに下肥を施すことによって、やせた山麓の土壤に地力をもたせている。

かつては下肥として、ほとんどの農家で飼われていた馬の糞と人糞とを施していたが、物資運搬用・代搔用と生活に結びついてきた馬の需要が近年の機械化により減少し、現在では人糞が使用されているという。村人にとって最も貴重な肥料であった人糞を、大地に施されることが、良質の青麻を今日まで受け継ぐ要因でもある。

青麻の栽培されている山麓の斜面は排水性が良く、青麻が根をはることができる。しかし、斜面を吹く

谷風によって生育途中の青麻が変形して、損傷すると良質の繊維をとることができない。このことから、青麻畑には谷風を防ぐカヤを三方に立て付けた柵が設けられている。さらに奥会津の里では、雪や霜が降りるので、霜害を防ぐために地面には保溫の意味でワラが敷かれている。

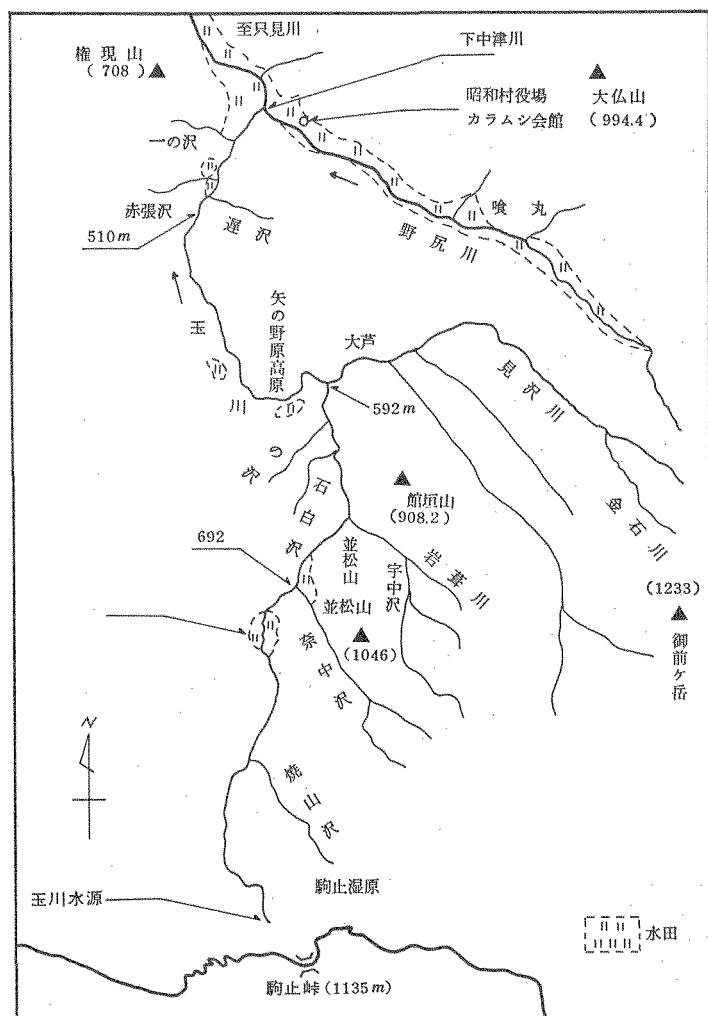
この様にして丹誠こめて育てられた青麻の歴史は古い。青麻からとれる繊維は、応永年間（1394年）にはすでに越後上布の原料供給圏に組み込まれており、昭和村は原料供給地として小千谷地方の商人が、国境の八十里峠を越して買いつけに来たという。

これにより庶民の労働着の原料に用いられてきた青麻が、商人の買いつけによって山間部の重要な換金作物となつた。そばや桑の畑に利用困難な、荒れた山肌では青麻の栽培面積が拡大されていった。

ところが200年程前、青麻よりも高値の付く繭の生産技術が導入されると、この山里にも馬屋の二階を利用した養蚕が普及した。織る方法がカラムシ織とほぼ同じであったため、養蚕は野尻川流域に広がる水田耕作に依存する集落に広まり、現金収入となつた。

玉川流域を野尻川流域と比較すると、玉川は周囲の急傾斜をもつ山々の渓谷を流れているため、野尻川より開発が遅れている。そのため、河川に沿った集落および水田等があまりみられない。

野尻川に沿った集落に養蚕が入った時点でも、おそらく玉川流域には、養蚕が入りえなかつたと考えられる。これは養蚕の基本である桑の木の栽培範囲に原因がある。一般に桑は葉を収穫してから蚕に与えるまでに、長時間では鮮度が落ちることから、養蚕農家の周囲で栽培される。このため、わざわざ遠距離の玉川流域に桑を栽培して、摘みに出かけたとは考えられない。この様なことが玉川流域に開発の手が、遅くまで入らなかつた



福島県昭和村玉川

原因になった。

しかしながら、開発の手が入らなかったことが、かえって玉川を清流に保たせる結果にもなりえたとも考えられる。さらに玉川流域に自生する青麻も、厳しい地形環境のため乱獲をまぬがれたと考えられる。ゆえに、本来自生を基本としたはずの青麻にとっては、玉川流域が最良の自生地であったと考えられる。

古くから受け継がれた青麻は、戦中戦後の食糧難で、青麻畑は食糧畑に転換され、さらに化学繊維の普及、着物需要の減少により、栽培は激減した。

この様な変化の中で、昭和 51 年に伝統的に受け継がれてきた青麻を原料に、かつての技法を再生させる糸づくりが始められた。この再興は、昭和村の発展に一役かっている。

観光開発に将来の路を切り開く山村が多いなかで、昭和村は山里の歴史的遺産、青麻とそれにまつわるカラムシ会館を建設した。山に生きる人びとの暮らしを後世に継承させる姿せいは、現代人に課せられた重要な課題でもある。

#### [ 参考文献 ]

吉田東伍著 『大日本地名辞書』 富山房 昭和 44 年増補版

昭和村農業協同組合工芸課編 『会津郷 からむし織』

### 北海道美深町の玉川

北海道の最北の大地、美深の開拓地にも玉川がある。冬季には冷下 30 度を越える日も、まれではないという厳寒の山里、上川支庁中川郡美深町は内地からの開拓者たちが、歴跡を遺したところ。

天塩川流域の玉川も、道内他の河川筋と変わらず、アイヌたちの生活舞台だったところである。それについて『美深町史』には次のように記されている。

安政 4 年 ( 1857 ) 松浦武四郎によって天塩川筋の探検がおこなわれ、この地方のアイヌの生活状況は『天塩日誌』によって初めて記録され、後世に伝えられた。

この「日誌」によると、当時本町内には、「オクルマツオマナイ」に 12 人家族のエカシテカニと「ヘケレフル」( 美深 2 線付近 ) にコロカイ ( 家内 4 人 ) 、トウリヘ ( 家内 2 人 ) の 3 戸 18 人が住んでいた。さらにそれから 15 年後の明治 5 年 ( 1872 ) には、4 人家族のトワンルが「ニウプ」に住んでいた『闇幽日誌』

と記載されている。しかし玉川の川筋に、アイヌたちの暮らしの拠点があったかどうかは、『美深町史』をみても不明である。

天塩川の河畔に拓かれた美深の街面から、国道 275 号線を西に約 10 Km 走ると、玉川の里が畜舎やビート畑、コーン畑、カボチャ畑など、現代の顔立ちで迎えてくれる。緑一色で覆われた畑地と、のどかに乳牛が草をむしばむ野原を創作した、天塩川に注ぐウルベシ川 ( 閏可 ) は玉川とも指称された清流である。

新第三期層の上に拓いた、玉川の土着の人びとは現在 9 世帯。玉川の流れとともに歴史を刻んできた農民たちである。

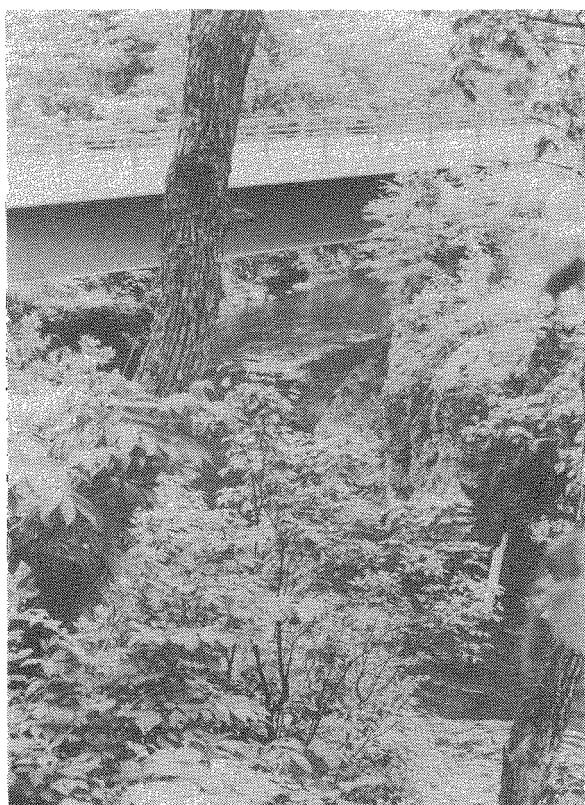
玉川の原野を島田ぐわで最初に切り開いたのは、明治 40 年 4 月のこと。佐々木勇五郎氏ら 8 名であった。当時は換金作物になる菜種を中心に、自給の麦、いなきび、じゃがいも等を栽培するだけで、まったく生活の基盤を整えるだけの暮らしであったという。フロンティアの時代というのは、どこも同じで、開拓者たちの住みかといえばアイヌのチセを使用した小屋で、中央に炉を切り回りにムシロを敷き、カンテラの燈火での生活であった。身にまとう衣服にしても、そまつな和服にワラジばきという身なりであったという。

翌明治 41 年になると、ウルベシ川（玉川）流域に更に入植者が増えて、48 世帯に達している。この年には玉川小学校の前身にあたるウルベシ教育所も開校されるが、生徒はわずか 15 名であった。明治 43 年になると、地味の良さが伝聞されてか、クトンベツ（広島団体クトンベツ入地）に広島県から 6 戸入り、里の馬車道と原野奥深く分け入るようになってから、土着できる里らしいいたずまいに整えられたという。

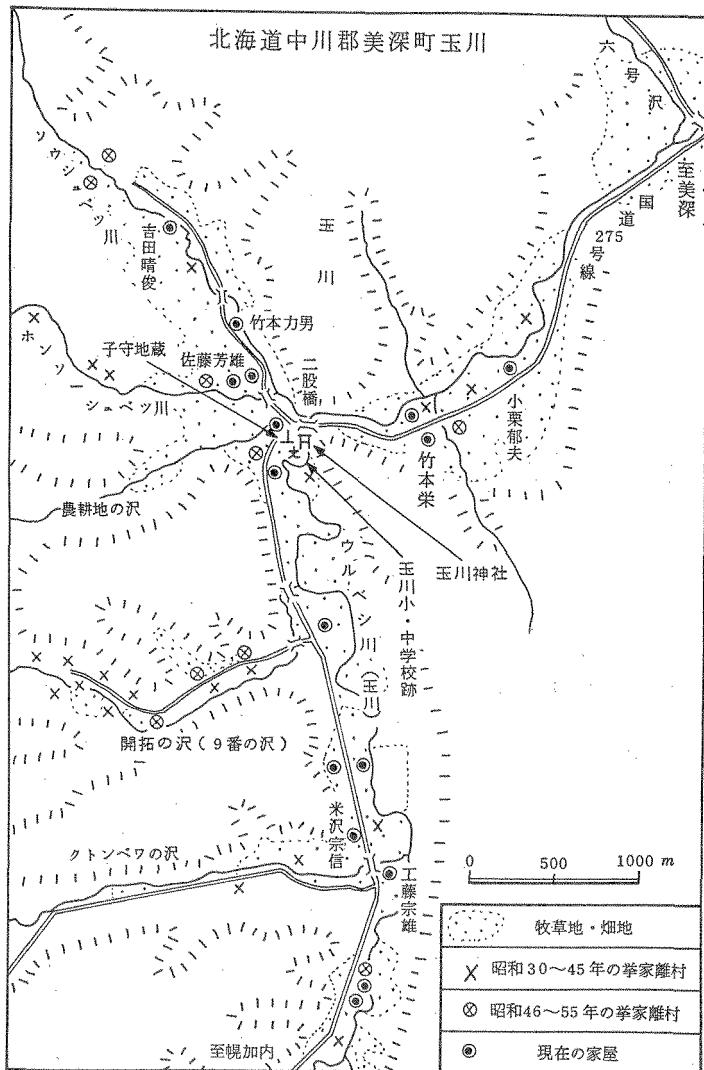
里の輪郭が整った明治 45 年には、愛媛県からの伊予団体もソウシュベツ入地に、越智森松氏など 10 戸が入り、ますます原生の粗野な大地に鍬を入れていく。この頃になると、小学校の児童数も 49 名に増加して、村の履歴に重みを感じさせないまでも、子供の笑顔と学舎を玉川の里にしづめて、村の機能が熟し始める。

こうした開拓史のなかで、玉川の字名と河川名が誕生するのは、昭和 10 年代になってからである。開拓 30 周年にあたる昭和 11 年、それまでウルベシと呼ばれていた谷間の里は、この年に玉川と改正されている。それにともなって小学校名も、玉川尋常小学校と改称されて、丸太を渡しただけの「丸太橋」（現在の二股橋）を中心に、玉川の里名で拓かれていく。

開拓地において、二世誕生は農家にとって、また玉川の里にとっても、最もめでたいことである。しかし当時は美深までの道のりが遠く、それも地道であっただけに、



玉川（ウルベシ川）と二股橋 北海道美深町



玉川にも産婆が不可欠であつた。そこで二世を産りあげたのが、在の郡ウノさんで、ひ弱な赤ん坊を元気になるまで泊りがけで世話をしたとか。次の時代を荷なう子供たちが多く誕生する、大正から昭和初期にかけた頃の、玉川の功劳者でもある。

二股橋のたもと、郡ウノさんも信仰したという子守地蔵が、古老人の信仰に語りを付けて、いまも三世、四世の手で守られている。赤い服や帽子をつけたお地蔵様、郡ウノさんを写したやさしい顔立ちだと、土着のひとはいう。玉川が困難な状況をむかえていた冬の時代のこと。今では里人だけでなく、遠く旭川方面から参拝者も多いという。

昭和 10 年代は内地から疎開者までも加わって、開拓の沢（現在 9 番の沢）に入植し、

戸数の増加を見る。しかし戦時のなか、食料事情の悪化によって、澱粉かすまでも食用にして自給体制をととのえる時代であったから、玉川の村里もその影響をまともに受け、日びの食料にも事欠く状況であった。食料不足の状態は戦後にまで及んでいたが、すでに土地に根づいた里人にとっては、余分なものを削ぎ落すことによって事態は数年で解消され、美深中学校玉川分校まで玉川小学校に併設させて、後継者づくりによる共同体としての基盤を整備していった。

土地の生産性が高まるとともに、昭和30年代にはトラクター導入（昭和33年）、電燈の開設（昭和35年）、郵便局設立（昭和39年）など、外部からの大きな文化の流れを受容して、玉川も繁栄期に入る。しかし昭和40年代ともなると、農業労働者が大都市へ流出するいわゆる日本経済の高度成長によって、労働効率の高い年齢層が、離村への路をたどる結果となってくる。ことに昭和42年に48戸を数

えた世帯が、昭和 59 年になると 14 戸に減少している。この年、玉川の村里とともに歩んできた玉川小学校でさえ廃校となり、二股橋のたもとの子守地蔵や玉川神社境内で、児童が遊ぶ光景もみられなくなつた。

さて玉川の由来であるが、昭和 11 年に里名と川名で誕生している。それまではアイヌ語で、パンケウリリルペシベと呼ばれていた河川である。それを和人は閏可川の川名をあてたが、『美深町史』によればこの経緯を次のように記載している。

パンケは「川下の」、ウリリは「雨竜」、ルペシベは「山を越えて向うの土地へ降りて行く路のついている川」、ウリリルペシベは雨竜越があったので、ここをパンケ「川下の」といったのである。『松浦日誌』はウリウルペシベ(右川)、『松浦地図』はウリウルヘシベとしており『闘幽日誌』『植民地撰定報文』も『松浦地図』と同様であるが、『地質調査鉱物調査報文』はウルウルペシベおよびパンケルペシベとし、『下名寄村全図』はウリリルペシベと現わしている。また『永田地名解』はウリリ・ルペシベ(鶴川、雨竜川へ下ル路)と訳している。字名改正前の地名をウルペシといい、音訳して部落名、校名を閏可としていた。

と記されている。このように、先学諸氏の探索をみても、玉川に結びつく来歴はなさそうである。果たして玉川を命名する意図が何であったのか、町教育委員会の菅野勝一氏の語りにしても、玉川は土着のアイヌが流傳する川名ではなく、後の開拓者たちが彼らの教養をもって改名したものという。しかし昭和になってから、玉川が誕生したにもかかわらず、その経緯については不明のこと。

まだ半世紀を経ただけの地名にもかかわらず、正確な解答が得られないというのは、どうも合点がいかず、里の古老をたずねてみた。里の記録をもとに、開拓の先輩がこう教えてくれた。福島県から移住したという、佐藤芳雄氏

宅では玉川の由来は

わからないという。

更に二股橋のたもと

で、梶田富彦氏にた

づねたが、まだ糸口

がつかめない。しか

し水沢氏が詳しいと

のことで早速たずね

た。水沢氏は心よく

話に応じていただき、

次のようなきさつ

を記録することがで

きた。



美深町玉川の開拓の沢

かつて天塩川に注ぐ玉川をウルベシ川といい、小学校もウルベシ尋常小学校と呼んだ。この昭和初期には、まだまだ鍬の入らない沢地が多く、開墾によって入植する余地は充分存在していたという。そこへ戦前地味が良いこの里に、大阪や東京方面から開拓者、また疎開者までも移り住んで原野を切り開いている。この移住者たちは二股橋より上流の、9番の沢（現在開拓の沢）に12戸入り、農業は勿論、かたわらに彫刻や絵をたしなむ人までも住んでいたという。この時期彼らも加わって、雑然とした集合体から、共同体としての暮らしの場に玉川は表情を変えている。

彫刻家高橋始次郎氏も、この移住者のひとり。白髪でヒゲの長い高橋氏が、当時の世相に最低の願いを込めて玉川と命名したと、水沢氏は語る。ただ高橋氏は戦後、郷里の大坂に帰郷したらしく、詳細にはわからないとのこと。

そういえば玉川小学校廃校記念『75年の歩み』（昭和59年3月発行）には、高橋始次郎氏の作品を以って校章に決定（昭和26年1月）したと記載されている。結局、高橋氏が意図したもののが何であったのか不明である。ただ吉岡フミエ氏作詞の校歌に

玉川ふじのみどりこく  
泉の流れ水清く  
自然の恵み身にあびて  
わが学舎ぞかがやける

と遺された玉川小学校歌のように、玉川は今も清流であることには変わりない。

それにしても、大阪から高橋氏がもち込んだと思われる玉川の川名と里名は、玉を当てるにふさわしい清水であったことは確かだ。もしかすると古歌に詠まれた三島の玉川を忍んで、教養人の彼が呼んだのではないかと、当時を知る古老人はふりかえる。

#### 〔参考文献〕

- 美深町史編さん事務局 『美深町史』 昭和46年11月発行
- 美深町農業協同組合 『びふか農協史』 昭和54年3月発行
- 美深町郷土研究会 『ピウカ』研究集録1. 昭和58年7月発行
- 美深町立玉川小学校廃校委員会 『玉川小学校廃校記念「76年の歩み」』 昭和59年3月発行
- 美深町郷土研究会 『ピウカ』研究集録2. 昭和60年5月発行

#### 北海道泊村の玉川

松前町の北、日本海の荒海の沿岸は北前船の寄港地が点在する。蝦夷と呼ばれた時代の、北海道の玄関が松前であっただけに、白砂の浜にそって、北へ和人の技術や文化が波濤していった。

泊村の泊にしても、岩内や神恵内と同様で、明治から昭和初期に隆盛をほこったニシン漁の時代も、地

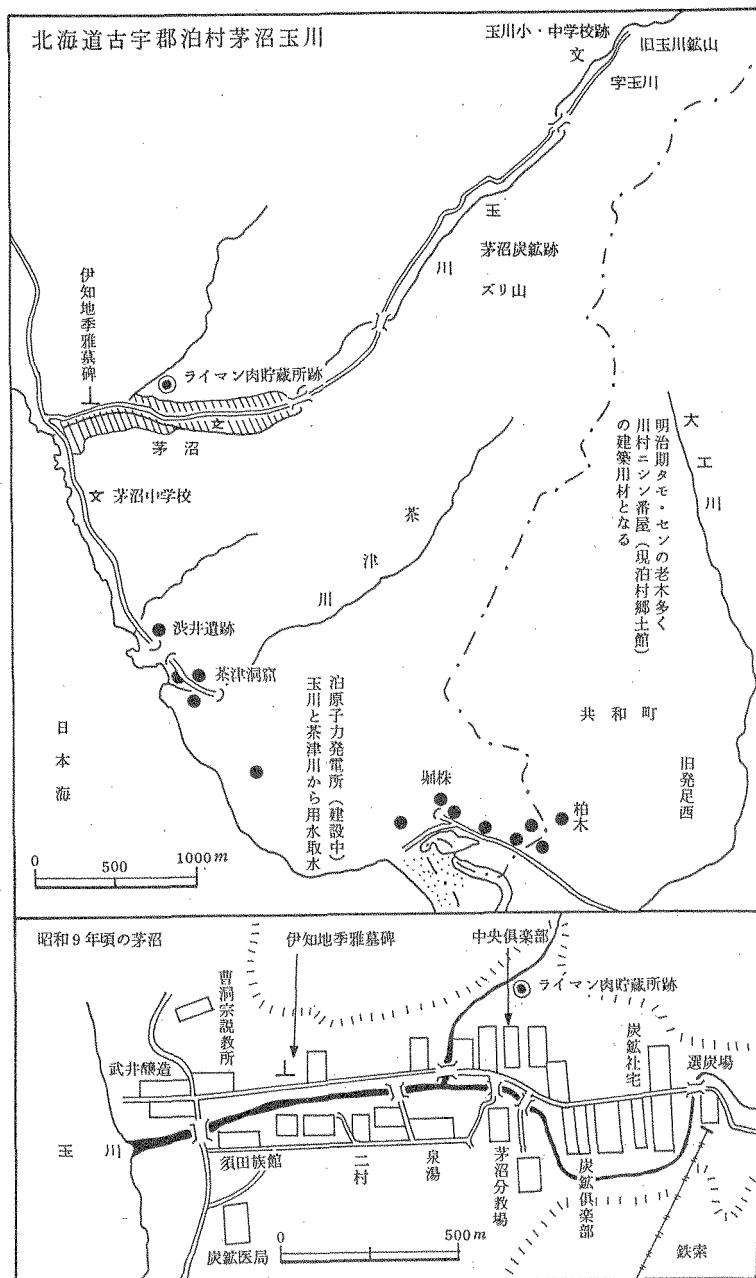
元でポッチ・ホツと呼ばれる「保津船」が行交う場所の機能を果している。19世紀に、ニシンを求めて松前、江差方面から潮の流れにのって、独自の漁法で追う海の男たちが増す。

限界地の泊の浜に、内地から流入し定着した漁民はせかせかした場所の勢に、ニシン労働者「ヤン衆」たちが東北から加勢に加わり、潮路をたどった人たちだ。小樽の運上屋鰯御殿は泊村の田中福松氏の番屋であったし、泊村郷土館兼ニシン番屋は川村慶次郎の番屋で、現在村が管理運営している。使用する建築用材は隣郷共和町の大工川奥の、タモやセンなどの原木を切り出して建築したという。豪壮な構えはニシンによって繁栄した、親方の羽振りをうかがわせる。

荒海に生きる男たちの  
「ソウラン、ソウラン」「漁夫（やとい）は神様だ」と、即興に節を付けて労働歌を口ずさむ様は、まさに男の生き甲斐ある粗い労働の場であったという。

鰯倉に入りきれないニシンが、急設のナップに野積みされた壯観きわまる時代は、蝦夷の荒海と奥深い大地の接点にあたる、波打際に光が当てられていた。もっとも、漁法の開発と輸送手段の確保のみが、時代を生き抜く鍵であったし、野望にみちた漁夫たちが、いてつく寒さに耐える労働姿勢も加わって、賑わいを増してもいるところ。泊村茅沼も、こうして燃焼したところであるが、他にも大地の奥に光を当てたところがあった。

嘉永6年（1853）6月、



ペリーが艦隊をひきいて浦賀に入港した翌年、日米和親条約（安政元年）で伊豆下田と箱館（函館）を開港したが、箱館に寄港する外国船は石炭燃料を使用した船舶であった。そこで幕府にしても、箱館付近に石炭山を開くことが急務となつて、白糠とここ茅沼に開鉱した。

茅ノ潤村網元、武井忠兵衛は常に新たな鮮かな世界への開発を志していた。彼の雇人で鮫釣船頭忠蔵が、安政3年（1856）茅沼の山中に分け入り、石炭を採取したのが茅沼炭鉱の始まりとされている。当時の漁夫には石炭の知識をもっていなかったので、「これが噂に聞く、唐船の燃料石炭ではないのか」と思い炉に入れてみると、まさしく石炭であることを確認したという。この実験的検証がきっかけとなって、安政4年（1857）2月14日箱館奉行村垣淡路が検分し、また9月には、松前藩士松場文左衛門を派遣させて、石炭を岩内の場所まで移送させている。

しかし万延元年（1860）になると、箱館奉行所手附栗原善八が試掘したが、経営には困難な地層であるとの判断で、採掘経営を中止している。この分断する地層にそむいて採掘するには、高度な技術者を招く必要が急務であったことから、幕府は米国の地質学者ウィリアム・ビー・ブレークとライハル・パンペリーの2人を招いて、蝦夷地を探索させた。なかでも茅沼には良質の炭層が埋蔵されていることをつきとめたことから、再びこの地質学者の協力で、採掘を開始した。

こうしたいきさつを背景に、その後開拓使に引継がれて、良質のコーカスを採炭していった。明治2年には秋田県出身の技術者、鈴木金吾と柴田金作、それにガール、スコットの両外国人が最新技術を導入して、輸車道、斜道などまでも新設している。

鈴木、柴田の両鉱山技師が秋田県出身だったためか、『茅沼炭鉱史』によると「現在の居住者の先祖の出身地についての聞きとり調査によると、初期の坑夫が秋田県鉱山出身者の多いことがわかり、これはこの時期および、その後における北海道鉱業開発と東北地方鉱山との労働力技術における結びつきを暗示している」と記載しているごとく、秋田との関係が親密であったことを語ってくれる。秋田の鉱山といえば、玉川の水脈を道標に十和田湖方面に深く分け入る仙北の郡に、佐竹藩が拓いた玉川鉱山がある。ここでの男たちが茅沼炭鉱の技術指導に当ったことは確かで、その影響から、茅沼炭鉱を流れる河川を玉川と命名したと、古老は語る。ただ秋田の玉川では金、銀、銅、鉛等を採掘する鉱山で、石炭は少ない。しかし、開発技術の基本はヤマ男たちにとって、石炭も同じであった。

時代が大分降りてくるが、茅沼炭田から更に玉川の流れに沿って上ること1km、玉川の奥深い溯源に、昭和18年帝国鉱業開発株式会社玉川鉱業所が開鉱した。石炭のみでなく、金や銀の鉱脈も埋蔵されていたのだ。

こうしたことから、茅沼字玉川には泊国民学校玉川分校を開校（昭和18年）させるまで隆盛をきわめ、戦後20年代は黒屋根の長屋が続く社宅が、鉱山の郷の顔立をきめていた。玉川鉱山の男たちも、やはりその多くが秋田県出身だと、赤茶けた玉川の川面をみつめてきた古老はいう。今の玉川の川面は、みるからに鉱山下の流れを思わせる、黄濁のなか表面が変色した礫が多い。そうした礫は明治9年「日本北海道茅ノ潤煤田地質的及地理的概測の図」拾七枚を著したライマンが、この地に滞在した時に使用したと

### 伝えられる肉貯蔵所

(天然の冷蔵庫)のある沢には、赤茶けた河床はみあたらぬい。

鉱山で汚染された流れに、玉川とは全国でもめずらしい。

一般に玉川は清流が多いにもかかわらず、秋田県の玉川と同じで、ここでも鉱毒の河川である。「玉」本来の意味と異なる

茅沼の玉川は秋田から移住したヤマ男たちが、故国の河川名を異郷の地に採用したことから玉川と命名したというが、これについて泊村の資料では認証できるものが何も得られなかった。

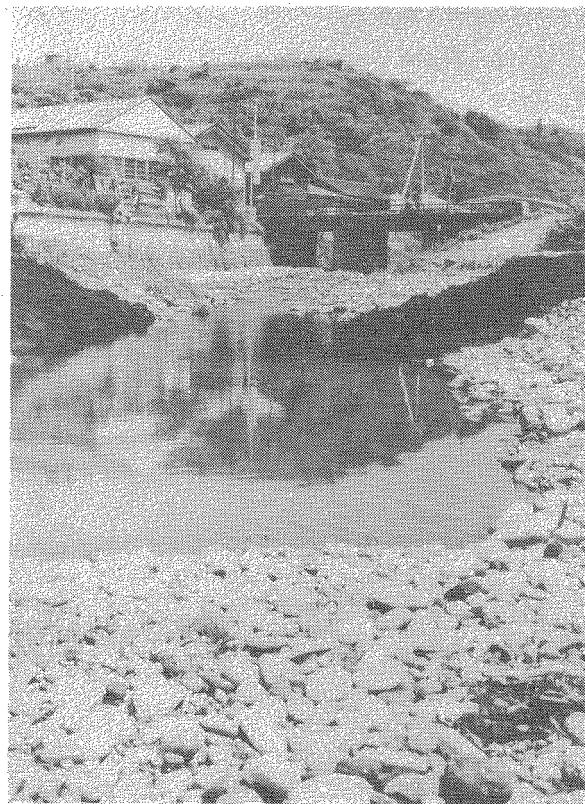
ただ、秋田の玉川鉱山とは無縁だとしても、疑問はおこらないが、もしそうだとすれば、古からの足跡に記されているはずである。そこで昭和59年に発掘された渋井遺跡をみたが、土器や石器類の出土は確認できるものの、玉類の出土は皆無である。

石器にはメノウ、玄武岩質安山岩、黒曜石、砂岩、硬質頁岩が用いられているが、これとて赤井村、十勝村などからの移送であって、茅沼の玉川流域から採取した岩石は認証されていない。

多元の検索で、祖先より伝言する茅沼玉川の法をさぐってみたが、古からの履歴は見えてこない。秋田で修業して、腕を磨い



泊村玉川



泊村茅沼の玉川

たヤマ男たちが、近代になって生活の舞台を茅沼において、水面を業の固めにしたなかに、玉川の来歴もひそむようである。

#### [参考文献]

- 秋田県角館誌刊行会『角館誌』昭和40年12月発行  
泊村『泊村史』昭和42年11月発行  
秋田県西木村郷土誌編纂会『西木村郷土誌』昭和55年8月発行  
茅沼炭鉱史編集委員会『茅沼炭鉱史』昭和57年3月発行  
北海道泊村教育委員会『波井遺跡発掘調査報告書』昭和60年3月発行  
『とまり』1985年泊村勢要覧

### 北海道共和町の赤玉川

日本海に面した岩内の隣郷、共和の町は国鉄岩内線が昭和60年に廃止された今も、農業で安定と成熟の時代に入ろうとする町である。共和の雷電メロン・スイカは北海道産の横綱とか。地元では道内で最も早く、稻作を取り入れた土地柄（岩手県人田沢彦吉が明治13年導入）でもあるという。それだけに、農業に注ぐ町民の勢に活気がある。

土地に照合して、ニセコ・アンヌプリの山塊にすそ野を広げる里には、厳しい冬を耐え抜いた素朴な地域風土の呼吸をくみあげた遺が容れられている。

共和町に開拓の歴跡が印されたのが、江戸末期の安政4年（1857）のこと、幕府は松前藩から分離させ官費をもって、その統治と開拓を前田幌似と発足常見に御手作場を設けさせた。本格的に開拓がおこなわれたのは、明治13年の岩橋轍助の開進社と、明治16年に金沢前田藩が士族授産の意味で結成した、起業社が設けられてからである。

前田起業社について、『共和町史』によれば「明治16年、金沢の盈進社長遠藤秀景氏の尽力によって、旧金沢藩主前田利嗣候から士族授産のため金10万円を受けて資金とし、千島押搾の鮭鱈業とリャムナイにおける農場經營を兼業とする起業社を設立し、西田三郎氏にこれを管理させた。地積150万坪を拠下げ約3万円を費して、事務所および居小屋数10棟を建築し、翌17年から3回にわたり79戸を移住させ、2カ年間農具、食糧などを給与した。これが前田村の始まりで現今の起業社と称する地域がそれである」と記している。

現在共和町大字前田の字名に、幌似、岩崎、起業社、宿内、梨野舞内、老古美、浜中、赤玉沢、それに前田などがある。ところで、赤玉沢の字名は役場の書類上記載されただけで、地元では民家もすぐなく、消滅した字名になったが、起業社からもそう遠くない位置にあり、早くから開拓の歴を入れた土地柄であったことは、古の語りからも確かである。古里の守り神、前田利家が祭神の前田神社は開拓地を見下す

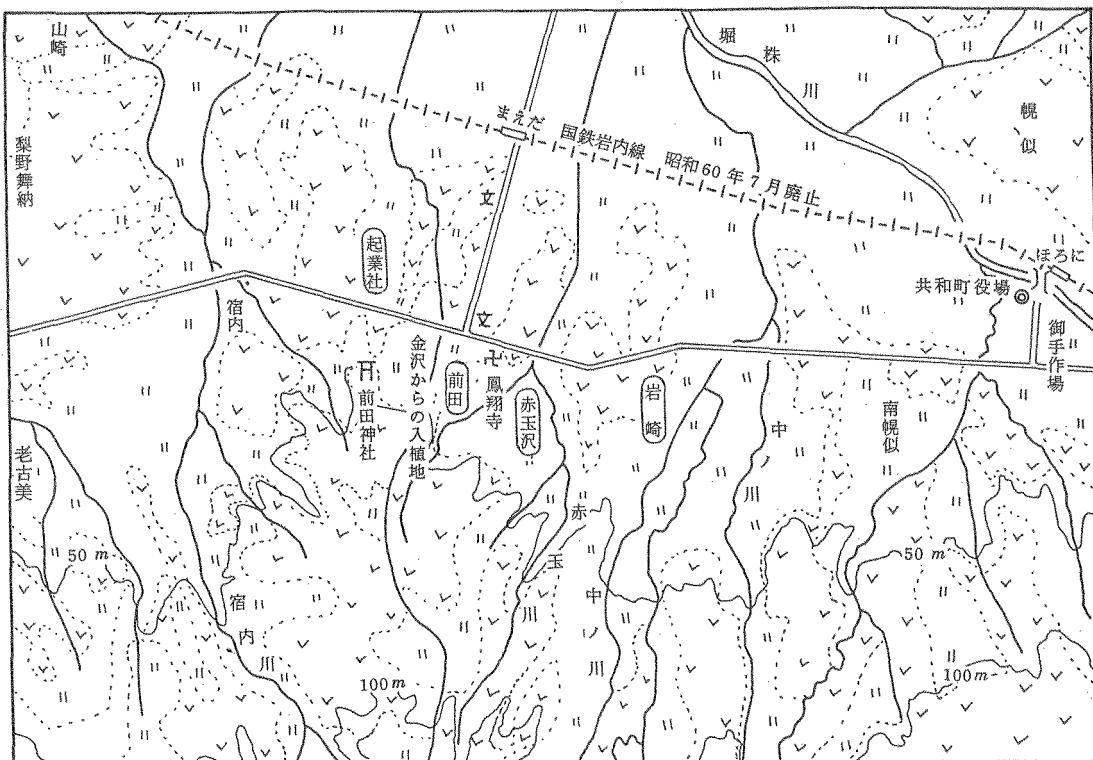
位置におかれていしたことからも、赤玉沢がその範中に属していることを物語る。

このように赤玉沢の字名はなく、赤玉川の河川名だけになってしまった今では、それを索るてだてもないが、金沢前田藩の開拓者たちによって名付けられた川名であることは、古者の語りからも認証できるし、今も前田神社の祭りには、石川県金沢市から、わざわざ近親者がおとずれるという。字前田に居住する黒田や西田等の姓を名のる、土地に根づいている世帯は祖先の系譜を、金沢に求められると町役場ではいう。

石川県金沢市には玉川町という町名が、今も現役している。サイフォンを応用した日本初の辰巳用水の分水、鞍月用水沿いにある町で、今でもこの用水に清水が流れる。この玉川町と赤玉川が、何らかの関係があるのか、金沢市を探索してみたが結びつく資料は得られなかった。

そこで再び『共和町史』を見ると、次のような記述が認められた。「移住した当時はどういうものか井戸を掘ることをせず、川水を飲料とするため、赤玉川（室岡氏の側を流れる川）などの川沿いに居を構えたが、丘の上の人のために、辻野氏から 20 町くらいのところから中の川の水を引いて飲用に供していた。上川氏が 10 才の頃（明治 31・32 年頃）父庄蔵が赤玉川の水を引いて、水田 1 反歩（田 2 枚）試作した」と記録しているごとく、赤玉川の河水が、鞍月用水にも劣らない、飲料水に用いられるだけの清流であったことは確かだ。

しかし、赤玉川の赤にはどのような意味がひそんでいるのか。赤木三兵著の『アイヌ語小辞典』によれ



北海道岩内郡共和町赤玉川

ば、「アカ(aka)とは水を意味し、wakkaとも言う」と記されている。赤木氏のいうアカだとすれば、アイヌ語と合成させて、清水の流れる川ということになる。チセヌプリの山地からの伏流水が顔を出す湧水で、金沢市の鞍月用水と同じに、飲み水にもなりうる清流であったことを、この細流は語っている。

そういうえば、イギリスの郷土語、アクア・ポリスの aqua(アクア)は水を意味し、ラテン語、サンスクリット語の「アカ」に由来しているという。仏教の語りにしても、サンスクリット語からきたという闘伽(あか)の用語がある。闘伽は墓前や墓前にそなえる靈水で、清水であるという。

そうすると、アイヌたちの伝承するアカもその影響からか。それとも原始以来、土着の古人たちが生活のなかで語ってきた言葉なのか。どちらにしても、和人とアイヌ人の文化が、赤玉川のなかに両者交錯する形で、容れられてきたのかも知れない。

#### [参考文献]

赤木三兵編 『アイヌ語小辞典』 昭和47年8月発行

共和町 『共和町勢要覧』 昭和59年

共和町史編さん委員会 『共和町史』 昭和47年発行

高室信一著 『金沢・町物語 町名の由来と人と事件の四百年』 昭和57年11月

#### 北海道瀬棚郡北檜山町の玉川

自然と調和する町、北檜山町。といっても北の大地の北海道ではどこにでも見かける景観であるが、開拓の小径が先人の鍬入れの跡となってひそんでいる町だ。この風情のある町奥に、クマザサの葉ずれと川瀬の音が、開拓者を根づかせてきた活力を、かき消すかのような、のどかな里がある。丹羽(にわ)という里で、ここにも玉川があった。

玉川の由来は前人未踏の曠野を住みかに仕立てた、丹羽五郎の活躍する明治期まで溯らなければならない。時の指導者丹羽五郎氏が最初に鍬を入れたところ、それが丹羽玉川を探るてだてになる。北檜山町は丹羽のように、内地からの移住者たちの手によって、粗野な大地を鍬と鋸で料理していった野面が多い。町の郷土資料館には阿波人形淨瑠璃の道具や、再現した開拓当時の家屋と家財などが遺されるように、町の歴史は開拓の歴史でもあった。

丹羽五郎という人物は旧会津藩士(福島県の出で、戊辰の役に家祿を失ってから東京に出ていた。彼はまだ江戸のいなせな風情が残る、神田界隈の警察官であったが、子供の頃から抱いていた北海道開拓の志だけは、街を守りながらも捨てないでいたようである。

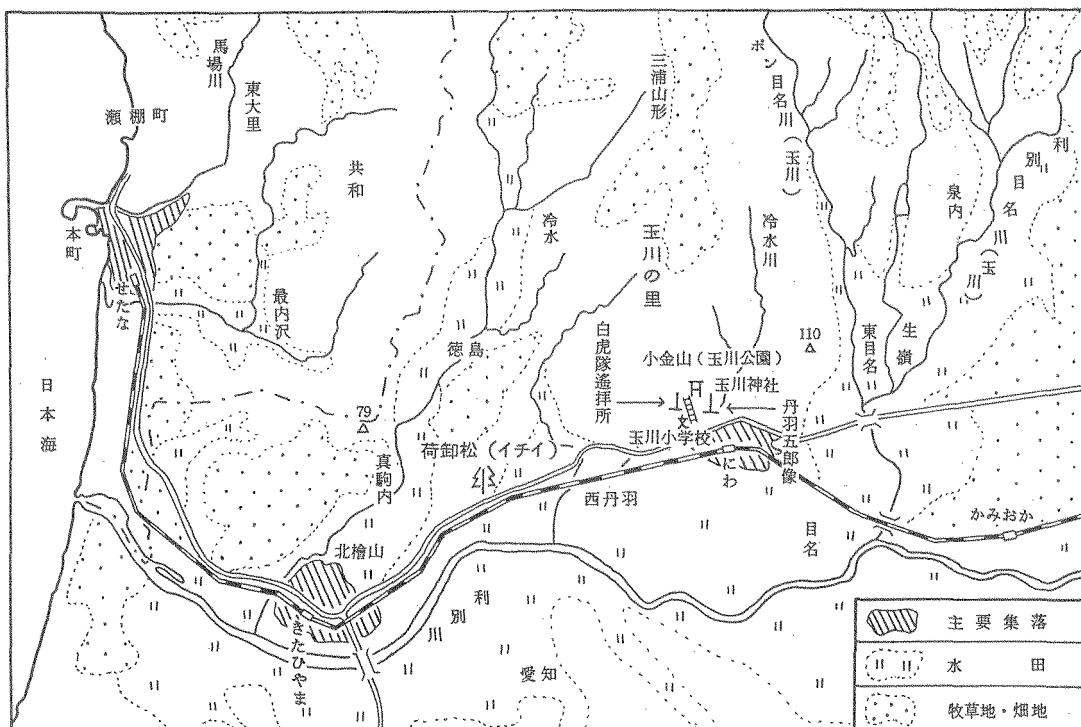
警察官の職を振り切る気持で、ついに腰をあげたのが明治22年7月のこと。まず開拓地選定のため行動を開始するが、立場上街の治安も守らねばならず思案した結果、わざわざ休暇をとって道庁の永山長官の視察に同行し、旭川付近をこの年調査した。しかし資金不足もあって、旭川開拓を断念したが、開拓の

夢だけはさめず、翌 23 年 7 月再び北海道に渡るが、こんどは旭川と気候風土の異なる渡島半島の日本海側に調査地域を移し、活氣のある場所から利別川流域に入っている。

流域を熟知しているアイヌ人 2 人を先導者に、丹羽五郎は丸木舟で原野に分け入って、目名川、ポン目名川での土着の条件を調査している。この調査で、入植地がほぼ決定したという。そこで明治 24 年 3 月には永年なじんできた警察官の職を辞職し、親族、知人合わせて 18 人の名義で先に入手しておいた利別原野百八十万坪に鍬入れをする。この入植が、丹羽五郎の夢が現実のものとなる年であり、クマザサの覆う原野に第一步を踏み入れる時でもあった。

渡道とともに彼は故郷岩代の猪苗代千里村の大閑栄作に、移民募集を依頼してもいる。結果は 12 戸の希望者を得たという。まだ雪深い明治 25 年の 3 月、会津を出発した一行は、瀬棚梅花都に入港して、利別川に分け入るが、なにさま自然が支配した、北の大地を初めて経験する者ばかり。クマザサの原野を踏み分けながら、それぞれ荷物を背負って、重い脚を進めるにはまだまだ遠い。そこで水松（樹種はイチイ）と呼ばれる巨樹の緑蔭で、野宿をしている。このオシコが「荷御松」と名付けられて、丹羽の里はずれ、国道 230 号線脇にたたずんでいる。「荷御松」の石柱には「玉川里丹羽村」と記され、開拓当初の歴史が忍べる。

もっとも、丹羽の里は丹羽五郎の影響もあって、岩代国との縁が根づよく、会津藩飯盛山で散った白虎隊遙拝所までも、玉川神社参道左隣に設けられている。



北海道瀬棚郡北檜山町玉川

ところで玉川であるが、地元の地図とか地形図をみても、河川名では記載がなく、神社名と小学校名に確認できるのみである。玉川神社は国鉄丹羽駅の北西小金山おきんざんにあり、明治25年岩代國の入植者たちを引率して入植するさい、青森県岩木山神社の坂上刈田麻呂、坂上田村麻呂の祭神を勧請したのが始まりという。朱塗りの社は玉川公園の高台にたたずみ、丹羽五郎の銅像とともに、丹羽の里なかを見守ってきた。272段の男坂とだらだら坂の女坂、それに白樺の古木が疎林となって散見できる境内と、水仙が色どりを添える参道沿いの玉川公園は、開拓の歴史をかみしめる里人の小径でもある。

ところで玉川の経緯であるが、丹羽五郎が著した『我が丹羽村の經營』の第一章、「玉川里丹羽村は後志国瀬棚郡にあり……」の昌頭の文章でもわかるように、かつては丹羽を玉川とも称したものと思われる。玉川の地名が字名に残されていないか、町役場で探ってみたが、確認できる資料はなかった。町なかの多くの地名が、入植者たちの内地から持ち込んだ故国名や郷名であるにもかかわらず、玉川の記録は遺されていない。

そこで丹羽五郎の子孫で、玉川小学校前の丹羽氏宅をたずねてみた。大字丹羽村の村名に、常に接頭辞のように付けられて玉川の里で伝言されているから、字名では存在しないとのこと。神社や小学校に冠されただけの玉川名は、丹羽氏の著した先の記録が示唆するように、郷の口碑とも一致する。

では玉川の由来になると、町役場の道高勉氏のお話でも、古老から流伝された語りはみられないという。しかし「荷卸松」にも玉川の里と記されているのには、開拓の時代にすでに存在していたのでは。それと



北檜山町の荷卸の松



荷卸の松（玉川里丹羽村開拓の跡）

も丹羽氏が入植する以前、アイヌたちの野野であった時代から、和人が彼らの暮らしを侵食し始める頃にまで溯らなければならないのか。それを解してくれる文献は、先の『我が丹羽村の経営』のなかに、次のように記されていることで知らされる。

「めな川」は源を「メップ岳」に発し、奇岩怪石の間を縫ふて泉内に至り、緩流して利別川に注ぐ。聞説く日本に六玉川あり其水皆清冷なるを以て、此名ありと。「めな川」の清澄透明なる六玉川に譲らす、依って「めな玉川」と称し、此地を玉川の里と名つけたり、とある。この「めな玉川」とは、現在のポン目名川と目名川を指している。水の脈を道標に流域をたどってみると、稲穂がこうべを垂れる整地された野野、歌を詠む風流の場所に仕立てられた故郷の風情があった。六玉川にたとえるならば、ナナカマドの朱に映える故地の玉川といったところか。勿論、先人の土音が聞こえる土地柄も遺る。

それにしても、丹羽の代名詞のように、玉川がいつごろ設けられたのか、記録にないが、東京で警察官をしながら教養を身につけた、丹羽五郎の説が有力である。だとすれば、丹羽氏が最初に調査でおとずれた明治23年から、小学校名で採用される明治30年9月までに付けられたことになる。

さしづめ北の若い大地に設けた、後世の作意による六玉川といったところか。今では決して清流とはいえない細流の水面であるが、玉川公園に立つと、何か詩情をさそう古里に成熟しているようだ。

丹羽中学校の校歌には

豊かに拓く 利別の その名も清き 玉川に  
遠き昔を しのびつつ 共に進まん 学びやの  
ああ その名ぞ丹羽

と学舎にまで玉川を取り込んで、故郷を誇るかっこうの野面で語らせている。それは全国で高名な近江八景（唐崎の夜雨・石山の秋月・矢橋の帰帆・栗津の春嵐・瀬田の夕照・比良の暮雪・堅田の落雁・三井の晩鐘）に擬して、ともに開拓の経緯を踏みしめてきた野中でも、荷卸夜



玉川 (ポン目名川)

雨・長牛山秋月・利別帰帆・不逢晴嵐・湯淵夕照・めな暮雪・ネト井隅雁・能教寺晩鐘を玉川八景に仕立てて、玉川の里を風流の故地で編んだことと類似している。これも丹羽五郎たちの作為によるという。粗い北の大地に、先祖の教養の遺が忍べる。

#### [参考文献]

秋里籬島『近江名所図会』文化11年

丹羽五郎著『我が丹羽村の経営』昭和2年発行

北檜山町『北檜山町史』昭和56年12月発行

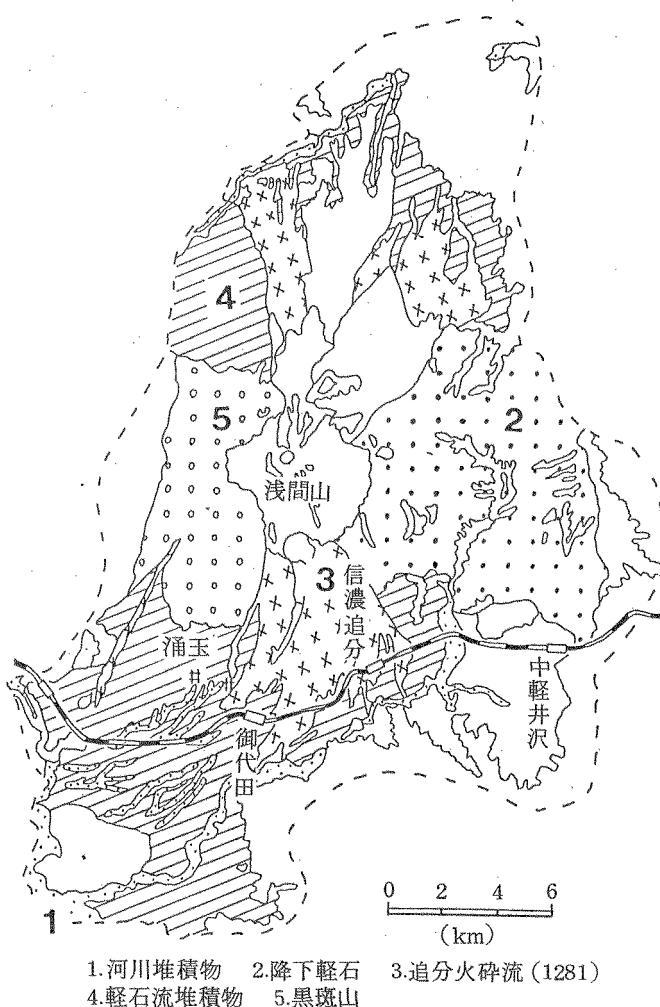
北檜山町役場『北檜山町勢要覧』昭和60年11月発行

#### 長野県御代田町の涌玉川

浅間山の南麓、カラマツの木立にお  
おわれた高冷の山里に、清水の湧く御  
代田の里がある。信濃追分宿のはずれ、  
分去れから浅間の山すそを、古道は善  
光寺道と中山道に分岐する。

緩やかに傾斜した里を通るこの道筋  
に、明治8年維新の御代を慶賀した御  
代と、古里の小田井、前田原、池田新  
田には、それぞれ田の漢字を当てたこ  
とで、御代と田を合成させて誕生した  
町だ。白樺の小径に別荘のこぼれ灯が  
さす、隣郷の軽井沢とちがって、土地  
に根づいた人と大地とが、深く編みな  
されている古里である。

この山ふところの火山灰の里に、七  
玉の池があった。清水の湧くこの泉は  
御代田町真楽寺の大沼池、御代田町塩  
町の湧玉、小豆玉、小田井の飯玉、そ  
して小諸市平原大豆田の大豆玉、赤沼、  
そして池の前の菖蒲玉の七玉である。  
このような水源は浅間の麓に無数にあ



る。水源からの水の脈は集水して、古里をうるおしているのだ。古くからの幹道も、こうした玉のオアシスみたいに道が設けられていて、東国の関の東に入る碓氷峠にかかるのである。水もままならぬ時代、水脈の屈折につれて、すそ野の宿場もきまる。

「七玉の池」の玉は浅間の伏流水が顔を出す、湧水を意味するという。涌玉の源泉も、塩野字大谷地のキャベツ畑の窪地にあった。甲賀三郎の妻が夫の後をおって、蓼科の大穴に飛び込み、ようやく明るい世界に出たところが、この涌玉だったという伝説をもつこの清水は、泉の中央からモッコリモッコリと湧く清水が盛夏でも秋冷を思わせるような低温で、水量の変化が少なく、下流の民の飲料水になっていた。

涌玉は涌玉堰とか涌玉川といって、御影用水、赤沼堰、平原呑堰、石神堰、大沼堰、出間清水堰など、佐久の野野を潤してきた流れである。とくに佐久平の水田開発には、これらの堰の役割が大きかった。馬瀬口の古老は在では水が余っていたので、下流の和田、市村の里へ酒五升で分けたという。五升の酒で水利権を認めさせたことは、塩野や馬瀬口の開拓が、まだまだ進んでいなかったことを物語っている。

こうした湧水は七玉の池はもちろん、一帯に点在していて、古から語り継がれた名高い玉の井が多い。古老的の伝言によると、昔京都の侍が浅間山に登って佐久平を見渡すと、麓に目を疑うような美しく澄んだ七つの池が見えた。京でもみられなかつたような清水をまえにして、侍は感激のあまり、いつとわなしに七玉という歌を詠んだという。その後この池を山里の人たちが、七玉の池と呼ぶようになったという。

なかでも豊富な清水をいまも湧かせているのは、飯玉の池と涌玉、そして大沼の池である。飯玉の池は前田原の里中にある。老松で覆われた小丘に飯玉神社が鎮座し、その参道石段の左隣りには清水の湧く、飯玉の古池がある。確証はないが、地元では良水の得られる場所を飯玉という語りが継承されているともいう。守るひともなく、自然の喰むに任せ、叢のなかに捨ててあるような古池であるが、いまも水音がしのべる。

前田原で伝言された口碑には、古里の水旱魃の季節に、きまつて活動する浅間の御山を拝める古習がある。山神様が住むという浅間山が御水をくださり、そのおかげで、生きる基本が整えられたとか、また長雨の季節になると水量を調節するよう祈ったという。

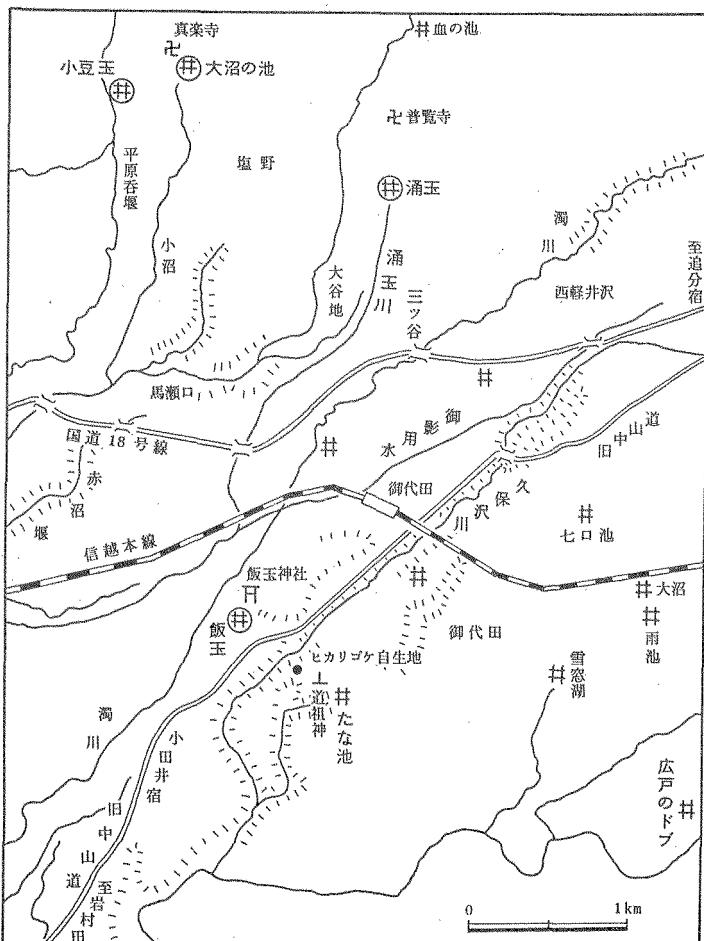
名水は里びとにとて生命線であったからこそ、よけい古からの作法を崩さない姿勢があったのだ。そこに、山里で根づく発想とかまえがひそむ。そういえば飯玉神社の背後が、雄大な浅間の御山になることから、自然のなかで活きた先人が、ただ一心に山神様に祈ることで、天然の上に宿る土地の作法が熟知できたようだ。だから良水の地下水が顔を出す場所を玉でおさえ、古人たちのとりでに仕立てた。それが赤土のまう曠野を拓く、里人の素顔であり、知恵でもある。

名刹真楽寺の大沼の池については、古寺の略縁起「大沼の池伝説」に詳しい。それによると、「近江の甲賀家には太郎、次郎、三郎の三兄弟があったが、三郎が最も武勇にすぐれていたので、父は三郎に甲賀家の存続をたくしました。この事を知った二人の兄たちは三郎を殺すことを決意して、蓼科の大穴に落したが、三郎は横穴からにげ、出たところがこの大沼の池だったという。しかし三郎はすでに蛇体になっていて、やむなく池に住んでいたが、体が大きくなつて池に住めなく、蓼科の双子池に移り住んだ後、諏訪

湖の湖底に住んだ」という。

いまでは佐藤竜泉作（昭和7年）という、三郎の蛇体が清水の湧く湖面から顔を出し、ヒシで覆われ苔むした古池に、神秘がただよう。応永2年（1395）建立の仁王門を入って、老杉の参道右手樹間から眺める大沼の古池は、ヒメマス養殖場を清水下につけてはいるものの、古から休みなくコンコンと湧く様を、蛇体の寝返りという、年に一度のおみわたりの現象で表現している。それだけに岸辺に立つと、時を越えたような世界に陥る。靈魂と結びついた古池のたまに、心惹かれるものが宿っていた。

このはなのさくやひめ  
真言宗智山派の浅間山真楽寺が、火を噴く浅間山に木花之佐久夜昆壳を祀って、爆発を鎮めたのに始まるという古刹であるだけに、境内で湧出する大沼の伝説も仏教伝来以前にまで溯らなければならない。認証できる資料もないが、古池の来歴を語りかけているようだ。ただ蛇体伝説と水脈の基本線には、祖先より伝言する、土地に根づく法を踏んでのこと。



長野県御代田町

里の地名に玉を当てたのは、中山道沿いにあつたという道祖神や庚神塔を集め、古道を語る児玉の里で、土地の古老が「オネ」と呼ぶ、久保沢川左岸の深い沢岸の里地名だけだ。七口、留池、大池、蓮池、つぼ谷地、前児玉、雪窓湖などの水の脈が里中にあって、これららの湧水を、児玉の玉は意味するという。古老的の語りをさぐると、児玉を七玉の池のひとつだという口碑がある。

しかし、子玉が転じて児玉になった伝説もひそむ。現に子供の健康を祈って、2月8日は各家いで藁馬を作り、馬の背にきなこ餅を背負わせて、道祖神に供えた後、餅を

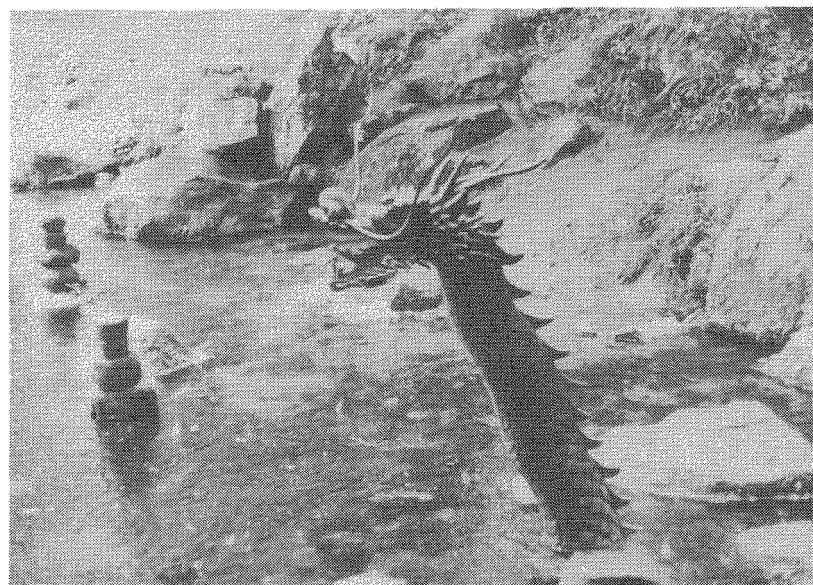
すり付ける古習が遺る。きなこで黄ばんだ道祖神は曠野を翔めぐる馬のように、子供が成長するような願いが込められているという。

七玉の湧水が、山里の顔立ちをきめた古巣であることから思考すると、児玉も前者の伝言に添えられ流伝されたのが後者ではないのか。それにもしても、浅間の粗野な大地に立つと、地下水脈の玉があちこちに点在する御代田の里の、そんな歴史と風土の香りがする。

地質をみても、地下水脈を麓の野で、顔を出させる土地に、浅間の御山が創作させている。御代田の里には軽石流の堆積物と、追分

火碎流が覆う。この軽石流の噴出物は1万1千年前、デイサイト質のマグマが噴出したもので、すべてが軽石や火山灰となって、御代田の曠野を敷きつめている。この火山の影響で、麓の巨木が高燃の軽石によって、炭化し埋没しているという。

またその上に、堆積した火碎流やスコリアなども分布するが、下層には仏岩溶岩流や黒斑山の噴出物があって、この互層が土地柄をうむ要因にもなっている。とくに里びとが「オネ」と呼ぶ沢沿いの崖からみ



古刹真楽寺、大沼池の蛇体



児玉の石仏（御代田町旧中山道沿い）

る露頭には、地下水を透水させる層と不透水の地層が明瞭で、清水の湧く摸査をみることができる。

玉の清水を里中にもつ、御代田は浅間の御山からうける唯一の恩恵なのか。それにしても、伏流の玉水が生活の基本を整えている。

#### [参考文献]

御代田町公民館 『御代田物語』 昭和 55 年 10 月発行

小諸市教育委員会 『小諸市誌』歴史編 (II) 昭和 59 年 3 月発行

萩原進著 『碓氷峠』 有峰書店 昭和 48 年 11 月発行

荒牧重雄 『日本の火山 浅間山』 アーバンクボタム 15 所収 昭和 53 年

#### 城下町の玉川（金沢市玉川町）

北陸の小京都、金沢の城下は天正十一年（1583）に藩祖前田利家が七尾から入り、それまでの尾山御坊の寺町から発展させた。織田信長に仕えた利家は、天正三年（1575）に越前北ノ庄の領主柴田勝家の与力であって、越前府中に三万三千石を領していた。その後加賀・能登・越中と支配地を拡大して、二代藩主利長の時代になって、徳川家康から百二十万石の石高を認められた。かつての領主畠山氏の支配がゆるぎ、一向一揆が鎮圧されたこともあって、「加賀百万石」の基礎がここに固まった。この古い城下町のなかにも、玉川がひそんでいる。

加賀の文化は藩祖利家の時代に、すでにめばえていた。利家は茶道を千利休と織田有楽斎から学び、能樂は自ら舞い、加賀宝生の伝説を遺す先がけにもなった。利家は秀吉の教養をも、容れたことによるが、加賀の文化が完全に爛熟するのは、五代綱紀の時代になる。

「天下の書府」と新井白石がうらやむほどの文献類の収集には、京都の朱子学者木下順庵や、順庵から儒学を学んだ室鳩巣らが招かれた。「百工比照」の標本にみられる美術工芸品は城内に細工所を設け、二十余の部門にそれぞれ細工職人をつけ、藩営工房の体制がためをして、贈答や藩邸で使用した。加賀金箔、加賀染、加賀蒔絵、加賀象眼のように、加賀を冠する思想はその工芸技術や製品を、藩自らの手元に留めようとする意図があったからである。

そういえば、明治の象眼の巨匠、米沢弘安は城下玉川町の出身で、父清左衛門から細工師の基本を学び、近代から現代へと加賀象眼を継承させた白銀屋である。この米沢家など金沢の白銀師たちが住む街が、玉川町（旧宗叔町）でもあった。

職人たちは京畿の技術者の指導のもとで腕をみがき、金沢の工芸を発展させた。彼らの勢もあって、隆盛をきわめた金沢の街面は寛永年間にはほぼ完成をみている。それも諸国の城下町より、武家地と寺社地、それに町人の居住地が整然と区画され、町人の街面は城下の 3 分の 1 にすぎなかった。

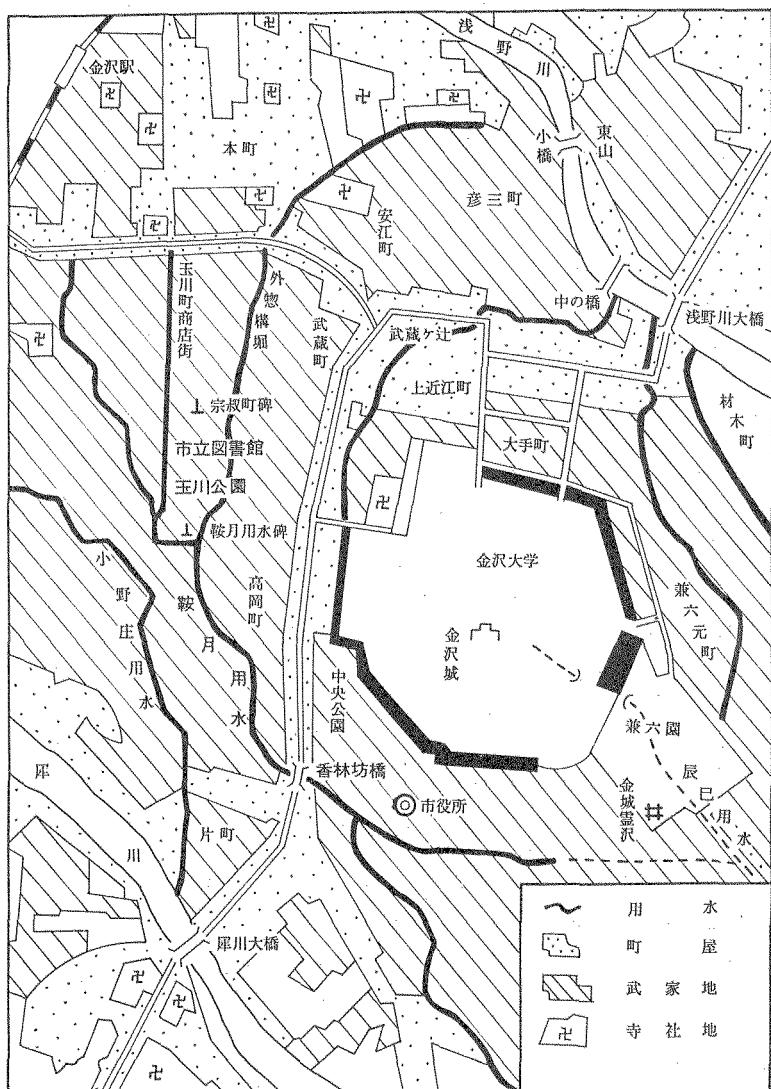
京づくりの格子でいろいろとられた町屋は、更に本町と地子町、それに相対請町に分けられ、いずれも金沢

奉行の支配下にあり藩の保護をうけていた。そのためか、町人の生活姿勢は規制されて、利益の追求というよりも、藩の御用に勢をださざるをえなかったという。

金沢城下のたたずまいのなかで、商家の賑わいは舟形に配置した犀川から浅野川までの、北陸道に沿った屋並のなかにあった。城下の範囲はそれよりも広く、金沢の南の端有松の一里塚から市井の町屋をすぎ、北の端春日の一里塚に至る沿道だった。この一里塚が城下と村里の境であったことは、その場所に松門（まつもん）を植て目印にしたという。現代でもその伝言で若松が植えられている。一般にいう「サイ」である。

現代の市域は、もちろんそれよりも拡大しているが、ただ古道と屋並のうえに現代の感覚で、改造を加える構造だけのことである。この化粧をとれば、かつての素顔の街面がみえてくる。今も古道に沿って、年輪をきざんだ老舗の暖簾と格子、それに甍も、時代を越えて古都の街面にひそむ。

香林坊から武蔵ヶ辻に至る道筋は城下でも賑わった屋並で、とくに現代の繁華街香林坊界隈は今様の顔立ちに整えられているものの、街の風情のなかに、藩政のにおいがする。香林坊の橋下を流れる鞍月用水は、用水の多くが暗渠になってしまったが、かつては水量の多い御城を囲む外堀でもあった。角の東急ホテルと109ビル下の流れは、かつての清水を現代の流れにかえて、玉川町方面に落としている。享保二年の『農業図絵』をみても、橋桁が二脚あって、河幅の広いことと水量の豊富な堀であったことを語りかけてい



石川県金沢市玉川町

る。今は無いが、堀の内側には土塁があって、竹や雑木が植えられていた。街面のなか、清水に映え風情のある用水だったという。

この流れは「伏越の里」とよばれるサイフォンの原理を応用した水道で、高度な技術工法の辰巳用水の清水も合わせ流している。辰巳用水は兼六園内山崎山下に通り、日本三大名園の園庭の水面と名木をささえている。日本最初の噴水の場所からは百間堀の窪地を越えて、御城内にまで引水したという。

そもそも城下町というのは紙と木と泥で創作したので、現代のように耐震耐火性には欠けていた。「火事と喧嘩は江戸の華」と呼ばれたごとく、諸国の城下にしても防火対策には知恵をしぼったにちがいない。金沢城下も同じで、北西の季節風やダシと呼ばれる東風と東南風のフェーン現象にあおられて、完成した城下の構造までも、廃墟にさせる大火も多かった。寛永9年(1632)には本丸までも焼失させている。防火用水と御城水確保の目的で、難工事のすえ辰巳用水を完工したのも、そうした意図があったからだ。

いつも観光客で賑わう兼六園の御庭の池も、藩政期からの用水施設を使用している。伝統産業工芸館前の遺溝が、いまも当時の清水を園内に導いている。その余水は小立野台地の灌漑用水や石引町から、台地下の城下の鞍月用水にも落している。こうして生命水、辰巳の清水が外惚構堀に流れ容れられたが、香林坊橋から先も街を潤しながら、浅野川大橋の下流で浅野川に落されている。その途中では玉川の街中を流し、庶民の生活水にもなった。

稿本『金沢市史 市街編 第一』の鞍月用水の水路の項に、鞍月用水は「香林坊を経、長町川岸に沿ひ、字四ツ屋に至り西に折れ穴水町に入る、此に至って北に分流するものは玉川町・木ノ新保五番丁を経て復た二派となり」と記載されていて、用水沿いに玉川町の街面があったことがわかる。しかし玉川という町名は藩政期の古図には、まったく記されていない。かつて武家地は何々様の御屋敷で一般に通用するわけであるから、武家屋敷には町名がなかった。そこで玉川姓の屋敷をあたってみても見あたらないことから、明治以降誕生した町名ということになる。

やはり玉川町は、明治四年に戸籍編成によって、宗叔町横町を改称し成立している。もともと武家地で、櫻田兵蔵と掘宗叔の屋敷があったことから、小塙堀宗叔町と呼ばれていた。市立図書館横の宗叔町と刻んだ石碑が、かつての名残りを留めている。

芳斎町二丁目38番地の北陸銀行英町支店横から、日本たばこ産業金沢支社に入る、昔ながらの細い商店街下を、鞍月用水がいまも暗渠となって流れる。その東片側の商店のみは玉川町になり、更に並行して走る東側の、市立図書館方面にのびる道路両側は玉川町である。

この界隈には昔の玉川の町名と、いまの玉川がひそんでいて、玉川町交差点角の金沢郵便貯金会館は大正十年から昭和三十八年まで金沢市の治安を保つ警察署があった。それも玉川署で、いまに残る隣の玉川消防署とともに、古都のまもりをかためていた。この貯金会館前の道筋には、このほか郵便局やガソリンスタンドに玉川の地名が散見できるが、何といっても目につくのは、市民の教養を高める金沢市立図書館が玉川町にあることだ。隣接する玉川公園とともに、昭和50年代に造成建築された現代風の図書館で、もとは日本専売公社金沢地方局の敷地であった。いまは一部を残して、昭和48年に工場が西金沢に移転

した。

当時の面影をしのぶ建物は、市立図書館別館で生れかわった、旧専売公社の工場だけだ。明治44年の煉瓦造2階建ての建物で、イギリス積みの煉瓦と白塗りの木の窓枠が、図書館に通う市井の人びとの心をなごませてくれる。

それにも、図書館と公園を合わせ

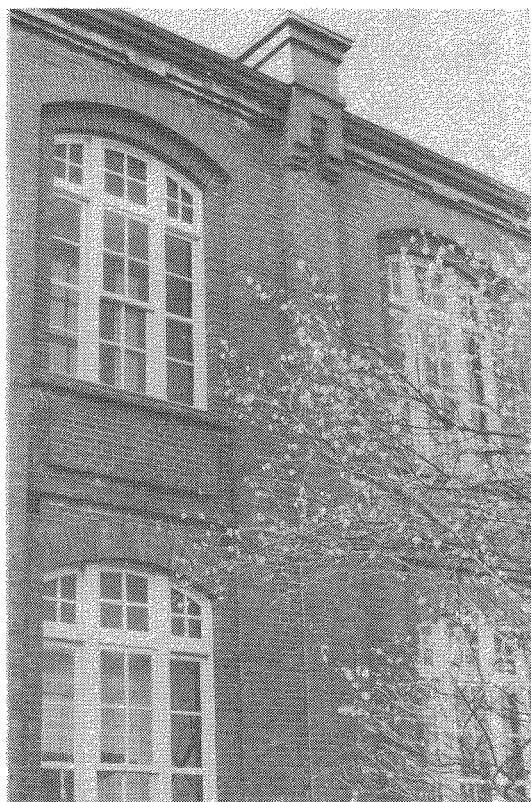
ると、他に類をみない広さだ。街の中心部にこれだけの施設が残せたのも、工場跡地を有効に利用しようとする市民の声を反映させたからである。これで玉川の地名も後世に連綿と流伝されるが、それも市民の文化と教養を高め、啓発する街面に変わっていくことだろう。金沢の泉の源であってほしい。

では玉川町の町名の由来について、現地で古老的の語りや市立図書館の古書をもとにさぐってみたが、まだ百年余の町名だというのに、そのいきさつについて、まったく伝言されていない。もちろん、玉川という河川の存在についても検証できなかった。しかし玉川町には2つの流れがあるから、それに関連した水面に玉川がひそんでいいか探索してみた。

玉川町と高岡町の境を通る道筋の溝が、



玉川公園 (金沢市玉川町)



玉川町の金沢市立図書館別館

外惣構堀の面影をとどめるようであるが、この堀は香林坊、長町川岸を経て、四ツ橋に至って玉川と高岡両町の境を北に流れていた。この堀筋の長町一丁目と玉川町三谷産業の間の、ハンダスポーツ店前から、鞍月用水は西に折れ、堀と分かれている。今はこの分流地点に昭和57年に建立した、高さ1.5メートルの「鞍月用水の碑」が語ってくれる。

昭和58年の『加賀辰巳用水』（辰巳ダム関係文化財等調査団刊）には、「幕藩体制の確立による軍事目的の漸減と、城下町の膨張及び人口の過密化は、しだいに取締りを形骸化させ、藩士の邸地あるいは町方の宅地としての取込みを促すこととなり」と、次第に武家地内の庭園を潤したり、町人の精米、製油の水車を廻し、灌漑水にも用いられる水音になったようである。

市井の人びとの生活水に利用された鞍月用水は、先の碑を過ぎ再び三谷産業の西角を北に流路を変え、長土堀一丁目と芳斎一丁目の間で、北の流れと西に流れる用水に分流していた。この北への流れが北陸銀行英町支店の方向にのびる、古い屋並の下を暗渠となって流れる筋になる。この流れに沿う街面が、明治からの玉川町で、流れを玉川と呼称したと市教育委員会文化課や市立図書館の係官はいう。古老の語りにしても、御城水だった辰巳用水を引水したのが鞍月用水であるから、玉の水という、美しい川面と清流の御水だったことから、流れを古習で玉川と呼んだという。

しかしその証は何もない。鞍月用水の水音だけが知る、玉川の来歴であった。

#### 〔参考文献〕

- 辰巳ダム関係文化財等調査団 『加賀辰巳用水』 昭和58年  
金沢市役所 『橋本 金沢市史 市街編 第一』 大正5年  
金沢市教育委員会 『金沢市歴史のまちしるべ案内』 昭和58年  
土屋又三郎 『農業図絵』 享保2年  
『金沢城下町図』 文政11年  
金沢市教育委員会 『金沢の歴史的建築』（金沢市文化財記要57） 昭和61年

#### (2) 玉川(玉)の一覧表

河川名のタマ川に関する一覧表

北海道	玉川（古宇郡泊村）
玉川（中川郡美深町）	玉垣沢川（石狩川流域）
玉川（日高振興局ポン川、瀬棚郡北檜山町丹羽）	赤玉川（岩内郡共和町）
埼玉川（利別川流域）	

青 森 県

玉 川 (青森市浜田)  
玉 川 (東津軽郡平館村野田・野田の玉川)  
玉坂川 (西津軽郡深浦町)

岩 手 県

玉 川 (東磐井郡藤沢町)  
小玉川 (九戸郡軽米町小軽米)  
玉 川 (九戸郡野田村・野田の玉川)  
玉の脇川 (久慈市)

秋 田 県

玉 川 (仙北郡田沢湖町)  
上玉田川・下玉田川 (由利郡鳥海村)

山 形 県

玉 川 (西置賜郡小国町)  
小玉川 (西置賜郡小国町)  
玉 川 (東田川郡羽黒町)  
白玉川 (飽海郡八幡町)

宮 城 県

玉 川 (塩釜市・野田の玉川)

福 島 県

玉 川 (いわき市小名浜野田・野田の玉川)  
玉造川 (いわき市)  
玉星川 (伊達郡)  
水玉川 (大沼郡本郷町)  
玉 川 (大沼郡昭和村)

茨 城 県

玉 川 (那珂郡大宮町)

埼 玉 県

玉 川 (比企郡玉川村・玉壺川)

東 京 都

多摩川 (玉川・調布の玉川)  
玉川上水 (武藏野を流れる人工の上水)  
玉 川 (小笠原村母島)  
玉 川 (千代田区永田町参議院議長公邸内)  
玉 川 (文京区関口二丁目と目白台一丁目の)  
境・旧河川

千 葉 県

玉 川 (我孫子市布佐付近、布川を玉川)  
玉 川 (鴨川市)

神 奈 川 県

玉 川 (厚木市)  
新玉川 (伊勢原市)  
玉 川 (小田原市石橋)

山 梨 県

玉 川 (都留市玉川)  
須玉川 (北巨摩郡須玉町)  
玉 川 (中巨摩郡竜王町)  
玉ノ入川 (秋山川流域)  
玉 川 (北都留郡小菅村)  
丹波川 (北都留郡丹波山村)  
玉峠川 (北巨摩郡武川村)

新潟 県

珠 川 (十日町市馬場)  
玉 川 (両津市玉崎)

富 山 県

玉 川 (高岡市伏木)

長 野 県

涌玉川 (北佐久郡御代田町)  
玉 川 (飯田市上久堅)

静岡県	島根県
玉川（三島市）	玉造川（八束郡玉造町）
丹間川（掛川市）	
荒玉川（引佐郡龜玉村）	
愛知県	岡山県
玉野川（春日井市玉野町）	玉川（高梁市玉川町・玉谷川の別名）
	玉田川（真庭郡八束村）
福井県	広島県
玉川（丹生郡越前町）	田万里川（竹原市）
滋賀県	山口県
玉造川（日野川をいう）	矢玉川（豊浦郡豊北町）
玉川（草津市・野路の玉川）	玉江川（萩市）
	田万川（阿武郡田万川町）
三重県	香川県
玉川（度会郡玉城町）	田万川（綾歌郡綾上町）
京都府	玉浦川（大川郡志度町）
玉川（綴喜郡井手町・井手の玉川）	
奈良県	徳島県
玉置川（吉野郡十津川村）	玉笠谷（海部郡海南町）
和歌山县	愛媛県
玉川（伊都郡高野町・高野の玉川）	玉川（松山市一番町、旧河川）
玉川峡（伊都郡九度山町）	玉川（越智郡玉川町）
玉置川（東牟婁郡）	玉谷川（伊予郡広田村）
大阪府	福岡県
玉川（大阪市福島区）	玉川（福岡市南区玉川町）
玉川（高槻市・三島の玉川）	
玉串川（柏原市より大阪市へ流れる川）	
兵庫県	佐賀県
玉落川（佐用川の支流）	玉島川（東松浦郡浜玉町）
玉川（淡路島津名町・宝珠川の別名）	
	大分県
	玉来川（竹田市玉来）
	真玉川（西国東郡真玉町）

宮 崎 県

玉カツラ谷（東臼杵郡北郷村）

鹿児島県

戸玉川（とだまご、大島郡住用村、奄美大島）

### 地名のタマに関する一覧表

北海道	玉の脇（九慈市）
玉川（中川郡美深町）	生玉（盛岡市）
玉川（瀬棚郡北檜山町丹羽）	
玉川（古宇郡泊村）	秋田県
丘珠（札幌市東区）	玉ノ池（本荘市）
青森県	玉の池（南秋田郡若美町）
玉島（青森市大野）	玉内（鹿角郡八幡平村宮麓）
玉川（青森市浜田）	玉川（仙北郡田沢湖町）
玉水（青森市宮田）	玉米（由利郡東由利村館合）
玉作（青森市）	玉田（由利郡鳥海村）
漆玉（上北郡東北町本町）	山形県
玉掛（三戸郡南部町）	小玉川（西置賜郡小国町）
玉水（西津軽郡柏村）	玉川（西置賜郡小国町）
玉ノ沢（西津軽郡岩崎村）	高玉（西置賜郡白鷹町）
玉堤（西津軽郡深浦町）	玉作（鶴岡市上清水）
岩手県	玉井（山形市、旧町名）
玉の沢（久慈市山根町）	玉ノ井（西村山郡朝日町）
玉山（陸前高田市竹駒町）	玉庭（東置賜郡川西町）
玉ノ木沢（江刺市玉里）	玉川（東田川郡羽黒町）
玉里（江刺市）	玉虫（東村山郡山辺町大蕨）
玉山（岩手郡玉山村）	玉ノ木（米沢市）
奥玉（東磐井郡千厩町）	玉庭（米沢市、旧地名）
玉川（東磐井郡藤沢町西口）	高榆（たかだま、天童市）
根玉（下閉伊郡岩泉町）	高櫛（たかだま、天童市）
小玉川（九戸郡軽米町小軽米）	玉野（尾花沢市）
玉川（九戸郡種市町）	舛玉（最上郡大蔵村）
玉川（九戸郡野田村）	玉平（鶴岡市金峰山）
	玉谷山（鶴岡市金峰山）

宮 城 県

玉 川 (塩釜市玉川)  
榆 木 (たまのき、古川市)  
玉の木 (角田市君萱)  
玉 浦 (岩沼市押分)  
玉 崎 (岩沼市南長谷)  
玉出清水 (仙台市、旧地名)  
玉 貫 (伊具郡丸森町)  
玉 造 (玉造郡)  
大 玉 (登米郡登米町白根牛)  
浅部玉山 (登米郡中田町浅水)  
敷 玉 (古川市、旧村名)

福 島 県

玉子湯 (福島市庭坂)  
玉 川 (郡山市熱海町)  
高 玉 (郡山市熱海町)  
玉 露 (いわき市泉町)  
玉 川 (いわき市小名浜野田)  
小 玉 (いわき市瀬戸町)  
玉 沢 (いわき市勿来町白米林崎)  
馬 玉 (いわき市常磐馬玉町)  
玉 山 (いわき市四倉町)  
玉 広 (いわき市四倉町薬王寺)  
高 玉 (いわき市四倉町薬王寺)  
小 玉 (いわき市小川町西小川)  
山 玉 (いわき市山玉町)  
玉 造 (いわき市)  
玉 坂 (白河市双石)  
小 玉 (須賀川市塩田)  
玉 野 (相馬市)  
大 玉 (安達郡大玉村)  
玉 井 (安達郡大玉村)  
玉 川 (石川郡玉川村)  
玉 梨 (大沼郡金山町)  
氷 玉 (大沼郡本郷町)  
玉 野 (東白川郡棚倉町)

群 馬 県

飯 玉 (高崎市飯玉町)  
玉 村 (佐波郡玉村町)  
南 玉 (なんぎょく、佐波郡玉村町)

栃 木 県

玉 田 (鹿沼市玉田町)  
田 間 (小山市)  
玉 田 (矢板市)  
埼 玉 (黒磯市)  
飯 玉 (安蘇郡田沼町小見)  
玉 東 (塙谷郡塙谷町喜佐見)  
玉 東 (塙谷郡塙谷町熊ノ木)  
玉 生 (塙谷郡塙谷町熊ノ木)

茨 城 県

玉 戸 (下館市玉戸)  
田 間 (結城市)  
玉 田 (鹿島郡旭村)  
阿 玉 (鹿島郡大洋村)  
玉 造 (久慈郡金砂郷村)  
玉 (久慈郡金砂郷村下利員)  
玉 取 (筑波郡大穂町)  
玉 川 (那珂郡大宮町)  
小 玉 (那珂郡緒川村)  
玉 造 (行方郡玉造町)  
玉 川 (行方郡玉造町、旧村名)  
玉 里 (新治郡玉里村)  
船 玉 (真壁郡関城町)  
大国玉 (真壁郡大和村)  
玉 (結城郡石下町若宮戸)  
玉 川 (那珂郡瓜連町)  
玉 簾 (日立市)

埼 玉 県

埼 玉 (行田市・県名)  
玉 井 (熊谷市)

玉川	(比企郡玉川村)	阿玉台	(香取郡小見川町)
児玉	(児玉郡児玉町・美里村)	編玉	(香取郡小見川町)
玉作	(大里郡大里村)	玉造	(香取郡多古町)
若小玉	(行田市)	小玉	(香取郡多古町南玉造)
田間宮	(鴻巣市、旧村名)	玉野	(君津郡袖ヶ浦町)
東京都		白玉	(山武郡山武町)
多摩川	(大田区)	玉浦	(海上郡飯岡町)
玉川台	(世田谷区)	神奈川県	
玉堤	(世田谷区)	多摩	(川崎市多摩区)
玉川	(世田谷区・昭島市)	玉川向	(川崎市中原区下沼部)
玉川田園調布	(世田谷区)	玉川淵	(川崎市中原区上平間)
豊玉	(練馬区)	玉繩	(鎌倉市)
多磨	(府中市多磨町)	新玉	(小田原市浜町、旧町名)
玉川学園	(町田市)	玉川	(小田原市石橋)
多摩辺	(昭島市拝島町)	才玉	(西玉、秦野市名古木)
多摩平	(日野市)	玉川	(厚木市七沢)
多摩湖	(東村山市多摩湖町)	山梨県	
多摩	(多摩市)	国玉	(甲府市国玉町)
玉川向	(西多摩郡秋多町草花)	玉宮	(塩山市、旧村名)
大丹波	(西多摩郡奥多摩町)	玉井	(塩山市竹森)
小丹波	(西多摩郡奥多摩町)	玉川	(都留市)
玉川附	(西多摩郡羽村町羽)	須玉	(北巨摩郡須玉町)
玉ノ内	(西多摩郡日の出村大久野)	多麻	(北巨摩郡須玉町)
玉川	(小笠原村母島)	丹波	(北都留郡丹波山村)
千葉県		玉川	(中巨摩郡竜王町)
水玉	(館山市)	玉穂	(中巨摩郡玉穂村)
玉造	(佐原市)	三珠	(西八代郡三珠町)
玉造	(成田市)	新潟県	
田間	(東金市)	珠川	(十日町市馬場)
仁玉	(旭市)	玉崎	(両津市)
玉前	(市原市)	赤玉	(両津市)
藏玉	(君津市)	玉郷立	(岩船郡関川村上関)
玉川	(鴨川市)	見玉	(中魚沼郡津南町秋成)
矢玉	(夷隅郡大原町若山)	玉の木	(西頸城郡青梅町市振)
阿玉川	(香取郡小見川町)		

富山県

玉川（高岡市伏木）  
玉免ヶ丘（高岡市野村）  
大玉生（婦負郡八尾町）  
土玉生（婦負郡八尾町）

岐阜県

玉姓（岐阜市玉姓町）  
玉姫（岐阜市玉姫町）  
玉川（岐阜市鷺山玉川町）  
玉森（岐阜市玉森町）  
玉宮（岐阜市玉宮町）  
玉井（岐阜市、旧町名）  
玉井（加茂郡八百津町）  
玉（不破郡関ヶ原町）  
玉姫（吉城郡神岡町釜崎）  
玉川（吉城郡神岡町船津）

長野県

玉川（茅野市）  
蚕玉（松本市蚕玉町）  
お玉ヶ池（松本市）  
尾玉（諏訪市）  
玉の井（北佐久郡北御牧村）  
児玉（北佐久郡御代田町）  
涌玉（北佐久郡御代田町塙町）  
小玉（上水内郡牟礼村）  
小玉（小県郡真田町本原）  
玉根（東築摩郡坂井村）  
登玉（木曾郡上松町）

静岡県

有玉（浜松市）  
玉江（沼津市）  
玉川（三島市）  
赤玉（あこお、三島市）  
玉沢（三島市）

玉川（静岡市、旧村名）

玉越（磐田市）  
玉穂（御殿場市中畑、旧村名）  
丹間（掛川市）  
相玉（下田市）  
玉川（駿東郡清水町）  
鎮玉（引佐郡引佐町、旧村名）  
麓玉（浜北市宮口、旧村名）  
玉取（志太郡岡部町）  
前玉（榛原郡榛原町）

愛知県

児玉（名古屋市西区）  
玉水（名古屋市瑞穂区）  
玉ノ井（名古屋市熱田区）  
玉川（名古屋市中川区）  
玉船（名古屋市中川区）  
玉川（豊橋市石巻本町、旧村名）  
玉川（春日井市玉野町）  
玉野（春日井市）  
小玉（豊田市岩瀧町）  
玉野（尾西市）  
玉ノ井（葉栗郡木曽川町）  
玉野（東加茂郡足助町）  
玉袋（宝飯郡御津町下佐脇）

石川県

玉川（金沢市）  
玉鉢（金沢市）  
玉井（金沢市、旧町名）  
小玉（金沢市小玉小路）  
玉才（加賀郡、旧郷名）

福井県

玉川（福井市）  
玉井（福井市、旧町名）  
生玉（小浜市）

玉前（小浜市）  
玉置（遠敷郡上中町）  
玉木（坂井郡芦原町）  
玉井（坂井郡三国町）  
玉ノ江（坂井郡三国町）  
玉川（丹生郡越前町）

#### 滋賀県

玉屋（近江八幡市）  
玉木（近江八幡市）  
玉屋（大津市、旧町名）  
白玉（大津市、旧町名）  
玉緒（八日市市大森町、旧村名）  
玉津（守山市赤野井町、旧村名）  
玉屋（蒲生郡日野町大窪）

#### 三重県

玉置（津市）  
玉泉（松阪市茅原町）  
玉垣（鈴鹿市）  
小玉（上野市、旧町名）  
玉滝（阿山郡阿山町、旧村名）  
玉川（度会郡玉城町）  
玉城（度会郡玉城町）  
田間（度会郡度会町）

#### 京都府

玉頭（京都市右京区川島玉頭町）  
玉津（京都市右京区竜安寺玉津芝町）  
玉屋（京都市上京区）  
玉岡（京都市左京区田中玉岡町）  
玉津島（京都市下京区）  
玉屋（京都市下京区）  
玉本（京都市下京区）  
玉水（京都市下京区）  
玉藏（京都市中京区）  
玉植（京都市中京区）

玉水（京都市東山区）  
泉玉（京都市東山区山科勘修寺泉玉）  
玉ノ井（船井郡八木町）  
玉水（綴喜郡井手町）

#### 奈良県

玉手（御所市）  
玉足（宇陀郡榛原町萩原）  
玉垣内（吉野郡十津川村）  
玉置川（吉野郡十津川村）

#### 和歌山县

玉藻（和歌山市）  
玉川通（伊都郡高野町）  
玉伝（西牟婁郡日置川町）  
玉置口（西牟婁郡熊野川町）  
玉出島（玉津島、和歌山市）  
玉川峡（伊都郡九度山町）  
玉ノ浦（東牟婁郡那智勝浦町）  
玉名（日高郡竜神村）

#### 大阪府

玉江（大阪市北区）  
玉造（大阪市天王寺区玉造本町）  
玉水（大阪市天王寺区）  
玉出（大阪市西成区玉出本通）  
玉造（大阪市東区）  
玉堀（大阪市東区）  
玉津（大阪市東成区）  
玉川（大阪市福島区）  
玉屋（大阪市南区）  
玉川（東大阪市岩田町、旧村名）  
美玉（東大阪市瓜生堂）  
玉串（東大阪市）  
玉井（豊中市）  
玉瀬（茨木市）  
玉川（高槻市）

玉水（茨木市）

玉櫛（茨木市）

玉手（柏原市）

#### 兵庫県

玉津（神戸市垂水区）

国玉通（神戸市灘区）

玉地（姫路市飾磨区）

玉手（姫路市）

玉屋（姫路市）

玉川（尼崎市水堂）

玉田（伊丹市中野）

玉瀬（宝塚市）

玉野（加西市）

玉丘（加西市）

玉置（朝来郡和田山町）

玉田（飾磨郡夢前町）

玉巻（氷上郡山南町）

玉見（養父郡養父町）

#### 鳥取県

玉津（鳥取市）

玉鉾（岩美郡国府町）

白玉（八頭郡智頭町口宇波）

#### 島根県

玉江（江津市郷田）

玉山（能義郡伯太町上小竹）

玉湯（八束郡玉湯町）

玉造（八束郡玉湯町）

玉江浦（八束郡美保関町）

#### 岡山県

玉柏（岡山市）

玉江（岡山市、旧町名）

玉水（岡山市妹尾）

玉島（倉敷市）

玉野（玉野市）

奥玉（玉野市）

玉（玉野市）

玉原（玉野市）

玉川（高梁市）

玉（高梁市）

多麻（和気郡吉永町）

玉津（邑久郡邑久町尻海、旧地名）

玉川（川上郡備中町平川、旧村名）

玉井（赤磐郡瀬戸町、旧村名）

#### 広島県

田万里（竹原市）

玉浦（尾道市、旧地名）

玉津島（福山市鞆町）

柞磨（芦品郡芦田町）

三玉（双三郡吉舎町）

#### 山口県

玉江（萩市山田）

速玉（徳山市）

児玉（徳山市）

田万川（阿武郡田万川町）

湯玉（豊浦郡豊浦町宇賀）

矢玉（豊浦郡豊北町）

神玉（豊浦郡豊北町）

玉島（阿武郡須佐町）

長府珠の浦（下関市）

#### 香川県

玉藻（高松市）

田万（綾歌郡綾上町粉所）

玉の井（綾歌郡綾歌町）

玉島（大川郡津田町）

玉井（綾歌郡飯山町、旧村名）

久万玉（綾歌郡綾歌町、旧村名）

玉の浦（大川郡志度町）

徳島県

玉笠（海部郡海南町）  
玉取（麻植郡鳴島町上浦）

高知県

玉水（高知市）  
玉島（高知市横浜）  
玉造（安芸市土居）

愛媛県

玉谷（松山市）  
新玉（松山市千舟町、旧町名）  
玉川（松山市一番町二丁目、旧町名）  
新玉通（西条市大町）  
玉津（西条市）  
新玉（北条市辻）  
新玉（北条市別府新玉）  
玉谷（伊予郡広田村）  
玉川（越智郡玉川町）  
玉之江（東予市）  
中玉（南宇和郡城辺町）  
玉津（北宇和郡吉田町）  
玉垣（伊予郡松前町西古泉）

福岡県

玉川（福岡市南区）  
玉川（大牟田市櫟野）  
緒玉（大女市）  
玉来（朝倉郡小石原村敷）  
玉満（三潴郡三潴町）  
玉屋（田川郡添田町英彦山）  
玉虫（朝倉郡夜須町曾根田）

佐賀県

浜玉（東松浦郡浜玉町）  
玉島（東松浦郡浜玉町南山玉島）

長崎県

玉園（長崎市）  
玉江（長崎市）  
玉浪（長崎市、旧町名）  
玉之浦（福江市）  
田間（壱岐郡勝本町）  
豊玉（下県郡豊玉村）  
玉調（たまつき、下県郡豊玉村）  
玉崎（壱岐郡郷ノ浦町）  
玉之浦（南松浦郡玉之浦町）

熊本県

玉名（玉名市・郡名）  
久玉（牛深市牛深町）  
玉目（阿蘇郡蘇陽町）  
玉虫（上益城郡御船町滝尾）  
玉東（玉名郡玉東町）  
玉水（玉名郡天水町部田見、旧村名）  
垂玉（たるたま、阿蘇郡長陽村河陽）  
玉来（阿蘇郡高森町）  
玉来（上益城郡御船町田代）

大分県

玉沢（大分市）  
玉川（日田市十二町）  
玉来（竹田市）  
御玉（豊後高田市）  
玉津（豊後高田市）  
玉井（豊後高田市）  
タマラカキ（豊後高田市落）  
玉来（臼杵市嶽谷）  
袖玉来（日田市小野）  
玉来（日田市小野）  
玉洗（日田市小山）  
玉洗（日田市堂尾）  
玉洗（日田市鶴河内）  
玉田（大野郡三重町）

玉来（宇佐郡院内町田所）	玉里（鹿児島市）
玉来（大分郡大南町上判田）	玉虫野（加世田市内山田）
狩留（かりたまらい、大分郡湯布院町川北）	玉利（指宿市）
玉来（大野郡犬飼町高津原）	玉利（姶良郡構辺町麓）
矢玉来（大野郡大野町酒井寺）	玉井（揖宿郡開聞町十町）
玉洗（日田郡上津江村川原）	玉城（大島郡和泊町）
三玉（大野郡清川村）	玉林（川辺郡笠沙町片浦、小浦）
玉井（北海部郡佐賀関町白木）	
真玉（西国東郡真玉町）	
玉ノ木（日田郡天瀬町）	
宮崎県	沖縄県
玉利（都城市大岩田）	玉城（たまぐすく、沖縄群島玉城村）
鹿児島県	玉城（たましろ、沖縄群島玉城村）
玉利（鹿児島市下福元町）	真玉橋（まだんばし、沖縄群島豊見城村）
	玉上（沖縄群島北谷村）
	玉城（たまぐすく、沖縄群島今帰仁村）
	玉取（石垣市玉取崎）

### タマに関する山地名一覧表

北海道	福島県
球島山（奥尻郡奥尻町）	長須ヶ玉山（南会津郡檜枝岐村）
青森県	群馬県
玉清水山（東津軽郡蓬田町）	玉原（沼田市）
岩手県	玉原越（沼田市と利根郡水上町の境）
玉東山（姫神岳、岩手県玉山村）	埼玉県
山形県	玉鉢山（秩父郡大滝村）
玉谷山（鶴岡市金峰山）	山梨県
宮城県	玉峠山（たまをやま、北巨摩郡武川村）
玉山（登米郡中田町）	奈良県
	玉置山（吉野郡十津川村）

大 阪 府

玉坂山（池田市）

玉田山（泉南郡阪南町息然田）

兵 庫 県

日玉山（川西市）

島 根 県

玉造山（八束郡玉湯町）

玉嶺山（能義郡広瀬町と仁多郡仁多町・横田町  
の境）

岡 山 県

不溜山（たまらずせん、苦田郡富村）

徳 島 県

玉厨子山（玉津志山、海部郡日和佐町）

高 知 県

玉取山（長岡郡本山村と愛媛県伊予三島市の境）

佐 賀 県

玉島山（鏡山、唐津市と東松浦郡浜玉町の境）

長 崎 県

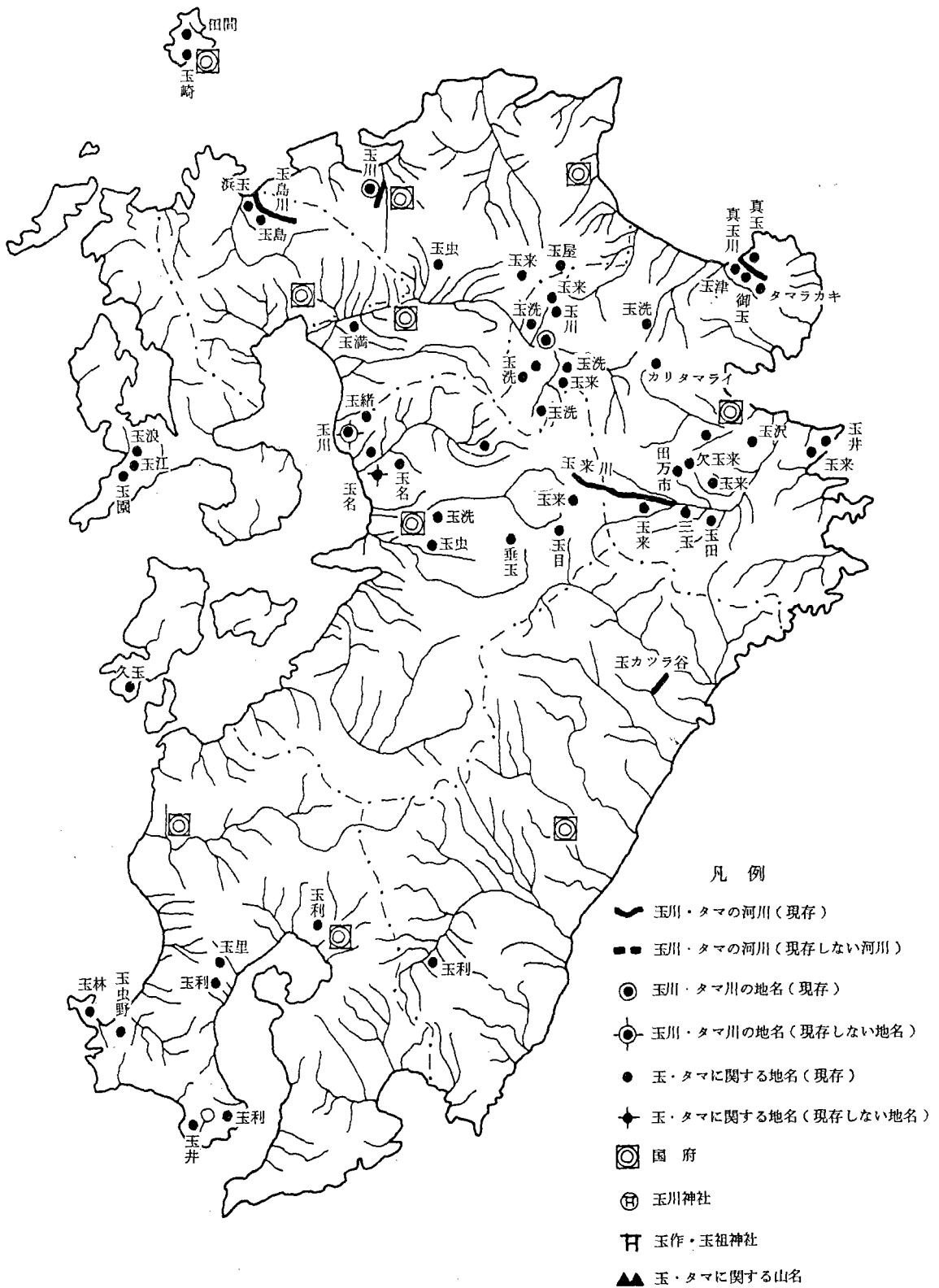
玉垣山（長崎市立山町）

玉園山（長崎市上西山町）

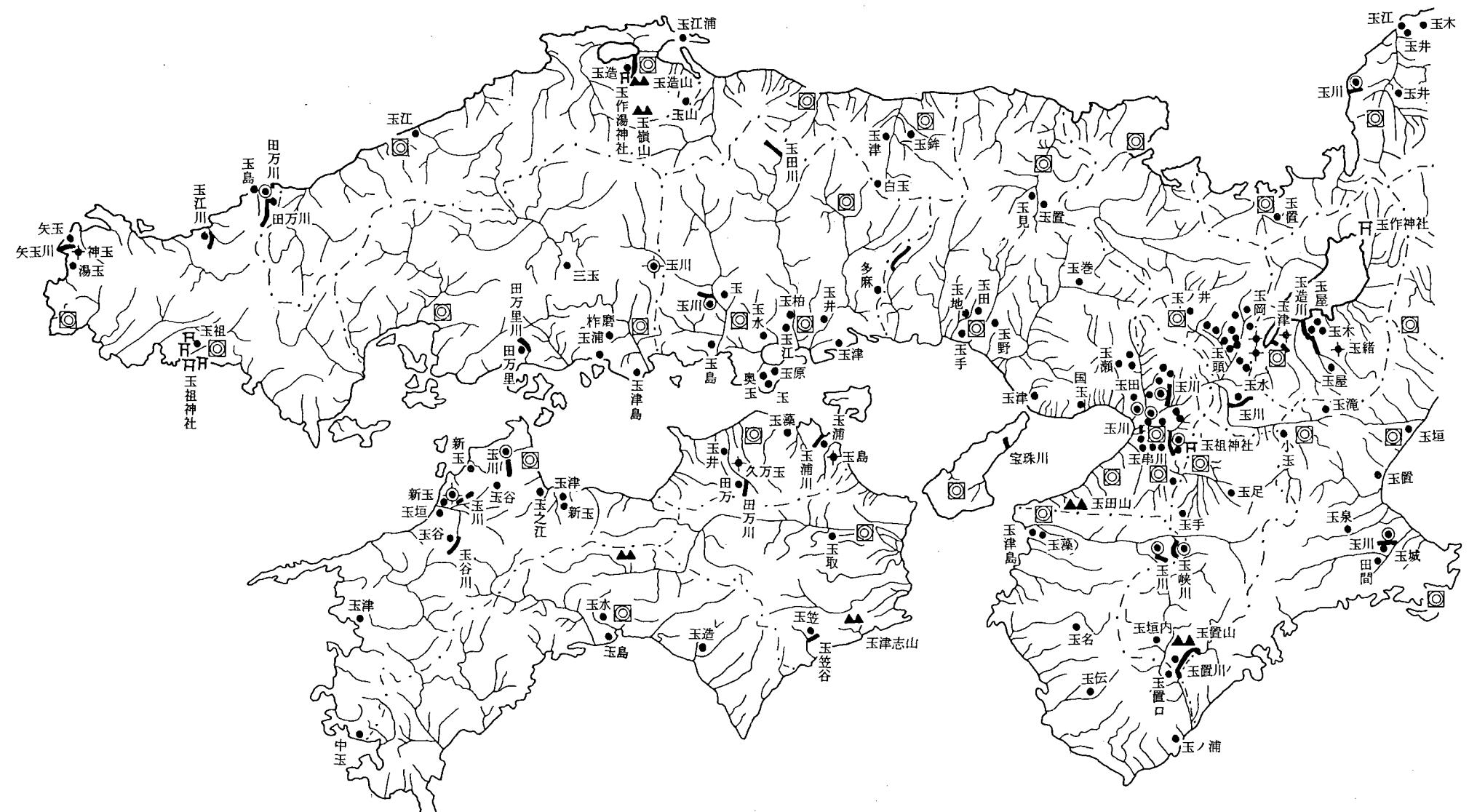
沖 繩 県

玉辻山（沖縄群島東村と大宜味村の境）

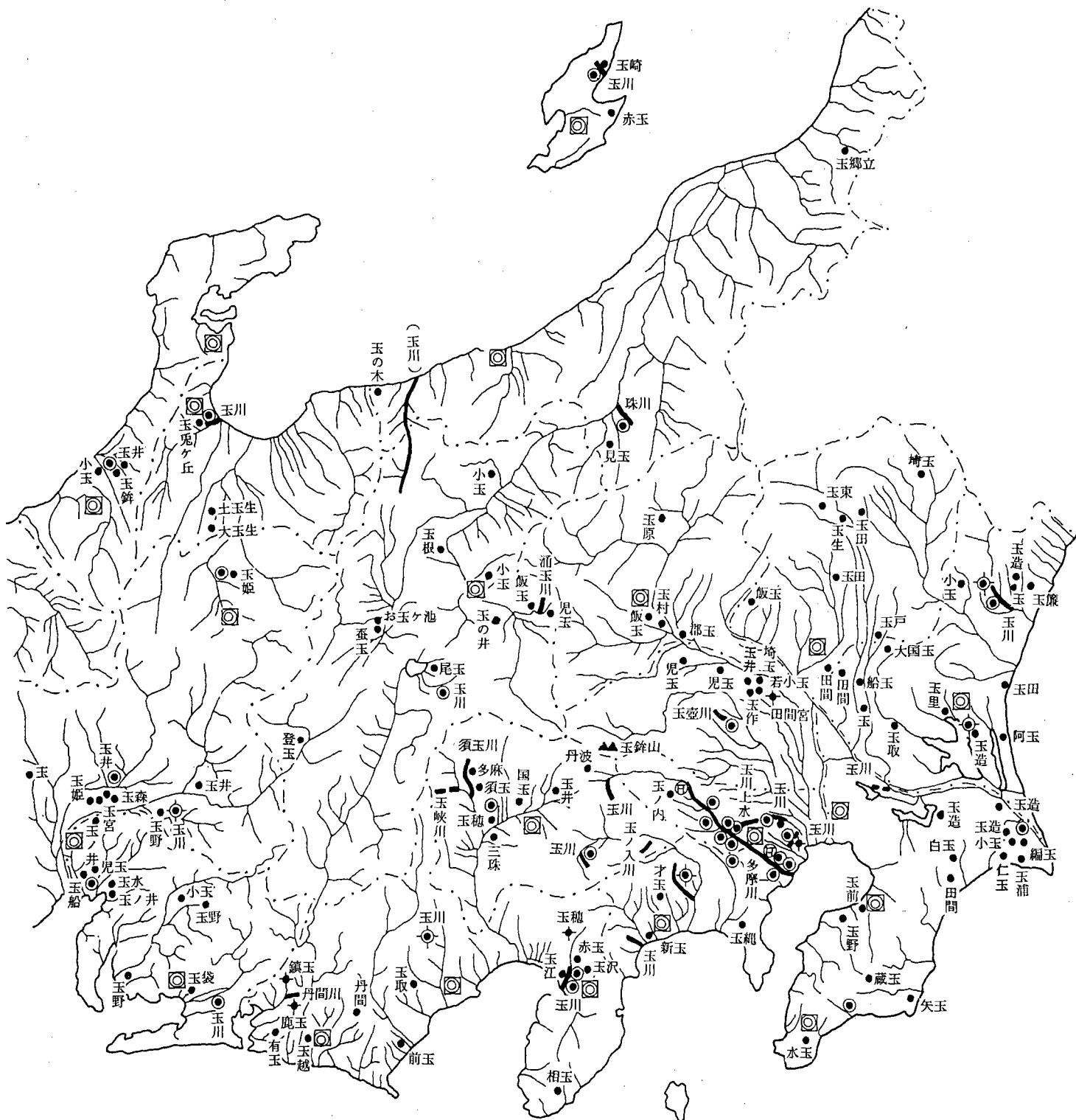
(3) 玉川(タマ川)・タマに関する分布(1)



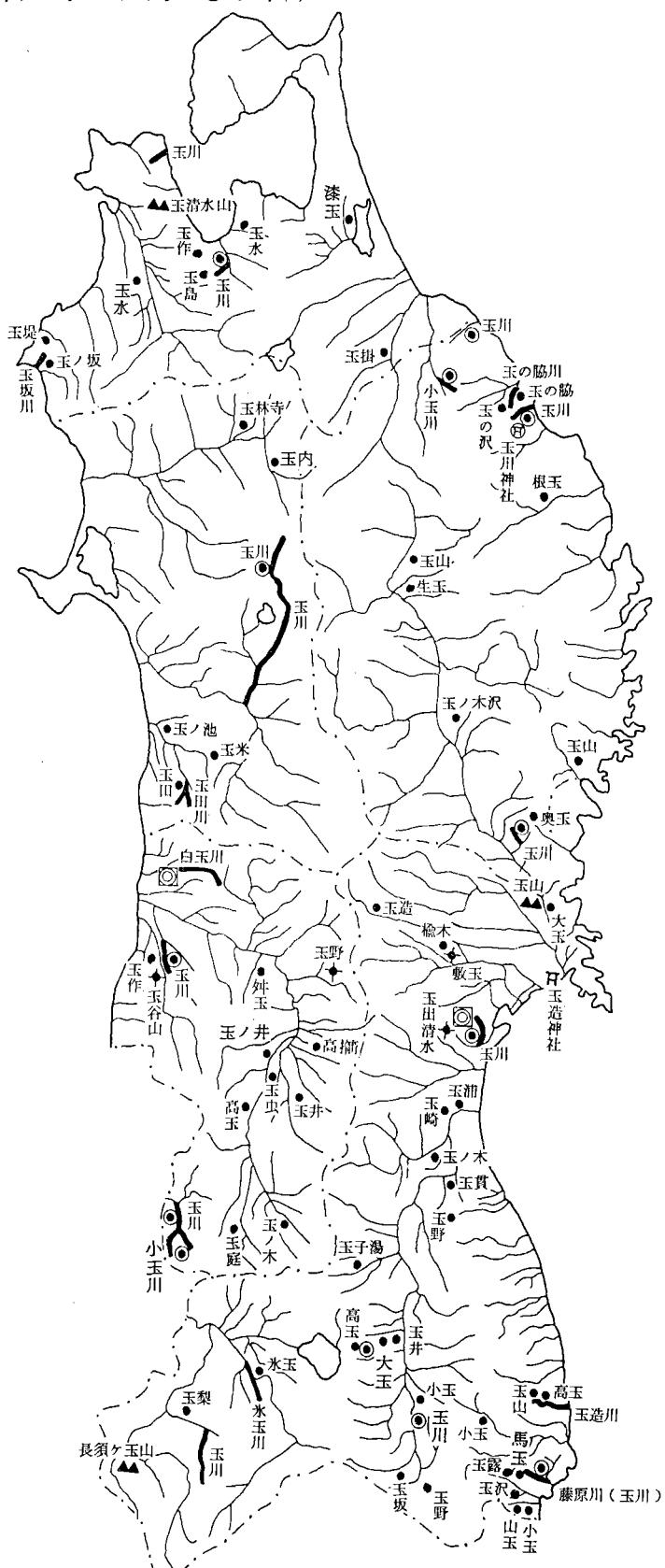
玉川(タマ川)・タマに関する分布(2)



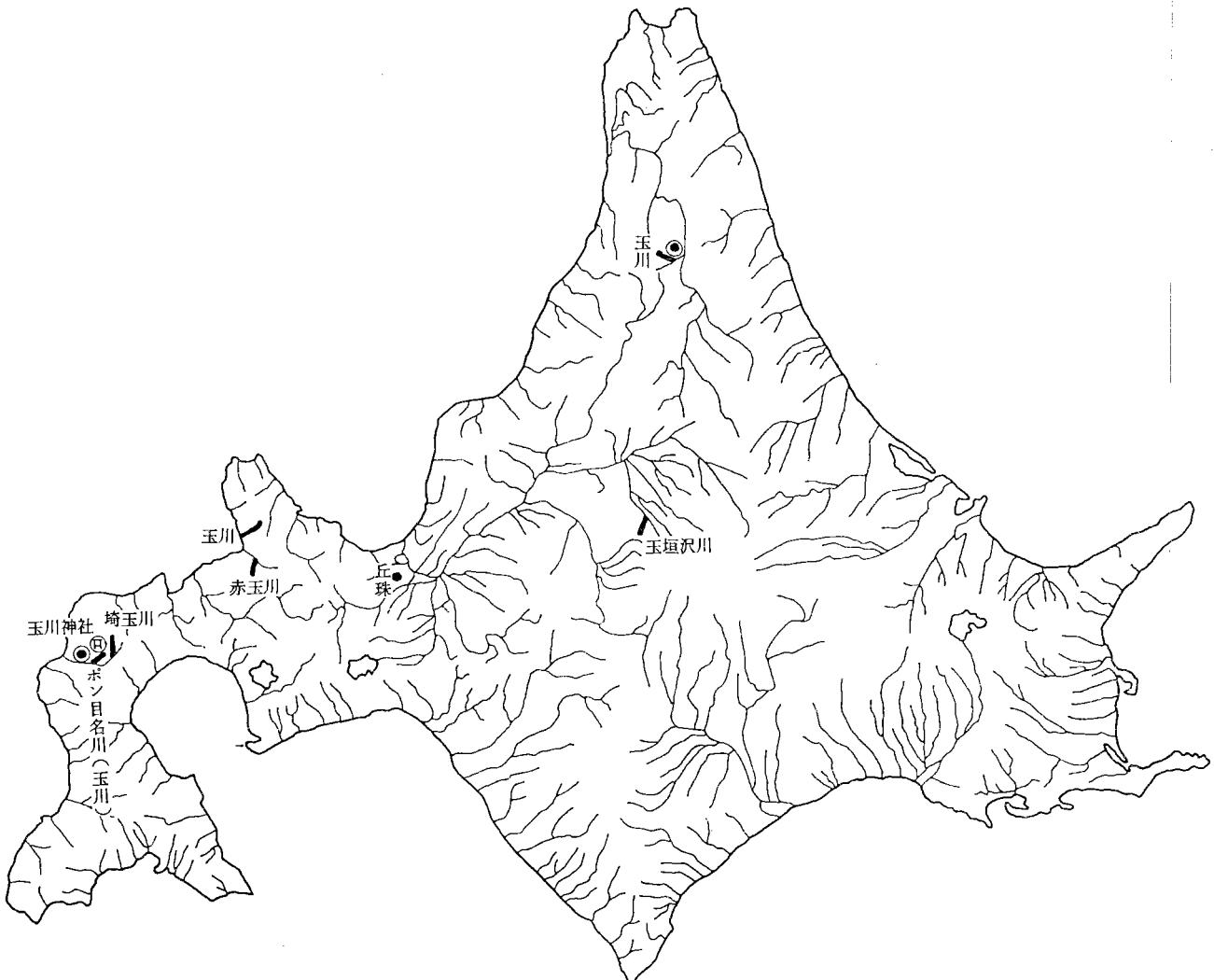
### 玉川(タマ川)・タマに関する分布(3)



#### 玉川(タマ川)・タマに関する分布(4)



玉川(タマ川)・タマに関する分布(5)



## ま　と　め

玉について諸書をひもとくと、宝石類、ひとしづく、客商売の女の称などから、物事に冠して貴重で美しいといった内容、更に尊称と莊重、それに神秘性の意味までひそんでいる。『万葉集』をみて、三百数十種に玉をちりばめている。玉川、新玉などの歌枕から、玉垂、玉衣などの修飾句、宝石などの宝物、それに盡、魂にも玉をおいて歌の固めにしている。『万葉集』のまろやかさは「玉」をちりばめ添えることで、一層ひき立たせている。

こうした古人の玉の使用例が、現代の玉川（タマガワ）にどう活きづいているのか、玉と深くかかわる河川、地名、名水の里を約 50 カ所調査した。

山柴水明の国土にあっては、玉川の水音はけっして素性の違う水ではない。自然の摂理に従って野面を流れ、大地と人が組成する土地柄をうみ、隣郷に誇るに足る名水になりうることを里人は熟知していた。この一条の流れは山地を侵食した土砂を伴いながら、角礫を研磨し、谷口下の河床に丸い良質の砂利を堆積させる。その砂利が河水の浄化を図る玉であり、美しい川面を創作する玉川になる。

ちなみに徳川期に武蔵野の多摩川から、江戸の市井に引水された玉川上水は、多摩川の上流水ではなく、多摩川の清流域でも、谷口下の玉川からの飲料水を引水したことを語っている。また昭和 40 年代初頭まで、世田谷区の二子玉川から渋谷まで路面を走っていた玉川電車（通称玉電）は、玉川の研磨された砂利を運んだことから、多摩電ではなく玉電なのである。それらの内容は古の武蔵野オアシス地帯に、<sup>みのも</sup>玉川の水面を誕生させ、更に後世になってその水面を拡大させたことを物語っている。

研磨された礫が覆う玉川は、また古人たちが珍重した玉を産出する場所でもあった。かつての裝飾技術者玉作部が玉礫の得られる、いわゆる山麓の玉川周辺で、比較的国府にもほど近い野面に居を構えていることからも解される。更に先人たちが歌を詠み、風流の場に仕立て、業の地にも整え醸成している。

古歌に詠まれた六玉川は勿論、玉川（タマガワ）はおよそ 38 都道府県に散見でき、86 の流れが確認できた。明治になって、河川名の変更ですでに消滅した玉川や、後世の人たちが合成したと思われる玉川を含めると百河川を越える。玉の地名に至っては、全国で約 450 カ所にも達する。

こうした分布からは、単に玉の借用にとどまらず、玉川や玉を道標に地図をぬりかえていく先人の鍛跡と、その履歴とが、土地に広く深く編みなされていく法をも、語りかけていくことが指摘できる。ただ、全国に散見する玉川の溯源を論究するには、まだまだ古里をたずね、丹念に探索しなければならない。それには東北日本と西南日本での変容、玉作や丹生（水銀）、それに古社寺との関係など、隣接科学を借用しながら、学問の枠組を越える立場で、巡検調査を行わなければならない。玉川のしきいは、まだまだ高い。